

---

# 心の隙間の埋め方

篠原 皐月

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

心の隙間の埋め方

### 【Nコード】

N9168W

### 【作者名】

篠原 皐月

### 【あらすじ】

佐竹清香さやかは早くに両親を亡くし、シスコン気味の売れっ子作家の兄清人きよひとと2人暮らし。若干寂しくも穏やかな毎日を送っていたが、20歳の誕生日を過ぎる頃から、身边が賑やかになってくる。それが両親の通夜の席で不用意に発した一言と、彼女達両親の隠された境遇に因るものだとは、清香は夢にも思っていなかった。

顔見知りの優しい《お兄さん》達に加え、近付いてくる1人の人物を無視できなくなっていく清香。しかしその相手も複雑な事情を抱えて清香に接触していたのだった。

## プロローグ

両親の通夜で、市営住宅の集会所に設けられた白を基調とした簡素な祭壇を見やりながら、その間近に制服姿で正座していた清香は呆然と今の状況について考えていた。

(どうしてこんな事になってるの？ 昨日までは2人とも、普通に笑ってくれてたのに……)

中段に並べて飾られている両親の遺影を見ても、居眠り運転のトラップに突っ込まれて両親が呆気なくこの世を去ってしまった事が未だに理解できていない清香を、隣に座る喪主の年の離れた兄、清人が低い声で促す。

「清香、ご挨拶しなさい」

その声で正面に向き直ると、旧知の人物が顔を揃えて弔問にやって来ていた。

「柏木さん、倉田さん、松原さん。本日はお忙しいところ足を運んで頂き、ありがとうございます」

清人礼儀正しくが頭を下げる前で、並んで沈痛な面持ちを見せる父親の幼馴染として時折顔を見せていた初老の男性達が口々に声をかける。

「何を言ってるんだね、水臭いぞ清人君」

「そうだぞ？しかし連絡を受けて、何か我々でできる事があればと思つて取り急ぎ駆けつけてみたが、この短時間で君が万事整えていた様で安心したな」

「私達としては寂しいが、2人とも安心しているだろう」

「いえ、この自治会の方やご近所の方にお世話して頂きました。

私1人ではとても……。今後何か手に余る事がありましたら、その

時はご助力をお願いします」

再度神妙に頭を下げた清人に対し、三人は涙ぐみながらも力強く請け負った。

「それは勿論だとも。遠慮なんかしないで、幾らでも頼って来なさい」

「まだ清香ちゃんも中学に上がったばかりなんだしな。あまり気を落とすんじゃないよ？」

「何か困った事があつたら、すぐにおじさん達に言うんだよ？」

引き続き自分にかけられた声が引き金になつたのか、ここにきて漸く清香の目にじんわりと涙が浮かんでくる。

「雄一郎おじさん、正彦おじさん、義則おじさん、ありがとう、ごさいま、す……」

そんな清香の様子を見た面々は、黙つて1人は頭を撫で、1人は軽く肩を叩き、1人は膝の上で固く握りしめた彼女の手を優しく握つてから下がつて行つた。そして彼らが集会場の片隅で、何やら手伝いの女性達と話し始めたのを涙で潤んだ視界に留めていると、突然横の清人が立ち上がったのに驚く。

「どうしたの？ お兄ちゃん」

すると清人は険しい顔つきで低く囁いてから、出入り口に向かって足早に歩き出した。

「ちよつとだけ離れる。ここを頼む」

「え！？ ちよつと！ お兄ちゃん!？」

1人にされ一気に心細くなったものの、同じ団地の知り合いが挨拶に来た為自分まで席を立つ真似はできず、そのまま座ってお礼を言いながら頭を下げた。そしてその人物が去ると同時に、同じ棟で家族ぐるみの付き合いをしていた女性が、割烹着姿で背後からにじり寄つて声をかける。

「清香ちゃん、ちょっと良い？」

「はい、なんででしょうか」

するとその女性は割烹着のポケットから素早く白い封筒を取り出し、後ろに向き直った清香の手に握らせた。

「凄い仕立ての良いスーツを来た三人の方に、『葬儀では現金が手元に無いと何かと不自由です。私達からだと言人君は遠慮して受け取らないと思いますので、貴方達から後で渡して頂けませんか？』って押し切られて預かっちゃったんだけど……」

困った様に囁かれ、こっそり渡された封筒の厚みに彼らの思いやりを実感して、清香はいよいよ号泣しそうになる。

「ありがとうございます。あとからお兄ちゃんに渡して、おじさん達にはお礼をちゃんと言いますから」

それを聞いて、相手は如何にも安堵した表情を見せた。

「良かったわ。おばさん安心しちゃった。だって佐竹さんの所ってご夫婦どちらも親戚付き合いが無いって伺ってたから、急に兄妹2人だけになってしまって団地の皆で心配してたのよ。勿論清人君はもう成人して自活してるから大丈夫だとは思うけど、やっぱり頼りになる親戚の方が居れば安心でしょう？ 優しい伯父さん達で良かったわね」

「……いえ、あの方達は父の幼馴染で仲良くして頂いただけで、親戚じゃないんです」

「え？ あ、そう、だったの？」

「父は確かに天涯孤独ですが、確かに母には親兄弟が居るらしいです」

「らしいですって……。清香ちゃん？ その人達には連絡は取ったの？ それらしい方はまだお見えになっていないみたいだけど……」

何故か急に俯き、暗い声で呻くように告げた清香に、若干たじろぎながらも相手は控え目に問い質したが、そこでいきなり清香が激昂した。

「だれが連絡なんか取るか！ あの人で無し野郎どもにつ！！」  
その怒声に集会場内が静まりかえり、先程挨拶して帰りかけていた三人組と、それと入れ替わりに目立たぬ様に集会場に入ろうとしていた1人の老人の動きが止まった。

「おばさん！」

「なっ、何っ！？ 清香ちゃんっ！」

「母の家族っていう人達はね、お金持ち特有のもの凄く選民意識に凝り固まったどうしようもない連中で、1人娘の結婚しようとする相手が15も年上のバツ子持ちの男だと知るや、その職場に圧力掛けて首にさせ、借りてたアパートの大家に金を掴ませて無理やりたちのかせ、人を雇って悪質なデマビラを撒き散らして子供が学校でいじめられる様にしむけ、何度電話番号をかけても無言電話を掛けまくる、非常識かつ不見識な人間の集団なの！ お母さんから洗いざらい聞いてるんだから！」

「そ、それはなかなか、大変だったのねえ……」

思わずドン引きになりながらも相槌を打った相手に、清香は泣き叫びながら畳み掛ける。

「お父さんは間違つても人の悪口なんか言わない人だったから、その話を聞いている横で『子供に向かってそんな事を言うのは止めなさい。それにそれだけ大事な1人娘を奪ったんだから、当然の仕打ちだと思ってるから』って笑つてたけど、お母さんは未だに怒つてたんだから。結婚の許しを得ようとお父さんがお兄ちゃんを連れて自分の実家に挨拶に行った時、よってたかっつてお父さんをボコボコにした拳げ句、お兄ちゃんの腕まで折った事！」

「ええ？ そんな事があつたの？」

「全然知らなかったわ」

「その頃清人君、小学生でしよう？」

「幾らなんでもそれは、子供相手に酷過ぎるわよね」

奥まった給湯室でお茶出しをしていた他の女性達も騒ぎに驚き出てきたが、清香の話を聞いて揃って顔を顰めつつ同意を示す。その声に重なる様に、清香が声を振り絞る様にして叫んだ。

「そんな人達、焼香に来たって一歩たりとも上げさせるもんですか！！ どうせ『それみた事か、こんな貧乏暮らしの上早死にするなんて馬鹿な奴だ』とかなんとか、せせら笑う為に来るに決まってるんだから！ もし来たら頭から灰をかぶらせて叩きだしてやるわっ！！」

「清香！ 何を騒いでる！？」

「お兄ちゃん！」

その時、どこに姿を消していたのか慌てて集会室に入って来た清人が清香に駆け寄ると、とうとう緊張の糸が切れたらしい清香が抱きついて盛大に泣き出した。

その自分の腕の中にすっぽりと埋まる小さな体を抱きかかえ、背中をさすってやりながら、先程断片的に聞こえてきた清香の叫びの影響を考え、清人は小さく溜息を吐いた。そして部屋に駆け込む時にすれ違った何人かの人間に、肩越しに視線を向ける。

案の定全員が未だ蠟人形の様な表情で固まっており、その者達にほんの僅かの罪悪感を覚えた清人は、謝罪の気持ちを視線に乗せ、清香を抱きかかえたままごく軽く頭を下げてみせたのだった。

## プロローグ（後書き）

出だしがシリアスですが、頭の中で構築中の中身は基本コメディです。期待ハズレな展開になってしまったら、申し訳ありません。



## 第1話 二十歳の誕生日

2人で食べる為用意されたごく小さなサイズのホールケーキに、細いカラフルな蝋燭を20本立てた清人は、それに火を点けてから室内の電気を消した。そしてテーブルに戻り、向かい合って座っている妹を促す。

「さあ、吹き消してごらん、清香」

「はあ〜い」

途端に真顔になって何回か深呼吸して息を整えた清香は、勢い良く溜めた息を吐き出す。それは見事に一息で、全ての蝋燭の火を吹き消す事に成功した。

「誕生日おめでとう、清香」

「ありがとう、お兄ちゃん」

「さあ食べよう。今日はいつにも増して、腕によりをかけて準備したから」

「うん！」

途端に満面の笑みになり、ウキウキと料理に手を伸ばす清香。

当初清人に負担が大きかった兄妹2人暮らしも、八年近く経過した今ではきちんと清香も家事を分担していた。しかし小さな洋食レストランを経営していた亡父の料理の才能は主に息子に受け継がれたらしく、清香の料理はどうしても兄の作るそれに及ばないと自覚しているのだった。

「うう〜ん、やっぱりお兄ちゃんの料理は最高に美味しい！ 同じレシピで作っても、どうしてかお兄ちゃんの作った方が美味しくなるのよね。それにマンネリ化しないで次々レパートリーを増やしてるし」

幾つもの皿に手を伸ばして味わう合間に清香が感嘆の声を漏らす

と、清人が箸の動きを止めないまま爽やかに言い返す。

「それは当然だな」

「え？ どうして？ 何かお父さん直伝のコツでもあるなら教えて？」

途端にキラキラとした目を向けてくる妹に、清人は優しく目元を緩ませながらのたまった。

「大した事では無いけど、それは俺が作る料理には清香への愛が詰まってるから。清香が美味しく食べてくれたら嬉しいと、終始思いながら調理してるからな」

目鼻立ちがすつきりとした色白の、若干癖のある髪を綺麗に流して切り揃えている、一見王子系のイケメンに面と向かって言われたら動揺しない女性は少ないと思われるのだが、その手の台詞に慣れきっている妹は盛大に不満の意を唱える。

「ええ？ それは絶対納得できない！」

「どうして？」

「だって私だって料理する時は、毎回お兄ちゃんに美味しく食べて貰える様に愛情込めて作ってるのよ？ それなのにお兄ちゃんの作った料理には、適わないんだもの……。何か根本的な才能が欠けているとしか思えなくなっちゃう……」

最後は拗ねた様に呟いた妹の可愛らしい台詞に、清人は噴き出したいのを何とか堪えつつ宥めようと試みた。

「清香の愛は充分分かってるよ？ だけどそれが普段だだ漏れしてるから、料理だけに集中してないだけなんだろう。適性というより性格の問題だから心配するな。清香の料理は充分美味しいぞ？ 俺が保証する」

「ありがとう、お兄ちゃん」

この兄妹の日常を知っている彼女の友人達が聞いたなら「いい加減にしなさいよ、このバカカップル兄妹！」と盛大に毒吐かれる事は

確實だったが、自宅には当然2人しか存在しない為、そんなベタベタ会話が暫く続いた。

そして清人がふと思い出した様に口を開く。

「そういえば……、柏木さん達からお前への誕生日プレゼントを預かってるんだ」

「え？ 本当？」

嬉しそうに見返してくる清香に、自然と清人の顔が緩む。

「ああ、二十歳になった時に真珠を贈られると幸せになれるという謂われがあるそうで、3人で相談して色とかも揃えたらしい。柏木さんがネックレス、倉田さんがイヤリング、松原さんがブローチだそう。後でちゃんと礼状を書くんだぞ？」

「分かってるわ！ うわ、なんか凄く嬉しい！ いけ好かなくて音沙汰が無い親戚より、おじさん達の方がよっぽど本当の親戚らしいわね。『遠くの親戚より近くの他人』って良く言ったものだわ。ねえ、そう思わない？」

「……………ああ、そうかもな」

同意を求められた清人は何故か微妙に清香から視線を逸らし、幾分口ごもって控え目な同意を返した。しかし上機嫌な清香は、兄の不審な行動に気がつく事無く食べ続けたのだった。

佐竹家の兄妹がそんな風に和やかに誕生日ディナーを堪能している頃、清香に《親戚の様なおじさん達》と評されていた面々は、それぞれの息子達を連れ、とある場所で一堂に会していた。

「さて……、食事も無事済んだし、本題に入るか」

そう言ってその場を取り仕切る発言をしたのは、その家の当主である柏木総一郎。

既に80近い年齢にも関わらず意気軒昂であり、大企業である柏木産業を一代で築き上げた往時の面影を失ってはいない人物であっ

た。

長方形の広い食堂に相応しい、20人は席に着けるダイニングテーブルの上座に当たる一辺に1人で陣取り、左右に並ぶ息子と孫息子達を睥睨した途端、食事中も和やかと言い難かった雰囲気が一層重苦しいものとなる。

「……お父さん。大体予想はつきませんが、息子達まで呼びつけた訳を説明して下さい」

柏木産業の社長職を引き継ぎ、最近では父親以上の手腕を発揮している財界では評判の彼の長男の雄一郎が深い溜め息を吐きつつ促すと、総一郎は重々しく言い出した。

「今日10月18日は、清香の二十歳の誕生日だ」

「（（知ってますよ。プレゼントも贈りましたし）（（

そんな事を正直に口にしようものなら目の前の人物が拗ねまくる事が分かりきっている為、彼の3人の息子は余計な事は口にせず、黙って父親の表情を窺った。

「これまでは清香に幾ら害虫が寄り付こうが、あのクソガキが頑として認めなかっただろうが、二十歳を過ぎたらあの子の自由意志で結婚ができるわけだ」

「（（いや、清香ちゃんが二十歳過ぎても、あの清人君なら妨害しまくるだろうな）（（

「（（（（一体何を言いたいんだ？ 祖父さんは）（（（（

思わず遠い目をしてしまった息子達と、祖父の言わんとするところが全く分からなかった孫達に向かって、総一郎から爆弾発言が投下された。

「だから浩一、玲二、正彦、明良、友之。お前達のうち誰でも良いから清香と結婚しろ」

「……はぁあ！？」

従兄弟達が揃って間抜けな声を上げる中、その場で1人だけ名前が挙がらなかった倉田修が、恐る恐る手を上げながら声を出した。「お祖父さん。俺は妻帯者だからその話は除外ですよ。それならどうしてこの場に呼ばれたんですか？」

「まあ、結婚してるだけなら離婚させれば良いだけの話だが、来春子供が産まれるなら仕方あるまい。俺はそこまで鬼ではないからなお前には従兄弟達のフォロワーをしてもらう」

もったいぶって頷いてみせる総一郎に、その場の全員が白い目を向けた。

(子供がいなかったら別れさせるんだ……)

(さすがワンマン爺さん)

(だから娘に逃げられるんだよな)

(年を取って丸くなるどころか……)

それぞれが心中で呆れていると、年長者達が嫌そうに口を開いた。

「お父さん……、話を戻しますが、何が『だから清香と結婚しろ』なんですか？ 清香ちゃんと息子達が結婚する必要性と理由を説明して下さい」

「まあ、大体理由は察せられますが、『誰』と指名では無く、『誰か』と乱暴な事を言うあたり」

冷静に、婿養子として家を出ている次男の倉田和威と三男の松原義則に促され、総一郎は決定的な一言を放った。

「そんな事は決まってる！ 孫達の誰かと清香が結婚する事で、俺が清香の實の祖父だと紹介して貰うんだ！」

( )( ) やっぱり……。それよりいい加減にきちんと清香ちゃんに名乗れば……。いや、これに関しては父さんの事は言えんか……)( )( )

息子達はすっかり諦めた様にうなだれたが、当事者の孫息子達は流石に噛み付いた。

「ちょ……、何考えてんだ祖父さん！」

「気でも違ったか？」

「儂は正気だつ！ 何だお前達、清香では不満だとも言う気かっ！！」

総一郎に纏めて怒鳴りつけられた面々は、ある者は困惑し、ある者は些か呆れつつ言葉を返す。

「いや、確かに清香ちゃんは可愛いし、気立ては良いのは分かってるけど」

「結婚となると色々とは話は別ですよ」

「そうだな。妹みたいなものだし」

「それに今までキチンと名乗れていないのは、どっからどうみても祖父さんと親父達の自業自得だろ？」

「散々当時の話は聞いてるぜ？」

「その尻拭いを俺達にさせようつてのは、少しムシが良過ぎませんか？」

口々にやんわりと責められた総一郎は、巨大企業を一代で築き上げた『経済界の優駿』と誉れ高い高潔な雰囲気をかなぐり捨て、単なる困った孫バカ老人に変貌した。

「五月蠅い口答えするな！ 清香の結婚相手には、儂の保有している柏木産業の全株式を譲渡してやる！」

「お父さん！？ いきなり何を言い出すんです！」

「そんな事を言つて、もし変な人間の手に渡つたりしたら！」

「全発行株式の15%ですよ！？」

瞬時に血相を変えた息子達に、総一郎はあくまでも真顔で宣言する。

「だからそうならない様にお前達、気合い入れて清香を口説くんだ。儂が可愛いかった1人の孫娘と、感動の再会ができるかどうかはお前達の働きにかかっているんだ。分かったな！！」

「……………」

そのままふんぞり返る祖父を前に、指名を受けた5人の孫達は何とも言い難い顔を見合わせて黙り込んだが、ここでドアを開ける音と共に、冷え切った声が割り込んだ。

「ああら、皆何を黙り込んでるの？ 気の毒なお祖父様のたつての願いを叶えてあげるのが、孫としての当然の務めだと思わない？ だけど、私の記憶に間違い無ければ、お祖父様の孫娘はもう1人居たと思っていたのだけど……………」

そこで雄一郎の長女で柏木産業に勤務している真澄が予告なしに現れ、その彼女の一言でそれまで決して快適とは言い難かった食堂内の空気が凍りついた。

「真澄……………」

「全て終わらせました……………」

母親譲りの美貌にうすら笑いを浮かべつつ真つすぐ自分を目指して歩み寄る孫娘に、総一郎は蛇に睨まれた蛙の如く、固まったままダラダラと冷や汗を流す。

「い、いやっ！ 決してお前の存在を忘れていたわけではっ！」

「そうですね。確かに孫娘ではありますが、《可愛い孫》では無かったですというだけですよね？」

「かつ、可愛いに決まっとするだろう！ ただ、お前に関しては、可愛いよりは雄々しいとか凛々しいとかの形容詞が前面に出てきていてだな」

そんな風に必死に弁解を試みる祖父を、側まで来た孫娘は呆れ果てた視線で冷徹に見下ろした。そして仕事上の口調で淡々と指摘する。

「柏木会長、第一線を退いたとはいえ、あなたは未だに柏木産業の

対外的な顔で、社内でも依然として影響力をお持ちです。ご自分の言動に節度と責任をお持ち下さい」

「……っ」

「柏木社長。現時点ではあなたが柏木産業のトップです。まだ柏木家の家長では無いのかもしれませんが、いい加減頑固ジジイの操縦法位会得して下さい。そうでないと振り回される周囲が迷惑です」

「……あのな、真澄」

反論できずに口ごもる総一郎と閉口した雄一郎を知った事かと真澄は睨み付け、淡々と正論をぶつけた。

「ところで、明朝9時から経営会議と伺っております。会長と社長は勿論ご出席の筈。くだらない話は適当に切り上げて、さっさとお休みになる事をお勧めします」

「く、くだらないだどっ!？」

「玉砕が怖くて真正面からブチ当たれない人間が、何を言ってもやつてもくだらないだけですよ」

「なっ……」

「それでは失礼します」

流石に声を荒げかけた総一郎の台詞をぶった切った真澄は、言うだけ言っつて踵を返し、食堂を出て行った。その背後や閉めかけたドアの向こうから、男達の囁き声が微かに届く。

「全く、年々気が強くなりおっつて!」

「亡くなった母さんに、年々似てきましたね。父さんをやりこめる所なんか特に」

「五月蠅いぞ和威!」

「しかし相変わらずきつっついよな、真澄姉。あれじゃ嫁の貰い手が無いんじゃない?」

「もついい年だろう? 33だったっけ?」

「友之、明良君。そこまで遠慮の無い言い方はちょっと……」



「姉さんは仕事に生きてるからな。仕方ないさ」  
そんな声もドアを閉めると聞こえなくなり、真澄は傍らに控えていた使用人を振り返った。

「部屋に軽食と飲み物をお願い。夕食を食べそびれたのよ」  
「畏まりました」

恭しく一礼した背広姿の男性が歩き去ると、真澄はそれに背を向けて足音を吸収する厚さのある絨毯の敷かれた廊下を進む。そして階段を上がりながら、食堂に乱入する直前に聞こえた話を頭の中で反芻した。

(清香ちゃんと従兄弟達の誰かをね……。いよいよ棺桶に片足突っ込んだのかしら、あのお祖父様がそんな発想するなんて)  
実の祖父にかなり辛辣な批評をしつつ、真澄の心の中で静かにさざ波が生じる。

(まあ『彼』がそうそう簡単に清香ちゃんに男を近付ける筈は無いけど……、面倒な事になってあまり怒らせたくは無いわ)

そんな事を考えながら真澄は自室のドアを開け、溜め息を吐きながら中へと入ったのだった。

## 第2話 男達の事情

その日食事当番だった清人が台所で軽やかに野菜を刻んでいると、カウンターの向こうから自身のアシスタントをしている川島恭子が困惑気味に声をかけてきた。

「先生、お忙しい所申し訳ありません。お電話が入っているのですが……」

「うん？ 誰かな？」

手の動きを止めて背後を振り返った清人に、恭子が補足説明を行う。

「小笠原聡と名乗ってらっしゃいます。“小笠原由紀子の息子”と言えば分かると仰っておりましたが」

その台詞を耳にした途端、清人は瞬時にその表情の一切を消し去った。

「……知らないな。そのまま切ってくれ」

吐き捨てる様に告げて再び調理台に向き直った清人に、恭子は諦めて了解した旨を告げる。

「分かりました」

多少気まずい思いをしながら恭子はリビングの奥に戻り、電話の向こうに一言断りを入れて切ったが、間を置かず再び着信音が鳴り響いた。立場上再び恭子が受話器を取り上げ応対してから保留にし、恐る恐る清人にお伺いを立てる。

「先生、先程の小笠原さんからまたお電話ですが……」

今まさに中華鍋で油を熱し炒めに入ろうかと思っていた清人は、憤然と舌打ちをして火を止め、乱暴な足取りでキッチンとリビングを横切った。

(どうやってこの番号を調べやった?)

向かつ腹を立てながら保留音を響かせている電話の受話器を取り上げ、相手に何か言う隙を与えず、もの凄い棒読み口調で伝える。

「只今おかけになってる番号は、現在使われておりません。番号をお確かめの上、再度お掛け直し下さい」

言うだけ言ってガチャンと乱暴に受話器を戻した清人は、些かキツイ視線を恭子に向けた。

「川島さん。今後この人物からの電話は、一切取り次がないで下さい」

「あの、でも……」

「まだ何か？」

常に自分に従順な恭子がここで口ごもった事を清人は不思議に思ったが、続けられた台詞で再び表情を険しくした。

「先程の男性は、自分は先生の弟だとも仰ってまして……。でも先生に弟さんが居るなんてお話は」

「川島さん。俺の家族は、亡くなった両親の他は清香だけです。そのつもりで。勿論この電話の事は、清香の耳に入れる必要はありません」

「わ、分かりました」

慌てて頷いた恭子に背を向け、清人は調理を再開したが、なかなか動揺と苛つきは収まらなかった。

（今更何だつてんだ！ 胸くそ悪いっ！ それに……）

一心不乱に中華鍋を振るっていた清人だったが、少ししてまた邪魔が入った。

「あの、先生。柏木さんからお電話が入っていますが……」

「浩一から？ 何の用だ……、こんな中途半端な時間に」

大学以来の腐れ縁である浩一からの着信を告げられた清人は、反射的に通常なら就業時間内である事を掛け時計で確認し、眉をしかめながらもキツチンを離れた。

「もしもし？ 何だ浩一、まだ仕事だろうか。ろくでもない用だつたら速攻で切るぞ？」

不機嫌さを隠さず応対を始めた清人の声を耳にしつつ、リビングのテーブルで頼まれていた資料の整理を再開した恭子だったが、清人の苛立たしげな呻き声に思わず無言で視線を向けた。

「はあ？ 今夜？ お前いきなり何を……」

何事かと思つたものの恭子はおとなしく作業を続け、幾つかのやり取りの後、清人は不承不承といった感じで会話を終わらせる。

「……分かった。いつもの場所で9時だな。時間を合わせて行つてやる」

「どうかされましたか？」

そんな憎まれ口をたたいた清人が受話器を戻してから、恭子は静かに声をかけてみた。すると話している間に幾分感情が落ち着いたので、清人がいつも通りの柔和な笑顔で振り返る。

「ああ、川島さん。今日帰りがけに原稿を届けるのをお願いしてましたが、やはり俺が行く事にしますから」

「予定が変わりましたか？」

「ええ、出版社に顔を出すついでに次回作の構想を相談して、軽く食べて時間を潰した後浩一と待ち合わせする事にしました。……それで川島さんに一つお願いが」

「何でしょう？」

急に真顔になった相手に恭子が若干固めの表情で応じると、清人は淡々と“お願い事”を述べた。

「夕食を2人分準備してしまいましたし、清香を予定外に1人で夕食を食べさせるのは可哀想なので、一緒に食べてやって貰いませんか？」

それは確かに妹を溺愛している清人らしい台詞ではあったが、おそらく長く1人暮らしを続けている自分への心配りをも含んでいる

と分かっている恭子は、うつすらと笑いながら了承の言葉を返した。

「先生のシスコンぶりは相変わらずですね。そういう事でしたら、喜んでお相伴に預かります」

「それは良かった。それではもう少ししたら出掛けますので、後は宜しくお願いします」

「畏まりました」

そんなやり取りの後、帰宅した清香と入れ違いになるように、清人は夕闇が迫る街中へと出て行ったのだった。

出向いた出版社で担当者と結構有意義な打ち合わせを終えた後、軽く腹ごなしを済ませた清人は、その足で待ち合わせ場所へ向かった。

高級ホテルとして名高いラルフリードホテルをエレベーターで上がり、最上階スカイラウンジのバーカウンターに出向く。そこに何人かの男性がまばらにスツールに腰掛けている中で、迷わず1人のスーツ姿の男に近付いて行った。

「よう、待たせたか？」

勝手知ったる仲である気安さから、いつもとは違う碎けた口調で声をかけつつ隣に座った清人に、浩一は苦笑いしてみせる。

「いや、俺も今来たばかりだ。しかし男2人で待ち合わせるのは、正直虚しいな」

「呼びつけた本人が何を言ってる」

清人も苦笑いで返して早速注文を済ませ、顔見知りのバーテンダーと二言三言言葉を交わしてから、肘を付いて浩一に視線を向けた。「それで？ さっさと俺を呼び出した本題に入れ」

その詰問口調に幾分困った様に視線をさまよわせてから、浩一は重い口を開いた。

「……実は、これから暫く俺達が清香ちゃんの回りをうろろするが、黙認して欲しい」

「何だそれは。しかも“俺達”？ 分かる様に話せ」

「それなんだが……」

そうして浩一が清香の誕生日に自分を含む総一郎の孫達に召集がかけられ、その場で清香との結婚を求められた経緯を話した。

「……そんなわけで、お前の気に障って強制排除されるのは勘弁して欲しいが、電話で済まそうとすると益々お前の機嫌を損ねかねんし、かといって家に押し掛けるのも清香ちゃんの耳に入る可能性が無きにしても有らずだから、お前とちよつと突っ込んだ話もしたかつたし呼び出したって訳だ」

その事情とやらを一通り聞き終えた清人は、その間に目の前に置かれたグラスを持ち上げながら小さく失笑する。

「それなら当然この支払はお前持ちだな。しかし御大は相変わらずだと思っていたが、いよいよ棺桶に片足突っ込んだのか？ そんなくならない策とも言えん策を用いようとするなんて」

奇しくも当日真澄が心の中で断じた表現と酷似した言い方を清人はしたが、当然そんな事は知りようもない弟の浩一は憮然として清人の顔色を窺った。

「まあ正直に名乗る事ができれば一番なんだけどな？ その時、お前フオローなんかしてくれないよな？」

「当然。そんな義理は無い」

「容赦無いな」

溜め息しかでない浩一の前でグラスの中身を一口飲み落としてから、清人はすこぶる冷静に相手に告げた。

「だが、告白自体を妨害しようとは今も昔も思っていない。清香ももう二十歳だし、幾ら子供の頃に香澄さんから散々刷り込まれてると

しても、少しは大人の対応ができる、かも、と、思うんだが？」

その会話の最初と終わりの微妙な口調の変化に、浩一が鋭く突っ込みを入れる。

「あくまで疑問形なんだ」

「流石に30過ぎると、若い子の心境に疎くなってるな」

ニヤリと笑いながら再びグラスを傾けた清人に、些か気分を害した様に浩一が肩を竦めた。

「言ってる！ あちこちで若い女を口説き落としてる癖に」

「口説いた事は無いぞ？ 向こうから言い寄ってくるだけで。お前の方こそどうなんだ？ 柏木物産の御曹司どの」

そこで不毛な言い合いになりかけた事を自覚した浩一は、話題を変える事にした。

「……それはともかく。お前、母方の方と未だに連絡取り合っていないのか？」

軽く顔を覗き込む様に尋ねてきた浩一から視線を逸らし、清人が途端に不機嫌そうに目を伏せる。

「愚問だな。酒がますぐなる話題をふるな」

その態度に浩一が軽く溜め息を吐き、手元のグラスを見下ろしながら淡々と続けた。

「やっぱりな……。実は先週親父の代理であるパーティーに出席したんだが、そこで小笠原氏を見かけた」

「それで？」

「夫人が今入院中だそうで、単身で出席されてた」

言うだけ言っただけ浩一は再び清人の反応を窺ったが、相手はさほど関心が無さそうに呟くのみだった。

「……へえ、それはお気の毒に」

「別に命に関わるような大病じゃないらしい。来月末には退院するとの話だし」

「……………」  
途端に漂う冷気にもめげず、浩一はもう一押ししてみる。

「なあ、見舞いに行ったりとかは……………」

「……………」  
まるで取りつく島もない様子の清人に、浩一は完全に説得を諦めた。

「分かった。もうこの話は止め」

「今日家に電話があった」

「は？ 誰から？」

いきなりの話題の転換に浩一が戸惑った顔を見せると、面白く無さそうに清人が続ける。

「小笠原聡とか名乗りやがった」

数瞬かけてその名前を記憶の底から浩一が、思わず驚きの表情を向けた。

「え？……………それって、ひょっとしてお前の」

「問答無用でブチ切った」

「お前な」

はああ、と重い溜め息を吐いた浩一に、清人が冷たく言い捨てる。  
「だがさっきの話で大体のところは分かった。話を聞く気にはならんが」

それ以上不用意に相手を怒らせたく無かった浩一は、続ける言葉を選びつつグラスを揺らし、琥珀色の液体に浮かぶ氷が微かな音を立てるのを眺めていたが、ふと面白い事を思い出した様に口を開いた。

「しかしよくよく考えてみれば、大したもんだよね、お前の親父さん」

「いきなり何だ？」

訝しげな顔を向けた義理の従兄弟兼親友に、浩一は楽しげに指摘



してみせる。

「だって考えてもみろよ。柏木物産と小笠原産業、業界1位を争ってガチンコ勝負してる総合商社のご令嬢2人をたぶらかして、両方と結婚しちまつたんだぜ？」

それに清人は相手以上に笑いを堪える風情で応じた。

「悪いが今の話、一点だけ訂正させてくれ。親父が口説いたんじゃないって口説かれたんだ。“あの人”も香澄さんも押し掛け女房だった筈だし」

「だろうな。……それじゃあ」

（実の母親を“あの人”呼ばわりか。相当根が深いな）とは思いながらも浩一はそれ以上突っ込まず、持ち上げた自分のグラスを清人のそれに近付ける。

「モテモテで羨まし過ぎる、良い男だった叔父上に乾杯」

「乾杯」

軽く触れ合ったグラスがカチンと小さな音を立て、男2人はそれから余計な事は言わずに酒と四方山話を楽しむ事に専念したが、心のどこかで何かが動き出しているのを感じていた。

同じ頃、都内でも有数の規模を誇る総合病院内で、消灯時間を過ぎた病棟内を極力足音を響かせない様に歩く20代半ばの男性の姿があった。

仕事帰りであるのか片手にビジネスバッグを持ち、薄暗い廊下を迷うことなく進んで行く。そして目指す個室に辿りつくと、入口の引き戸をするすると音も無く開いた。

中の人間に気付かれる事は無いと思っただが、予想に反して当面のその主である小笠原由紀子が気配を察した様に顔を向け、それを見て心の中で舌打ちをする。

「……聡？」

「ああ、ごめん。起こしたかな？」

自分譲りの多少癖のかかった柔らかな髪を持つ息子が申し訳なさそうに謝ってきた為、由紀子はベッドから体を起こしながら笑って首を振った。

「ううん、何となく目が覚めたところだったから。それより何かあったの？」

僅かに首を傾げつつ尋ねた母親に、聡は鞆から一冊の文庫本を取り出し、彼女に向かって差し出す。

「大した事ではないけど……、東野薫の新刊が今日発売だったから持って来た。もう寝ていると思ってたから、置いて帰るつもりだったんだけど」

「え？ まさかわざわざ仕事帰りに買って来てくれたの？」

それを見た由紀子は僅かに目を見開き、目の前の本と息子の顔を交互に見やる。その視線を居心地悪そうに受け止めた聡は、まるで反抗期の様な受け答えをした。

「……今日は偶々外に出る用事があって。ついでに買って来ただけだから」

ボソツとそう呟いて視線を逸らした聡を見つめた由紀子は、ほんのりと嬉しそうに笑った。そして愛おしそうに受け取った文庫本のカバーを撫でる。

「ありがとう。明日ゆっくり読ませて貰うわね」

そのまま本の表紙に視線を落としている母親に顔を戻し、聡が静かに声をかけた。

「……母さん」

「何？」

顔を上げた由紀子と真正面から向き合った聡だが、少ししてから自分からその視線を外した。

「……いや、何でもない。遅いしもう帰るよ。次の休みの日にゆくり来るから」

そう言っつて踵を返した聡の背中に、由紀子が気遣わしげな声をかける。

「来月には退院できるんだし、忙しい思いをして無理に顔を出さなくても良いのよ？お仕事が大変だろうし」

「ああ、分かっている。それじゃあ」

些か重い気分で母親の病室を抜け出た聡は、そのまま依然として喧騒を保っている夜の雑踏の中へ戻って行った。そして家路を辿りながら、日中の出来事を反芻する。

（一応、電話をしてみたが……、やはり直接は無理か。予想通りと言えば予想通りなんだが……）

未だ直接顔を合わせた事の無い異父兄の事を頭に思い浮かべ、聡はその顔に渋面を浮かべた。

（だが、このままで良い筈がないだろうか？）

そう決意を新たにした聡が、地下鉄のホームへと通じる階段を降りながら呟く。

「本人が駄目なら、この際、妹から接触してみるか」

そんな風に、聡の当面の方針が決定したのだった。

## 第2話 男達の事情（後書き）

なんか今回主人公が影も形も出ませんでした。次はそんな事は無い筈ですが……。

### 第3話 First contact

ある土曜日の午後、時間を見計らって清人達の自宅マンション最寄りの図書館に出向いた聡は、書架の間から首尾良く目的の人物の姿を探し当て、軽く安堵の溜め息を吐いた。

（興信所を使って生活パターンを調べさせたものの……、今時の学生に珍しくバイトはしていないしサークル活動もしていないから接点がない）

そしてスキニージーンズとパーカーの後ろ姿を見ながらほっとしたのも束の間、新たな問題に直面する。

（唯一ここだったらそれなりに自然に知り合いになれるかと思っただが……、どう声をかけたものか。下手するとストーカーとか、不審者扱いされかねないし）

棚を眺めている清香の動きに合わせ、周囲に怪しまれ無い程度にさり気なく移動しつつ、そんな事を真剣に悩んでいた聡だったが、清香が頭を動かす度にゆらゆらと揺れる、真つすぐに床に向かって伸びているポニーテールを見ているうち、ふと思ってしまった。

（ちょっと引つ張ってみたいな、あれを）

そして次の瞬間、自嘲的な呟きを漏らす。

「……何、小学生のガキみたいな事を考えているんだ？ 俺は」

そうこうしているうちに、既に左手に一冊抱えていた清香が二冊目を取るうと書架に手を伸ばした。しかし目指すそれは最上段にあり、身長が160cm前後の清香が背伸びしてもギリギリ手が届かない高さだった。

普段なら列毎にキャスター付きの台形の踏み台が置いてある筈が、その日に限って何故か清香が見渡す範囲に見当たらず、ちょっと不

機嫌そうに棚を睨み上げる。そうしてもう一度背伸びしてみようと踵を上げかけた清香に、背後から声がかけられた。

「俺が取りましようか？」

「え？」

反射的に清香が振り向くと、チノパンにボタンドアンのカラーシヤツを合わせ、ジャケットを羽織った聡がその前に立っていた。そのまま聡が書架に近寄り上方に手を伸ばす。

「わざわざ踏み台を探してくる程の事では無いでしょう。……確か、これですよな？」

「あ、えつと……」

驚いて軽く目を見開いた清香の前で、181cmの聡は楽々と目的の本を取り出し、彼女に差し出した。

「はい、どうぞ」

爽やかに微笑まれながら差し出されたそれに、清香は一瞬戸惑ったものの、素直に礼を述べて受け取る。

「ありがとうございます。助かりました」

「どうぞ致しまして」

本来ならそこで話が終わる筈が、聡が何気なさを装いながら慎重に口を開いた。

「良くここに来るんですか？」

「はい？」

「そのポニーテールを、ここで度々目に留めていたのでいきなり何を言い出すのかと怪訝な顔した清香が、僅かに首を傾げながら応じた。

「そんなに目立ちます？」

「ええ、………ついつい引つ張ってみたくなる、色と形と長さですか」

真顔で告げられたその内容に清香が一瞬キョトンとした後、堪え

きれずに嘔き出した。

「やだ、子供ですか！？ しかもいじめっ子でした？」

「とんでもない、虐められる方でしたよ？ だから昔出来なかった事を、今無性にやりたくて仕方がなくて」

しみじみとした口調の予想外の切り返しを聞いて、益々爆笑したくなった清香。しかし場所が場所だけに精一杯声量を抑えようとした為、余計に苦しい。

「何ですかそれ？ すっごい迷惑です」

「すみません」

そこで清香は何とか笑いを静め、改めて初対面の苦笑している相手を見やった。

「でも度々つて……、あなたもこの常連さんなんですか？」

「常連と言うかどうかは分かりませんが、月に1・2回は来てますね。本を読むのも好きですが、図書館の独特な空気と匂いが好き、と言うか……」

考え込みながらそう告げた聡に、清香が我が意を得たりとばかりに力強く頷いてみせる。

「そうなんですか！？ 私もそうなんです！ 良いですよ？ 整然と分類されて、年月を感じさせる書物の存在感。日常空間から切り離された雰囲気！」

「あの……、分かったからちよつと移動しませんか？ 他の人の迷惑かも……」

「う……、す、すみません」

興奮気味に叫んだ清香に、割と近くに配置されていた閲覧席から幾つかの視線が突き刺さる。それを察した聡が清香を促し、清香もすぐに状況を理解して奥の方へと移動した。

そして多少笑いを堪える様な表情で、聡が口を開く。

「でも確かに珍しいかもしれませんがね。女の子が図書館について、そういう風に熱く語るなんて」

「はい、友達にも良く言われるんです。『そんなカビ臭い事言っていないで、もっと周りに目を向けたら?』って」

思わず頂垂れそうになった清香を宥める様に、聡が口を挟む。

「人の趣味嗜好なんてそれぞれですから、放っておけば良いのでは?」

「それはそうなんですけど、昔から進路もそれで決めてしまったので、余計にからかわれるネタなんです」

「ここではあ……、と軽く溜め息を吐いた清香に、聡は慎重に話を進めてみた。

「進路? 将来何になりたいのかな? 図書館とか本から連想すると……、作家とか?」

「まさか! あんな大変な仕事、私には無理です。私、図書館司書希望で、大学も司書科目を取れる所を選択したってだけで」

大袈裟に片手を振りながら否定した清香に、聡は内心ほくそ笑みながら探る様に言い出す。

「ああ、そうなんですか。なるほど。……だけど『あんな大変な仕事』って、まるで身近に文筆業の人が居る様な言い方ですね」

「……あ、えっと、……まあ、そんなところで……」

途端に視線をさまよわせて曖昧に言葉を濁した清香に、聡はストリートに自分が目的としている人物の名前を口にした。

「まあ作家と言ってもピンからキリまでありますけど、確かに東野薫位の売れっ子作家とかだと大変そうですね」

「……あの」

「え? どうかしましたか?」

「その……、どうしてその名前……」

聡が清人のペンネームを口にした途端、清香の顔が僅かに強張る



と同時に、今更ながら警戒する色が浮かぶ。しかし聡はそれに気付かないふりをしながら、淡々と話を続けた。

「“東野薫”の事ですか？ 実は母が以前からのファンで、デビュー以来発売された本を全作揃えているんです。この前も新刊を買って届けたので、何となく名前が出ただけなんですが」

「そうなんですか？」

若干警戒の色を弱めた清香に、聡はスルスルと用意しておいた台詞を続けた。

「ええ。母は中でも『覇権の階』<sup>ハケンノカイ</sup>とか『雷光』とか好きみたいで、繰り返し何度も読んでます。なんでも初期の頃の作品より、ここ数年の作品の方がストーリーも人物描写も各段に良くなってるからと言っていました」

「嬉しいっ！お母様って、本当に本物のお兄ちゃんファンなんですネー！！」

いきなりそう叫びつつ清香が空いている方の手で自分のジャケットの袖を鷲掴みした為、流石に聡は驚いた。

「は？ え？ あの、ちょっと」

「あああっ！ ご、ごめんなさい！」

瞬時に我に返った清香が慌てて手を離しつつ謝罪したが、聡は緊張しながらわざとらしく突っ込んでみた。

「いや、それは良いんですが、お兄ちゃんって……」

すると清香は幾分迷いながら、控え目に口を開く。

「あの…、実は“東野薫”は私の兄なんです」

「本当に？ 凄い偶然ですね」

白々しくそう驚いてみせた聡に、清香が切々と訴える。

「私とその妹だと知ると、『お兄さんのファンなんですよ』と良く言われるんですけど、それならどの作品をどんな風に好きかと尋ねると途端に口ごもったり、トンチンカンな受け答えしか出来ない人

が大半なんです。でもお母さんがファンだつて仰るなら、その通りなんですよね？」

「勿論です。見ず知らずのあなたに、嘘やお世辞を言っても仕方がないし」

苦笑しているふりをしつつ、聡は密かに冷や汗を流した。

(うつ……、下手に俺自身がファンだとか言わなくて正解だった)  
そんな聡の内心など知る由も無かった清香は、頷きながら続ける。

「そうですね。実は……、お兄ちゃんがデビューした翌年に両親が急死したもので、私を引き取ったりして金銭的にも色々大変だったみたいなんです」

当時の事を思い出したのか沈んだ表情になって俯いてしまった清香に、何と言葉をかければ良いのか分からない聡は沈黙を保った。

「そんな事もあつて、その後何年か編集さんの言いなりになって大衆受けする物ばかり書いてたから、『その頃の物は今自分で読み返してもつまらない』って言うて……。あ、これは勿論お兄ちゃんがそんな愚痴めいた事を私に言つたわけじゃなくて、アシスタントの人から『私が言つた事は内緒ね』って口止めされた上でこっそり聞かせて貰つた話なんですけど」

顔を上げて弁解する様に告げた清香に、聡が安心させるように宿めた。

「分かりますね、それは。どんな職業だとしても新人時代はあるものだし、そういう場合不本意な事が多いのはお約束ですから」

それを聞いた清香は、安心した様に顔を綻ばせる。

「それで『自分の作品だつて自信を持つて言えるのは、五年目位からの作品だな』って言うてたそうで、さつき名前を挙げてくれた本がその時期の作品だったから、お母さんは本当に良く読んでくれてるんだなあつて思つて、凄く嬉しくなつちやっただんです」

「そんな風に言って貰えるなんて、母が聞いたら喜びます。今度行った時に伝えますね」

ニコニコと告げてきた清香に釣られて笑顔になった聡だが、ここで清香がささやかな疑問を呈した。

「ご両親とは離れて暮らしてらるんですか？」

「いえ、同居してますが、今入院中なので」

「え？ご病気なんですか……」

途端に心配そうな表情を浮かべた清香に、聡が取り繕う様に続ける。

「でも大した事じゃありませんから。確かに手術はしましたが経過は順調で、来月末には退院できますし。……そんな心配そうな顔をしてしないで下さい」

何となく罪悪感を覚えてしまった聡が清香に言い聞かせていると、少しの間何やら迷っていた様な清香が躊躇いがちに言い出した。

「あの……」

「どうかしましたか？」

「お見舞い代わりと言ってはなんですけど……、そんなにお兄ちゃん作品のファンの方なら、サインとか貰いましょうか？」

聡にとっては願ったり叶ったりの申し出だったが、あからさまに喜びを露わにする事はできず、控えめに問い返した。

「え？ それは嬉しいですが……、色々にご迷惑では？」

「私は構いません。せっかくですから最新刊とかにサインして貰って、そちらのご自宅に送る様に手配しましょうか？」

「あ……、それはちよつと……」

「何か不味いでしょうか？」

親切に清香がそう申し出たが、そうなると自分の名前と住所を教えなければならず、早々に自分が清香に接触した事が清人にバレる

危険性に気がついた聡は、慌てて考えを巡らせた。

偽名を使ったり知人の住所を教えて誤魔化す事も考えたが、本来欲しかったのはサイン本ではなく、清人への足掛かりだった事から考えて、継続的に清香と連絡を取り合える状況を作り出す事が最優先だと結論を出す。そして短い時間の間に脳内をフル回転させ、目の前の人物を何とか丸め込めそうな流れを捻り出した。

「……うーん、サインを貰うだけでも悪いのに、新刊まで頂くのは正直言つて気が引けるんです。それに……、せっかくだから母が読み込んでいる本にサインして貰えないかと。書き手として、その方が先生も嬉しくないでしょうか？」

「言われてみれば、そうかもしれないですね」

「ですがそちらに本を送りつけるとなると、貴方の住所を聞かなくてはいけません……、先生に保安上不用意に見ず知らずの人間に住所を教えない様に言われていませんか？ 勿論俺は不特定多数の人間に漏らす気はありませんが」

「そうですね……、ファンと言つても色々な人が居ますから、出版社でも公表してないって聞いてますし」

聡の繰り出す話に頷きつつ考え込んでしまった清香に、聡は優しく笑いかけながら打開案らしき物を口に出した。

「だからあなたさえ良ければ、あなたの携帯番号かメルアドを教えてくださいませんか？ 2人で連絡を取り合つて、直接本をやり取りすれば良いかと」

「あ、なるほど。その手がありましたね！ そうしましょう！」

嬉しそうに同意し、左手に抱えていた本を棚の空いているスペースに乗せ、斜め掛けしたショルダーバッグから今にも携帯を取り出しそうな様子の清香に、自分がそう誘導したにも関わらず聡は頭を抱えなくなつた。

(見ず知らずの男に住所を教えるのは確かに危険だが、あっさり携番やメルアドを教えるのもどうかと思うんだが……)

そして自分の携帯のプロフィールには本名の“小笠原聡”の名前で登録されている事を思い出し、あっさり赤外線通信でデータ送信はできないと判断する。

そして何か考える前にジャケットのポケットから財布を取り出し、更にその中から仕事で使っている名刺を取り出した。

「……ああ、すみません。今手元に携帯が無くて。代わりにこれを渡しておくので、後で都合の良い時に連絡をくれませんか？ 仕事でないので名刺入れを持って無くて、財布に入れててくれたびれた奴で申し訳ありませんが」

続けて取り出したボールペンでサラサラと裏面にメルアドと携帯番号を書き込んで清香に差し出した名刺には、聡が職場で名乗っている父の旧姓である“角谷聡”の名前が刷られてあった。それを受け取って眺めた清香は、少し困った顔をする。

「……ええと、ごめんなさい。“すみや”さんですか？ それとも“かどたに”さんか“かどや”さん……」

「ああ、そういえば自己紹介がまだでしたね。“すみやさとる”です。でもちゃんと確認して貰えて嬉しいですね。いい加減な人間はそのまま流して、次回に自分が適当に思った読み方で声をかけますから」

実際、これまでに何度か不愉快な思いをしていた聡が思わず嬉しそうに本音を述べると、清香は多少恥ずかしそうに話を続けた。

「こちらこそ名乗るのが遅れてすみません、佐竹清香です。仕事柄、読み書きに関してはお兄ちゃんが五月蠅いんです。それに加えて、人様の名前を間違えるなんて失礼極まりない。社会人としての礼節に欠けるから、曖昧な場合には初回にきちんと確認する様に」って念を押されて」

「そう。先生は清香さんの事がよほど大切なんですな」

「どうしてそう思うんですか？」

同じ事を友人に話した時は「口うるさい」とか「厳しい」とか評された経験しかない清香は意外に思ったが、聡は目元を和ませながら当然といった口調で続けた。

「だってそれは清香さんが社会に出てから恥をかかないようになっていう、先生の優しい心配りからきている言葉でしょう？ 凄く大事にされてるのが、その一事で分かります」

そう告げられた清香は間接的に清人を褒められた事ですっかり嬉しくなり、満面の笑みで聡を見上げた。

「はい！ お兄ちゃんは頭が良くて優しくくて何でもできる自慢のお兄ちゃんなんですよ。だから私も大好きです！」

「そう……」

その時、聡は自分の胸中に、何とも言い難い感情が宿ったのを感じた。

それが清香から絶対的な思慕と崇拜を受けている清人に対する嫉妬心と、兄である清人に対するその感情を躊躇い無く表に出す事のできる清香への羨望である事に気付くのは、もう少し先の事になるのだった。

#### 第4話 交錯する思惑

「いただきます」

夕食時、清香と食卓を挟んで挨拶をした清人は、常より微妙に多い皿数と手の込んだ料理を眺め、箸を動かしながら不思議そうに尋ねた。

「……清香、何か今日は随分気合いを入れて作ったんだな」

「うん！ だって嬉しい事があったから」

如何にも上機嫌に言い出す清香の、“聞いて聞いて！”的な無言の訴えを醸し出す瞳を見た清人は、笑いを堪えながら尋ねてみた。

「へえ、因みにどんな？」

「今日図書館で、お母さんがお兄ちゃんデビュー以来の熱烈なファンだって人に偶然出会って、色々な話を聞いてきたの」

「そうか。例えばどんな話？」

「あのね、出版作品を全部コレクションしているのはお約束でしょうけど、装丁が傷まない様にオリジナルの手製のカバーをかけてるんだって」

「そんな風に大事にして貰ってるとは、有り難いし作家冥利に尽きるな」

自分の作品を大事にして貰っていると聞いて悪い気がしないのは当然であり、清人の顔も自然に緩む。

「それで、お兄ちゃんはこれまで色々なジャンルで書いてるでしょう？ 一般的な文芸書とか他にエッセーとかミステリーや各種ルポやノンフィクション、恋愛物や時代劇とかSFまで手を広げちゃって」

「まあ、書きたいものを書いてるうちに、際限なく幅が広がってしまっただが」

「それでその方、ご丁寧にジャンル毎に色柄を変えてカバーを作っ

ているから、お兄ちゃんが新しいジャンルに手を出す度に『今度はどんな物にしようかしら？』って楽しそうに、でも真剣に悩んでるんですって」

「俺が雑食作家なばかりに、見ず知らずの女性を散々迷わせる結果になって申し訳ないな」

そこで苦笑いを一層深くした清人に、清香が顔付きを改めて神妙に言い出した。

「それでね？ お兄ちゃん。お話しているうちに分かったんだけど、実はその人今入院中なんですって」

「それは……、それなりの年齢の人だろうし、心配だな」

思わず同情する口調と表情になった清人に、清香が軽く首を振りながら続ける。

「でもすぐ退院予定だから心配しないで欲しいし、変な事を聞かせて却って悪かったと謝られたわ。だけどその話を聞いて、私つい『お見舞い代わりにお兄ちゃんのサイン本でもさしあげましょうか？』って言ってしまった……」

そう言っただけで顔色を俯けた清香を眺めた清人は、目元を緩ませて優しく笑いかけた。

「分かった。それは清香の親切心から申し出た事だし、気にしないで良いよ。俺なんかのサインで喜んで貰えるなら、幾らでもするから」

それを聞いた清香は、弾かれた様に顔を上げ、嬉しそうに礼を述べた。

「ありがとう、お兄ちゃん！」

笑みにすこぶる満足しつつ、清人が早速どの本にサインして渡そうかと思案する。

「じゃあ……、出版社から貰った最新刊が残っているから、早速それだけでも」



「あ、ちよつと待つて！」

「どうした」

慌てて引き止めた清香に清人は訝しげな顔を向けたが、清香は順序立ててその理由を口にした。

「あのね、できればお母さんが普段読み込んでいる本にサインをして貰えないかって頼まれてるの」

「そうなのか？」

「うん、サインして頂くだけでも恐縮なのに、本まで頂けないってそれに愛着のある本にサインを頂けた方がお母さんも喜びそうだからって事なんだけど、どうかな？」

幾分心配そうにお伺いを立てる清香の顔を見て、清人は破顔一笑した。

「それなら俺もそれで構わない。大事に読み込んで貰ってる本を見たら、俺も嬉しいし」

「良かった！　じゃあ今度預かってくるからお願い」

「分かった。しかしその人は良識と謙虚さを兼ね備えた上、母親思いの親孝行な人だな。そんな風に思いやって貰って、そのお母さんは幸せだ」

「そうね……」

しみじみと感想を述べた清人だったが、ここで何故か清香が箸の動きを止めて何やら考え込んでしまったらしい事に気がつき、気遣わしげに声をかけた。

「どうかしたのか？」

その問い掛けに清香は一瞬何と言ったものかと迷う風情を見せたが、ぼそぼそと正直に思った事を口にする。

「あ、えつと……、大した事じゃ無いんだけどね？……私も親孝行、したかったかなあ、なんて」

「……清香」

思わず何とも言い難い顔で清人が口を閉ざし、自然と重苦しくなったその場の空気を払拭しようと、清香がわざとらしく明るい声を張り上げた。

「だから！ 親に親孝行出来なかった分、親代わりに面倒見てくれるお兄ちゃんの老後の面倒はみてあげるからね！ 安心して！」  
「……なんだそれは？」

いきなり飛躍した話の内容に清人が眉を顰めたが、清香は勢い込んで続けた。

「だってお兄ちゃんつたらもう31なのに、結婚どころか女性と付き合ってる気配すら感じないんだもの」

その妹の訴えに、清人は呆れた様な溜め息を吐く。

「あのな……、未成年の妹が居る家に、女性をとつかえひつかえ引つ張り込んだりできると思うのか？ お前が知らない所でそれなりにやってるから、清香が心配する問題じゃない」

「それなら今までどうして結婚の話が出てこなかったの？」

「清香が自立して幸せな結婚するのを見届けるまでは、自分の事は考えられないから」

真顔で淡々と、自分の中での既定路線を語った清人に、今度は清香が溜め息を吐きたくなった。

「あのね……、そんな事言ったら、お兄ちゃんは忽ち40過ぎるわよ！？ だから私のせいで1人寂しい老後を過ごす事になったら、面倒みてあげるって言ってるの」

椅子に座りながら些かふんぞり返る様に姿勢を正して宣言した清香に、清人がクスツと小さな笑いを漏らす。

「別にそうなくても、清香のせいじゃないと思うが？」

「いいの！ それに……、お兄ちゃん以上に格好良くて頭が良くて

頼りになる男の人なんてそうそう居ないんだもの。だから私の方が一生独身っばいし……」

多少いじけた様に呟いた清香に、とうとう清人は笑い出し、何とかそれを堪えながら結論づけた。

「それについては明らかに俺のせいだな。分かった。じゃあその時は、2人で静かな老後を過ごそうか」

「そうしようね！」

自分達の将来についての、ブラコンシスコン2人組の会話はそれでひとまず円満に終了し、その後清香が清人に色々話し掛けつつ食事を続けたが、何故か清人は何かを考える風情で受け答えをした。そして食べ終えて椅子から立ち上がりつつ、すまなさそうに清香に声をかける。

「清香、悪いが来週一つ締切があつて、予定が詰まってるんだ。後片付けを任せて良いか？暫く書斎に籠もるから」

それに清香が素直に頷く。

「分かったわ。二時間位したら珈琲を持っていくね。明日の朝ご飯も私が準備するから心配しないで」

「ああ、頼む」

軽く微笑んでから清人は歩き出し、仕事場に行っている書斎へと入った。そして机の前のキャスター付きアームチェアにドサリと音を立てて座る。

大きめのその背もたれに寄りかかりながら、清人は斜め上方向を見るともなしに見つつ、先程までとは打って変わって無表情で呟いた。

「……親孝行、か。『親孝行したい時に親は無し』とは良く言ったものだな」

そして次に上半身を起こし、机に肘を付いて両手を組む。そこに

額を押し付ける様にして、不機嫌そうな呻き声を漏らした。

「しかし、不愉快な事まで思い出したな。……………ふざけるな」

この時、清香がはつきり告げなかった事もあり、清人は清香が知り合った“母親がファン”だという人物が清香と同年輩の女性だと何となく思い込んでしまっていた。しかもその人物が最近自分を苛立たせている張本人と同一人物であるなどは、夢にも思っていないかったのだった。

本来、清香に関しての観察力洞察力が鋭過ぎる清人が、珍しくそんな些細な勘違いをした日の翌日。明るいつ後の日差しが差し込む、ガラス張りの広い店内の壁際でシャンプーを済ませた清香は、スタッフに誘導されて鏡の前の椅子に座った。

さほど待たされる事もなく、指名をしていた明るいオレンジ色に近い髪的美容師がやってきてその背後に立って声をかけてくる。

「やあ清香ちゃん、お待たせ」

笑顔を振りまきながらふわりとカット用のビニールケープを自分の周りに広げた玲二に、清香は鏡の中の彼に笑顔を返しつつスルリと袖に腕を通した。

「今日もお願ひします、玲二さん。でも私って贅沢よね？」

「何が？」

ケープを清香の首の後ろで止めつつ、首にかかる程度の髪を僅かに揺らしながら玲二が尋ねると、清香がクスクスと笑いながら理由を述べた。

「だってカリスマ美容師と人気も高い玲二さんに、電話一本でこちらの都合に合わせていつでも予約を入れて貰えるんだもの。しかも毛先を揃えるだけなのに。他の女の人達に知られたら、絶対恨まれ

るわ」

それに玲二は清香の髪を纏めたタオルを外しつつ、笑って応じる。「可愛い清香ちゃんかわざわざ俺に会いに来てくれるんだから、時間を空けるのは当然だよ?」

「もう、相変わらず上手なんだから」

苦笑した清香の髪を、玲二は滑らかな手の動きで肩から背中へと流した。

「言っておくけどお世辞じゃないよ? 本当に、会う度に何にも染まっていない清香ちゃんを見ると……」

そう言いながら玲二は後ろから両手を回し、清香の両サイドの髪を耳の横で指で挟んで長さを測る様に伸ばしつつ、僅かに屈んで清香の顔に自分の顔を寄せた。そして鏡の中の清香に向かって、艶やかな流し眼を向ける。

「上から下まで余す所無く、俺色に染め上げてみたくなる……」

「ぜえ〜ったい駄目っ!」

大抵の女性はこれで落ちるところが、清香は頬を染めるどころか、気分を害したらしい顔で盛大に否定してきた為、さすがの玲二もへこみそうになった。

「……酷いな。そんなに嫌わなくても」

すると清香が猛然と理由を述べる。

「だって美容師さんって、会う人会う人私の髪を見るなり『あら素敵な髪ね! でも若いんだからもう少し明るい色にした方が絶対似合うわよ? ついでに軽くパーマもしてみない?』とか何とか上手いこと丸め込もうとするんだもの!」

憤然としながら訴えられた内容に、玲二は苦笑いしながら立ち直った。

「ああ、カラーやパーマが嫌な訳ね……。因みにその理由、聞いて

も良い？」

「だってお兄ちゃんが『自分の髪がくせ毛で明るめの色だから、この黒くてサラサラの髪が好きだ』って言って、嬉しそうに髪を撫でてくれるんだもの。うっかり職業上の口車に乗って変えたりしたら、そんな事してくれなくなるかもしれないでしょう？」

「……そうかもしれないね」

取り敢えず同意の言葉を返しながら玲二は手を動かし、肩甲骨にかけりそうな長さのストレートヘアを少しずつヘアクリップで頭に留めてカットの準備を進めた。

「じゃあいつも通りの長さで、揃えるだけで良いんだね？」

「はい、玲二さんの腕の振るい甲斐が無くてすみませんが、宜しく願います」

「任せて」

くすくすと笑いながらも、次の瞬間真面目な仕事上の顔になった玲二は、クリップを一つ外して指に挟みこんだ髪に向かって鋏を動かして始めた。しかし頭の中では先程の話を思い返し、些かげんなりする。

(だけど……、嬉々として年頃の妹の髪を撫で回すなよ清人さん。絶対、あちこち触りたいだけだろ。危ないな)

思わず愚痴を言いたくなった玲二だったが、今日顔を合わせた時からいつも以上にここにこしている清香を見やって、ふと第六感的なものが働いた。

「ところで清香ちゃん。最近何か良い事があった？」

「え？ どうしてそんな事を聞くの？」

「いつもより何となく機嫌が良いかな」って。客商売だから観察眼はそれなりにね。特に魅力的な女性に対しては」

目を丸くした清香に、玲二は手を止めないまま茶目っ気たっぷりに言ってみる。すると清香は納得したように話し始めた。

「凄いな〜、玲二さん。実は昨日嬉しい事があって」

「へえ、どんな事？」

「お母さんがお兄ちゃんとの熱烈なファンって言う人と知り合いになつて、色々あつてその人と連絡先を交換したの」

好奇心で尋ねてみたものの、何やら不穏な物を感じてしまった玲二は慎重に尋ねてみた。

「……ちよつと聞くけど、その知り合った人って、勿論女の人だよな？」

「ううん、男の人」

（はあ？ それじゃあ得体のしれない男に連絡先を教えたって事か！？）

サラツと言われた内容に、玲二は流石に手の動きを止めて慌てて確認を入れた。

「因みにそれ、清人さんに話した？」

「ファンだってお母さんの事？ 勿論嬉しいって言ってたけど？」

「いや、そうじゃなくて……、連絡先を交換した息子さんの事」

「別にわざわざ話す事じゃないかと思つたから、言つてない、かな？」

僅かに首を傾げ、怪訝そうに自分が話した内容を確認している清香を見て、玲二は腹立たしく思つた。

（何だよ清人さん！ いつもなら俺らが清香ちゃんを誘つたりしようものなら、露骨に邪魔したり圧力かけてくる癖に！ どうして今回に限って疑いもしないんだ？）

そこまで考えて、ある一つの可能性に行き着く。

「……清香ちゃん。ひよつとして清人さん、締め切りが近いとか？」  
その問い掛けに、清香は完全に目を見開いて驚愕した。

「凄い！ どうしてこの場に居ないお兄ちゃんの事まで分かるの？ 玲二さん、ひょっとして最近超能力に目覚めた!？」

「は、はは……、さすがにそれはどうかなく」

天然つぷりを如何なく発揮し、嬉々として食い付く清香に顔を引き攀らせつつ、玲二は内心で深い溜め息を吐いた。

（清人さん、あんた何で肝心な時に使い物にならないかな!? しかしあの人が締切位で清香ちゃんの監視が緩むとは考えにくいが……。まあ、仕方がない。今日は俺が情報収集に勤しむ事にするか）  
そう腹を決めた玲二は、再び手を動かしながら清香から必要な事を漏れなく聞き出す事に専念した。

「因みに清香ちゃん。その人とどこでどんな風に知り合ったの？」

「昨日図書館に行つて、レポートを書くための資料を探してたの。学内の図書館は粗方目を通してたから、他に参考になるのはないかなつて。そしたら……」

そして繊細な手の動きで玲二が毛先を揃えている間、清香は巧みに誘導されて前日出会った悟との一部始終を語った。

「……そんな風に意気統合して、結局本を借りた後、図書館の隣のカフェでお茶を奢って貰ったの。『お手数をかけるので、是非ともこれ位奢らせて下さい』って。流石一流商社勤務の人は、気配りも欠かさないのね」

心底感心した様に目を閉じて1人納得している清香に、前髪を揃えていた玲二は激しく脱力して思わず床に蹲りたくなった。

（清香ちゃん……、悪いけど、そいつどう聞いても胡散臭さブンブンだから！ もっと警戒心持とうよ！）

しかし取り敢えずの小言はひとまず横に置いておく事にし、玲二は何とか最後まで笑顔を保ちながらカットを終わらせた。そして「



じやあまたお願いします！」と無邪気な笑顔を見せる清香を見送った直後、緊急召集をかけるメールを兄と従兄弟達に一斉送信したのだった。

## 第5話 秘められた確執

浩一が鞆を片手にビジネススーツ姿で小料理屋くらたの前に立つと、まだ営業時間内にも関わらず暖簾が店内にしまい込まれ、準備中の札が入口に掛けられていた。一瞬戸惑ったものの店内の明かりと人の気配に、苦笑して引き戸を開ける。

カラカラとドアの開ける音で奥のL字型のカウンターに囲まれた調理場の女性と、右手奥の座敷席に陣取っていた男達が浩一に目を向け、それぞれ笑顔を向けてきた。

「日曜まで仕事だったのか？お疲れ」

「そんな所だ。馬鹿な部下の尻拭いほど、疲れるものは無いな。：しかし早じまいしたんですか？ 奈津美さん。愚弟が迷惑をかけて申し訳ない」

真つ先に声をかけてきたこの店の主である、上下白の仕事着のまま座敷で寛いでいる修に苦笑してみせた浩一は、次にカウンターの向こう側で予め用意されていた料理を取り分けているその妻の奈津美に向かつて軽く頭を下げた。しかし彼女は笑って手を振る。

「あら、良いのよ。修さんの大事な清香ちゃんの一大事なんですよ？ お店を開けていたってそわそわして仕事にならないもの」

そう言われてますます苦笑を深めてから、左側に幾つか並ぶテーブル席の横をすり抜けて浩一は座敷に上がり込み、諸悪の根源の弟の隣に立った。

「あ、兄貴、お疲れ」

そう言っつてヘラヘラ笑いかけてくる玲二に、浩一は疲れた様な溜息を漏らしながら畳に膝を付き、弟の首を絞める真似をしつつ恫喝する。

「玲二、お前な……、人の都合も聞かずに『俺達の愛しの清香ちゃ

んに纏わりつく害虫発見！ 駆除対策を練るべく即刻全員集合すべし！』の文面に、この場所と時間だけ付け足して送るとは良い度胸だな。何様のつもりだ？」

「あ、あはは…、いや、俺もちよつと動揺したかな？」

他の皆が傍観する中、玲二が些か引き攣った笑いを浮かべた所で、タイミング良く浩一用のお通しとグラスを運んできた奈津美が割り込んだ。

「はいはい、浩一さん、その位で。皆さん浩一さんが来るのを今か今かと待つてらしたんだから」

そう言われながら目の前の空席に小皿とグラスを並べられた浩一は、あっさりと怒りを引つ込めた。

「分かりました。奈津美さんに免じて許してやります」

「ありがとう。さあ、どうぞ」

笑顔の奈津美に促され浩一が所定の位置に収まると、この場を仕切っていたらしい修が浩一のグラスにビールを注ぎながら玲二に声をかけた。

「じゃあ全員揃った所で、早速始めようか。玲二君？」

それに軽く手を上げて、真顔で応じる玲二。

「はい、じゃあまず俺から報告。何が目的か、清香ちゃんに近付いてる男が居ます。そしてどうしてだか、これに清人さんが気付いて無いらしいという驚愕の事実」

「はあ？なんだそれ」

「ありえない」

「泳がせてるわけじゃ無いのか？」

「もつとあり得ないだろ、即断即決の清人さんが」

その場の殆どの人間が懐疑的な視線を向ける中、玲二は予め協力を要請していた従兄弟に話の主導権を譲った。

「それで今日俺の店に来た時に清香ちゃんから得たデータを元に、

今日明良に調べて貰ってるんで。あ〜き〜ら、ちびちび飲んでんだよ。後は任せた！」

それを受けて、修の弟である明良がグラスを置き、どこからか手帳を取り出して見下ろしながら仔細を話し始めた。

「玲二から連絡貰って、取り急ぎ分かる範囲だけ調べてみたんだけど……、結構面白い事が分かったから報告するよ？」

「おう、何だ？」

「男の個人情報なんて聞いても、面白く無いとは思うがな」

大して気にも留めない様子で促した面々に気を悪くした様子も見せず、明良は淡々と衝撃の事実を告げた。

「故意か偶然か、清香ちゃんに接近してきた男は自称『角谷聡』。この名前で小笠原物産営業部第一課勤務の25歳。実は本名『小笠原聡』で小笠原物産代表取締役社長、小笠原昭の一人息子で……、かつ、清人さんの異兄弟だ」

そう明良が口にした途端、一瞬店内に沈黙が発生し、次いで驚きの声が沸き起こった。

「はああ！？ ちょっと待て！」

「何なんだそれは!？」

「そんな話、初耳だぞ！」

しかしそんな中、年長組である浩一と友之だけは何とも言い難い顔で黙り込んでいるだけなのに気付いた玲二が、訝しげに声をかけた。

「……おい兄貴、友之さん。何で2人だけ平然としてんだよ？」

それに対し、浩一と友之はちらりと互いの顔を見合わせてから、不思議そうに問い返す。

「いや……、お前達知らなかったのか？」

「法事か何かで集まった時、小耳に挟んだ気がしたがな……」

それを聞いて啞然とする修、玲二、正彦の3人に、がっくりと頂

垂れる明良。

「何だよ、2人とも知ってたのか……。気合い入れて調べて損したな……」

それを浩一は申し訳なさそうに宥めた。

「悪い明良。でも今日の午後に玲二から連絡を受けてから、それだけ調べられるとは大したものだ。伊達に人脈の広さを誇ってないな」「どうも」

そう言われて苦笑するしかない明良から他の面々に視線を移しつつ、浩一が慎重に口を開いた。

「さて、どこからどう話せば良いかな……。佐竹の叔父さんが香澄叔母さんと結婚する前に、離婚歴があつたのはお前達も知ってるだろう？」

「それは勿論」

「だから揉めたんだろうし」

素直に頷く従兄弟達に、軽く頷いて浩一が話を続ける。

「実は叔父さんと最初に結婚してたのが今の小笠原昭夫人の由紀子さんで、前小笠原物産会長小笠原幸之助の1人娘で、清人の母親だ。2年位で離婚して実家に戻り、その数年後に小笠原物産で頭角を現していた昭氏と再婚した。婿養子に入った昭氏とは盛大な挙式披露宴を催したが、清吾叔父さんとは駆け落ち同然で式も挙げなかったから、世間一般的には清吾叔父さんと由紀子さんの結婚の事実は知られていない。清人は佐竹家に置いていかれてその後没交渉だったし、余程の事情通でなければ親子である事実も知られていない」

立て板に水の如く浩一が語り、ここで喉を湿らせる為にビールの入ったコップに手を伸ばす。何となくその場に重苦しい沈黙が満ちたがそのままにしておけず、控え目に正彦が問いを発した。

「……離婚の理由は？」

「そんな事、当人にしか分からんだろ。俺に聞くな」

「それもそうだな」

「それで？」

促してきた面々から僅かに視線を逸らし、浩一が如何にも言い難そうに言葉を濁す。

「……清人の記憶力が抜群なのは知ってたが、あいつ母親が出て行った時の一歳児当時の事をすっかり覚えていらしい。もう驚愕としか言いようがないな。それで……、表からは窺い知れ無い、精神的な部分で相当グレた」

（（（身も蓋もない言い方だな……、否定できないが）））

浩一はその台詞を聞いた者は、この場に居ない人間の事を思い返して全員遠い目をしてしまったが、続く浩一の言葉で意識を引き戻された。

「その後、表向き佐竹家と小笠原家とは没交渉だったんだが、清人の話によると、母方の祖父に当たる小笠原物産の前会長が時々よっかいを出してきたそうだ」

「ちよっかい？」

「って、どんな？」

思わず好奇心に負けて尋ねてくる玲二や明良に、浩一は苦々しい顔を隠す事無く仔細を告げる。

「自分が認めない男との間に馬鹿娘が産んだ孫なんか歯牙にもかけてなかったらしいが、清人の優秀さが分かったら掌を反して嬉々として擦りよってきたらしい。国内最高峰の東成大経済学部に入學が決まった時、『学費は一切面倒みてやるし、小笠原の籍に入れてやる』と恩着せがましく言ってきたんだと」

「……うわ、うちの祖父さん以上のKY」

「そんな事を言って、本気で清人さんが喜ぶと思ってたのか？」

その場全員の気持ちを代弁して問いかけた正彦に、浩一が肩を竦めてみせる。

「『ありがたくお受けします』と言うとでも思ってたんだろうさ。だがさすがに清人が『今まで様子も見ずに放っておいたのに、厚かましくありませんか?』と言ったら、『養育費と慰謝料はたんまりくれてやると言ったのに、全て拒否して今後私達親子に関わらないでくれとほざいたのはお前の父親の方だぞ。俺は情けをかけてやったのに、好き好んで自分の息子に貧乏暮らしをさせた、甲斐性なしの上大馬鹿野郎だ』と暴言を吐いたらしい」

それを聞いた面々は何とも言えない顔で黙り込み、清人の出自は知っていてもそこまでの詳しい事情を知らなかった友之が、顔に嫌悪の表情を浮かべながら続きを促した。

「……………それでどうなったんだ?」

「どうもこうも。清人は『丁重にお断りした』と言ってた」

「『丁重に』ねえ……………」

「『丁重に』の言葉の定義が変わりそうだな」

両手を広げてお手上げ、と言った風情で述べた浩一に、修と正彦が茶々を入れる。それでその場に失笑が漏れ、場の空気が少しだけ回復した。

しかし小さな笑いを収めた浩一が、更に容赦の無い話を続ける。

「それから大学四年の時、あいつの主席卒業が本決まりっぽい時に『うちに入れ。ゆくゆくは社長の椅子を渡してやっても良いぞ?』と厚かましく言われたらしい」

それを聞いた浩一以外の面々は、揃って呆れ顔になった。

「一度で懲りなかったんだ? その祖父さん」

「…ある意味、根性あるよな」

「いや、もう意地じゃないのか?」

「それにしても、もう少し言い方を考えても」  
それを受けて、浩一が重々しく口を開く。

「その時、殊勝に小笠原物産にエントリーシートを提出してあっさり内定を貰ったから、小笠原物産に取られるかと焦ったんだ。だが、……卒業直前に某出版社の新人賞を受賞した事と作家デビューを公にして、華麗に就職を辞退しやがった。……同時期に柏木産業でも内定を出しててこちらも断られたから、小笠原と二股かけられてたと分かった時に祖父さんと父さんに『早く向こうを断らせる』と散々責められた挙げ句、内定を辞退された時には『何で気がつかなかったんだ。お前もグルか!』と怒鳴られまくった」

そんな過去を告白して座卓に突っ伏した浩一を、周りの皆が同情の眼差しで見詰めた。

「……大変だったんだな」

「華麗について……」

「絶対一悶着あったよな?」

ぼそぼそと男達が囁き合う中、再び浩一がゆっくりと上半身を起こし、陰鬱な口調で再び話し出した。

「それから5年位前」

「まだあるのかよ!？」

「おいおい、かんべんしてくれ」

心底うんざりした様な声がかかる中、些か自棄になりながら浩一が話を続けた。

「前会長がいよいよ駄目らしいって事になった時、自分の死後、今現在辣腕を振るってる婿養子の社長が会社を私物化するんじゃないかと不安になったらしい。まだ孫は学生だったし、幾らかでも社長の重しになる駒が必要と考えたんだな。入院先から弁護士を介して『相続人に加えてやるから、大して金にもならんくだらん物書きなど止めて小笠原の経営に参画しろ』と命令してきたそうだ」



「……馬鹿か？その祖父さん」  
「見苦しいね、人生の最後に」  
「清人さん、怒ったよな。“くだらん物書き”呼ばわりされて」  
ある者はがくりと頂垂れ、またある者は溜息を吐いて清人に同情したが、続く浩一の言葉に全員固まった。  
「当然だ。会長の病室に、山ほど仏花を送りつけようとしたらしい」  
言われた内容が一瞬理解できなかった一同は、頭の中でそれを反芻してから引き気味に感想を述べた。

「いや、幾らなんでも」

「さすがにそれはちよっと……」

「人間としてどうかと思う」

「第一、病室にそんな物を配達する花屋があるのか？」

「モラルに反するだろうが」

それを聞いた浩一が、事も無げに頷く。

「ああ、さすがに配達先を聞いたら、引き受ける所は無かったらしい。どう考えても嫌がらせにしか思えないし、その片棒担いで店の信用を落とすたくは無いだろうからな」

「それじゃあ清人さんは諦めたんですか？」

一縷の望みをかけて顔を引き攣らせながら明良が尋ねたが、浩一は苦々しく吐き捨てた。

「そんな訳あるか！ 大学以来の付き合いだが、あいつはやると言ったら手段を選ばず必ずやり遂げる奴だ。あいつ複数の花屋に日時を合わせて仏花を大量発注した後、その日に運転手付きで幌付きの軽トラック3台を手配して、その荷台に準備した花束を容器毎詰め込んで貰って、翌日の朝八時に入院先の玄関の車寄せに乗りつけた」

「……げ、マジかよ？」

「警備員に追い返され無かったんですか？」

「同時にガタイの良過ぎる体育会系の学生を、30人も現地集合で

動員してな。バイト料を提示した上で、『今から15分以内に指定する病室にこの荷物を全て運び終えたら、各自プラス1万円の料金を支払うから頑張ってくれ』とやったそうだ。清人は『職員の妨害なんてものともせず、皆嬉々としてきっかり15分でやってくれたぞ』と嬉しそうに言ってたな」

「ただでさえその時間帯は、外来の準備とか夜勤と日勤の引き継ぎとか、検温採血その他諸々で職員が忙しい時間帯じゃないですか」「それを狙ったな。……どこまで上げつないんだか」

過去に看護師と交際でもしていたかの様な冷静なコメントを零す友之に、呆れ果てた呟きを漏らす玲二。最早同意するのも馬鹿らしくなったらしく、浩一が淡々と話を続けた。

「職員に迷惑をかけたのは勿論、他にも入院患者が居る中、病棟をそんなものを抱えて走りまわられてはたまったものじゃない。百歩譲って菊の花束だけだったら病人の好みだと弁解する事も出来るが、当日持ち込んだのは菊の後ろにシキミが段々に整えられている奴だったから、どう見ても仏花以外の何物でもないからな。しかも『小笠原の指示で運び込んでますので、抗議は後から纏めて小笠原がお受けします』と叫ばせながら運ばせたそう、後から会長側に『何を考えているんだ縁起でも無い!』と非難轟々だったそう。勿論激昂した前会長の指示で、遺言書から清人の名前は綺麗さっぱり削除されたらしい」

( )( )(人生の最後に、とんだ災難だったな……)( )( )( )

そこまで聞いた面々は、ほんのちよつとだけ前会長に同情した。

そこで何を思ったか、急に浩一が座卓に両肘を付き、文字通り頭を抱える。

「その時の事を聞いた時、清人が『花が広い病室だけに収まらなくて廊下にまで溢れて、なかなか壮観な眺めだったぞ? そのまま憤死しそうな会長の記念写真を撮ってあるから見るか?』といいなが

ら当時の写真を差し出してきたんだ。その時のあいつの、悪魔的な  
壮絶過ぎる笑顔っ……。今思い出しても寒気がする。それ以降、俺  
は絶対にこいつを本気で怒らせまいと心に誓った」

本気で呻いている浩一を見ながら、他の者はさもありなんと頷い  
た。

「なるほど。そこまで拗れたら没交渉つてのも納得だな」

「互いに良い感情なんて持てないと思うし、妥当ですね」

「だけど今回、これまで一切面識の無かった弟が、清香ちゃんに接  
触を試みた、と」

「その前に、一度清人に電話をかけてきたそうだ。話を聞かずに速  
攻でブチ切ったらしいがな」

「清人さんらしい……」

話が次のステップに進んだのを捉えて、浩一が顔を上げて経過を  
告げると、皆が苦笑いした。しかし続く台詞に、その場の空気が再  
び不穏なものに逆戻りする。

「その話を聞かされた時、俺が小笠原社長夫人が最近入院してるつ  
て事をあいつに教えたら、途端に嫌な顔をされてな」

「ちよつと待つてくれ、浩一さん。それじゃまさか、その聡つて奴  
が偽名乗つてまで清香ちゃんに近付いたのは、単に清人さんに渡  
りを付ける為だつて言うのか？」

「そうとは限らないさ、明良君。偶々仕事上で使つてる通称で自己  
紹介して、偶々自分の異父兄が作家だつて事を知らなくて、偶々知  
り合った女性がその人の異母妹だつた事を知らなかったただけかもし  
れないだろう？」

飄々と口を挟んで来た友之に、明良が思わず白い目を向けた。

「……………友之さん、自分でも全つ然信じてない口調で言うのは止  
めて貰えませんか？」

「はは、自分で言うつても信憑性が無さ過ぎるな」

苦笑いで返した友之の横で、玲二が軽く腕を組みながら納得する。

「うーん、でも何となく分かったな、今回清人さんの反応が鈍かったわけ。全然気にしていない様でいて、やっぱり母親の話聞いて多少は動揺してるとか？ 締切位で清香ちゃんの観察を怠ると思えなかったから」

「それはそうだろうな」

浩一が賛同を示した所で、比較的大人しく話を聞いていた修が話を纏めにかかった。

「じゃあ取り敢えず、清人さんもそんな不純な動機で清香ちゃんに近づく男は即刻強制排除するだろうから、この際俺達も全面的に協力するという事で。清人さんには締め切りとやらが落ち着いた頃合いを見て、浩一さんが友之さんから報告して貰うって事でどうかな？」

「賛成」

「異議なし」

「右に同じ」

「全く厄介だな」

「他人の迷惑を考えろよ」

そんな風に兄弟従兄弟で意見の集約をみた所で、先程から議論の様子を窺っていた奈津美が、新しいつまみの小鉢と酒を運んで持ってきた。そして各人の前に手早く並べてから、最後に夫に配りつつ幾分探る様に問いかける。

「さつきから随分物騒なお話をしているけど、もし万が一さつき言った様に何の下心も無く、偶然2人が知り合っただけだとしたら、その小笠原さんとやらをどうするつもり？」

その問いかけに、修達は淡々と言い返した。

「それは、まあ……、そうだな」

「俺達も鬼じゃないし？」

「一応、強制排除なんて手段は取りませんよ？」

「年長者としての立場から色々言い聞かせて」

「納得してくで、自主的に身を引いて貰うとか」

「そんなところだろうな」

（どちらにしても、清香ちゃん周辺からは排除する方針は変わらないわけね）

笑いだしたくなるのを必死で堪えながら、奈津美は夫に言い聞かせた。

「どうでも良いけど修さん？明日朝からお仕事の方もいらっしやるんだから、際限なくお酒を勧めちゃダメよ？」

「分かってるって！」

苦笑して頷いた修に、早速他の面々から冷やかしの声がかかる。

「おいおい、もうすっかり尻に敷かれてるな」

「何とでも言え！ 家庭円満の秘訣は、何と言っても黙って女房の尻に敷かれてやる事だ。覚えとけ、この独り身集団！」

ふんぞり返った修の言葉に、傷ついた様に玲二が胸を押さえてみせた。

「はああ、言われちゃったよ」

「独り身集団で思い出したな、清香ちゃんへの求婚指令。どうするよ」

「取り敢えずそいつの邪魔をしつつ、清香ちゃんとデートしてアリアイ作りにするか？」

「そうだな、あの祖父さんの事だ。俺達に尾行を付けて、清香ちゃんと接触が無いと呼び出されて説教されかねない」

「じゃあそういう事で、当面の方針は決まったな」

そんな風に賑やかに、《くらた》での夜は更けて行った。

## 第6話 込み上げる怒り

「じゃあお兄ちゃん、ちょっと駅前のカフェまで出かけてくるね？」  
その声に、朝食後リビングのソファに座って寛いでいた清人は、読んでいた新聞から顔を上げ、ドアの方を見やった。

「ああ、例の角谷さんから、お母さんの本を受け取って来るんだな」  
「うん。お兄ちゃんがサインしてくれるって伝えたら、とても喜んでくれたわ」

「そうか。しかしわざわざこの近くまで足を運んで貰って申し訳無かったな。先方に住所を教えても良かったかも……」

僅かに表情を曇らせた清人に、清香が宥める様に明るく言葉を継ぐ。

「何でも今日は、もともとこの近くに用事があったんですって。本を渡したらそこに行くからって言ってたから」

それを聞いた清人は、どこか安堵した顔付きになった。

「そうか……、それはお互い都合が合って良かったな」

「うん。帰りにケーキでも買って来るね。行ってきます！」

「ああ、気をつけて行っておいで」

そんなやり取りをして清香を見送った後、再び新聞を読み始めた清人だが、電話の着信音に不快気に顔を上げた。

「誰だ？土曜日の朝っぱらから」

小さく悪態を吐きながら新聞を横に置いた清人は、壁際の電話に真っ直ぐ向かった。そして受話器を取り上げて応答する。

「はい、佐竹ですが」

「お久しぶりです、清人さん。友之です」

「……何の用だ？」

妙に嬉しそうに聞こえてきた男の声に、清人の機嫌は確実に悪く

なつた。

浩一を初めとする清香に纏わりついてくる彼女の従兄弟達の1人で、清人の一つ下の友之は、一見人当たりが良く穏和な気質を持っている好青年と思われがちだが、実際は松原工業次期後継者と見込まれるだけの人物であり、その内側に鋭敏な観察眼と胆力を兼ね備えた、早く言えば一癖も二癖もある人物だった。

しかしそれは清人も同様であり、同族嫌悪と言つ言葉がぴったりなこの2人の関係は、浩一とのそれとは異なり以前からとても友好的とは言えない代物だった。

『そんな露骨に嫌な声を出さなくても良いじゃないですか。一つ悪い事を教えてあげようと思つたのに』

「良い事”じゃなくて“悪い事”か？相変わらずだな」

清人は思わず皮肉つたが、相手は平然と切り返してくる。

『あなたには負けますよ。ところで清香ちゃんは？』

「今外に出たところだ」

てつきり清香に電話をかけてきたと思つた清人は、言外に「目的を果たせなくて残念だな」という意味合いを含ませたが、友之は全く気にせず用件を口にした。

『それは好都合。実は彼女が今、会いに行つてる人物は男です。それを教えてあげようかと』

「は？」

いきなり思考停止する内容に清人が絶句すると、友之がどこか思わせぶりに伝える。

『もつと詳しく言えば……、あなたの異父弟だったりするんですよ』  
その台詞を聞いた清人はたつぷり数秒は固まった後、電話の向こうに怒声を浴びせかけた。

「何だと!? そんな馬鹿な!! お前、いい加減な事をぬかすな!!」

「……五月蠅いですよ。彼女、その人物をどう言ってたか、思い出してみたらどうです?」

迷惑そうに指摘してくる友之に、清人は取り敢えず怒りを抑えて考え込む。

「そう言えば……、“角谷”って言う苗字は、確かあの小笠原社長の旧姓!? 迂闊だった……。おい、ちょっと待て! 大体どうしてお前がそれを知ってる!？」

矢継ぎ早の言葉に、清人の動揺ぶりが容易に推察できるらしく、友之が笑いを堪える様な口調で説明してくる。

「最初の情報源は玲二です。しかし色々平静さを欠く事があったかもしれませんが、らしくないですね。清香ちゃんに近づく男の影に気がつかないなんて」

「勝手に言ってる!」

忌々しげに吐き捨てた清人に、友之が口調を改めて問い質してきた。

「それで、どうするんです?」

「どう、とは?」

衝撃の事実を告げられた為、些か失調気味の清人が言われた意味を掴み損ねて眉を寄せると、友之が淡々と畳み掛けてきた。

「清香ちゃんに小笠原との一部始終を話した上で、彼らに金輪際近付くなど致命しますか?」

「それは……」

思わず口ごもった清人に、友之が追い討ちをかける。

「そもいきませんよね? 実の母親を死んだ事にし、実の祖父に対して仕出かした非常識な行為の数々を聞いたら、あの素直で純粋な子が『お兄ちゃん酷い、あんまりだわ! 人として最低よ! 軽蔑する



わ、大つ嫌い！」とかなんとか言いそうだ。そんな事を面と向かって言われたら、妹命のあなたにはダメージが大でしょうし」

「……うるさい、黙れ」

律儀にも清香の口調を真似て言われたそれに、清人が静かに恫喝し、そのこめかみに青筋が浮かんだ。それがまるで見えているかの様に友之がクスクスと笑いを漏らしてから、いつもの口調に戻って確定事項を告げる。

『取り敢えず今日は2人の待ち合わせ場所に、体の空いていた正彦を向かせてます。さり気なく邪魔しますから心配しなくて良いですよ』

その台詞で、清人はおおよその事情を把握した。

「全く……、俺が知らないところで皆で集まったのか？」

『ええ、意思統一しました。それで清人さん、今日は病人になって下さい』

「はあ？」

唐突な申し出に流石に清人が戸惑った声を上げたが、友之はそれに構わず話を続ける。

『携帯の電源を切つて、家電も出なければ完璧です』

そこで元々聡い清人は、友之の思惑を瞬時に理解した。

「……なるほどな。清香に心配をかけるのは不本意だが仕方がない」

『どこまでも清香ちゃん本位の人ですね。それじゃあ連絡はしましたから、失礼します』

「ああ、手間かけさせたな」

最後は互いに苦笑しあつて通話を終わらせ、清人は静かに受話器を元の位置に戻した。しかし（くだらない小細工を弄しやがって……）と聡に対する清人の怒りは、それから暫く燻り続けていくのだった。

清香が目指す店に入ると、入り口近くのテーブルに着いていた聡が軽く手を上げて自分の位置を知らせてきた。それに微笑みながら、清香が歩み寄る。

「すみません、遅くなりました」

「いえ、清香さん、こちらこそわざわざお呼び立てしてすみません。しかも先に自分の分だけ注文してしまいましたし」

聡の前に置いてあるコーヒークップを見ながら、清香は向かい側の席に座った。

「いえ、自宅のごく近くですし、角谷さんの方がご自宅から距離がありますよね。……あの、ところで今の“清香さん”と言うのは……」

前回とは違う呼び方でサラリと呼び掛けられた清香は、戸惑いながら尋ねたが、聡は事も無げに言い切った。

「ああ、この前は佐竹さんってお呼びしてましたけど、お兄さんである先生も同じ佐竹さんですから、自分の中で何となくお2人の呼び方を変えてたんですよ」

「はあ」

「清香さんがお嫌なら止めますけど、どうしても駄目ですか？さやかって言う名前が素敵だから、できればそちらでお呼びしたいと思っていたのですが」

「……えっと、そういうことなら」

「良かった。ありがとうございます、清香さん」

にこやかに微笑みながら微妙に押し強さを発揮する聡に、清香は何故か既視感を覚えた。

（あれ？ 何か、前に似た様な事が無かったっけ？）

何かにつけ、顔に貼り付けた聖人ぶった笑顔とソフトな物言い

清人に知らず知らずのうちに舌先三寸で丸め込まれている清香だったが、あまりの頻繁さの為に逆にはつきりと意識出来なくなっていた。何となくモヤモヤした気持ちを抱えながら、近寄ってきたウエイトレスにカフェオレを注文すると、清香が落ち着いたのを見計らって、聡が小さめの手提げ袋を差し出す。

「それで……、早速なんです、この本に先生のサインを貰えますか？ハードカバーの物を持ってきてしまったので、かさばるし重くて申し訳ありませんが」

「構いませんよ？本一冊位。角谷さんったら、そんなに恐縮しなくても」

クスクスと笑い出してしまった清香に、聡も自然と目元を緩める。そしてここで唐突に清香は気がついた。

（あ、そうか！ 角谷さんって、何となくお兄ちゃんに似てるんだわ！）

そうと気付いた清香の頭の中で、目の前の人物の徹底観察が始まった。

（パツと見は似てないのよね。強いて言えばお兄ちゃんはキラキラ王子系で、さしずめアレクシス様だし、角谷さんは精悍な騎士様って感じで、例えばジュノーだし……）

密かに愛読しているライトノベルの登場人物に清人と聡を置き換え、清香が軽く妄想に突入していると、ここでウエイトレスがカフェオレを運んできた。軽く会釈して目の前に置かれたカップを取り上げた清香は、それに軽く口を付ける間も注意深く聡に視線を向ける。

（臉もくつきりとした二重だし、目つきが鋭いけど怖くは無いのよね。笑った時に目を細める感じが似てるかな？ それに……、そうか！ 髪質が同じなんだ！）

自分の顔を真正面から見ながら難しい顔で考え込み、次いでニコニコと微笑みだした清香に、聡は幾分怖じ気づきながら声をかけた。「……あの、清香さん。俺の顔に何か付いてますか？」

その問い掛けに、清香は瞬時に我に返った。

「あ！？ えっと、ジロジロお顔を見てすみません。ちょっと考え事をしてまして」

「いえ、大した事でなければ良いんですが」

「あの！ 今お兄ちゃんと角谷さんの事を考えてまして。2人がちよつと似てるかな〜と」

弁解する様に清香が口にした台詞に、聡がピクリと反応した。そして若干言葉を選ぶ様に確認を入れる。

「……先生と俺が、ですか？ 因みにどの辺りがでしょうか」

「はい、髪質とか笑った時の感じが」

「そうですか……」

公表されている写真で顔は知っているものの、未だ直接対面した事の無い兄に似ていると言われた聡は面映ゆい感じがしたが、素直に喜んで良いか分からずに微妙な顔をした。しかし何とか清香に無難な言葉を返す。

「光栄です。先生のような高名な方に似ていると言われて、嬉しいですね」

「高名だなんて、ちよつと大袈裟ですよ？」

クスクスと笑った清香に、聡は慎重に話題を逸らした。

「ところで…、この前お会いした時、清香さんは先生と11歳違いだとか伺いましたが、随分年が離れてるんですね。2人の間に他のご兄弟はいらっしゃらない様です」

「ええ、実は兄とは母親が違つんです」

（よし、かかった！）と話題を誘導するのに成功したと喜んだのも

束の間、続けて聡の耳にとんでもない内容が飛び込んできた。

「兄の実母に当たる人は、兄が一歳の時に亡くなったそうで、その後父が再婚して私が生まれたんです」

「……お亡くなり、に、なつた？」

顔を蒼白にした聡が呆然と呟くと、清香は小さく頷いて続けた。「はい。亡くなった後に位牌とかは実家の方で引き取ったとかではありませんし、写真も皆無なので、どんな人だったのか私は知らないんです。兄も私の母に気兼ねしていたのか、そんな話は一切しませんでしたし」

それを聞いた聡は少しの間黙り込んでから、常より幾分低めの声で謝罪の言葉を口にした。

「……そうですね。すみませんでした清香さん。好奇心からつまらない事を聞いて」

「大丈夫です、気にしないで下さい！ 半分しか血が繋がってない異母兄妹でも、お兄ちゃんと私は並の兄妹より仲が良いって自覚と自信がありますから！」

「確かにそんな感じがしますね」

ドンと自分の胸を叩く真似をして明るく保証してくる清香に、聡は辛うじて笑顔らしきものを顔に浮かべながら言葉を返したが、内心は怒りで煮えくり返っていた。

（母さんを死んだ事にしてるだと？ 幾ら行き来が無いとは言え、あんまりじゃないのか！？ 妹に向ける愛情の100分の1でも向けられないのかよ！？ 母さんが可哀想だとは思わないのか？）

そんな事を考えながら必死に激情を抑えていた聡の頭上から、唐突に男の声が降ってきた。

「……あれ？ 清香ちゃん。どうしてここに居るの？」

「あ、正彦さん。こんにちは。どうしてって……、何がですか？」  
かけられた言葉の意味が分からず、清香は不思議そうにテーブルの横に立つ男女二人組を見上げたが、対する正彦は怪訝そうな顔付きで口を開いた。

「実はさつき、清人さんに電話したんだ。今度一緒に飲みに行く約束をしてたからそれについて。そしたら何だか急に具合が悪くなってきた様な話をしだして」

「え？それ、いつの話ですか？」

途端に顔色を変えた清香に内心ほくそ笑んだ正彦が、連れの女性を軽く指差しながら続ける。

「こいつと待ち合わせしてる最中だから10分位前かな？何かキツそうな口調だったから救急車は呼ばないのか聞いたら、清香に付き添って貰って病院に行くから大丈夫って言われて。……何だよ清人さん、まさか俺に心配させない為に、清香ちゃんが側に居るって嘘ついたのか？」

わざとらしく顔をしかめた正彦の前で、すっかり狼狽した清香が立ち上がる。

「本当ですか？ やだ、どうしよう？ 家で倒れてたりしたら！」

「落ち着いて清香ちゃん。取り敢えず電話してみたら？」

「そ、そうですね！」

慌てまくって携帯を取り出した清香は、立つたまま電話をかけ始める。その側に佇んだままの正彦達と共に店中の注目を浴びてしまったが、清香にはそんな事に構っていられる精神状態では無かった。

「正彦さん、どうしよう？ お兄ちゃんの携帯も家の電話も繋がらないの！」

すっかり涙ぐんでしまった清香に、正彦は宥める様に言い聞かせた。

「たまたま電源を切って、病院に行ってるだけかもしれないよ？」

家はここから近いんだから、取り敢えず戻って見たら？ 清人さんなら出かけるにしても行き先位書き置きしてると思うし」

「それもそうですね。ありがとう正彦さん。それじゃあ角谷さん、慌ただしくて申し訳ありませんけど、これで失礼します！！ お兄ちゃんにサインをして貰ったら、また改めてご連絡しますねっ！！」  
そう叫ぶやいなや清香は持参したバッグと先ほど聡から預かった紙袋を引っ掴み、もの凄い勢いで店を飛び出した。

「清香さん！ 何かあったらまずいですから、俺が送りま」

「引っ込んでなボーヤ」

すっかり傍観していた聡もここで慌てて立ち上がり、清香の後を追おうとしたが、その腕を正彦が素早く捕らえる。そしてその耳元に口を寄せて囁いた。

「俺はちよつとばかりお前に話があるんだ。……小笠原聡」

その一言が、瞬時に聡の全身の動きを止めた。

## 第6話 込み上げる怒り（後書き）

本来は次の話と纏めて出すつもりだったのですが、長くなりすぎて切ってしまいました。なるべく早く続きを出すつもりです。



## 第7話 地雷

(彼女には角谷と名乗ってるのに、その知り合いらしいこいつが、  
どうして俺の本名を知ってるんだ?)

聡が自分の腕を掴んだままの男を疑惑に満ちた目で眺めていると、  
当の正彦は鼻で笑う様に聡の内心を当ててみせる。

「彼女の知り合いなのに、どうしてそれを知ってる？」って顔だ  
な」

「……………失礼します」

長居は無用とばかりに聡がその手を振り払って立ち去ろうとした  
が、正彦は益々腕を握る右手に力を込めた。

「俺は話があると言った。…………じゃあ今日はここで。後で必ず埋め  
合わせするから」

正彦の後半の台詞は連れの女性に対するもので、彼女は予め予定  
を聞いていた為、小さく肩を竦めて苦笑いしたのみだった。

「全く…………、デートの時間が5分足らずなんて、最短記録だわ。し  
かも乗り替える相手が男なんて、ちよつとバカにしてない？」

「でもなかなか良い男だろ？」

「そうね。後10年位したら正彦と張るかしら？」

「容赦ないな。初対面の相手をこき下ろすなよ」

「あら、坊やだと思つてこれでも手加減してるわよ？ それより埋  
め合わせ、忘れないでよ？」

「ああ、期待してくれ」

聡が黙つたままなのを良いことになり辛辣な事を好き勝手に言  
い合つた男女は、正彦が未だ聡を拘束して片手が使えない状態の為、  
彼女の方から正彦に顔を寄せて唇が触れあうだけのキスをして、あ  
つさりと店を出て行つた。

「座るぞ。お前も座れ。……あ、俺はブレンドね」  
「畏まりました」

「……………」  
聡を逃がす気は無く、その腕を引っ張りつつ半ば恫喝する正彦。聡の待ち合わせ相手かと勘違いしたウエイトレスが水とお絞りを持つて近寄つて来ると、振り返った彼は途端に愛想笑いを浮かべながら注文した。

それを仏頂面で見やった聡が、取り敢えず再び席に座る。続いて正彦が先程まで清香が居た席に腰を下ろした。

「じゃあ、取り敢えず自己紹介といくか。こっちはお前の事は一通り知ってるし。他人の周囲を色々嗅ぎ回るのは、お前だけの専売特許じゃないんでな」

「それはどうも、お氣遣いありがとうございます」

皮肉を込めて返した言葉にも全く動じる事なく、正彦は顔に薄笑いすら浮かべながら一枚の名刺をテーブルの上に取り出し、そのまま聡の方へ押しやった。それを受け取ってしげしげと眺めた聡は、以前目にした報告書の一部を思い出す。

「《倉田運輸株式会社経理部主任、倉田正彦》……………って事は、ひよつとして清香さんの」

「きちんとそこまで調べたのは誉めてやるが、彼女の前でその先は口にするなよ？」

途端に目つきを険しくして恫喝口調に戻った正彦に、聡も不快気に眉を寄せた。

「どうしてですか。あなた達はれっきとした従兄妹同士で、先程も仲良さげに会話してたじゃ無いですか」

「確かに仲は良いが、従兄妹同士としてじゃない。単なる“父親同士が幼なじみの知り合いの、優しいお兄さん”って言う関係だ」

「はあ？ 何ですかそれは」

理解不能な内容を聞かされた聡は思わず間抜けな声を上げてしまったが、ここで正彦は反撃に出た。

「お前だって人の事は言えんだろ？ 本名隠してコソコソと彼女に近付きやがって。清人さんを刺激したくなかったんだろ？ とつくにバれてるぞ？」

その台詞に、聡が僅かに顔を強張らせてから、慎重に問い掛けた。

「……それなら、どうして彼女が未だに俺の話の信じてるんですか？」

「清人さんとしてはできれば本当の事を言いたくないんだろ？ なのにしろ実の母親とは死別って事にしてるし」

そこで聡が弾かれた様に拳でテーブルを叩き、正彦に問い質した。「それをさつき彼女から聞いて、耳を疑いましたよ！ どの世界に勝手に母親を死んだ事している息子がいるんですか！ 幾ら何でもあまりに酷過ぎます！」

憤慨する聡を見た正彦は思わずテーブルに肘をつき、多少呆れを含んだ表情でしみじみと感想を述べた。

「酷過ぎる、ねえ……。お前、随分幸せに育ったんだな」

「何が言いたいんですか」

ここでウエイトレスが珈琲を運んできた為会話が一時中断し、腹立たしげな聡の前に正彦がブラックで一口珈琲を味わってから、真顔である事を尋ねた。

「一つ聞くが、お前は清人さんの事を、子供の頃から知ってたか？」すると、その途端、聡が歯切れ悪く答える。

「……いえ、二十歳の頃に、父から初めて聞かされました。そして『今では行き来はしていないから関わるな』とも」

「と言う事は、五年前位？ あの騒動の前後、だろ？ なあ……。流石に外野が五月蠅くなると思ったか」

「1人で勝手に納得しないで貰えませんか？」

小さな笑いを漏らしながら頷いた正彦に聡の不機嫌さは増大するが、相手はそんな事は斟酌せずに畳み掛けた。

「母親を大事にしようとする心掛けは良いと思うがな。お前が二十歳になる前に、母親から清人さんの事を一度でも聞いた事が無かったんだろ？」

「確かにそうですが……」

「普通に考えたらおかしくないか？」

「それは……、父と再婚した手前、前の家庭に関する事はあまり口に出さなかつた」と

「お前の父親は小笠原に婿養子に入ったんだろ？ それなのに他で育つてる子供の名前すら口に出さなかつて？ 随分気を遣つてんだな。それともお前の両親、そんなに夫婦仲が悪いのか？」

明らかに挑発する台詞を立て続けに述べる正彦に、以前から両親の微妙な距離感を気にしていた聡は思わず中腰になって片手を伸ばし、その胸元を掴みながら礼儀正しさを投げ捨てつつ唸った。

「ふざけるなよ？ 部外者があまり好き勝手抜かすと」

「それが今更？ と言うか、お前が勝手に暴走してるだけで、母親は清人さんの事なんか何とも思つて無いんじゃないか？」

「そんな事は……」

何かを言いかけてそこで急に口ごもってしまった聡は、至近距離で正彦と見つめ合っていた視線を自分から逸らし、同時に腕も離して元の様に椅子に座った。それを興味深そうに眺めた正彦は、片手で服の乱れを直しながらぼそりと呟く。

「清人さんにしてみればこれまでの母親との関係が有る無し以前に、清香ちゃんの為にもお前達の事は口にしたくない筈だけだな」

「……どういう意味ですか」

先程の勢いがどこかに消え失せてしまった聡が、取り敢えず聞いてみたという風情で尋ねると、正彦が苦笑気味に理由を告げた。

「あの子の両親はもう亡くなって、近親者つて言えば清人さんだけなんだよ。それなのにその兄に『実は母親と半分血が繋がった弟が居る』つて事が分かったら、清香ちゃんが1人疎外感を感じるとでも思ってるかもな」

「そんな……。ですがそれは」

「それ以上に、母親は死別して弟なんて勿論居ない事になってるから、その事実を話したらあの優しい子だったら『実のお母さんを勝手に死んだ事にするなんてあんまりじゃない！見損なつたわお兄ちゃん、最低！鬼！人非人！』なんて罵倒しそうだ」

「どことなく遠い目をしながらそんな事を言い出した正彦に、思わず聡は真顔で問い掛けた。

「……その場合、どうなると思います？」

「どう、つて、……。そうだなあ。そうしたらあの《妹命》の清人さんのダメージ大は決定だし、再起不能寸前まで行きそうだな。そうなるとその反動で、猛烈な怒りが真っ直ぐそれをバラした人間に向かうのは確実だし」

「ちよつと待つて下さい！ そうすると清香さんには清人さんと俺達の間を知らせないまま、清人さんの怒りを回避しつつ接触を図れと？」

清人の怒りを買う事を思つて流石に青ざめた聡を、正彦は他人事の様に見つめた。

「道は険しそうだな。助けてやるわけにはいかないが、まあ頑張れ。何も知らないで決定的な亀裂を生む類の墓穴を掘らない様に、忠告だけはしてやつたからな。俺の好意を無駄にするなよ？」

「好意なんですか？ 単に面白がつているだけじゃ」

「一理あるな、所詮他人事だし」

「……………っ！」

テーブル上で強く両手を握り締め、顔を引き攣らせた聡に、正彦は椅子から立ち上がりながら更に容赦の無い言葉を投げつけた。

「ああ、肝心な事をもう一つ言うのを忘れてた。さつきも言ったが、柏木、倉田、松原の家が清香ちゃんと縁戚関係にある事は本人には漏らすなよ？ もし万が一口を滑らせたら……、その時は清人さんじゃなく、俺達が制裁を加えるからそのつもりで」

「ちよつと待って下さい。だからどうしてそんな事になってるんですか！」

聡は慌てて正彦の左手を掴んだが、相手は軽々と振り払いつつ、テーブルの横をすり抜けて行った。

「あゝ、説明するのが面倒だから、興味が有るなら本人にさり気なく母方の親族について聞いてみてくれ。それじゃあそろそろ時間なので失礼。コーヒー御馳走様」

「ちよつと待って下さい、倉田さん!？」

しっかりと珈琲代を聡持ちにしつつあっさりとその場を立ち去っていった正彦を、会計をしないまま追い続ける事もできず、聡は諦めて見送った。そして文字通りテーブルに両肘をついて頭を抱える。

「ちよつと待て……。一体これから、俺に何をどうしろと？」

今の話で複雑すぎる現状の一端を把握し、困惑の渦に叩き込まれてしまった聡は、自分の見通しというものが如何に甘いものであったのかを実感していた。

何やら騒々しい物音がドアの向こうから響いて来たと思ったら、自分が寝ている寝室のドアを開けながら叫んだ妹の声に、清人はすこぶる満足した。

「お兄ちゃん、居るっ!？」

ドアに背中を向けて寝ていた為、清人の薄笑いの顔は当然清香に

は分からず、さも今日が覚めたという風情を装いつつ清人はゆつくりと寝がえりを打ち、清香の方に向き直る。

「……清香？ どうした、そんなに慌てて」

「どうしたもこうしたも！ お兄ちゃん、急に具合が悪くなって病院に行ったんじゃないの？ 正彦さんに偶然会って聞いたんだけど！？」

ベッドに歩み寄りながら問い質してくる清香に、清人は多少考え込む様子を見せてから、あまり悪そうに微笑んでみせた。

「そうか……、悪い。正彦君との電話の後、急に痛みが落ち着いてきたから、腹痛で救急車を呼ぶのも気恥ずかしいし、休んでれば良くなるかと思っただ。実際もう落ち着いたし、大丈夫だから」

「電話は？ 家の電話も、携帯も繋がらなかったんだけど？」

「眠ってたから気が付かなかったかな？ 携帯は……、ああ、正彦君からの電話を切った時、うっかり電源を落としてしまったみたいだね。ほら」

枕元に置いておいた携帯を取り上げて清香に差し出すと、確かにディスプレイが真っ黒になっており、清香は呆れ半分安堵半分の溜息を吐きだした。次いでベッドの端に腰かけ、清人の顔を見下ろしながら猛然と説教モードに突入する。

「もう、本当に人騒がせなんだから！ どれだけ心配したと思ってるのよ！！ それに腹痛だって甘く見ちゃいけないのよ！ 第一お兄ちゃんは仕事し過ぎよっ！ 不摂生な生活していると、病気にもなりやすいんですからね！ 言われ無くても自重して頂戴！！」

「うん分かった、反省してる。これからは十分気をつけるから、そろそろ許してくれるかな？ 清香」

「反省してるならもう良いわ。もう……、本当に何かあったらどうしようかと思っただから……。お父さんとお母さんだって病気になるかったのに、急にいなくなっちゃったし……」

「清香……」

最後は涙声の清香の訴えに、清人は流石に罪悪感を覚えた。布団の中から片手を出して伸ばし、清香の頬を軽く撫でながら謝罪しつつ、これ以上暗い雰囲気にならない様に話題を変える。

「すまなかつたな、心配かけて。そう言えば角谷さんには会えたのか？ 途中で引き返したなら相手にも申し訳無かつたが……」

待ち合わせ場所で正彦がちょっとかいを出した事は知りながら、素知らぬふりで清人が尋ねると、清香は気持ちを落ち着かせながらそれに答えた。

「ええ、大丈夫。本の受け渡しをした直後に正彦さんとカフェで会ったの。デートだったみたいよ？ 綺麗な女の人を連れてたから」

「そうか、それなら良かった」

「あ、ちよつと待つててね。今、その本を取つて来るから」

そこで清香がパタパタと寢室を出ていき、すぐに一冊の本を手にして戻つて来た。

「お待たせ。ほら、素敵でしょ？」

そう言つて嬉しそうに清香が差し出した一冊のハードカバーの本を、清人はいつもよりゆっくりとした動作で上半身を起こし受け取った。そして手に本来感じる以上の重みを感じながら、黙つて見下ろす。

いつもの清香なら常には見せない、その表情を消した清人の状態を訝しんだかもしれないが、緊張が一気にほぐれた事で些細な事には気が付かなかつた。

「このお手製のカバーって、和紙を使つてるんだよね。それでこんな綺麗な流水紋のデザインの物なんて、私初めて見た。凄いセンス良いのね、角谷さんのお母さんって。そう思わない？」

「ああ、確かに綺麗だな。これは」



微妙な言い回しで、清人は個人のセンス云々ではなくカバーに對してのみの感想を述べたが、清香は益々笑顔になって言い募った。

「それに墨を使って、細筆でタイトルを書いている。達筆だよねえ、私昔お母さんに習わされたけど、全然ものにならなかったし」

「……安心しろ、俺も習字は大してできない」

「あと、本棚の肥やしとかにしてるんじゃないかと、本当に大切に読み込んでくれてるんだね。だって少し角が擦り切れてるし、ページの真ん中辺りに指で捲った跡がうっすらと付いているもの。角谷さんのお母さんって、本当にお兄ちゃんのファンなんだね！ こういう人達に心配かけさせない為にも、自己管理は徹底しようねっ！」

「……そうだな。気をつけるよ」

明るく結論付けた清香に、清人は胸中を綺麗に押し隠して素直に頷いて見せたが、ここですっかり気分を良くした清香が、自覚しなのまま余計な事を言い出した。

「何だか角谷さんに益々親近感湧いてきちゃったな。お兄ちゃんと大学も学部も同じな上、どことなくお兄ちゃんに似てるし」

「……俺に似てる？ どこが？」

途端に若干目を細めて問い返した清人だが、清香は清人のそんな変化に気付かないまま口を滑らせた。

「えっと、ちょっと明るめの色調でくせ毛の髪質もそうなんだけど、笑った時の目元の辺りが何となく似ていて格好良いなあって」

テレテレと笑いつつ清香としては（やっぱりお兄ちゃんは格好良いと思う）という意味表示のつもりで言った台詞だったのだが、清人は（俺と似てるだと？ しかも清香が俺以外の男の事を格好が良いだなんて、冗談じゃない！）との認識しか持てなかった。

「じゃあお兄ちゃん、今日は一日寝てるのよ？お昼ご飯は食べられそう？」

密かに怒りまくっている清人の心中など分からない清香が無邪気

に尋ねてきた為、清人は辛うじていつもの口調を保った。

「……いや、あまり食欲が無いからこのまま寝ている。夕飯だけ準備してくれるか？」

「分かった。消化の何か良い物を準備するね」

そう言つて寢室のドアを静かに閉めて清香が出て言つてから、清人は押し殺した声で腹立たしげに吐き捨てた。

「ふざけるなっ！人の領域にずかずかと踏み込んで来やがって！！」  
如何にも憎々しげに手の中の本をベッドの端に投げ捨てた清人は、怒りに燃える目で携帯に手を伸ばし、迷わずにアドレス帳からある番号を選択する。待つ事数秒で、向こうが応答すると同時に、清人は捲し立てた。

「長野さん、佐竹です。大至急お願いしたい事があります。今回は色ボケ学生の素行調査とはわけが違いますから、経費は使い放題で構いません」

『ほう？ それはそれは豪勢な。それで、依頼内容は？』

「小笠原物産営業部第一課が今現在取り扱っている案件が何か、可能な限り調査して下さい。報告書に纏める必要はありません。分かった時点でその都度連絡を」

『そりゃあまた、随分毛色の変わつたご依頼で』

電話の相手は面白そうに笑いを堪えていたが、清人は冷たい声のまま核心に触れた。

「特に、第一課主任の角谷聡の業務内容に関してを集中的に」

その口調で何かを察したのか、電話の向こうで小さく溜息を吐く気配がしてから咳き漏れる。

『……要するに、そいつが今回の先生の標的ですか。気の毒に』

「宜しく願います。請求書が回ってきたらいつもの口座への振り込みで宜しいですね？」

『はい、それで。こちらこそ宜しく。それじゃ早速動きませす』  
お互いにどこまでもビジネスライクに話を進め、2人はあっさり  
と通話を終わらせた。

「……………俺を本気で怒らせたな？ 聡。たつぷり後悔させてやるぞ？」

手にした携帯をまるでそれが本人でもあるかの様に睨みつけながら、清人がまだ見た事も無い弟の名前を口にしていた事など、当の本人は知る由も無かったのだった。

## 第8話 八つ当たりの末に

清香に置いてけぼりを食らわされた拳げ句、色々と頭を悩ませる内容を聞かされてしまった聡は、悩んだ末夜になって清香の携帯に電話してみた。病院に付き添っているなら電源を落としているかと思いきや、予想に反して普通に応答がある。

『はい、佐竹ですが』

その落ち着き払った声に、聡は（兄さんは大した事は無かったんだな）と安堵する半面、（俺の名前をアドレス登録してくれて無いんだろうか……）と微妙に気落ちしながら口を開いた。

「清香さん、角谷です。今日はわざわざ出向いて頂いて、ありがとうございます。うございました」

そう礼を述べると、電話の向こうの気配が途端に慌てたものになる。

『そんな！ 角谷さんにお礼を言って貰う必要なんかありません！いきなり中座して、私の方こそ却って失礼してしまいましたし。その上こちらからご連絡しないで、本当に申し訳ありませんでした。』

声の調子だけで清香が最敬礼している様子が見える気がして、聡は思わず笑い出しそうになった。それを何とか抑えながら、清香を宥めにかかる。

「それは構いませんから。自分の家族の具合が相当悪そうだと聞いたら、誰だって動揺しますよ。それで……、先生のお加減はいかがですか？」

それを聞いた清香が、益々申し訳無さそうな口調で詳細を伝える。

『ご心配かけてすみませんでした。実は思ったより酷く無かったみ

たいで、帰宅したら大人しく横になってたんです』

「そうだったんですか？それは何よりでしたね」

『はい。病院にも行かずに済みましたし、夕食も消化の良い物を食べられましたし、もう心配要らないと思います』

「それを聞いて俺も安心しました」

聡は口ではそう述べたものの、内心では（ひよつとしたらと思っただが……。やっぱり仮病で、あの男とグルか）と断定し、密かに項垂れた。

しかし1人で悶々としている訳にもいかない状況を思い出し、慎重に会話を再開する。

「それで……。清香さん。実はあなたにお話ししないといけない事があるのですが……」

『はい、何でしょうか？』

怪訝そうに問い返す清香に、（もう兄さんにはれているなら、変に名前を偽っていたら益々印象を悪くするに決まっているし、ここは思い切って）などと考えつつ、聡が口を開いた。

「俺は初対面の時から自分の事を角谷と名乗ってましたが、実は本名は違うんです」

『え？ それなら角谷と言うのは偽名なんですか？』

「いえ、偽名では無くて職場で使っている通称です。初めてお会いした時、プライベートにも関わらず、ついっつかりそちらを名乗ってしまつて、なんとなく訂正する機会を逸したままズルズルと。申し訳ありません」

『それは構いませんが、そうなるに本当のお名前は何て仰るんですか？』

不思議そうに尋ねた清香に、聡は一拍空けて本名を告げた。

「……小笠原です」

『小笠原、さん、ですか？』

「はい」

怪訝な声でどこか躊躇いがちに問い返す清香に、聡は叱責もしくは非難されるのを覚悟した。

(やはり《小笠原》の名前位は知ってたか？ どうして黙っていたのかと責められても仕方が無いが、ここで正直に言っておかないと後々面倒になりそうだし)

聡が自分の周囲に無自覚に醸し出すそんな緊迫した空気とは裏腹に、清香はどこかのんびりと答えた。

『私は全然気にしてませんよ？ ついうつかり、慣れた名前を口にしただけなんですよね？ 私を騙そうとして意図的に名乗ったわけじゃ無いんですから』

(やっぱり母さんに関しての事は、兄さんから微塵も聞いて無いんだ……)

明るく朗らかに言われた為、却って絶望的な心境に陥ってしまった聡だが、更に予想外の台詞が耳に飛び込んできた。

『でも角谷さ、ええつと……、小笠原さんが、25歳ってお伺いした年齢の割に落ち着いて見える訳が分かりました』

「え？ それはどういう意味ですか？」

『どういうって……、小笠原さんはもう結婚していて、結婚を機に奥様の方の苗字に改姓したけど、仕事上は旧姓のまま通しているんですよね？』

「は？」

『もう既に家庭を持っているなら、年齢より落ち着いて見えるのも道理です』

しみじみと語られた清香の話に聡は固まり、次いで慌てて弁解した。

「それは誤解です清香さん！ 俺は結婚なんかしてませんから！」

「え？ そうなると本人に向かつてはもの凄く言い難いですし、口に出すのもとても失礼なのかも知れませんが……、ひよっとして小笠原さ」

「あのですね！ 今、何か変な想像をしてみませんか？ お願いですから俺の勤務先を思い出して欲しいんですけど！？」

「何やらまた妙な考えを口にされる前にと聡が必死で訴えた内容に、携帯を介して清香が考え込む気配が伝わる。」

「小笠原さんの勤務先ですか？ えっと、確か小笠原物産の営業部で……、小笠原？ え？ あ、まさか……」

そこで言葉を区切った清香に、聡は心底安堵しながら事情を説明した。

「ええ、父がその代表取締役社長を務めていまして。色々対外的な事があって、入社するに当たって父の旧姓を名乗らせて貰っているんです。父は婿養子ですから」

「ああ、そうなんですか。良く分かりました。親の会社に入社したりすると、確かに色々大変そうですね」

（何だかもう、どっと疲れが……）

一連のやり取りで精神的な疲労感を一気に覚えてしまった聡は、これ以上会話を続行させる事を諦めた。

「それでは先生の容態が確認できましたし、これで失礼します」

「いえ、こちらこそ心配して頂いてありがとうございます。お兄ちゃんにサインして貰ったら、お渡ししますのでまた連絡しますね？」

「ありがとうございます。おやすみなさい」

そうして表向き平穩に会話を終わらせた聡は、携帯を耳から話して深々と溜め息を吐いた。

「……とても諸々を打ち明ける雰囲気でも、気力も保てなかったな。……また今度にしよう」

極めて後ろ向きな発言をして現実から目を逸らした聡は、初手の躓きが後々祟るといふ事に、この時まだ気付いていなかった。

「うん、やっぱり社長の息子って分かれると色々大変なのかな。あまり気にしなくても良いんじゃないかと思うけど」

リビングで首を傾げながら清香が携帯を閉じると、パジャマ姿で起き出してきた清人がドアから顔を覗かせていた。

「清香？ 誰かと電話してたのか？」

「うん、小笠原さんと」

「小笠原？」

途端に目を細め、ピクリと眉を動かした清人に、清香が事も無げに聞いた内容を伝える。

「角谷さんの事。初めて会った時、つい職場で使ってる通称を名乗ってしまって、今までうっかり訂正するのを忘れていて申し訳無かったって謝られたの。別に大した事無いのに、律儀な人だよね」

「……へえ、つい、うっかり、ねえ」

かなり皮肉を交えた清人の口調だったが、自分の考えに浸っていた清香はそれに気がつかなかった。

「それにね？ お兄ちゃんの具合を心配して、わざわざ電話してくれたのよ。お店に置き去りにしちゃって失礼な事をしたのに、気を悪くしたりしないで。やっぱり思いやりのある、優しい人だわ。そう思わない？」

「……ああ、そうだな。今度本を渡す時にでも、俺も礼を言っていたと伝えてくれ」

苦々しい思いを抑えつつ清人が型通りの受け答えをすると、清香は益々嬉しそうに言い出した。

「うん、ちゃんと伝えるね。それで、そんな優しい人のお母さんってどんな人だと思う？」



「さあ……、どんな人だろうな……。あまり想像できないな」

話が嫌な方向に向かって行くのを察した清人は、不機嫌そうに話の流れを断ち切ろうとしたが、清香は思うまま話し続ける。

「やっぱり凄く優しく、子供思いの人だと思うな。あのカバー1つ見ても繊細で上品そうな印象を受けるし、一度会ってみたいな」  
「なんて」

「駄目だ!」

「お、お兄ちゃん？ 急にどうしたの？」

突然自分の台詞を遮って怒鳴った清人に、清香は驚いて目を丸くした。次いで恐る恐る清人に問いかけると、幾分バツが悪そうに目を逸らしつつ、しかし語気強く清人が言い聞かせてくる。

「その女性は病気で入院中なんだろう？ 経過が良いと言っても見ず知らずの他人が押し掛けて良い状態の筈が無い」

「それは勿論、そんな事はしないわよ？ 会えるなら会ってみたいなくって言うてみただけで」

「それから、その小笠原さんとやらの前で『お兄ちゃん』とか連呼してないだろうな？」

「え？」

慌てて弁解しようとした清香だが、今までまさに清人の事をそう連呼していた清香は固まった。それを見越した様に清人が畳み掛ける。

「常々『子供扱いされたくない』と文句を言ってる割には、言動が子供じみてるぞ。相手がそういう風に気遣いができる大人で、それにふさわしい言動をしているなら、対するこちらもそれ相応の対応が必要なんじゃないか？ 俺に向かって『お兄ちゃん』と呼び掛けるのは構わないが、他人に向かっては『兄』と表現する位の分別は持って欲しいものだな。清香はもう二十歳なんだし」

「……はい」

「そして、必要以上相手に馴れ馴れしい態度を取らないのが大人と  
いうものだろう。これから言葉遣いに気をつけるよ？」

「気をつけます」

すっかり頂垂れてしまった清香を見て、清人は八つ当たりだと完  
壁に理解していたものの、怒りを抑える事ができずに素っ気なく言  
い捨てながら踵を返した。

「じゃあ、俺は水を飲んで寝るから」

「うん、おやすみなさい」

後日、清香と聡は連絡を取り合い、その週の土曜日に某ホテルの  
一階ロビーに入っている喫茶店で待ち合わせた。

しかし席に追いついた清香が聡に問われて清人について話そうと  
する度に、妙に口ごもったり、言い直したり、口癖の『お兄ちゃん』  
が『兄』に置き換えられていたり、聡からすると挙動不審さが際  
立っており、サインして貰った本を受け取るのもそこそこに、清香  
を問い詰めた。

「……………という事があつたんです。おに……………、あの、兄にしてみれば、  
私は相当子供に見えてるんだろうなって思……………、見えているかと思  
いますし、小笠原さんに対して、初めて会った時から結構馴れ馴  
れしい言葉遣いをしてたかな〜って、いえ、失礼をしていたのでは  
と、今更ながらに不安になりました」

清人に叱責された夜の経過を一通り語り、俯いて黙り込んだ清香  
を見た聡は頭痛を覚えた。

(……………兄さん、何も清香さんに八つ当たりする事はないでしょう？  
……………そもその原因の俺が言うべき事じゃないが。さて、どうし  
ようか?)

いつも明るい笑顔を向けてくる清香が、すっかり萎れて落ち込ん  
でいるのを可哀想に思った聡は、何とか慰めようと口を開いた。

「清香さん、先生は何もあなたが憎くてきつく当たったわけでは無いんですから。それは分かっているでしょう？」

「ええ、はい、それは重々」

「どうやら先生が危惧したのは、俺が年相応に見えずに落ち着いていると清香さんが評した為に、清香さんのいつもの口調だと失礼に当たるかも考えた事らしいです。言わば老婆心ですから、あまり気にされない方が良いでしょう」

「それはそうなんですが……」

「だからその対策として、俺はこれから清香さんに対して、同年代の人間に対する様に喋るから。清香さんもそのつもりで」

「はい？」

いきなり聡の口調が変化したのと、言われた意味を捉え損ねた清香は、思わず軽く目を見開きながら相手を見返した。すると聡は面白い物でも見つけた様に、ニヤリと笑いながら主張を繰り返す。

「俺も見ず知らずの女性に馴れ馴れしく話しかけるのはまずいと思っただから、これまでは仕事上の口調に準じて喋ってたけど、もう見ず知らずじゃないから構わないよね？」

「あ、えっと、それは……」

「だから、俺が馬鹿丁寧な言葉遣いをして、かなり年長者に感じさせる事が問題なんだろう？ こういう言い方をする相手には、清香さんも気兼ねなく話せるよね？ ああ、いつそのこと『清香ちゃん』とか『清香』とでも呼ぼうかな？」

「いえ、あのっ！そ、それは……」

流石に気恥ずかしいものがあり、それは止めて貰おうと口を挟みかけた清香に、聡があっさりと告げた。

「勿論俺の事は『聡さん』とか『聡』で良いよ？ 寧ろ聡って呼んで欲しいな」

「……小笠原さんって、実はタラシなんですか？」

「タラシ？ 俺が？」

清香が思わず疑惑の目を向けると、それを真正面から受けた聡は一瞬キョトンとし、すぐにお腹を抱えて爆笑した。いきなり大笑いされた清香が、些かむくれながら文句を言う。

「そこまで笑わなくても……」

「ごめん、悪かった。だけど自分の名前を呼び捨てにして欲しいって口にしただけで、女たらし扱いされたのは初めてだったから」

何とか呼吸を整えた聡は、清香に謝ってから苦笑交じりに話を続けた。

「話を戻すけど、だから俺の前では幾らでも『お兄ちゃん』って言うって大丈夫だよ？ 君の事を笑ったりしないし、寧ろ清香さんが先生の事を『お兄ちゃん』って話している時は凄い良い笑顔をしているから、見ているこっちまで嬉しくなる。『兄が』って緊張して話している時とは雲泥の差だ」

そう嘘偽りの無い本音を漏らすと、清香がそれを吟味する様に聞き終えてから、小さく笑って礼を述べた。

「ありがとうございます。やっぱり小笠原さんは私と比べると随分大人だと思います」

それに聡がすかさず突っ込みを入れる。

「ほら、清香さん。そういう時は何て言うんだっけ？」

それに清香は反射的に「うっ……」と詰まりながらも、嬉しそうに言い直した。

「えっと……、その。ありがとう、聡さん」

「ああ。まだ二十歳なんだし、そのうち自然に慣れるよ。無理に急いでつまらないしがらみに捕らわれる事もないさ」

そうして2人の周囲の空気が穏やかになった所で、聡が徐に話題を変えた。

「ところで……、清香さんと図書館で会った時、確か榊原康孝の本を借りてたよね。この作家が好き？」

「ええ、作品は大体目を通してるし」

「そうか。それならこれ、要るかな？」

「何ですか？」

ゴソゴソとジャケットの内ポケットから長方形の白い封筒を取り出した聡は、その封をされていない中身を取り出して見せた。

「映画の試写会の招待券。榊原康孝の『春の波濤』が原作だって。小耳に挟んだ所では、当日監督と原作者も来るらしいよ？」

「え？ 映像化の話が有ったんですか！？ 全然知らなかった！ これどうしたんですか？」

驚きと期待で目を輝かせた清香が、思わず身を乗り出して手元を覗き込んで来た為、聡が笑って続けた。

「職場が総合商社の営業部だからね。付き合いとかで色々回ってきたりするんだ。それでこれを見つけたから2枚掠め取ってきたんだけど、良かったら一緒に見に行かない？」

「勿論行きます！」

打てば響くように答えた清香に、聡も満足そうに頷く。

「良かった、貰って来た甲斐があったよ。じゃあここに書かれてある日時に、どこかで待ち合わせしようか。予定は大丈夫？」

「はい、空いてますから。ありがとうございます、凄く嬉しい！」

兄に怒られた事などすっかり忘れ去ってしまったかの様に、ニコニコと上機嫌に微笑む清香を見て、聡は思わず本音を漏らした。

「うん、清香さんは落ち込んでる顔もそれなりに可愛いけど、笑うとそれより数倍可愛いな」

常には清人以外の者にあまり口にされない賛辞を耳にして、清香は動揺して声を上げた。

「お、小笠原さんっ！？」

「聡」

容赦の無い笑顔での駄目出しに顔を若干引き攣らせつつ、清香が窘めようとする。

「う、……え、さ、聡さん。つまらない冗談は」

「本気だけど？」

「……………っ！」

真顔でサラツと言い返されてしまった清香は、本人が自覚しないままその頬を赤く染めていた。絶句して僅かに俯いてしまったその顔を真正面からじつくりと眺めながら、聡は自分の中で愛おしさが込み上げてくるのを自覚する。

（うん、やっぱり兄さんが清香さんを溺愛しているのが分かる気がする）

この時、聡の頭の中を占めていたのは清香と清人の事のみで、あれほど重要だった母親の事は綺麗に忘れ去られていた。

## 第9話 愛しのマスクメロン様

試写会が行われる小さなホールの前で待ち合わせた清香と聡が談笑しながら中へ入ると、こじんまりとしたロビーの向こう側から一組の男女が目敏く清香達を見付けて近寄って来た。

「あら、清香ちゃんじゃない。こんな所で奇遇ね〜」

ビジネススーツ着用でも華やかさが漂う真澄が偶然を装って声をかけ、聡にしてみれば些かわざとらしいその問い掛けに、清香が笑顔で応じる。

「あ、真澄さん！それに浩一さんも、お久しぶりです！」

「ああ、元気そうだね、清香ちゃん」

「2人も試写会に来たんですか？」

「ええ、そうなの。付き合いで招待券を買ってね」

女同士でその場で和やかに話し始めると、男2人はその背後で微妙な視線を交わし合った。

（確かこの2人、柏木家の……。このタイミングって事は、絶対兄さんが仕組んでるよな）

（やっぱり清人から連絡を買って、お邪魔要員として顔を出した事を分かってるよな、彼。あからさま過ぎるし）

聡が溜め息を吐きたいのを堪え、浩一が神経質そうに眼鏡のブリッジを指で僅かに上に押しやると、この状況を面白がっているかと思えない真澄が思い出した様に聡に顔を向ける。

「そういえば……。どこかでお見かけした事があると思ったら、そこに居るのは確か小笠原物産営業部の角谷さんじゃないかしら？

清香ちゃんの彼氏？ なかなか隅に置けないわね」

「い、いえっ、あのっ！ か、彼氏とかって言うのは聡さんに失礼でっ〜！」

くすくすと笑いながらの問い掛けに、聡は（白々しい……。ライ

バル会社の課長クラスと顔を合わせた事なんかあるか」と思っただけだったが、清香は少々焦った。

（そうか！ 聡さんと真澄さんって同業者だから、仕事関係で顔を合わせた可能性があったんだ。良かった、まだ本名で小笠原さんって紹介してなくて）

そして互いの紹介がまだだった事に気がつき、初対面ではない空気だったものの一応声をかけてみる事にした。

「えっと、真澄さんがおっしゃる通り、こちらは小笠原物産の角谷さんです。最近ちよつとした事でお知り合いになりました。私、角谷さんに今回の招待券を頂いたんです」

「あら、そうだったの。良かったわね」

にこやかに頷いた真澄から視線を移し、清香は聡に向かって説明を続けた。

「角谷さん、こちらは昔から家族ぐるみで親しくお付き合いしている、柏木真澄さんと弟の浩一さんです。お2人とも柏木産業に勤めてますから、角谷さんとはどこかでお会いしてるかもしれませんね」

「ああ、そうなんですか。清香さんから話は聞いてますし、勿論柏木のご令嬢と御曹司の事は、以前から存じ上げてました。この機会にお見知り置き下さい」

「こちらこそ、小笠原物産のホープと評判の高い角谷さんとお知り合いになれて、光栄です」

「ご冗談を」

思い切り社交辞令的な会話を交わす3人に、清香がのんびりと声をかけた。

「会場が開いたみたいですし、後は中で座って話しませんか？」

「あら、そうね」

「何も立って話し込む事もないか」

そう言っただけでスタスタとホール内に向かって歩き出し、（2人きり



になんかさせないわよ？」というオーラを醸し出しつつ、「清香ちゃん、こちら辺にしましろう？」と当然の如く手招きする真澄達に、聡は今度こそ小さな溜め息を吐いた。

結局4人は向かって左から聡、清香、真澄、浩一の順番で横に並んで着席し、主催者の挨拶や上映開始まで時間があるのを幸い、女2人は連れそつちのけで四方山話に花を咲かせていた。

「そついえば清香ちゃん、年が明けたら成人式があるのよね」

「はい、お兄ちゃんが振袖を勝ってくれました。それに久しぶりに同級生と会えるのが楽しみです」

嬉しそつに語る清香を見て、真澄がしみじみと口調を改めて言い出す。

「本当に……、月日が流れるのつて早いわね。おじさま達が亡くなつた時、清香ちゃんは中一だったのに」

「そつ言えはお葬式の時是一家揃つて来て貰いましたね」

「ええ。今の清香ちゃんを見たら、ご両親もお喜びになるだろうなと思つて」

思わずしんみりとなつてしまつた空気を払拭したかつたのと、以前から気になつていた人物の事が話題に上つていた為、ここまで黙つて2人の会話に耳を傾けていた聡が、礼儀正しく会話に割つて入つた。

「清香さん、ちよつと聞いても良いかな？」

「どうかしたんですか？聡さん」

「その……ご両親つてどんな人達だったの？」

「え？ どうしてですか？」

キョトンとしながら尋ね返す清香に、聡は幾分言い難そつに話を続けた。

「いや、ちよつとした好奇心なんだけど……。先生が公表している顔写真を見ると、かなり整つた顔立ちをされているから、ご両親が

結構美形だったのかと思って」

「美形、ですか？」

(うつ……、かなり苦しい言い訳だったか。何だか柏木さん達の視線が痛いし……)

以前から母親の前夫に対しての好奇心はあつた為、思い切つて口にしてみたのだが、清香の背後から自分に向かって投げかけられる柏木姉弟の胡乱気な視線を受け、聡は一気に居心地が悪くなった。しかし自分越しにそんな無言のやり取りが交わされているなど夢にも思っていない清香は、怪訝な顔で考え込みながら自分の考えを口にする。

「うーん、確かにお兄ちゃんは美形の部類に入るけど、お父さんは娘の私から見ても、間違つてもその範疇には入らないと思いますよ？ お兄ちゃんは母親似なんじゃないかな？ どのような人なのか分からないけど」

「そうなんだ」

冷や汗をかきつつ言葉を返した聡の声に、真澄達の声が重なる。

「そうねえ、清香ちゃんも香澄おばさん似だと思つし」

「だからパツと見、2人は兄妹に見えにくいんだよね。年も少し離れてるし」

「う……、浩一さん、微妙に気にしてる事を。それじゃあ私達が親子に見えるとか言つんですか？」

少し恨みがましく言われた台詞に、浩一が苦笑しながら弁解した。

「いや、流石にそこまでは。でも初対面の人に、叔父姪位の関係に間違われたりしない？」

「……時々間違われます」

ボソツと呟かれた言葉に、清香以外の3人が小さく吹き出す。それに「皆酷い！」とむくれた清香を3人がかりで宥めてから、再び会話が再開した。

「佐竹のおじさまはハンサムって言うよりは、貫禄がある顔立ちって言った方が良いわよね」

「そうだね。気後れしないでどっしりとしてて、人に安心感を与えるって言うか……」

実際に会った事のある真澄と浩一が、清香の父である佐竹清吾について分かるような分からないような論評をしていると、清香がうんうんと頷きながら同意した。

「その通りですよ。強いて物に例えるならお兄ちゃんはマスクメロンですけど、お父さんはジャガイモですし」

「……は？」

「え？ 私、何か変な事を言いました？」

（もの凄く変な事を言った）と全員が思ったが、それをストレートに清香に告げたら傷付くだろうと思っただ3人は黙ってアイコンタクトを行う。その結果、3人の中で一番年下かつ一番立場の弱い聡が、慎重に口を開いた。

「あの……、清香さん？ そのジャガイモってというのはどういう意味？」

「えっと、だって茄子の様にっるんとした印象じゃなくて、どっちかって言うところとちよつとごつい感じで。でもちゃんとお料理すれば色々な料理や味付けに合いますし、見た目によらず万能食材なんですよ？」

「あ、ああ。つまり、見た目も中身も良く知ると、結構味のある人だったと」

「ええ、そんな感じですよ！」

「……良く分かったよ」

小さく溜め息を吐いて無理やり納得してみせた聡だが、柏木姉弟から視線で無言の圧力をかけられ、更に清香に質問した。

「それで清香さん。先生を例えるとマスクメロンって言うのはどう

「いう事？」

「何となく似てるかな〜って思ってるので」

「……どこら辺がそうなのか聞いても良い？」

理解不能のまま思わず懐疑的な視線を向けてしまった事を聡は自覚していたが、清香はそれに気を悪くした様子を見せず、何かを思いつくような風情で話し始めた。

「あれは……、そうですね、私が幼稚園の頃の出来事なんですけど、当時住んでいた団地の側に昔からある商店街があって、いつもそこで買い物をしてたんです。そこに結構大きな八百屋さんがあって、大抵棚の上の方に5000円位のマスクメロンが果物の盛り合わせの籠とかと並べて、ドンと置かれてあつたんです」

「ああ、そういうのはお見舞い用とかお祝い用とかで、結構需要があるよね」

納得しながら口を挟んだ聡に、軽く頷きながら清香が話を続けた。  
「当時は背が低かったから、普段上の方まで見なくて気がつかなかったのに、ある日何気なく顔を上げたらそれを見付けて、何だろうって凝視しちゃって」

「何だろうって、どうして？」

「私の中でメロンって言えば、いつもお母さんが買ってたプリンスメロンとかの表面がつるんとした物で、大きさも違うしそれがメロンってその頃認識できなかったんです」

「……なるほどね。それで？」

悪いことを聞いたかと微妙に視線を逸らしながら聡が続きを促すと、清香は淡々と状況を説明した。

「動かないでじっと見ていたら、顔見知りの八百屋のおじさんがどつかしたのかと聞いてきたから、あれは何かと尋ねたらメロンだよって教えてくれたんです。そうしたら私、腹を立てまして」

「え？ どうしてそこで怒るの？」

思わずと言った感じで真澄が口を挟んだ為、清香は今度は真澄の方に体を向けて説明を始めた。

「さっきも言いましたけど、それまでメロンと認識していた物にはあの独特の模様は無かったから、『あんなのメロンじゃない！気持ち悪い模様！』って思い切りけなしたんです。そしたらおじさんが笑って説明してくれて」

「どんな説明を？」

「『これはマスクメロンって言って、外の皮より中身が大きくなるのが早くて、中から押されて皮が裂けちゃうんだ。だけど中から出てきた汁がそこを塞いで、覆った瘡蓋がこの模様なんだよ？ だからこのメロンは自分が甘くなる為に一生懸命努力して、体全体痛い思いをして頑張った奴なんだ。それで変な模様が付いてるけど、その分とっても美味しいし、凄いな』って皆が尊敬するから値段も高いんだよ』って。それを聞いて子供心に凄く感動して、一目惚れしたんです！」

「そ、そうだったの」

「一目惚れ、ねえ」

「……………」

所謂上流階級に生まれ育った面々は、マスクメロンなど見慣れた代物であり、そこまで感動を露わにする清香の気持ちがいまいち理解出来なかったが、適当に話を合わせた。

「それでその時、お母さんに『あれ買って！ 清香が美味しく食べさせてあげるの！』と言ったら、お母さんの顔が見事に引き攣って、『清香は子供だからまだ駄目なの！』って断言されて、無理矢理八百屋さんから引きずり出されちゃって……………」

（（（やっぱり庶民的な生活してたんだ。困っただろうな）））

突然店先で子供に「マスクメロンを買って」と言われて動揺したであろう当時の香澄に、3人は思わず同情した。

「それで商店街をズルズルと引きずられる様にして帰ったんですけど、どうしても諦めきれなくて、ちょうどアーケードの真ん中辺りで『マスクメロンさま〜！ 清香が大きくなったら食べてあげるから、待っててね〜！ 清香の事忘れないで〜』と涙声で叫んで、後からお母さんに滅茶苦茶怒られました」

そこまで言っただけで、聞いていた3人は揃って微妙に顔を歪めた。

「マスクメロン、さまっ……」

「忘れないで、って……」

「聞きよによっては、凄く愛の告白……」

そんな事をボソツと呟いてから、3人は申し合わせた様に爆笑した。

「い、嫌あああっ！ さ、清香ちゃん、笑わせないでええっ！！」

「酷い真澄さん！ 私にとってはちよつと切ない思い出なのにつ！」

「この場合、値段が唯一2人の間に立ちはだかる高い壁だったんだね」

「今だったら大丈夫だね。美味しく食べてあげられるよね？」

「うもう〜っ！ 浩一さんも聡さんもバカにしてええっ！ もう知らないっ！」

大笑いした為にすっかり拗ねてしまった清香を、何とか笑いを収めた3人が宥めた。

「ごめんなさい、悪かったわ」

「いや、当時幼稚園児だし、可愛いエピソードだよ」

「うん、清香さんがマスクメロンに並々ならぬ思い入れがあるの分かったよ。だから同じように大好きな先生をそれに例えたの？」

その聡の問い掛けに、清香はちよつと考えてから反論した。

「確かに最上級で好きですけど、それだけで例えてる訳じゃないです」

「と……」

「お兄ちゃんっていつも飄々としてるから、意志が強くて才能があつてすぐに何でも出来るスーパーマンみたいに思われがちですけど、実は結構繊細で不器用な所があるんです」

「そうなの？　あまり想像しにくいけど」

意外な表情を浮かべた聡に対し、思うところのあつた真澄と浩一は清香の話の行方を黙って見守つた。

「基本的にお兄ちゃんは凄い努力家なんですけど、それを隠すと言うか、あからさまにしたがらないタイプなんです。ああ見えて、実はある意味恥ずかしがり屋？　それにいつも穏やかに笑つてるイメージがありますけど、結構感情の起伏が激しくて、それを当たり障りのない笑顔で隠してる気がします。だから交遊関係はそれなりに広いけど、本当の意味で心を許してるって人は、ほんの一握りじゃないかと。……あ、浩一さんは勿論、その一握りの筈ですよ？」

「それは光栄だね。ありがとう」

取り成す様に付け加えられた言葉を聞いて、いつもは冷たく見える眼鏡の奥の目を優しく和ませた浩一が、嬉しそうに礼を述べた。それに小さく笑い返して清香が話を続ける。

「それで、いつ頃からか、どうしてそんな風に思う様になつたのかは分からないんですけど、お兄ちゃんって自分の苦しい事とか悲しい事とかは一切表に出さないで、しかも嫌な事に目を背けたりしないで真正面からぶつかった拳げ句、全部自分の中に抱えて最後には自分の力だけで昇華させてしまうことと不器用なタイプなんじゃないかなって思つて。そういう心の痛みつてものが今のお兄ちゃんを形作つて、お兄ちゃんを魅力的に見せてると思うんです。だからその時聞いた、自分自身が傷つきながら自らを作つてるって聞いた網目模様の話とダブつて、ひよつとしたら似てるかなって思つて。うーん、これって身内の欲目かしら？　どう思います？　真澄さん」

そこで唐突に意見を求められた真澄は、些か呆然とした表情で口

を開いた。

「清香ちゃんって……、天然かと思つてたけど意外に鋭いのね……」  
「いや、姉さん。この場合、天然だからストライクゾーンと真ん中を突いてくるんじゃないですか？」

「そうとも言えるかもね」

「どつという意味ですか？」

思わず小首を傾げた清香の頭を、真澄が軽く撫でながら穏やかに告げた。

「清人君の妹に清香ちゃんがいてくれて、本当に良かったって事。できるだけ一緒に居てあげてね？」

「勿論ですよ。あんまり私にかまけてお兄ちゃんが結婚できなかつたら、老後の面倒を見てあげるって約束しますから」

「あら、それなら彼の老後の心配はなさそうね」

思わずくすくす笑つてしまった真澄を、横から浩一が小声で窘める。

「姉さん、清香ちゃん。そろそろ主催者の挨拶が始まるから」

「あ、そうね。じゃあ話はまた後で」

「はい」

そうして会話は中断し、挨拶の後に上映が始まったが、聡は先程まで交わされていた会話の内容を暫く黙つて頭の中で反芻していた。

それから無事映画は終了し、会場内の明かりが点くと共にざわめきが戻つて来た。

「やっぱり榊原先生の作品は良いなあ、世界観が独特だし。映像化しても原作に沿つてしっかり人物描写も出来てたし」

「時代考証もしっかりしてたみたいね。ただテーマが家族愛っていう地味な物だから、売り出すのは難しいかもしれないけど」

「それはそうですね。派手な殺陣とかもないですし、大衆受けはしないかも」



「でもそれはそれで、最近では平凡な日常とか人生とかを深く掘り下げた作品が見直されてるから、こういう物も上映期間の後半になったら観客動員数が延びるかもしれないわよ？」

「そうですね」

女2人が上映された映画について好意的なやり取りをしていると、横から聡が声をかけた。

「清香さん、榊原先生がお帰りになるみたいだけど、もし会えたらサインをお願いしてみるとか言つて無かった？」

そう言いながら聡が指差した前方を見て、1人の老人が今まさに席を立とうとしているのを認めた清香は、慌ててバッグを手に立ちあがった。

「本当だわ！ 聡さん、ごめんなさい！ ちょっと行ってきます！」  
「焦らないで良いよ。ちゃんと待つてるから」

笑顔で言い聞かせ、自分も立ち上がりながら聡が出入り口に向かって駆け出す清香を見守っていると、横から今までとは打って変わった不機嫌そうな声がかげられた。

「小笠原さん、あなた清香ちゃん単なるツテで、本来の目的は貴方の母親とお兄さんを会わせる事よね？」

「……そうだと言つたら、どうなんです？」

本名で問いかけた事で明らかに嫌がらせと分かる口調に、清香がこの場に居ない為聡も些か挑戦的に返したが、それ以上に冷たい浩一の声が響いた。

「止めておけ」

「あなた方には関係ないかと思えますが？」

途端に睨み合う聡と浩一に、少ししてから真澄は疲れた様な溜息を吐いた。

「全く……。もう放っておきなさい、浩一。見ず知らずの間柄でも、

「一応忠告はしてあげたんだから」

「分かりました」

そう言いながらも納得はしていない顔つきで自分を睨みつけている浩一を、聡も負けじと睨みかえしていたが、ここで明るい声が割り込んだ。

「聡さんっ！ 榊原先生から首尾良くサインを貰えたの、ほら！」

「あ、ああ、良かったね、清香さん」

自分の背後から駆け寄って来た清香に、慌てて険しい表情を戻しながら振り向くと、満面の笑みを浮かべた清香が手にした本を差し出し、表紙を捲って流れる様に書かれたサインを示して見せた。

「うん、もっと気難しい人かと思ってたのに、『貴方の様なお嬢さんに読んで貰っているとは嬉しい限りですね』って快くサインして貰えて！ 聡さんにここに連れて来て貰ったお陰だわ。本当にありがとうございます！」

心の底から喜んでいるのが分かる笑顔に、聡は胸の中に溜まっていた色々な物が、すっかり消え去った様な錯覚を覚えた。少しでもそんな穏やかな心地を味わいながら、自然な動きで片手を伸ばす。「そこまで喜んで貰って嬉しいな。できればお礼してくれると、俺も嬉しい」

「お礼ですか？ 私にできる事だったら何でもしますよ？」

「じゃあちよつと触らせて」

「はい？」

「え？ ちよつと！」

「何をする気だ！」

さり気なく聡が口にした内容に真澄と浩一が慌てて事の真意を確かめようとしたが、それには構わず聡は清香の頭を撫で始めた。

「えっと……、聡さん。そんなに私の頭が撫でたかったですか？」

「うん、そうだね。本音を言えば初めて会った時に言った様に、そ

のポニーテールを引つ張つてみたいけど我慢するから」

当惑して尋ねる清香に、聡が些か残念そうに本音を告げたが、それを聞いた清香は少しの間だけ考え込み、クルツと後ろを向いて聡に背中を向けた。

「うーん、この際、ちょっとだけなら引つ張つてみても良いですよ？」

「本当に？　じゃあ遠慮なく」

そう言いながらも実際には引つ張ったりはせず、髪の毛の束に指を通してサラサラとした手触りを堪能している聡を見て、真澄達は顔を顰めつつ囁き合った。

「外見と違って良い度胸してるわね、こいつ。すっかり私達の事忘れて無い？」

「この場に清人が居なくて正解だった。これを見たら問答無用で殴りかかる」

そうして下手するとバカップルに見えかねない行為を止めさせる為、真澄は2人の間に容赦なく割り込んだ。

「さあ、食事にいきましょ！　今夜は私が奢つてあげるから。大人しく付いていらつしやい」

「え？　真澄さん。それは流石に悪いし、これから聡さんと」

「柏木さん、俺はそれほど親しいわけではありませんので、遠慮させて頂き」

「四の五の言わないで付いてきなさい。この中で一番稼いでる人間が奢るのが当然でしょ？　それとも何か？　私の奢りじゃ食べられない理由でも？」

清香と聡が固辞しようとする台詞を遮り、真澄が半ば脅しをかけると、横から苦笑しながら浩一が言葉を添えた。

「悪いね。姉は言い出したらきかない性格だから、付き合ってくれ

ると嬉しいな」

そこまで言われて清香と聡は苦笑いの表情を浮かべた顔を見交わした。

「それじゃあお言葉に甘えて」

「ご馳走になります」

「最初から素直にそう言えば良いのよ。じゃあタクシーを拾うわよ！」

そう高らかに宣言して率先して歩き出した真澄の後ろに付いて、3人は諦めた様な苦笑を浮かべつつホールの外へ出て行ったのだった。

## 第10話 反発と後悔と

休み明けで何となく仕事の効率が悪い月曜日の午前中。自分の仕事に一区切り付けた聡は、席を立って壁際のコーヒーマーカーが置かれていた場所へと足を向けた。

各自好きな時に飲める様に、出入りの業者がコーヒート共に常に過不足無く備え付けているカップにコーヒートを注ぎ、その場でブラツク飲みつつ一息入れていると、背後から明るく声がかけられる。

「よう、角谷。先週招待券を渡した例の試写会、どうだった？」

（そう言えばこいつはほぼ一週間出張だったか）と思い出し、出社早々自分と顔を合わせる事なく、上司や関連部署への報告を済ませ、漸く自分の部署に戻って来たらしい同期の高橋に、聡は礼を言いながら手にしたカップを軽く持ち上げて尋ねた。

「ああ、譲ってくれてありがとう。連れも喜んでくれたしな。ところで飲むか？」

「サンキュ、頼む。砂糖入りで」

「了解」

すかさず注文を付けてきた高橋に気を悪くする事なく、聡は軽く笑いながら手早くコーヒートを新しいカップに注ぎ、砂糖を入れてかき混ぜる。そして完成したそれを相手に手渡ししながら、思い出した様に苦笑混じりに付け加えた。

「そう言えば、『譲ってくれた会社の人にお礼を言っておいて欲しい』と言われてたのに忘れてた。朝一番で言わなくて悪いな」

「そんな事気にするなよ。生真面目な奴だな、将来禿げるぜ？」

「それは避けたいな」

「それはそれとして……、やっぱり女と行ったんだな。男とは有り得ないと思ってたが」

途端にニヤニヤ笑いを隠さずに突っ込んできた高橋に、聡は小さ

く溜め息を吐いてから、微妙に視線を逸らしつつ答えた。

「……誤解しないでくれ。彼女はただの知り合いだから」  
勿論それで納得する高橋では無く、わざとらしく目を見開く。

「単なる知り合い？ それでお前がわざわざ趣味でない作品の試写会の招待券を目にするやいなや『譲ってくれ』と懇願するわけか？

お前、経理部の美里ちゃんとか人事部の真紀ちゃんとか情報統括本部の陽菜ちゃんとかと付き合ってた時に、わざわざそんな事したことないだろ？」

「だから……、清香さんはそんなんじゃないって。第一彼女達なら間違ってもあの手の映画は見ないし」

「へえ、さやかちゃんって言うんだ。可愛い名前だな。どんな字を書くんだ？」

「……………」

弁解の台詞が却って相手の興味を引く結果になった上、入社以来の社内での女性遍歴まで口にされた聡は、憮然としてコーヒを一口啜った。それをチラリと横目で見ながら、高橋が微かに苦笑しつつ容赦のない指摘をしてくる。

「お前、『来る者拒まず去る者は追わず』とはちょっと違うが、基本的に女のご機嫌を取ったりしないタイプだから、長続きしないんだぞ？ 皆良い子ばかりなのに入社三年目で3人と付き合ってたって、男としてどうかと思うが」

最後はしみじみと語った高橋に、聡が些かムツとしながら言い返す。

「言うておくが二股をかけたりはしてないぞ？ それにどうしてそんな卑屈になって、付き合ってる女の機嫌を取らなきゃならないんだ？」

「そりゃまあ、卑屈になるほどする事は無いと思うが、お前は逆に気を遣わなさ過ぎ」

「そうか？ 自分ではそうは思っていないが」  
淡々と自分の考えを述べた聡に、今度は高橋が溜め息を吐いてから口を開く。

「お前さ……、実は身内に超フェミニストの男が居て、それへの反発心から付き合ってる女には無意識のうちに『黙って俺に付いて来い』的なオーラを発してるんじゃないのか？ そんなの今時流行らないと思うが」

「何だそれは……」

予想外の内容を聞かされた聡は思わず脱力しかけたが、高橋は真顔で続けた。

「うん、そう考えると単なる知り合いの清香ちゃん、女への気の遣い方に関してリハビリするのも良いかもな」

「だから、リハビリって何だ」

「ところで知り合いつてどんな知り合いだ？ 仕事関係じゃ無いよな」

自分の話を聞かずに一方的に断定してくる高橋に、色々諦めた聡は多少自棄気味にそれに答えた。

「図書館で知り合った二十歳の女子大生。偶々あの映画の原作者のファンだって知ってたから、券を融通して貰ったんだよ」

「お！？ 五歳下の女子大生とはやるな、角谷。それで？ 映画の後機嫌の良い彼女を、どこぞに連れ込んだとか？」

「するかっ！！ 第一、会場で出くわした彼女の知り合いに、俺が逆に拉致されたぞ」

「はあ？ 何だそれ」

嬉々として食い付いてきた高橋を仕事中の周囲を憚りながら小声で叱責すると、案の定怪訝な顔をされた。勢いで口を滑らせてしまった事を後悔しつつ、聡は適当に誤魔化すのを完全に諦めた。

「柏木物産企画推進部第二課長の柏木真澄と、その弟の営業部第一課長の柏木浩一と遭遇したんだ。彼女がその2人と家族ぐるみで親交があつて、両者とも清香さんを妹みたいに可愛がつてるらしい。映画の後、彼女共々無理矢理食事を付き合わされる羽目に」

「げっ！ あの長男の弟を押し退けて踏み付けて、名実共に柏木産業次期後継者レーヌ筆頭と言われてる、あの《柏木の氷姫》に可愛がられてる女あ！？」

（何か微妙に浩一氏が気の毒になつて来たな。確かに姉の方がインパクトは強烈だが）

自分の話の途中で突然呻いて指を差してきた高橋に、聡は無意識に眉を寄せた。そんな聡の内心など分からない高橋が、慌てて尋ねてくる。

「おい、ちよつと待て。さつき食事を付き合わされたとか言つたか」

「ああ。『私の奢りだと食べられないとか言わないわよね？』とか半ば脅迫されて。浩一氏は終始申し訳無さそうにしたが。その後カラオケにも連れて行かれて、門限が21時の彼女の携帯にお兄さんから電話がかかってきたら、名乗りもせずに出て『私が後から送り届けるわよ。黙つてお座りして待つてなさい！』と問答無用でブチ切つてた。そう言えば……、その後かかって来なかつたな」

（やつぱり兄さんもあの猛女には適わないらしい）と妙な親近感を感じながら苦笑混じりにその夜の事を思い返していると、高橋が頭を抱えて呻いた。

「あの”柏木真澄の妹分に言い寄つてるだけじゃなく、おそらく超ゴージャスな食事を奢つて貰つた挙げ句、仲良くつるんでカラオケに行つただと？」

「いや、言い寄つてはいないし、奢られたのは不可抗力で、つるんでなんて表現は以ての外なんだが」

そこでいきなり棚の上にカップを置いた高橋は、空いた両手で聡



の肩を掴み、真剣な表情で睨み付けてきた。

「ぐだぐだ言うな角谷！ 悪い事は言わん、今すぐその清香ちゃんとはすつきりきっぱり別れる！」

「藪から棒にいきなり何だ？」

「その清香ちゃんと付き合ってるのがバレたら、お前、最悪仕事干されるぞ？」

「おい、高橋落ち着け。だからどうしてそうなる」

呆れた様に見返す聡に、高橋はゴクリと唾を飲み込んでから声を低めて話し出した。

「課長、去年数社参加したプレゼンで柏木物産に負けたんだ。覚えてないか？ 当時日本未進出だったドイツの《Freiheit》の商品を、某系列百貨店とタイアップして全国展開させようって案件」

「あつたな、そう言えば。……まさか、その時の向こうの担当者が」

思い当たった内容に聡が軽く驚きを示すと、高橋は重々しく頷いた。

「ああ、泣く子も黙る柏木女史だった。その時、俺も担当者の一員だったから課長と係長に同行したんだが、提案内容もさることながら実に威風堂々としていたな。最後に会場を後にする時、わざわざ向こうからこちらに挨拶しに来たんだ」

「何て？」

「『小笠原産業の提示した内容もなかなかでしたわ。よほど《Freiheit》の商品に愛着を感じていらしたんですね。ご安心下さい。我が社が御社の分まで日本全国で商品の魅力を十分に知らしめて、思う存分売り上げて見せますわ』って上から目線で、実際見下ろされながら。実際に言われなかったが、背後から高笑いが聞こえてきそうなオーラを醸し出してた……」

「あの人、女性にしては上背があるからな……」

（そして課長は男性にしたら背が低いからな）

ハイヒールを履くと180cmの自分とさほど目線が変わらない

真澄の姿を思い返した聡は、当時の上司の心境を思つて少し切なくなつた。しかしそんな感傷を打ち消す様に、高橋が話を続ける。

「なあ、嫌味だろ？ 仕事奪つた上、そこまで追い討ちかけなくても良いだろ？ 鬼だよな。その晩居酒屋で係長と一緒に課長に散々愚痴られてさ。酷え目にあつた」

「……お疲れ」

切々と訴える相手を一応労つた聡だが、ここで漸く高橋が話を戻した。

「だから！ 坊主憎けりや袈裟まで憎いつて言葉もあるし、その柏木女史と懇意の女の子と付き合つてるなんて事が課長にバレたら、絶対お前目の敵にされるつて！」

「それとこれとは関係無いだろう。それに付き合つたりはしていないと、何度言えば分かるんだ？」

（第一、そんな事をしたら、飛ばされたり干されたりするのは向こうだし……）

呆れつつも、どちらにしても自分の立場からすると少々困つた事になりそうだと考えていると、高橋が慌てた様に動き出した。

「うわ、やべ。課長が睨んでる。俺行くわ」

「ああ、無駄話をし過ぎだな。俺もそろそろ机に戻る」

聡も険しさを含んだ上司の視線を察知し、2人はカップの中身を一気に飲み干し、横に設置されているゴミ箱に空のカップを突っ込んで業務へと戻って行つた。

その日の夜、病院の面会時間ギリギリに聡が母親の病室を訪れると、電動式のベッドの半分を持ち上げた状態で由紀子がそこに上半身を預け、静かに本を読んでいた。

「あら、聡。来てくれたの？」

自分の姿を見付けて嬉しそうに笑いかけてくる由紀子に、聡も照れ笑いで応じる。

「今日は何とか消灯前に来れたね。いつもバタバタしてごめん。土日とかにゆっくり来れば良いんだけど、色々あって」

「良いのよ？ もういい大人なんだし。良い加減母親より彼女を優先にしないと、振られてしまうわよ？ えっと……、何てお名前だったかしら、三宅さん？」

笑って確認を入れてきた由紀子に、聡は幾分気まずそうに視線を逸らした。

「……彼女とは、もう別れたから」

「あ、そうだったの？ ごめんなさい、知らなくて」

「いいよ。俺もわざわざ言わないし」

しかも最後ではなく二代前の彼女の名前を口にされた事で、聡は（俺ってそんなに彼女の入替わりが早かったらどうか）と微妙に反省した。そして多少気まずくなってしまった室内の雰囲気を一掃しようと、ここで聡が持参した物を鞆から取り出す。

「母さん、今日はこれを持って来たんだ」

「これって、私の本よね。どうしてわざわざ本棚から持って来たの？」

見覚えの有りすぎる手製のカバーをかけられたそれを受け取った由紀子が不思議そうに見返すと、聡は表紙を捲って見せた。

「母さんが喜ぶかと思つて、東野薫先生のサインを貰ってきた」

『喜ぶかと』と口にした割には些か心配そうに告げた息子に、由紀子の目が驚きで軽く見開かれ、サインと聡の顔を何回か交互に見てから、喘ぐ様に囁いた。

「貰った……、つて、聡？ あなた、まさか……、本人に直接名乗つて、サインして貰ったわけじゃ……」

由紀子の顔色は白を通り越してもはや蒼白になっており、その反応をある程度予測していた聡は、冷静に宥めにかかった。

「勿論、面と向かって『俺はあなたの弟です、宜しく』なんてやってないから。兄さんの妹の清香さんって子と最近知り合って、俺と兄さんの関係は明かさないまま、その子経由で頼んだんだ。角谷って名乗ったし、心配要らないよ」

（名乗ったけど兄さんにはバレバレだったみたいだが）

余計な事は自分の胸の中だけにしまつて説明した聡だが、それを聞いた由紀子が何かを思い出そうとする様に、前方の壁の一点を見やりながら呟く。

「清香さん……。そう言えばあの時、側にかなり年下のお嬢さんが制服を着て座って居たような……。あの子かしら？」

「あの時って……。母さん。ひょっとして彼女と面識があったの？  
初耳だけど」

「……。いえ、そんな事は無いわ。言いか間違っただけよ」

驚いて確認を入れた聡だが、それで瞬時に我に返った由紀子は誤魔化し、それ以上は余計な事を口にせず黙り込む。何分かそんな沈黙が続いたが、開いたページに目を落とし、そこに書かれたサインを愛おしそうに手で軽くなぞっていた由紀子が漸くそこから顔を上げ、聡の顔を見据えながらゆっくりと口を開いた。

「聡？ 嬉しいけど、こんな事はもう止めてね？ 相手を怒らせるだけだから」

「怒っていたらサインなんかしてくれないと思うけど？」

「それはこちらが身元をきちんと告げなかったからよ。第一、清香さんにも迷惑だろうし」

「彼女に母さんが兄さんの作品を愛読してる事を話して聞かせたら、凄く喜んでくれて快諾してくれたけど？」

「余計な事はしないでって言ってるの！ 人の気も知らないで、自分の自己満足の為に他人を騙して平気にいるなんて、人として最低

でしょう！ 黙って親の言う事を聞きなさい！！」

いきなり由紀子が声を荒げながら叱責してきた為、常には有り得ないその光景に聡は驚いて固まったが、次に激しい怒りに駆られた。

「……へえ、母さんは余計な事だつて言うんだ」

「当たり前でしょう？ 先方とこちらとは、今ではもう無関係なんだから！」

「じゃあ発作で倒れて意識が朦朧とした時、兄さんの名前を何度も口にしたのは？ 父さんは勿論、俺の名前だつて一度も出なかつたけどね」

「……え？」

そこで由紀子の声に勢いが無くなり、逆に静かに語り掛けた聡の口調が、段々激しいものに変化していく。

「ああ、確かにそうだね。兄さんと俺達は無関係だ。現に五年前に父さんから話を聞いた時、だから母さんが東野薫の本を読んでもんだと納得したけど、本当にそれだけだつたし。母さんが倒れるまで、正直存在すら忘れてたさ！」

「聡、ごめんなさい。さつきは私が言い過ぎたわ」

慌てて謝つてその場を治めようとした母親の台詞を、聡は聞かぬふりで続けた。

「だけど母さんはずっと忘れて無かつたつて事だろ？ そりゃあそつだよな。何と言つても家付き娘の母さんが、本気で好きになつて駆け落ち同然に結婚した相手との間の子供だし。そりゃあ可愛いだろうさ！ あの頑固爺に押し付けられた再婚相手の、あの面白味の無い父さんの子供の俺なんか、二の次だろうし！」

「聡！ そんな事は無いわ！」

血相を変えて激しく由紀子が否定したが、それを見て逆に落ち着いた聡は、いつそ冷たいとも言える口調で淡々と続けた。

「何を今更……。あれではつきり分かったから、別に遠慮しなくて良いさ。正直に言ったら？ 俺は兄さんの代わりだって」

「聡。だからそれは誤解よ。私は別に清人とあなたを比べたりなんかしてないわ」

必死で弁解する由紀子を真正面から見据えながら、母親が初めて“清人”と兄の名前を読んだ事実には訳も無く苛ついた聡は、以前からの疑問を母親にぶつけた。

「未だに気持ちを残してるなら、佐竹さんと別れた時、どうして兄さんを引き取らなかつたんだ？ 佐竹さんは再婚するまで10年近く男手1つで兄さんを育てていて大変だったろうし、うちは昔から金だけは十分過ぎる程あるんだから。母さんが言えばあのジジイだって、いけ好かない男の子供でも兄さんを手元に引き取ったんじゃないか？」

言うだけ言った聡は母親の反応を慎重に窺ったが、由紀子は聡から視線を逸らして俯いたまま、ボソツと呟いたのみだった。

「……………あなたには関係の無い事よ」

「分かった。もういい、俺は帰る。おやすみ」

何となく母親に裏切られた気持ちで一杯になってしまった聡は衝動的に立ち上がり、吐き捨てる様に別れの言葉を口にしながら由紀子の顔を見ずに足早に病室を去った。

廊下に出た瞬間、幾らか頭が冷えて残してきた母親の事が気になったが、どうしても病室内に戻る気にはならず、苛々しながらそのまま歩き出す。ちょうどその病棟で待機していたエレベーターに乗り込み、一階フロアに降りて廊下に足を踏み出した直後、我慢できなくなつて廊下の壁を拳で力一杯叩いた。

「くそっ……………」

考え無しに殴った拳も痛かったが、これまで穏やかな性格の由紀子に怒鳴ったり嫌味を言った事など皆無だった聡はそれ以上に胸の

痛みを覚え、そんな自分自身の感情を持て余していた。

## 第11話 親友の裏事情

一時限目の開始までに余裕を持って目指す教室に着いた清香は、既に机に座っていた親友の朋美に声をかけ、その隣に座った。そこで必要な物をショルダーバッグから取り出し、机の上に並べ終わった清香が、突然何を思ったか俯いたまま不気味な笑い声を上げる。

「うっふふふふ」

「……ちよつと清香。何よ、その変な笑いは」

さすがに隣席に辛うじて聞こえる程度の押し殺した笑い声だったが、現にそこに座っている朋美が薄気味悪そうな視線を向ける。すると清香が如何にも嬉しそうにバッグから一冊の本を引っ張り出し、朋美に向かって掲げて見せた。

「これっ！ 今日の講義は午後1コマ空くから、その時間にじっくり読み返そうと思って持って来たの！」

もう頬擦りせんばかりの上機嫌で告げる清香に、朋美は些か呆れた様に言い返した。

「ああ……、この前聞いた、試写会場で榊原康孝本人に直に会って、サインして貰ったってやつね。あんたもつくづく渋い趣味してるわ」「ほつといて。……うん、だけど何か、最近運氣が増してる気がするわ。聡さんに会ったお陰かな？ 招待券も貰ったし」

ウキウキと誰に言うとも無く呟いた清香だが、それを耳にした朋美はピクリと反応した。

「ところで清香」

「なあに？」

「その聡さんとやらの事は、お兄さんも知ってるのよね？」

慎重に問い掛けた朋美に、清香は無邪気に答える。

「勿論よ。同窓生だし、今時珍しい親孝行だねとか色々誉めてたわ



よ？」

「ふうん、“誉めて”ねえ……」

（あんたの前で本心から他の男を誉めるわけ無いじゃないの！）

清香とは高校時代からの付き合いの為、既に清人の性格を看破してしまっている朋美は心の中で断言し、今後の方針について1人考えを巡らせた。

（さて、このパターンは初めてなのよね。今まで清香に纏わりついてくるのは学生だったから、いつも私から情報発信してたし……）

本人は全く知らない事ながら、清人は清香と仲の良い朋美を《清香に纏わりつく男の情報提供及び工作活動要員》として目を付け、幾らかの交渉を経て双方合意に至った協力関係にあった。

既に五年目に突入するこの関係の為、今では朋美の周囲で清香に言い寄る男がほぼ皆無であり、その事に対して朋美は多少親友に罪悪感を抱いていた。それで一瞬（あのシスコン兄貴が認めている男なら、清香の恋を応援してあげられるかも）とは思ったものの、（その可能性はあり得ない……）と自分自身でそれを否定したのだった。

初めて聡の名前を清香から聞かされてから、注意深くその人となりなどを尋ねたりしていたのだが、清人の方からその人物について何も言っつてこないと言うのが、朋美にしてみれば不気味と言えば不気味だった。

（聞いている感じでは、まだ好きとか意識してるわけじゃ無さそうなのよね。それに社会人だから学内で接触する事はまず有り得ないし、私が知っていなくても良いって事かしら？）

そんな考えを巡らせながら、朋美は相変わらず本を抱えて楽しそうに語る清香に大して、適当に相槌を打ちながら笑顔を見せていた。

そんな状況が一変したのはその日最後の講義が終わり、2人で帰り支度をしていた時だった。講義中電源を落としていた携帯の電源を立ち上げ、メールチェックをしていた清香が突然当惑した声を上げた。

「……え？ 聡さん？ 嘘、やだ、後五分位しか無い。どうしよう」  
急に携帯を握り締めながらオロオロし始めた清香に、朋美は冷静に声をかける。

「ちよつと落ち着きなさい。例の聡さんがどうかしたの？」

「それが……、聡さんには私がここの学生なのは話してあったんだけど、今日は午後から営業の仕事でこの近くに来ていたみたいで、『ちよつと顔が見たいのと話したい事があるから、迷惑で無ければ正門の所で待つてる』って。それで到着予定時刻まで五分切つてそれを聞いた朋美は素っ頓狂な声を上げた。

「はああ！？ 清香、あんた別に約束なんかしてないのよね？」

「うん、してないけど」

「それなら『用事があるので失礼します』って断れば良いだけの話でしょ？ とつとと西門から帰るわよ！」

「でも朋美、わざわざ聡さんが仕事の途中で立ち寄るなんて、何か大切な話かもしれないし」

「大手総合商社のバリバリエリートサラリーマンが、一介の学生相手にどんな大切な話があるって言うのよ！」

教室内の級友達の怪訝そうな視線を一身に浴びながら、朝の心境とは打って変わって朋美は内心で焦りまくっていた。

（まずいわっ！ 校内で清香に男が近付くのを黙認なんかしたら、私の入学金がっ！）

朋美が高三の夏、実家が自身の進学費用を用立てるのはかなりギリギリだろうと判断していた朋美は、レベルを上げて地方国立大学を受験して1人暮らしの生活費を何とか工面するか、余裕で入学で

きる自宅から通学可能な私立のここにするかの二者択一を迫られていた。そして考えた挙げ句、清香が同じくここを志望校にしていた事から、高一の時から清香の周囲の男どもの情報を横流しする度に、惜しげもなく過分な“お小遣い”をくれていた清人との直談判に及んだのだ。

「すみません、入学金を全額無利子12年返済の条件で貸して下さい。その代わり大学内で清香には一切男を近付けさせません！」

その申し出を聞いた清人は如何にも楽しそうに笑い、幾つかの条件を出した。

《清香に気付かれると不味いので、男との多少の接触は許容範囲とする。その代わり2人きりにはさせない》

《卒業まで虫除けができたら、貸した全額は返却しなくて構わない》  
《もし失敗したら全額返済、当然銀行金利程度の利子はつけて貰う》

その条件で清人と手を結んだ朋美としては、かなり切実な問題だった。

（この不景気な時代に、卒業したって稼ぎの良い職にありつけるかどうかなんて分からないわ。百万単位のお金がチャラになるなら、悪魔にだって魂だろうが何だろうが売ってやるんだからねっ！）

そう決意を新たにしながら、未だに某財団から奨学金を貸与されたと本気で信じている両親に対しても腹を立てた。

（大体、保護者に書類の一枚も見せない書かせないでポンとお金を渡すなんてあり得ないでしょ？ それを疑いもしないなんて、そんな事だから出世コースから弾かれてうだつが上がらないのよ！ もう頼りにできるのは自分自身だけだわ！）

頭の中で脳天気な親への八つ当たりも済ませて気持ちを落ち着けた朋美は、素早く頭を回転させながら清香に声をかけた。

「ねえ、清香。この場合、わざわざ相手に付き合う義理は無いと思

うんだけど、清香としては取り敢えず話を聞きたいのね？」

「うん。わざわざここに立ち寄るなんて始めてだし、電話じゃ出来ない話なのかと思うと気になるし」

「じゃあ取り敢えず門まで行きましよう。案外すぐ済む話かもしれないわよ？ 私も付き合うから」

「ありがとう、そうしてくれる？」

「私は構わないわ」

鷹揚に頷いて見せた朋美だが、実は（変に引き止めてムキになられたり、あの時の代わりにとか変な交換条件にされたら面倒だもの。この際徹底的に観察させて貰うわ）などという思惑の結果だった。

そんな風に話が纏まり、何やら朋美が携帯を操作してから2人連れ立って校舎から正門への真っ直ぐな道を歩いて行くと、門柱の側に佇む1人の男性の姿が目に入ってきた。

「ねえ、清香。もしかしてあの人？」

「うん、あの人小笠原聡さんよ」

「……へえ」

相手も歩いてくる清香を認めたらしく、鞆を持っていない方の手を軽く振りつつ、笑顔で真っ直ぐ2人の方に向かってくる。校内では見掛ける事の少ないビジネスマンの出で立ちの彼と、それに近付いていく自分達に周囲の視線が集中していくのが分かったが、朋美はそれには構わず徐々に近付いてくる聡を食い入る様に眺めた。

（清人さんとはまた毛色が違ったイケメンだわ。体つきも均整取れている感じだし、着ている物も上物そう。だけど……、どこことなく温室育ちって感じが。あの清人さんに真正面から刃向かえるだけの根性が有るかしら？）

そんな結構失礼な事を考えている間に、両者は1メートル未満の距離まで接近した。

「こんにちは、清香さん。突然メールして学校まで押し掛けてごめんね？」

「いえ、ちょうど今日の講義は全部終わった所でした」

「それは良かった。それでちょっと時間を貰いたいんだけど」

「お話中すみません。清香、こちらの人に私を紹介してくれないの？」

自分の目の前で2人が和やかに話し出したところで、朋美が些か強引に会話に割って入った。それを受けて清香が慌てた様に友人を紹介する。

「あ、ごめんね、朋美。……聡さん、こちらは高校時代からの友人で緒方朋美さんです。クラスも一緒に、2人で帰るところだったんです」

「小笠原さんの噂は、清香から色々お聞きしています。初めまして」  
につこりと笑って清香が親友を紹介すると、今度は聡が愛想笑いを浮かべつつ、目の前の女性の観察を始めた。

「こちらこそ初めまして。知って頂いていて光栄です、宜しく。だけど高校から一緒にいて長いし、もう親友って域だよな」

「そうですね。若干腐れ縁っぽいですけど」

「酷いわ、朋美」

「そうなるか……、当然彼女のお兄さんともお知り合いかな？」

「ええ、良く存じてます。色々清香の事について相談を受けたりもしています」

（やっぱり裏で兄さんと繋がってるか……。彼女の親友面して、陰で何をしてるか分からないな）

含みのある会話を交わし、互いに相手の言わんとする所を察した2人は、愛想笑いを更に深くした。

「ところで、小笠原さんは清香にお話があるとか」

「ああ、ちょっとね」

「お時間かかりますか？実はこの後、私達用事がありまして」

「え？ 特に何も無いよね、朋美」

キョトンとして問い掛けてきた清香に、朋美は幾分すまなそうに、しかし余裕で言い返した。

「ごめん、今思い出したの。今度の学祭でのチャリティーオークションに、スタッフでの参加を頼まれてたでしょう？ その打ち合わせが後40分位で始まるのよ」

「ええ？ 聞いてないそんな話！」

「だからごめんって」

当惑した声を上げた清香に朋美は詫びを入れ、改めて聡に向き直った。

「そういう訳なので小笠原さん、清香と話をされても構わないんですが、外に出てどこかお店に入つてとなると、それに間に合わなくなる可能性があるんです。宜しかったらあそこの学食でお話ししませんか？今の時間はカウンターは開いてませんが、自販機は揃っていますし」

そう言いながら朋美は前庭に面したガラス張りの学食を指差した。本校舎から渡り廊下で連結されているそれは上層階に図書館や研究室を抱えており、チラホラと調べものや研究に一区切り付けて、一息入りに降りてきたらしい人間の姿も見える。それを無言で眺めてから聡は快諾した。

「俺は構わないよ。君達の都合も聞かずに押し掛けたのはこちらだし。せつかくだから2人に奢るよ。何が良い？」

「それならカフェオレをお願いします」

「分かった。清香さんは？」

そんな事を言いながらさっさと学食に向かって歩き出した聡と朋美を、一歩遅れて清香が追い掛けた。

「え？ 朋美も一緒に居るの？」

「何か都合が悪い？」

「俺との話が終わったら一緒に打ち合わせに行くんだろ？ 一旦離れてまた呼び出しとかするのは面倒だろうしね。俺は構わないし」「そうですよね。一人前の社会人が、人に聞かれちゃマズい話なんかしないですよね」

「そうだね。相手の都合を聞かずに押し掛ける程度の非常識な事位はするかもしれないけど」

「あら、自覚はありましたね。良かったです」

（どうあっても彼女と2人きりにはしないつもりだな？ この女）  
（ふっ……、1分で打ち合わせ前倒しの根回しは完了よ。意地でも清香は離さないわ！）

笑顔と友好的な口調を取り繕いながら聡は朋美と嫌味の応酬をし、微妙な顔をしながらも清香ははつきりとそれを認識できないまま学食へと入って行った。そして聡の支払いでそれぞれ好みの飲み物を手に入れた3人は閑散としている学食の片隅のテーブルに落ち着き、聡が幾分迷う様な素振りを見せてから、自分のコーヒーを入れた紙コップに口をつけないままゆっくりと口を開いた。

「清香さん。呆れないで聞いて欲しいんだけど」

「はい、何ですか？」

一口レモンティーを口に含んでから問い返した清香に、聡が予想外の事を言い出した。

「実は……、三日前に母と喧嘩をしたんだ」

「はい？」

もの凄く深刻そうな顔で語られた内容に、清香と朋美は揃って戸惑った声を上げた。それには構わず、聡が紙コップの中身を見下ろしながら淡々と続ける。

「あまり詳しい事は言えないけど……、母に良かれと思った事が、

実は本人にとってそうでは無かったみたいで。あ、いや、少しは反発みたいな物があるかもしれないとは予想してはいたんだけど、初めて母から大声で叱責されて動揺したと言うか、ついこっちも口を滑らせて売り言葉に買い言葉で結構酷い事を……」

段々ボソボソとした口調になってくる聡の話清香は啞然として聞いていたが、恐る恐る尋ねてみた。

「あの、聡さん。喧嘩の内容が全然分からないので判断出来ないんですが、客観的に見たら悪いのは聡さんですか？ それともお母さんですか？」

「……殆ど俺が悪いと思う」

がっくりとうなだれてしまった聡を、清香は励ます様に続けた。

「それがちゃんと分かっているなら、一刻も早くお母さんに謝った方が良いですよ？」

「次の日謝りに行ったんだ。そしたら『気にしてないから』と言われたけど、母の態度がきこちなくて。でもそれ以上どうしたら良いのか分からなくて。しかも当日俺が飛び出した後、母が体調を崩してナーズコールで看護師を呼んだって主治医から聞いて」

「え？ お母さん、どうかされたんですか？」

驚いて聡の話の腰を折ってしまった清香だが、聡は力無く笑って続けた。

「狭心症の発作で入院してて予後は良かったんだけど、興奮させたのが不味かったのか血圧の上昇と不整脈が出て、予定してた退院日を半月は延ばして経過を見る事になったんだ。11月末に退院予定だったのが、年内退院が微妙になった」

「そうだったんですか」

どう言葉をかけて良いか分からなくなってしまったらしい清香の表情を窺いながら、聡は1人自己嫌悪に陥った。

（俺は一体何をやってるんだ？ 全く無関係とは言えないが、彼女



にこんな愚痴を聞かせた挙げ句、自分の母親の事にまで気を遣わせる結果になって。情けないにも程があるだろう……）

そうして小さく溜息を吐いた聡は、深刻そうな顔の清香をチラリと見ながらしみじみとここに来た理由を告げた。

「その他にも色々あって、この2日間どうしても気分が晴れなくて、清香さんの顔が見たいなと切実に思」

「馬っ鹿じゃないの？」

そこで朋美が聡の独白を容赦なくぶった切り、舌戦の火蓋が切つて落とされたのだった。

## 第11話 親友の裏事情（後書き）

長くなりすぎてここで一度切る事にしました。続きは今日中に纏めて明日更新予定です。

## 第12話 教育的指導

「部外者は口を出さないで貰えるか？」

「部外者だろうが何だろうが、耳障りな事を目の前で垂れ流されるのを黙って甘受しなくちゃいけない理由なんてないわ。たかが親と気まづくなつた位で、いい年した男が年下の女子大生に愚痴零してんじゃないわよ、みつともない」

「ちょ、ちょつと朋美落ち着いて、聡さんも」

聡が向けてくる、これまでの苛立ちも相俟つた険しい視線を、朋美は恐れ気も無く真つ向から受け止め、吐き捨てる様に言い返した。間に挟まれた格好の清香は、ただオロオロとするばかりである。

「随分お気楽に育つたみたいだな。いつも『ごめん』の一言で何でも済ませて来れたのか？ いつそ羨ましいな」

「はん！ 何よ深刻ぶつて。これまで親とまともに喧嘩した事が無い、人間的に未成熟な人間に、好き勝手言われる筋合いは無いわ！」

「何で人間的に未成熟とまで言われなくちゃならないんだ！？」

「その年で、親を怒らせてどうしたら良いか分からないなんてうろたえている様じゃ、まともに反抗期なんか過ぎて無いんでしょ？」

終始親の顔色を窺う“良い子”だったんじゃない？ それに当然兄弟が居なくて1人っ子よね」

「……どうして断言できる」

見事に言い当てられ無然として尋ねた聡にわざと直接答えず、朋美は清香に顔を向けた。

「清香。この人に今年私が選択してて、あんたが選択してない科目を教えてやって」

「えっと……、児童心理学と行動分析学と精神発達論、です」

チラリと聡の方を気にしながらも清香が素直に答えると、朋美は

語気強く言い放った。

「私に言わせればね、今時の小学生の方が鬱屈して屈折してるわよ。何？ その幼稚園レベル。ひよっとして家族なんだから、時間が経てばその内自然に何とかなるとか思ってたんじゃないの？ 甘いわね」

「朋美、家族なんだから何とかなるものじゃないの？」

黙り込んだ聡とは対照的に怪訝そうに清香が口を挟むと、それを聞いた朋美は深い溜息を吐き出す。

「あのね、清香。血の繋がりが有る分、余計に人間関係って厄介なのよ。家族だから何でも分かり合えてたら、家族同士で保険金殺人とか、遺産相続で骨肉の争いなんか、この世に存在しないわよ？」

「……ごもつともです」

神妙に頷く清香に、朋美は苦笑しながら言い聞かせた。

「子供が社会性を身に付ける過程で、まず目の前に存在しているのは親兄弟でしょう？ その人達とぶつかった上で、その人間関係をどう修復していくかの過程で、他の人間との関係を構築して行くスキルを身に付けるのよ。どこまでなら許されるのか、どうすれば許して貰えるのかって学習しながらね。喧嘩したら同じ数だけ仲直りしなきゃいけない。これ、常識だから。喧嘩したらそのまま良いとか、嫌われるのが怖いから絶対喧嘩できないなんて考えの持ち主は、精神構造がどこか歪だって言われても文句は言えないと思うわ」

「う……、それはそうかと思うけど。でもよくよく考えてみれば、私、お兄ちゃんと喧嘩してたことあるのかな？」

思わず漏らされた清香の呟きに、朋美は苛々した様に話を続けた。

「まあ、そんな事だと思ってたけど。要するに小笠原さんは経験値が殆どゼロだから『喧嘩したら相手に二度と許して貰えないんじゃないか』って喧嘩する前から怖気づく根深い人間不信型で、それが高じて積極的に人間関係を広げられない『来る者拒まず去る者追わず』の淡泊なタイプ。清香は『喧嘩する状態まで持っていけない』

過保護もしくは無関心家族型で、それが逆な方向に働いて《特定の狭い範囲だけに強固な関係を結びたがる》固執タイプってところかな？」

キツパリと言い切られて清香と聡は絶句した。

「なんか随分酷い事を言われた様な気が……」

「私、そんなに固執するタイプじゃないと思うけど……」

そんな控え目な抗議も、朋美はあっさり受け流した。

「まあ、他人がどうこう言う事じゃないかと思うけど。小笠原さんはぶつぶつ愚痴ってる暇が有るなら、もつときちんと謝る事ね。何か物を壊したなら代わりになる物を。それで代替えできない思い出とかなら、それ以上に楽しい思い出を作ってあげられる様に努力する事。そして家族なんだから、思った事はきちんと口にして正面からとことんぶつかる事。何かを始めるのに遅すぎるって事は無いのよ？ ヨボヨボの爺さんになって死ぬ前に『ああしておけば良かった』って後悔するより良いじゃない」

「確かにね」

最早苦笑するしかないといった表情の聡から、朋美は清香に視線を向けた。

「前から一度言いたかったんだけど、清香は何でもかんでも清人さんに任せつきりにしないで、色んな事柄や物をきちんと自分で選ぶ事。あまり物事に執着しないのは美点かもしれないけど、度が過ぎると周りが見えなくなるわよ？」

「私そんなにお兄ちゃんに依存している様に見える？」

不満げに訴える清香を、朋美は鼻であしらった。

「判断基準が何でもかんでも《お兄ちゃん》じゃない。お兄ちゃんが好き髪型、お兄ちゃんが好きな服装、お兄ちゃんが好きな料理、お兄ちゃんが好きな場所。他にもこれまで色々聞いたけど？ 別にお兄ちゃんの言う通りにしなかつたからって、あの人はあんたを放

り出したり、あんたの前から急に黙って消えたりしないわよ」

「……そんな事、思って無いわよ」

何やら微妙な空気を察した聡が思わず清香の顔をまじまじと覗き込もうとした時、学食の正面入り口付近から女性の声が響いてきた。

「ちよつと朋美！ 見つけたわよ！？」

「あなた、さっきのメールは何なの？」

急な打ち合わせ日時の変更を一齐にメール送信した為、当惑した彼女達が自分を探していたと瞬時に察した朋美は、清香達に不審に思われない様慌てて立ち上がった。

「あつと、ごめん清香。ちよつと真希子達と話があるから、ここで待っててくれる？」

「うん、良いわよ？」

断りを入れて級友の元に駆け寄っていく朋美を見送ってから、清香は黙り込んでいた聡に幾分心配そうに声をかけた。

「あの、聡さん、気を悪くさせてしまったらすみませんでした。朋美は思った事をストレートに口にするタイプで。でも基本的に世話焼きの、優しい子なんですよ？」

自分に気配りしつつもちゃんと友人をフォローする清香に、聡は強張っていた表情を緩め、優しく笑いかけた。

「いや、気にしてないから。俺が情けないのも結構子供なものも、言われてみればその通りだし。寧ろ目が覚めて良かったよ、もう少し頑張ってみるから」

「そうですね？ それなら良いんですが」

そこで聡は苦笑混じりに呟いた。

「本当に……、清香さんの顔を見たら気分が良くなるかも位の、軽い気持ちで来てしまったんだけど」

「う、ごめんなさい」

「え？ どうして清香さんが謝るの？」

予想外の反応をされて聡が戸惑うと、清香が如何にも申し訳無さそうに呟く。

「だって聡さん、気分転換にポニーテールを触らせて貰いに来たんですよ。それなのに私、今日はバレッタで留めてるだけです」「は？」

そう真顔で告げられた聡は反射的に清香の髪型を確認し、今日彼女に会った時から感じていた微かな違和感の正体に漸く気がついた。そしてどれだけ自分が失調していたかを自覚すると共に、自分の中から笑いが込み上げてくる。

（俺って、彼女の中ではとんでもないポニーテールフェチだとも思われてるのか？ しかし自分に会いに来たとは微塵も考えない所が、なんとも笑える……）

そんな事を考えて笑いを堪えていた聡は、ふとある事を考え、早速それを実行に移した。

「ねえ、清香さん。じゃあ俺に気分転換させて、慰めてくれる？」

「それは……、できればそうしてあげたいですが」

「じゃあヘアブラシとシュシュを買おう。駅前まで行けば小物は幾らでも売ってるよね。今日のお詫びに、清香さんの気に入った物を買ってあげるから」

「え？ あの、まさか……、それで私にポニーテールにしてくれとか……」

自分の腕を軽く引つ張りながら立ち上がった聡に、清香は若干引き攣った顔であり考えたくない可能性を口にしたが、聡は笑顔であっさり肯定した。

「ああ、勿論。実は五時までには一度社に戻らないといけないから、ここにあまり長居はできないんだ。そういう事だから行くよ？」

「あの、ちよつと待つて下さい！ 一応朋美に断りを入れないと！」

「大丈夫大丈夫。親友なんだから？ これ位で怒らないから」

「何で聡さんが断言するんですか！」

「彼女とは腐れ縁なんだから？」

「もつとマシな言い方をして下さい！」

そんな言い合いをしつつ2人は朋美達が立ち話をしている入り口とは反対方向の扉を目指し、朋美が話を終えて再び座っていたテーブルに視線を向けた時には、2人の姿は影も形も見あたらなかった。

「清香をあつさり丸め込んで、まんまと逃走しやがったわね？ あいつ……」

忌々しげな口調とは裏腹に、朋美はどこか楽しんでいる様な表情で清香達が出て行ったと思われる奥の出入り口を見詰めた。そして徐にバッグから携帯を取り出し清人の携帯を呼び出すと、短いコール音の後冷静な清人の声が響いてくる。

『もしもし、朋美さん？ 何かあったのか？ こんな時間に』

「ええ、ちよつと。実は大学に小笠原氏が清香を訪ねてきて、先程まで3人で顔を合わせていたんです」

そう告げた瞬間清人は電話の向こうで一瞬押し黙り、次いではつきりと不機嫌だと分かる口調で問い掛けてきた。

『……何をしにそこまで押し掛けたんだ？ あいつは』

「私に凄まないで下さいよ。一言で言えば、ぐだぐだっぷりを露呈しにですね。あれじゃ付き合う以前の問題でしょう。恋人なら自分の格好悪い所なんて、意地でも見せたく無いでしょうし。あ、でも……、却つて気を許してるからこそ、洗いざらい話せるのかな？」

『君の見解はどうでもいい。さつさと話の内容を教える』

「はいはい。それでですね……」

何気なく口にした推論を完璧に無視されたが、朋美は気を悪くする事無く、薄笑いさえ浮かべながら一部始終を語った。



「……そんなわけで、清香と纏めて説教しちゃいましたよ。あのぐだぐだ男に」

肩を竦めながら朋美が語ると、電話の向こうの清人は更に不機嫌そうに問い掛けた。

「話の内容は分かった。それで？ 清香とあいつはまだそこに居るのか？」

「居たらこんな電話できないじゃありませんか。あの男、ちょっと目を離してる隙に、清香を丸め込んで遁走しやがったんですよ。言っておきますけど、これは不可抗力ですからね！ それ以降の事は清香が帰ったら本人に聞いて下さい」

腹立たしく思いながら弁解の言葉を繰り出すと、予想に反して清人は微かに笑う気配と寛大な言葉を返してきた。

「さすがの君も勝手が違つて油断したのか？ まあ、今回は良いさ。その代わり次回は宜しく頼む」

「分かりました」

当初はそこで大人しく通話を終わらせるつもりだった朋美だが、ふと悪戯心が芽生えて自然に口から言葉が転がり出た。

「それにしても……、清人さんと小笠原さんって、似てる所がありますね」

「どこが。どんな風に」

如何にも不機嫌そうに吐き捨てた清人に、朋美は必死に笑いを堪えながら理由を述べた。

「お二人とも頭は良い筈なのに、揃つてお馬鹿さんです」

「なっ……！？」

「頭が良い」賢いとは一概に言えないと、前々から密かに思っていたんですが、それを実証してくれる人間が二人も現れてくれて、とても嬉しいです」

全く悪びれずに告げた朋美に対し、絶句していた清人が小さく唸った。

『俺は君と契約するに当たって、暴言を吐く事まで容認した覚えは無いんだが？』

「暴言を吐くなと禁止されてもいませんよね？ もう三十過ぎのいい年をした大人が、ガキの台詞に一目くじら立てないで下さい。それでは失礼します」

そう言っただけと通話を終わらせた朋美の携帯には、わざわざ清人からかけ直してはこなかった。それをバッグにしまい込んだ朋美は、今後のキャンパスライフに一抹の不安と楽しい変化の予感を覚えつつ、校内を後にしたのだった。

### 第13話 嵐の予兆

「……ええ、じゃあそついう事で。それじゃあその時に、お休みなさい」

「清香、電話は終わったか？」

耳から携帯を離れた瞬間、背後から軽いノックの音と清人の声が聞こえた清香はゆっくり振り向いた。すると開いたドアの隙間から顔を覗かせている清人を認める。

「うん、終わったけど、どうかしたの？」

「浩一が袖の下持参で来てるんだ。顔を出すか？」

「うん、今行く！ちよつと待ってて」

「じゃあ紅茶を淹れておくから」

慌てて机の上に有った手帳に何かを書き込み始めた清香に、清人は声をかけながらその場を後にした。

そして用事を済ませた清香はすぐにリビングに向かい、ソファーに落ち着いているスーツ姿の浩一に笑顔で駆け寄った。

「浩一さん、今晚は。お兄ちゃんが袖の下を持って来たなんて言うてたけど、何か頼み事をしに来たの？」

その清香の台詞に、苦笑を禁じ得ない浩一。

「全く……、あいつは土産と言えないのか。単に清香ちゃんのご機嫌取りなんだけどね。ヨハンのクリームチーズケーキを買って来たんだよ、好きだろう？」

「うわ、浩一さんありがとう。大好き！」

思わず横に座って浩一の首に腕を回して抱き付いた清香を、抱き返しながら浩一が笑みを深くした。

「あはは、凄く嬉しいけど、清人に殺されるから、こついう事はあいつの目が届かない所だね」

「……その方が、お互いの身の為だな」

いつの間にかティーセットを乗せたトレーを持った清人がやって来て、頭上から冷え冷えとした声を降らせた為、清香はくすくすと笑いながら手を振った。

「もう、お兄ちゃん！ふざけて何物騒な事言ってるのよ！」

（いや、本気なんだが）

清人は黙ってポットとカップをテーブルに置いてキッチンに戻り、再びケーキを乗せた皿を持ってきた。その間斜め向かいに座って世間話をしていた浩一と清香だが、清人が浩一の正面に座り、茶漉しを持ちつつ蒸らしていた紅茶をカップに注ぎ始めたところで、清香が素朴な疑問を発した。

「ところで浩一さん、平日の夜にどうしてわざわざうちに来たんですか？」

「ちよつと清人に相談に乗って欲しい事が有ってね。男同士の話だから、ケーキを食べたら両手で耳を塞いでくれているとありがたいな」

ふざけた口調で告げた浩一に、清香も笑顔で応じる。

「安心して。それなら食べ終わったらちゃんと部屋に引き上げるわ」

「ごめんね、清香ちゃん。お詫びと言ってはなんだけど、今度の土日、どちらかドライブに行かない？行きたい所があれば連れて行ってあげるから」

さり気なく誘いをかけた浩一に対し、清香は申し訳無さそうに断りを入れた。

「ごめんなさい浩一さん。どちらも予定が入ってて。土日は再来週も無理なの」

「それは忙しいね。友達との約束が色々詰まってるの？」

「友達との約束もあるんですけど、最近浩一さんみたいに皆が色々誘ってくれて」

「へえ、色々つて、どんな？」

柏木総一郎から孫達への通達を浩一経由で聞いている清人は、笑いを堪えながら素知らぬふりで尋ねると、清香は考え込みながら口にした。

「えつと……、玲二さんとはボーリングの日と、それとは別に新しいネイルサロンで新着の物を試してみる事にして、正彦さんとは今度結婚する友人の結婚祝いを一緒に選んでから、食事をする予定で、明良さんにはエステに連れて行って貰った後写真を撮って貰う事になって、その他に水族館に連れて行って貰う日もあって、友之さんには……、あ、そうだ、お兄ちゃん！」

「うん？何だ、どうかしたのか？」

何か思い出したらしい清香に唐突に呼び掛けられ、清人は紅茶を飲もうとした手を止めて訝しげに妹を見やったが、続く話に僅かに目を細めた。

「友之さんに『二十歳になったんだからプールバーに連れて行ってあげる。だからいつもは門限は21時だけど、清人さんに帰りはそれより遅くなる事を了解して貰っておいて』って言われたの。『23時までには着く様に送ってあげるから』って言ってくれてるし、良いでしょ？お兄ちゃん」

（……あの野郎、どさくさに紛れて清香をどこに連れて行く気だ！？）

怒りまくっている清人の内心には気付かないまま、おねだりモードに突入する清香。

「ねえ、お兄ちゃん、良いでしょう？友之さんが帰りは責任持って送ってくれるって言ってるし」

上目遣いでの訴えに、清人は歯軋りしたいのを堪えながらボソツと呟く。

「……22時」

「え？」

「それ以上遅くなるなら、それ以降あいつと出掛けるのは無しだ」

素っ気なく宣言した清人に、清香がたちまち不満げな声を上げる。

「ええ？ お兄ちゃん、横暴！ せっかくビリヤードを徹底指導して貰えるかと思ってたのに！」

「清香。俺の言う事が聞けないのか？」

「う……、はい。分かりました」

途端に凄んできた清人の表情と声音に、清香はこれ以上逆らってはまずいと判断し、不承不承頷いた。そこで浩一が呆れた様に口を挟んでくる。

「清人、お前な……。清香ちゃんにも色々付き合いがあるだろう。」

二十歳になったんだし、コンパとかも『飲酒は厳禁だと兄に言われているから参加できません』で片端から断らせるのも無理があるんじゃないのか？」

「他ではどうか知らんが、うちでは俺の方針でやらせて貰うだけだ」

「……全く、変な所で頑固だな、お前は」

「放っておいてくれ」

浩一の取りなしの台詞をすげなく一刀両断し、黙々とケーキと紅茶を味わっている清人をよそに、浩一と清香は苦笑交じりに目と目で会話した。

（過保護で心配性の兄が居ると、色々苦勞が多いね清香ちゃん）

（今更です。もう慣れてますから）

そしてまた一口紅茶を味わってから、清香がしみじみと言い出した。

「でも皆の誘いがこんなに重なるなんて珍しくて。おかげで土日とか平日の早く終わる日とか、これから二週間ほぼ予定が埋まってるんだもの」

「随分モテてるな」

「茶化さないでお兄ちゃん。それで聡さんとの都合がなかなか合わないからさつき相談したんだけど、今度の大学祭の時に構内で待ち合わせする事にしたの」

「はあ？ ちよつと待って清香ちゃん!？」

「清香！ 何だそれは!？」

淡々と語る清香とは対照的に男2人は目を見開いて聞いたのだが、当の本人はきよんとしして言葉を継いだ。

「何だ、つて……、二人ともどうしたの？ 単に大学祭で聡さんと会う事になったつてだけの話じゃない。どうしてそんなに驚くわけ?」

途端に黙り込んで物騒な気配を醸し出し始めた清人から視線を逸らしながら、浩一はさり気なく突っ込んでみた。

「いや、その……。聡さんつて、この前試写会で会った角谷さんの事だよ。試写会の券は清人のサイン本を貰ったお返しに、つて事で何となく分かるんだけど、まだ2人が会う必要性とか理由があるのかな、と」

「それは、聡さんが浩一さん達と同じだからだと思いますよ?」

「え?お、俺達と同じ?」

動転して問い返した浩一だが、清香は事も無げに答える。

「ええ。だって私が小学生の頃に『どうして浩一お兄ちゃん達は清香と遊んでくれたり、色々プレゼントをくれるの?』つて聞いた時、『俺の所は気の強い姉さんだけだし、倉田さんと松原さんの所は息子ばかりだから可愛い存在つてもものに飢えててね。清香ちゃんみたいな可愛い子を、皆妹みたいに無性に可愛がりたんだよ。だから好き放題構われて、遠慮無くプレゼントを受け取ってくれたら嬉しいな』つて言つてたでしょう?」

「あ、ああ、言つたね。確かに」

過去の自分の発言を振り返り、浩一は清人から冷たい視線が全身

に突き刺さるのを感じながら、密かに冷や汗を流した。

「聡さんも一人っ子だから、私の事妹みたいに可愛がりたいたいんですよ。特にこのポニーテールがお気に入りで、良く触ってますし」

「触っ……………」

「……………」

（清香ちゃん！ お願いだから、これ以上清人を刺激する様な発言はっ！！）

（親はともかく子供まで邪険にするのは気が引けたから、こいつらが清香に纏わり付くのを半ば黙認してたが…………、間違いだっただか。

しかしあいつは俺の知らない所で、清香に何をしてやがるんだ！？）  
怒りのあまり無表情の清人を見て、真っ青になっている浩一に氣付いた清香が、心配そうに声をかけた。

「どうかしたの？ 浩一さん。何だか顔色が悪いような……………」

「い、いや。大した事は無いから気にしないで。それで、どうして彼は清香ちゃんの所の学祭にわざわざ出向く事に？ 出身大学でもないのに」

何とかその場を取り繕った浩一に、清香はそれに至った経過を話し出した。

「正式に私が所属してるわけじゃ無いんですけど、友達関係で時々お手伝いしてるボランティアサークルが院内学級の慰問してるんです。家庭教師みたいに勉強を教えたり、子ども達の遊び相手になつたりとか」

「ああ、清香ちゃんの大学は医学部付属の病院があったね。そこで何の活動？」

「主にそうです。それで学祭でその諸々の活動内容のポスター発表と、その院内学級の備品購入や活動費捻出の為にチャリティーオークションをする事になっていて、それに関わってる話をしたら聡さんが興味を持って」



そこで唐突に清人が皮肉混じりの口調で口を挟んだ。

「へえ、一介のサラリーマンの角谷さんが、どうしてそんな事に興味を持つんだらうね？」

（どうせ全然興味なんて無いくせに、口からでまかせを言って清香を丸め込んだらうが！）

（うわっ、清人の奴目が笑ってない！ 本気で怒ってる証拠だ。清香ちゃんは全然気付いて無いけど……）

そんな男達の心境など全く理解できないまま、清香は話を続けた。

「それがね？ 聡さんのお母さんってある民間団体の設立者の1人で、良く小児病棟の慰問に行ったり、小さな子供が長期入院してる親に対して、病院近くの宿泊施設や賃貸物件の費用を助成したりする活動をしてるんですって」

「……そうなんだ。それは偶然だね」

辛うじて声を絞り出した浩一に、清香は大きく頷いた。

「私も話を聞いてそういう活動もあるんだって初めて知ったの。そうよね、難病の子供とかだと全国各地から設備の整った大病院に集まるし、そうしたら小さな子供だけ1人で送り出すのは可哀想だから、親が付いてくるのが人情ってもので。だけど治療費に加えて、親の経済的・精神的負担は相当だと思うし。やっぱり学生とは視点が違うなあって思っただけ」

（小児病棟の慰問だと？ あの偽善者が、どのツラ下げてそんな事を！？）

如何にも感心した様に呟く清香の横で、清人はカップを砕かんばかりに両手で握り締めていた。

「それでお母さんがそういう活動をしてる事を知ってたから、私の話に聡さんが興味を持ったらしくて『できれば案内して貰えないかな？』って言われたから快諾したの。別に悪くは無いですよ？」

……って、本当にどうしたの？ 何だか浩一さんもお兄ちゃんも顔色が悪いけど」

ここで漸く清香は怒りのあまり血色を無くしている清人と、その清人を見て生きた心地がしていない浩一の異常に気がついて声をかけた。しかし浩一が引き攣った笑いを浮かべながら、何とか誤魔化そうとする。

「いや、何でもないよ。ちょっと仕事が忙しくて疲れたかな？」

「本当に大丈夫？ そうは見えないけど。……うん、ちょっと待っててね」

何かを思いついたらしい清香は、力無く笑ってみせる浩一に断りを入れて立ち上がり、真つすぐキッチンの方へと向かって行った。そこから扉を開けたり何かを置く様な気配が微かに伝わる中、浩一が正面の清人に目を向けて、思わずうんざりとした声を漏らす。

「清人……、清香ちゃんが居なくなつた途端、人相悪くなつてるぞ。気持ちは分かるが」

「それなら、俺がこれからする事の見当もつくよな？」

「正直、あまり考えたくないんだが」

「お前に……、もそうだが、柏木産業に少し無茶して貰うぞ。アポを取って、今度社長にも頭を下げに行く」

地を這う様な声で発せられた容赦の欠片も無い台詞に、思わず浩一は泣きたくなつた。

「……せめて全面戦争は回避してくれ」

「それはあいつの心掛け次第だ」

それを聞いて浩一がぐりと頂垂れた所で、清香が嬉しそうにリビングに戻って来て2人に告げた。

「良かった、今確認してみたら材料が全部揃つてたの。これから真澄さん直伝、特製スタミナドリンクを作るから2人も待っててね？」

その台詞に瞬時に顔色を変え、背中を向けた清香に慌てて声をかける2人。

「あのっ！ 清香ちゃん！？ もう夜も遅いし構わないで良いから」「ちよつと待て、清香。2人ともって、俺も飲むのか！？」

「もう材料は揃えたし、あとはミキサーにかけるだけだから遠慮しないで浩一さん。お兄ちゃん、この前急に体調崩したくせに何言ってるの。この際浩一さんにお付き合いなさい！」

そう言っつて再び清香が壁の向こうに姿を消すと同時に、浩一は無言で立ち上がった。しかし清人がささずその腕を捕らえ、低い声で囁く。

「……どこに行く気だ？ 浩一。折り入つての相談とやらがまだだろっ」

「いや、今夜はもう良いから。それは日を改めて電話でも」

遠くからウーンという振動音が微かに伝わる中、一層顔色を悪くした男2人の、些かレベルの低い攻防が小声で続いた。

「お前がここで帰つたら、俺が2人分飲まされる羽目になるだろうが。俺を殺す気か？」

「お前だつたら清香ちゃんを何とでも言いくるめて、飲まない様  
持つていかせられるだろ？」

「清香が俺の為に作った物を、口にしないで捨てられるか！ そんな事をする位なら死んだ方がマシだ」

「泣かせる兄妹愛だな。俺に構わず潔くそれに殉じる。だから頼むから俺を巻き込むな」

「お前は家で耐性ができてるだろう、お前こそ潔く俺に付き合え！」

「清香ちゃんが言う代物なんて、家で口にした事は無い！ 第一“姉さん直伝”っただけでもう、俺的にはアウトなんだ！」

「2人とも。出来たわよ？ さあ、どうぞ？」

そこで満面の笑みで現れた清香が携えて来た物を見て、清人と浩

一は何とも言えない顔で黙り込んだ。その反応を見ながら清香がトリーの上の大きめのグラスをテーブルに二つ置き、苦笑交じりに説明する。

「2人とも……、見た目で判断しないでよ。確かにほうれん草とかピーマンとか紫キャベツとか入っているからこんな色だけど、他にも色々入っているし見た目ほど味は酷くないのよ？ 私、風邪気味の時に飲んでみたら、次の日はすっかり回復してたし。騙されたと思って飲んでみて？」

（いや、「騙されたと思って」じゃなくて、実際騙されてると思う）

清人と浩一そうは思ったものの、にこにこ促す清香に対しそれを口にするできなかった。

更に大抵の物を“美味しい”という部類に括れる清香の幅広い味覚であれば、“見た目ほど酷くない”と評する味がどんなものかは想像もできなかったのだが、基本的に清香に甘い浩一と甘過ぎる清人はそれを突っぱねる事ができず、覚悟を決めて濁った濃緑色の液体の入ったグラスにゆっくりと手を伸ばしたのだった。

## 第14話 過去の残像

「母さん、少し話があるんだけど良い？」

消灯時間ギリギリに病室に現れた息子が、神妙な顔をして自分にお伺いを立ててきた為、ベッドの上で本を読んでいた由紀子は、本を閉じながら優しく微笑んだ。

「勿論構わないわよ、聡。どうかしたの？」

手振りで傍らの椅子を勧めると、聡がおとなしくそれに座ってから、どこか言い辛そうに口を開く。

「……一応、事前に母さんには話しておこうと思って」

「あら、何を？」

不思議そうに問いかけると、聡はまだ少し迷う素振りを見せたものの、意を決した様に口を開いた。

「その……、この前も謝った事だけど……。母さんが兄さんに会いたがってると思うってたから、俺は兄さんに母さんに会って貰おうとしてたけど……」

「聡、だからそれは」

「それは、現時点ではお互いの本意では無い事が良く分かったから、この件については潔く諦めようかと思ってる」

「……ええ、そうね。そうして頂戴」

窘めようとしたものの聡にはつきりと宣言され、由紀子は俯き加減で微妙な表情を見せた。しかし続く聡の台詞で、弾かれた様に顔を上げる。

「だけどそれとは別に、清香さんとはこれからも会うから。早速次の約束もしたし」

「聡!？」

驚いて聡を見やった由紀子と、黙り込んだ聡の視線が絡まる。

互いに視線を逸らさないまま十数秒が経過し、どうやら息子が本気らしいと悟った由紀子は、聡の顔を眺めながら穏やかに問い掛けた。

「それはどうしてか、聞いても良いかしら？」

しかしその問いに、聡は幾分困った様に曖昧に笑いながら答えた。

「さあ……、正直に言つと、まだ自分でも良く分からないかな」

「あら、そうなの？」

「けどそのせいで、これから母さんに嫌な思いをさせてしまうかもしれないから、先に謝っておこうと思って」

何かを吹っ切つたらしく悪びれずに言つてのける聡に、今度は由紀子が小さく笑う。

「馬鹿ね……、私なんかに詫びる必要は無いわ。清香さんと今後も関わっていくつもりなら、私の事で嫌な思いをするのはあなたの方よ？」

「その事なんだけど、今日はその理由を聞かせて貰おうと思って。それは単に佐竹さんと離婚後に、兄さんと会ってないだけじゃ無いよね？」

いきなり真顔で切り込んできた聡に対し、由紀子も表情を消して無言で見つめ合った。そして小さく溜め息を漏らす。

「……分かったわ。前々からあなたには一度ちゃんと話すべきだと思っていたし、良い機会かも」

そう言つてから、由紀子は重い口を開いた。

「私が清吾さんとの結婚を親に反対されて、家を出た経緯は知っているかしら？」

「ああ、五年前に父さんから兄さんの話を聞いた時、簡単な流れだけ。二年強で小笠原に戻った事も。どうして佐竹さんと離婚したのか、兄さんを手放したのか聞かせて欲しい」

「手放したんじゃないわ。置き去りにしたの」

「え？」

その言葉の不穏な響きに反射的に聡がたじろいだが、由紀子はどこか懐かしむ様に話し始めた。

「清吾さんと結婚した事については、私、後悔はしてないわ。確かに生活は大変だったけど、最初はそんなに苦痛に感じて無かったし、好きな相手と一緒にだったし、結婚してすぐに清人を妊娠して、あまり細かい事に構っていられないって言うのが正直なところだったかもしれないけど」

「それで？」

そこで一旦話を区切った由紀子を、聡は慎重に促した。それを受けて由紀子が淡々と話を続ける。

「清人を産んでから、何か少しずつ歯車が狂っていったみたいで。何もかもが嫌になってきたの。後から育児ノイローゼだって言われたけど、その頃はそんな意識全然無かったわ」

「母さん、それは…。どういう状況だったか俺には正確には分からないけど、仕方なかったんじゃない？」

一応庇う様な発言をした息子に、由紀子は軽く首を振って否定した。

「そんな事は無いわ。私がさっさと変なプライドを捨てていれば良かったのよ。家を飛び出した手前何も出来ないなんて思われるのが嫌で、所詮お嬢様のお遊びだなんて陰で馬鹿にされてる様な気がして、親切にしてくれた周囲の人に素直に頼れなかったから。何でも一人で完璧にやろうとムキになって、段々全ての事が苦痛になっていった……」

当時の事を思い出しているらしい由紀子が無意識に布団をきつく握り締めたのを見ながら、聡は黙って話の続きに耳を傾けた。

「慣れない家事で神経をすり減らすのも、少ないお金で家計の遣り

繰り返すのも、手のかかる清人の世話も。何よりもそれ以上に、私のせいで必要以上に負担がかかっている筈の、清吾さんに対する負い目もあって！」

「母さん」

段々激しい口調になってきた由紀子を抑える様に聡が口を挟むと、由紀子は聡に向かって頷きながら、自分自身を落ち着かせる様に呟いた。

「ええ、良く分かってるわ聡。今となっては言い訳に過ぎないのは。同じ様な環境で育った香澄さんはちゃんと家計を切り盛りして立派に子育てもしてたもの。単に私は清吾さんと一緒に暮らしているだけの覚悟も力量も無い、父が言う通りの馬鹿で無分別の女だったと言っただけだわ」

「そこまで自分を卑下しなくても良いんじゃない？」

流石に母親が気の毒になり、聡が宥める様に言葉を発したが、それを受けた由紀子は自虐的に笑った。

「私はそれだけの事をしたもの。発作的に清吾さんと暮らしていた部屋から飛び出した時、私が何をしたと思う？」

「ごめん、全然想像できないんだけど。何かあったの？」

全く予想がつかなかった聡が本気で困惑した声を出すと、由紀子は真顔になってとんでもない内容を口にした。

「一歳直前のやつとよちよち歩きしてた清人を、空の浴槽の中に入れて上から蓋をして出て行ったのよ。勿論その時清吾さんは仕事で居なかったわ」

「母さん！？ まさか本当に、兄さんにそんな事をしたのか？」

言われた内容に驚愕した聡は思わず椅子から立ち上がり、ベッドに両腕を付いて由紀子に詰め寄ったが、由紀子は固い表情のまま小さく頷いた。



「清人は最初何が起こったのか分からなかったみたいだけど、蓋を閉められた途端大泣きし始めて。でも浴室の外にはあまり響いてなかったわ。まともな判断力を無くしてた私は、そのまま周りの誰にも言わずに、小笠原に帰ったの」

あまりと言えばあまりの内容に、聡は思わず目眩を覚えた。そしてふらりと元の椅子に腰掛けてから、無意識に問い掛ける。

「……その後、どうなったの？」

「人伝に聞いた話では、団地の一階下に住んでいた岡田さんっていう方が『お風呂場の窓辺りから、子供の泣き声が微かだけどずっと続いている。呼び鈴を鳴らしても中から応答が無いし、もしかしたら奥さんが倒れてるかもしれない』って管理人室に駆け込んだそうよ」

「普段から付き合いがあった人？」

「多少ね。それで管理人の方と岡田さんが合い鍵で部屋に入って、清人を発見したそうよ。私の姿は無いし、連絡を受けた清吾さんも居場所を知らなかったから、事件かと警察沙汰になりかけたらしいわ。その頃実家に戻っていた私は、訳の分からない事をわめき散らして父に精神科に強制入院させられてたから、詳しい事は知らないの。その間に協議離婚の手続きも勝手に進められていたし」

「じいさんがそんな事してたのか!？」

先程の由紀子の衝撃告白に驚愕した聡だが、血の繋がった祖父の行為にも愕然とした。しかしそんな聡の反応に、由紀子は悲しそうに首を振る。

「一方的に父を責めないで。一番悪いのはこの私なんだから。事実、父に『この離婚届にサインしろ』と目の前に持って来られるまで、1ヶ月の間病室で自分だけの世界に浸っていて、清吾さんや清人の事をろくに思い出しもしなかったんだから。……本当に、最低の妻で母親だわ」

どこか遠くを見ながらうつすらと笑って見せた由紀子に、聡は慎重に問い掛けた。

「それで、大人しくサインして別れたの？」

それに対する由紀子の反応は、聡の予想を裏切った。

「いいえ、私別れたくは無かったの。逆にはつきりと自覚したわ。

もう一度清吾さんと清人とやり直したいんだって。それでこっそり病院を抜け出したの」

「そんな事、良く出来たね？ あのじいさんの事だから、付き添いつて名目の見張りとか張り付けそうだけど」

本気で驚いたらしい聡に、由紀子は苦笑いで応じた。

「詳細は省くけど、家の使用人で味方してくれる人が居てね、服とかお金とか調達して貰ったわ。それで暮らしていた団地に、1ヶ月ぶりに戻ったの」

「そうだったんだ……」

「それで、そこに着くまでに決心してたのよ。清吾さんを怒らせたかもしれないけど、本気で謝ってやり直そうって」

「それで謝ったの？」

その何気ない聡の問いに、由紀子はピタリと口を閉ざした。

「母さん？」

流石に不審に思った聡が再度問い掛けると、由紀子が徐に口を開く。

「いいえ。……結局、清吾さんとは、私家が飛び出した朝に玄関から見送って以来、会ってないわ」

「え？ どうしてそうなるんだ？」

予想外の話の流れに聡が軽く目を見開くと、由紀子が静かに語り出した。

「団地の入り口に公園があって、そこで岡田さんが清人を遊ばせてくれてたの。それを家に向かう途中で通りかかった私が認めたと同じ時に、私と目が合った岡田さんが清人を抱えてやって来て『佐竹さ

ん、心配してたのよ？ ご主人から外出先で倒れてそのまま病氣療養中って聞いてたけど元気になったのね。良かったわ』って笑顔で挨拶してくれて。清吾さんが、私が戻ってきた時に気まずい思いをしない様に、私がお家を飛び出した事や父と揉めている事を、周囲に誤魔化してくれてたのよ」

「そうなんだ。佐竹さんって、優しい人だったんだね。でも、それならどうして会ってないだなんて……」

先程聞いた様な騒ぎになった後では、さぞかし戻った時に気まずかったのではと、密かに母を気遣っていた聡は思わず本心から安堵したが、と同時に先程の由紀子の話の内容と食い違ふ事に違和感を覚えた。それを受けて由紀子が説明を続ける。

「岡田さんが『清人君は私達で面倒みてたけど、手がかからないとつても良い子だったわよ？ ほら、清人君、お母さんに抱っこして貰いなさい。久しぶりで嬉しいでしょう』って言いながら、私に清人を渡そうとしたの。私も清人を抱き上げようとして手を伸ばしたら……、思い切り指先を噛まれたわ」

「え？」

「まだ乳歯が生え揃っていないのに、前歯だけでね。目を閉じて、渾身の力を込めて歯を食いしばったのよ。凄かったわ。食いちぎられるかと思った」

「かあ、さん？」

そこで小さくクスクスと笑った由紀子を見て、聡は母が精神的にどこかおかしくなったのかと恐る恐る呼び掛けたが、次の瞬間由紀子は真顔に戻って続けた。

「思わず悲鳴を上げてしまったけど、見ていた岡田さんも真っ青になって『清人君、どうしたの！ お母さんでしょう！ 口を開けなさい！』って慌てて片手で清人を抱き抱えながら、もう片方の手で清人の口をこじ開けようとして。だから岡田さんは清人の口元だけ

見てたから、見ていなかったわ」

「何を、見ていなかったの？」

唐突に主語を省いて話した母の顔を見て、聡は何となくそれを確認しない方が良い予感に駆られたが、そのままにしてもおけない為、敢えて続きを促した。

すると由紀子が決定的な一言を放つ。

「清人がゆっくり目を開けたと思ったら、私を睨み殺しそうな視線で見上げてきたの。私があの子にした事を、きつとしっかり理解してたのよ」

「ちよつと待つて母さん！ 兄さんは当時一歳前後だろう？ 理解できないし覚えてるわけないだろう！」

再び腰を浮かし、殆ど悲鳴で訴えた聡を、由紀子は悲しそうに見やった。

「ちゃんと理解してたわよ。母親としての勘ね」

「そんな馬鹿な!？」

「それで《この子は私を憎んでるし絶対許さない》って思ったなら、もう駄目だったの。清人の顔をとても正面から見られなくて、やっと清人が私の指に食いつくのを止めた瞬間に、振り返りもしないで実家に逃げ帰ったわ。そして離婚届にサインしたの。……それで全部お終い」

淡々の述べた由紀子に、聡は呆然となりつつも何とか声を絞り出した。

「だから佐竹さんと会わなかった？」

「ええ。手続き一切は、父が手配した弁護士が全てやってくれたらしいわ」

自分から視線を逸らしながら、どこか他人事のように告げた母親に、聡は激しい怒りと憐れみを覚えたが、何も口にしなかった。

そのまま重苦しい沈黙が少し続いてから、由紀子が再び静かに語

りかける。

「未練がましいって笑われるかと思うけど、その後も定期的に2人の様子を興信所で調べて貰ってたの。ひよっとしたら清人が私を必要としてくれる時がくるんじゃないかって」

「未練がましくなんかないさ。親としては当然の気持ちだと思うけど?」

「でも、あの子は本当に聞き分けが良くて、手のかからない子に育ったみたい。親子2人で支障なく、仲良く暮らしてたわ。きつと清人は自分が父親の手に余る子供だと、私が戻ってくるかもしれないから、それが嫌で物分かりの良い子供を演じてたのよ」

「それは考え過ぎだって! 単に兄さんはそういう性格の子供だったってだけの話だろ?」

「どんどん後ろ向きな考えになっていく母親の話を、何とか打ち消そうと試みた聡だったが、由紀子は泣き笑いに近い表情で告げた。

「清吾さんが香澄さんと再婚してからは流石に調査するのは止めて貰ったんだけど、いつかはちゃんと2人の顔を正面から見、謝ろうと思ってたの。本当にそう思ってたのに私が意気地が無さ過ぎてとうとう間に合わなかったわ。あんなに早く亡くなってしまうなんて、思ってた無かったのよ……。もう、本当にどうしようもない馬鹿なんだから」

自分に対する悪態を吐いた由紀子の姿を、聡はただ黙って見守った。

「清吾さん達が事故死した時死亡記事を新聞で見つけて、どうしても行かないといけなそうって、昭さんに断りを入れて通夜に向こうと思つたら、一緒に行ってくれる事になつて」

「え? 父さんが? 本当に一緒に行つたの?」

意外すぎる話に思わず話の腰を折ってしまった聡だったが、由紀子は気を悪くした風でもなくそのまま続けた。

「ええ。そうしたら通夜の会場になっていた集会所に入ろうとした途端、私の姿を目ざとく見つけた清人に、昭さん共々腕を捕まれて凄いい力で引きずり出されて。その時一瞬だけ、清香さんらしい女の子を見かけたわ」

「……そうだったんだ」

数日前の気になった言葉の意味が分かり、思わず納得した聡に、由紀子はあっさりと言つてのけた。

「その時、人気の無い所まで連れて行かれて、清人に『今更何の用だ？ 自分を追つて来ない様に俺を閉じ込めてトンスラしやがった人間が、今度は邪魔な人間が居なくなつたからと嬉々としてちよっかい出しに来たつてのか？ どこまでも自分本位の女だな！』つて怒鳴られて殴られたの。だからやっぱりこの子は、私のした事を分かつて、今でも恨んでるんだなって」

「ちよつと待つて！ 殴られたつて、一緒に行つた筈の父さんは何してたんだ!？」

聞き咎めて思わず憤慨して詰め寄つた聡に、由紀子は落ち着かせる様に言い聞かせた。

「ちゃんと二発目は止めて、その場を何とか取りなしてくれただから怒らないで？ それで清人の『この人を連れてさつさとお帰り下さい』で話は終わったし。本当に、少しでも力になってあげられたらなんて、自分本位でおこがましい考えだったわ」

そう言つたきり俯いた母親に、聡はどういう言葉をかけたなら良いかが分からず、再度病室内に沈黙が訪れた。

下手をすると永遠にこのままかもしれないと、埒もない事を聡が考えていると、思い切つた様に由紀子が再び話し出す。

「それでね、聡。今日この話をしたのは、あなたにお願いしたい事があつたからなの」

「何？ お願いって」

そこで由紀子は一瞬迷う様な素振りを見せてから、切々と語った。

「もし……、この先清人が本当に困る様な事があつたら、一度だけで良いから無条件であの子の力になつてあげてくれない？ あの子は絶対私には頼らないと思うし、なんとなく私が生きているうちは困つた事態にもならない気がするから」

「母さん……、縁起でも無いんだけど」

「それに、私の存在は認めて貰えなくても構わないけど、あなた達はちゃんと血の繋がつた兄弟だから仲良くして欲しいの。ううん、仲良くはしなくても良いから、せめてお互いに存在だけは認め合つて欲しくて。これは私の我儘でしかないんだけど」

段々呟き声になつていく由紀子の台詞に、聡は力強く請け負つた。

「母さん、分かつたから心配しないで。そんな事態になつたら、どれだけ邪険にされようが必ず兄さんの力になるから。約束する」

「ありがとう、聡」

そこでやつと微笑かに笑つた由紀子の気持ちを経らかでも楽しみにしようとして、聡は些かわざとらしく明るく言つてみた。

「でも、あの人の事だから『お前なんかの手を借りる位なら、舌を噛み切つて死んだ方がマシだ』とか言い放ちそうだな。やつぱり少しは心証を良くしておく必要があるか」

「苦勞かけるわね、聡。清香さんには私と清人の関係は、無理に話さなくて構わないから」

「取り敢えずはね。けどまずは目障りな馬の骨としてだけでも、兄さんに俺の存在を認めさせるから」

「聡……、それは心証を良くするのは、真逆の様な気がするんだけど」

「そうかもしれない」

そんなやり取りをした親子は、ここで2人でクスクスと笑い出し

てしまい、先程までの深刻な空気は夜の闇の中に徐々に消え去っていった。



## 第15話 どうしようもない男達

柏木産業社長である柏木雄一郎は控え目なノックの音に顔を上げ、隣室から現れた無機質な秘書の顔を見やった。

「社長、佐竹様がお見えです」

「通してくれ」

秘書が一礼して引つ込むと雄一郎は仕事を迷わず中断し、ゆっくりと椅子から立ち上がった。そうして机を回り込んで応接セットに近付いて行くと、今度は清人が姿を現す。

「失礼します」

礼儀正しく頭を下げて入室してきた清人は、細いストライプ入りの濃いグレーのスーツを纏い、普段とは違った雰囲気醸し出していた。雄一郎が1人掛けの椅子に収まり、向かい側の長椅子を手振りですすと、清人が大人しくそこに腰を下ろして再度軽く頭を下げる。

「柏木社長、本日は貴重なお時間を割いて頂き、ありがとうございます」

「堅苦しい話は抜きだ。時間を無駄にする気はないからさっさと用件を話したまえ」

雄一郎が如何にも経営者らしい物の言い方をすると、清人は心得た様に持参した鞆から薄い書類の束を取り出し、無言で相手に差し出した。対する雄一郎も無言で受け取り、それに目を走らせて怪訝な顔をする。

「これがどうかしたのか？」

「これを柏木で取って下さい」

「何？」

何か聞き間違ったかと清人の顔に視線を向けた雄一郎だったが、相手がすこぶる真剣なのを認めて一気に顔を強張らせた。

「君は、自分が言った事の意味が分かっているのか？」

「勿論です」

「無関係の一般人が何の気無しに言った言葉ならいざ知らず、君は我が社の外部取締役の名を連ねている人間だ。その責任と義務位、弁えていないのか？」

「それに伴う損失は全て私が補填します。必要なら、以前前払いして頂いた役員報酬も全額返却した上で取締役も辞任します」

「少しも揺らぐ事なく言い切った清人と睨み合ってから、雄一郎は匙を投げた様にテーブル上に書類を投げ捨てソファの背もたれに背中を預けた。

「小笠原、か。君の事だ。おそらくこの他にも手を打っているな？」

「ご明察です」

にこりともせず冷徹に言い切った清人に対し、雄一郎は再び身を乗り出しながら探る様な視線を向ける。

「なあ、清人君。どうして今頃になってそこまで目の敵にするんだね。今までは存在自体を抹消してきただろう？」

そこで清人は僅かに怪訝な表情を見せた。

「浩一から聞いていませんか？」

「何をだね？」

当惑した雄一郎から僅かに視線を逸らしつつ、清人は独り言の様に呟いた。

「最近……、無視できない程の馬鹿が居まして。目障りなんです」

「ふむ……」

雄一郎が顎を掴み、興味深そうに清人を眺めた所で、再びドアがノックされた。

「社長、柏木真澄課長がお見えになりました」

「通してくれ」

「社長!？」

今度はその顔にはつきりと驚愕の色を浮かべた清人に、雄一郎は満足そうな笑みを向ける。

「私は時間は有効に使う主義だ。君が私に会いに来るのは厄介な頼み事、かつ仕事関係でしか有り得ない。呼ぶ手間を省いただけだ」

清人が思わず絶句している間に、ノックの音と涼やかな女性の声が室内に響いた。

「社長、失礼します」

「ああ、柏木課長、そこに座ってくれ」

勤務中は役職での立場を貫いている父娘は型通りの挨拶を交わし、示された長椅子に既に清人が座っているのを見た真澄が片眉を僅かに上げたが、無言のままその隣に座った。

「それでご用件は？」

「君にこの仕事を取って貰いたい。万事上手くやってくれ」

雄一郎がテーブルの上を滑らせてきた書類を真澄が受け止め、軽く持ち上げて中身を確認し始める。しかしすぐに顔を上げ、先程の雄一郎と同様の反応を示した。

「社長？ この仕事は既に小笠原で取り組んでいる事例の様ですが？」

「だから君に“盗ってくれ”と言った」

「……………」

微妙なニュアンスの違いを込め、雄一郎が意地悪く笑いつつ再度説明すると、言わんとする事を察した真澄が横で無言を貫いている清人に一瞬険しい視線を向けた。次いで雄一郎に向き直り、些かきつい口調で指摘する。

「社長。お言葉ですが、そんな事を強行した場合、下手をしたら同業者からの失笑を買うばかりか他社からの信頼も失いかねません。有形無形の損害も」

「だから“上手くやってくれ”と言った。金銭的な損失については柏木家で埋める」

「社長！」

流石に声を荒げた真澄に、雄一郎が冷たく言い捨てた。

「真澄。お前が承服できないなら、浩一にやらせるまでだ。こんな公私混同な事を他の社員に命じる訳にはいかんのだな」

それを聞いた真澄は齒軋りせんばかりの表情で父親と清人を交互に見た後、その書類を手に勢い良く立ち上がった。

「これは浩一向きではありません。分かりました、早速取り掛かります。年内中には目処をつけますので」

そう言つて挨拶も無しにドアに向かつて歩き出した真澄に、雄一郎はからかう様な声をかけた。

「ほう？ もう2ヶ月切つているが？ 何もそこまで急がなくても良いと思うのが。どうかな？ 佐竹君」

「いえ、俺は……」

いきなり話を振ってきた雄一郎に清人が口ごもると、真澄がドアを開けながら腹立たしげに告げる。

「こんな馬鹿馬鹿しい仕事、さつさとけりをつけて本来の業務に集中したいからです！ 時間外勤務手当は割増で頂きますので。それでは失礼します！」

バタンと乱暴に閉められたドアを見やって、雄一郎は苦笑いしながら肩を竦めた。

「ははは、これは完璧に怒らせたな」

「……それではお仕事の邪魔をしては申し訳ありませんので、私も失礼させて頂きます」

些か気まずい思いをしながら清人も腰を上げると、雄一郎が上機嫌に声をかけてきた。

「なあ、清人君。昔の罪滅ぼしになるならこれ位の頼まれ事は容易

い事だが、変なプライドとこだわりは早く捨てた方が君の為だぞ？」

「……ご忠告、感謝します」

「それから、今からでも我が社に入る事は」

「お邪魔しました」

まるで聞く耳を持たず、清人はその場をあっさりとは辞去した。

「やれやれ……、相変わらず頑固だな。そんな所も結構気に入っているんだが……」

そんな清人を見送った雄一郎は、ただ苦笑を深めるのみだった。

そんな不穏な動きが柏木産業内であったものの、表面的には何も変わらない日常が過ぎ、清香の大学の学際期間に突入した。

予定を摺り合わせ、2日目の午後に清香と待ち合わせた聡は、指定された中央棟一階の売店の前に着いて時間を確認する。

「充分余裕を持って来れたな」

腕時計を見ながら満足そうに呟き、聡は門を入れてからここに来るまでに貰ったパンフレットに目を走らせた。

勿論ここは聡の出身大学とは異なるが、やはりキャンパス内にはどことなく共通する空気があり、最近思い出しもしなかった今よりのびのびと過ごしていた学生時代の懐かしい記憶を呼び起こされる。(結構強引に来てしまったけど、良かったな)とか(今度母校にも顔を出してみようか)などと考えているうちに、パタパタと走り寄ってくる気配を察した。

「聡さん！ お待たせしました！」

「いや、そんなに待って無いから。大丈夫だよ？」

聡が清香に笑顔を向けてからチラリと腕時計を見ると、気がつかないうちに待ち合わせ時間を何分か過ぎていた。

「ごめんなさい、こんなゴチャゴチャした所で待ち合わせなんて。しかも遅れてしまって」

「構わないよ。友達と展示を回ったり、館内案内の係もやって忙しかったんだろ？ 俺の事はともかく、ちゃんとお昼は食べられた？」

「はい、隙を見て」

清香の慌てぶりを見て思わず心配になって尋ねたが、清香が笑って答えた為、聡も安堵した。

「それなら良かった。清香さんはちょっと痩せてる感じだから、もう少し太っても良いと思うよ？」

「う……、お兄ちゃんと同じ事を。お子様体型って事ですか？」

「そうは言っていないよ」

途端に拗ねた様に尋ねてくる清香に笑いを誘われつつ、聡は彼女を宥めた。そして話題を逸らそうと目の前でパンフレットを広げる。

「さっき貰ったのを見てただけど、結構色々な展示や発表があるんだね」

「聡さん、例のサークルの展示の他に、どこか見たい所はありますか？ 一緒に回りますよ？」

「そうだな……、それじゃあ、こことここらへん、とか……」

2人でパンフレットを覗き込んで相談していると、いきなり清香の背後から誰かが腕を回して抱き付いてきた。

「さーやくかちゃん！」

「きゃああっ！」

「おい！ 何だお前はっ！」

「ここら、乱暴は止めようか」

驚いた清香は悲鳴を上げ、聡が慌ててその男を清香から引き剥がす。しかし相手はのんびりと言い返し、その声を聞いた清香は振り向いて戸惑いの声を上げた。

「れ、玲二さん？」

「今日は、清香ちゃん。びっくりした？」

「びつくりしましたよ、もう!」

悪びれなく言つてのける玲二に、聡が胡散臭そうな視線を投げる。  
「清香さんの知り合い?」

それを受けて、清香は聡に向き直った。

「ええ。紹介しますね、柏木玲二さんです。真澄さんと浩一さんを  
試写会の時に紹介しましたが、あの二人の弟さんで、私の」

「専属美容師だよ。君がやたら気に入ってるらしいこの髪は、俺の  
作品」

「え?」

清香の台詞を途中でもぎ取り、玲二は清香の肩を抱き寄せつつ、  
もう片方の手を清香のポニーテールに伸ばし、それを手で梳きなが  
ら意味ありげに小さく笑った。それを見た聡が僅かに顔を引き攣ら  
せる。

「清香ちゃんから聞いてる。角谷聡君、だよ。宜しく。しっかし  
本当は野郎にベタベタ触らせる為に、清香ちゃんに秘伝のヘアケア  
法を伝授したんじゃないのにな。清香ちゃん、お兄さんは本当に悲  
しいよ」

「もう、玲二さんったら、こんな所で泣き真似なんか止して下さい

「よ」

「……………」

わざとらしく清香に抱き付き泣き真似をする玲二に、笑いながら  
それを諷める清香。そのやり取りを無表情で眺める聡。そしてその  
聡の顔をチラリと見た玲二は、さらりと言つてのけた。

「本当に泣きたい気分なんだよ? こっちの優男なんかほつといて、  
今日は俺に付き合ってくれない?」

「なっ!?!」

ここで聡が声を荒げかけたが、流石に清香が窘めた。

「玲二さん悪ふざけは止して。でないと怒るわよ?」

「はは、分かった。清香ちゃんに本気で嫌われたくないから、今日はこころ辺にしておくよ。それじゃあ聡君、またね?」

「……はあ」

一方的にまくし立てた玲二が機嫌良く立ち去って行くのを見送ってから、聡は困惑した顔を清香に向けた。

「彼は一体、何をしに来たのか分かる?」

「……さあ、ナンパでしょうか?」

キョトンと首を傾げた清香に、聡が更に尋ねる。

「清香さんを?」

「いえ、他の女の人を、ですけど?」

「……取り敢えず移動しようか」

「そうですね」

(何か、噛み合っていない気がする……)

密かにそんな事を思ったものの、聡は口に出さずに清香と連れ立ってその場を後にした。

それから清香と聡は研究棟に移動し、そこで研究されている新素材のポリマーや合金の展示、実験等を興味深げに眺めていた。

「はあ……、門外漢ですけど、やっぱり画期的な素材の開発過程を見ると、そこに至るまでが凄いのが分かります」

「うん、もう執念だね。やっぱり日本は技術立国なんだから、こういう最先端の技術をどんどん官民協力して開発活用していかないと」

「やあ、清香ちゃん。こんにちは」

「え? 友之さん、どうしてここに?」

突然背中から肩を叩かれた清香は話を止めて振り向き、聡もそれに倣った。すると聡に向かって一瞬薄笑いを浮かべた30前後の男が、清香に対して一転爽やかな笑顔を向ける。



「どうしてって…、酷いな。学部は違うけど、俺がこの工学部卒だっけ忘れた？」

「あ、そうでした！ すみません先輩」

「許せないな。どう落とし前つけて貰おうか」

「お手柔らかにお願いします」

くすくすと仲良さ気に笑っている2人に、聡の今胸中がざわついたが、それを知ってか知らずか友之が清香を促した。

「清香ちゃん。見かけない男を連れてるね。紹介してくれないの？」

「あ、ごめんなさい。聡さん、こちらは松原工業にお勤めの松原友之さんです。玲二さん達と同じく昔からの知り合いなんです。友之さん、こちらは小笠原物産にお勤めの、角谷聡さんです」

「やあ、初めまして、角谷さん」

「こちらこそ」

（松原……って言う事は、この人も柏木さんや倉田さんと同じく、彼女の隠れ従兄弟の1人……。どう考えても、ちょっかいを出しに来たと思えない）

笑顔で挨拶を交わしながら様子を窺う聡の前で、友之がにこやかに話し出した。

「そう言えば清香ちゃん。あの後大丈夫だった？」

「お兄ちゃんには盛大に雷を落とされました」

「いや、本当に悪かった。清人さんがザルだから、清香ちゃんも少しはいける口なのかと」

「お兄ちゃんレベルで判断しないで……」

がつくりと頂垂れた清香を見て、友之が苦笑いしつつ額に落ちていた前髪をかき上げる。そこで会話の中身に不穏な物を感じた聡は、思わず問いかけた。

「清香さん。松原さんと最近お酒でも飲んだの？」

「はい。プールバーに連れて行って貰った時、ビリヤードを教える貰う合間に少し。でも友之さんったら結構強いカクテルを勧めるんだもの。こっちは初心者だから勧められるまま飲んだのに！」

些か恨みがましい目で見上げてくる清香に、友之は苦笑を深める。「本当にごめん。あれ位で立てなくなる位酔っぱらうなんて、とても想像できなくて。ちゃんとお姫様抱っこして送り届けたから勘弁して欲しいな。今度改めてお詫びするし」

「それで余計にお兄ちゃんが酷かったんですよ。『酔っぱらって帰って来るのはともかく、抱かれて帰って来るとは何事だ！』って。

……次の日たつぷり一時間、床の上に正座させられてお説教されました」

「実は……、泥酔した状態で帰したら清人さんに説教されるのが目に見えてたから、近くにホテルでも取って清香ちゃんの酔いが醒めるまで朝まででも面倒みようかなと一瞬思っただけけど」

「そんな事したら友之さん、お兄ちゃんに殺されますよ？」

「ああ、そう思って踏みとどまった。俺はまだまだこの世に未練があるからね」

そう言つて2人で「あははは」と能天気になつて笑っているのを見て、聡は激しく脱力した。

（清香さん、男と2人で飲みに行つて、それは危機感無さ過ぎだろう！ それにこの男、本当は兄さんの事が無ければ、彼女をどうにかしてたんじゃない……）

1人密かに怒りを覚えていた聡を満足そうに見やつた友彦は、ここで清香に断りを入れた。

「じゃあ俺はここで。恩師の所に顔を出すついでに声をかけたんでね」

「はい、じゃあまた誘つて下さいね？」

「勿論だよ。角谷さんも失礼します」

「はい」

そうして表面的には友好的な笑みを振りまきつつ、友之はその場を立ち去って行った。

「……清香さん。お酒を飲む時は、相手を選んだ方が良いね」

「まだお兄ちゃんと友之さんとしか、飲んだ事ありませんし、大丈夫ですよ？」

（だから！ それが問題だから！）

その聡の心中の叫びは、声にされる事は無かったのだった。

「あ、清香ちゃん偶然だね。そっちの彼もどうも。角谷さん、だったよね？」

2人で移動中、唐突に通路の向こう側から現れた正彦を見かけた清香は笑顔を向け、聡は顔を引き攣らせながらも挨拶を返した。

「今日は、正彦さん」

「またお会いしましたね」

（また出たか……）

そのまま世間話に突入するのか、はたまた自分への嫌がらせトクが始まるのかと心の中で身がまえた聡だったが予想外の声が耳に飛び込んで来た。

「正彦、知り合いなの？」

そこで大柄な正彦の後ろに隠れる様にして歩いていた小柄な女性が、彼の背後からひょっこりと顔を出し、今までその存在に気がつかなかった2人は僅かに驚いた。そんな2人を指差しながら、正彦が事も無げに語って見せる。

「うん、ああ、知り合いの子とその彼氏だよ」

「あああのっ！ 正彦さん？ そういふ言い方は語弊があつて！」

慌てまくる清香には構わず、正彦は大人と子供程の体格差がある女性を促してあっさり2人に背を向けた。

「それじゃあ清香ちゃん、俺達デートの最中だからまたね」

「え？」

思わず呆然とその背中を見送りながら、小さく呟く清香と聡。

「えっと……、デートって、この前会った女性とは別人……」

「あれから三週間経って無いんだけど……」

そこで思わず2人は、何とも言い難い顔を見合わせた。

「見なかった事にしようか？」

「そうですね」

(本当に、何しに来たんだあの人は?)

しみじみとそんな事を考え、精神的疲労が徐々に蓄積して行く聡だった。

それから写真同好会の作品展示会場に足を向けた2人は、飾られているパネルの一つ一つを眺めながら、思うまま感想を述べ合っていた。そして半分ほどを見終わった所で、清香が聡の顔を見ながら、しみじみと述べる。

「でも意外ですね。聡さんがカメラに興味を持ってるなんて」

「そう？ 俺ってどんなイメージなの？」

「なんとなくアウトドア系な感じが。勿論山男系とは違いますけど」

真顔で答える清香に、聡は思わず噴き出しかけた。

「写真撮影も屋外と言えば屋外だよ？」

「それもそうですね。でもそうすると私の知り合いに、聡さんと気が合いそうな人が1人」

「あれ、清香ちゃんじゃない？」

何かを言いかけた清香の声を遮って、また背後から男の声がかけられた。聡と共に振り返った清香がそこに佇んでいる人物を見て、目を輝かせる。

「あ、明良さん！ 噂をすれば影だわ。聡さん、こちらは倉田明良

さん。フリーのカメラマンなの。明良さん、こちらは角谷聡さんです」

「ああ、兄さんから聞いてるよ。宜しく」

如才なく右手を差し出してきた健康的に日焼けした男に、聡も内心はどうあれ手を差し出して挨拶を返す。

「初めまして、角谷です。倉田さん……、と言う事は正彦さんの」

「弟だね。清香ちゃん、例の奴、良い感じに仕上がったよ？」

「え？ 本当ですか？」

途端に何かの話に食い付いた清香に、聡は（何事？）と怪訝な表情を浮かべた。

「うん、俺としても自信作。急遽今度の個展に出す事にしたから」

「えええっ！？ 良いんですか？ あれで」

「勿論。それで本人の許可を取ろうと思っててね。ここで会えて良かったな。どう？」

「はい、構いませんよ？ でも周りの作品の質も、一緒に下げないか心配ですけど」

「自信持つて。大丈夫だつて」

すっかり2人の世界に入っているのを聡は無言で見やっってから、控え目に清香に声をかけてみた。

「あの、清香さん、倉田さんの作品のモデルになったとか？」

「はい、実は」

「あ、悪いけどそれは俺と清香ちゃんの秘密つて事に。だつて公にする前段階だしね」

清香が何かを言いかけたのを遮り、明良がわざとらしく声を潜める。それに清香が真顔で頷き、聡に笑って手を振った。

「あ、えつと……、そうですね。聡さん、大したことじゃありませんから、気にしないで下さいね？」

「そうそう、俺達2人だけの話だから」

そうして五分程顔を突き合わせてボソボソ話し込んでいた2人を見て、聡の不機嫌度は更に増していくのだった。

それから明良と別れた2人は、本来の目的であった場所に辿りついた。

「聡さん、こちらの教室がサークルの発表の場所です」

「あら、清香ちゃんじゃない、久しぶり！」

その教室に入ろうとした瞬間、入口付近でいきなり声をかけられた2人は面食らった。しかしすぐに相手を認めた清香が、笑顔でその女性と手を取り合う。

「奈津美さん！ どうしたんですか？ こんな所で」

「うふふ、子供が産まれたらそうそう気軽に歩けないもの。最近休みの日は、専ら修さんとデートなの」

そこで教室の中から二十代後半の、髪を短く切り揃えた男が現れ、人の良さそうな笑顔を見せた。

「今日は清香ちゃん。俺達どちらも大学には行ってないから、前々からどんな感じなのか興味があったんだよ。ここからなら家から地下鉄一本で来れるしね」

それを聞いて清香は納得して頷き、続いて聡を紹介した。

「そうだったんですか。聡さん、こちらは倉田修さんと奈津美さん。夫婦で小料理屋を経営してるの」

「初めまして。角谷聡です」

すると奈津美の目がキラキラと輝いた。

「あら、あなたが正彦さん達が噂してた、“あの”聡さんね？ 思ったより格好良くて目の保養だわ」

「は、はは……、一体どんな噂をされていたんでしょうか？」

思わず顔を引き攣らせた聡だが、それを無視した夫婦の会話が始まった。

「おいおい、亭主の前で言う台詞か？」

「あら修さんは勿論別格よ。比較にならないわ」

「まあそれはそうだろうな」

（何だ？ 今回はひたすら惚気られるだけか？）

そんな事を考えてうんざりしかけたところで、奈津美が清香の手を引いて中へと促す。

「清香ちゃん、この前はお手伝いに来てくれてありがとう。助かったわ」

「大したことありませんよ。それより悪阻はもう大丈夫ですか？」

「もう五ヶ月だし平気平気」

「まだお腹は目立ってませんね」

「そりゃあね。でも以前よりウエスト回りは大きい物を着てるのよ」「そうですか？ 全然分からないな」

女2人で和気あいあいと話し始めた為、半ば放置された聡は苦笑いしつつ室内へと入ったが、ここで修が並んで歩きながら気安げに声をかけてきた。

「流石に、女同士の会話に割り込もうとは思わないだろう」

「ええ、想定外でしたね。彼女が隠し玉でしたか？」

それほど気を悪くしたりもせず聡は笑顔で応じたが、ここで修は真顔でボソツと呟いた。

「……真打ちは最後に登場と、相場が決まってるが」

「何か言いましたか？」

「いや、何でも無い。気にしないでくれ」

「はあ」

「まあ色々大変だろうが頑張れ。不憫過ぎるから心の中では応援してやる」

「……それはどうも」

何故か不自然に視線を逸らした修を、聡は憮然とした顔で見やっただ。ここで室内の奥の方から聞き覚えのある声が響いてくる。

「あら角谷さん、いらっしやい」

その声の方に向き直った聡は、瞬時に愛想笑いを顔に貼り付けた。「やあ、緒方さん。どうも。ここは君が所属してるサークルなんだよね」

(兄さんと繋がってるのがはつきりしてる以上、油断は出来ないな) そんな聡の心境とは裏腹に、朋美はニコニコと笑いかけた。

「はい、清香に色々協力して貰って助かりました。……聡さんとのデートの時間を割かせちゃってごめんね？清香」

「なっ、ちよつと朋美！いきなり変な事言わないで！」

「どこが変な事なのよ。……ところで聡さんは、清香がチャリティオークションに出品した物を知ってます？」

「そう言えば……清香さんからは頼まれて何かを作って出したとしたか……。何を出したの？」

「いえ、あの……、たいした物じゃ……」

途端に口ごもって視線を彷徨させた清香を、聡は不思議そうに眺めた。その聡に朋美が真剣な顔で訴える。

「清香は箱に詰めたプリザーブドフラワーのアレンジを作ってくれたんです。ケースのまま飾ってもとっても素敵なんですよ？」

「へえ、どんな物？」

「午前中はここに飾っておいたんですが、あと20分位でオークションが始めるので会場にもう運び込んで。でも写真を撮ってあるので見て下さい」

「朋美、良いってば！」

「何言ってるのよ」

何やら女2人で揉めながら朋美が携帯を操作し、データフォルダ内の画像を表示させて聡に見せた。聡がそれを覗き込むと、長方形の枠の中に右下から左上に向かって流水の様に配置された青系の花



の両側に、それぞれ違った系統のグラデーションになっている花々が、バランス良く配置されている物を認めて表情を和らげる。

「素敵なインテリアだね、清香さん」

「でしょう！？ それなのにこの子だったら恥ずかしがって、『最低落札価格は1000円から良いから』なんて言い出して」

「どうして？ もっと高く値が付くと思うよ？」

本気で驚いた聡が尋ねると、清香はボソボソと弁解した。

「だって……、朋美が『お祭り騒ぎがしたいだけだから、手作りでもご愛敬よ』って言うから安心して出したのに、他の品物がどこでもすぐ売れる様な、ゴージャスなものばかりで……」

「確かに金が有り余ってる所からは良い物も出てたけど、手作りの物もあつたでしょ？ それにあれ、どうみても力作じゃない。材料費だつてかかつてると思うし。その点では正直清香に悪かつたつて思つてる位なのに」

「それに……、ああいうのって好みがあるでしょう？ 気に入らなければ見向きもされないし、売れ残つたら恥ずかしいもの」

「そんな事は無いつたら！」

「そうだよ、清香さん。自信持つて良いよ？ 少なくとも俺は気に入つたし。母の退院祝いにしても良いかと」

「じゃあ角谷さん、清香の作った物を会場で競り落として頂けませんか？」

「「え？」」

唐突に言われた内容に清香と聡が揃つて戸惑いの声を上げたが、朋美は当然の如く話を続けた。

「それなら一石二鳥じゃありません？ 清香は売れ残らなくて安心するし、角谷さんはお母さんの退院祝いを首尾良く手に入れられますし。どうです？」

そう言つて意見を求めて来た朋美に、聡は笑顔になつて応じる。

「そうだね、そうしようか」

「あのっ、でも、聡さん!？」

慌てて何か言いかけた清香を、聡は笑って制した。

「別に支障は無いだろう? ちょうど良い物が見つかって嬉しいよ」

「そ、そうですか? ありがとうございます」

「どういたしまして」

そんなやり取りをしてから聡は一通り朋美から活動内容の説明をして貰い、それからオークション会場になっている講堂へ清香と倉田夫妻と共に向かって行った。

一方でそれを見送った朋美は、携帯を取り出してどこかへと電話をかけ始める。そして大して待たされず応答があった。

『緒方さん、首尾は?』

「上々です。上手く誘導して、焚きつけておきましたよ?」

『御苦労様。あいつに清香の前で、赤っ恥かかせてやる』

そこで携帯越しに薄笑いの声が伝わり、朋美は僅かに眉を顰めた。

「……本っ当に容赦無いですね」

『清香にちよっかい出す男限定だ。バイト料は後で支払う』

「楽しみにしてまゝす。それじゃあ」

最後は猫撫で声で告げて携帯を閉じた朋美は、バッグにそれをしまつていそいそとその場を後にした。

「さて、私も見に行かなくちゃ!」

その頃、講堂に入った清香達は、空いている席を探して周囲を見回していた。しかし前方で1人の人物が立ち上がって清香に手招きして来た為、それを認めた清香は満面の笑みでそこに走り寄り、修と奈津美は聡の顔を窺いつつ苦笑いし、聡は心中で深い溜息を吐いた。

（そうだよな。最大の敵はラスボスだって、相場が決まってる……）

そんな聡の視線の先には彼が初めて直に顔を合わせる、自分の妹である清香を愛して止まない清人が立っていた。

## 第16話 もつどうにも止まらない

正面のステージに向かって続く真ん中の通路を、笑顔の清人に向かって清香は足早に進み、聡はその後をゆつくりと歩きながら相手の様子を注意深く窺った。そして清人が立っている所まで来た清香は、兄を見ながら不思議そうに尋ねる。

「お兄ちゃん、どうしたの？ 今日ここに来るなんて言っただけじゃなかったじゃない？」

「ちよつと次回作の構想を練ってたから、急に大学構内の資料が欲しくなってるね。学生時代を思い返しながら書いてみるも良かったんだが、ここの学祭期間中だったし、気分転換がてら川島さんと来てみる事にしたんだよ」

つい、と視線を流した先に、ショートカットの女性が座っているのを認めた清香は、驚いて目を見張った。

「あ、本当だ。恭子さんまで」

「ふふ……、流石に驚いたみたいね、清香ちゃん」

「もう！ 言ってくれば色々案内したのに」

半ば呆れ半ば拗ねた口調で話しかける清香に追い付いた聡は、清香の見ている方を眺めて内心で首を捻った。

（誰だ？ この女性。特に興信所の報告書には載っていないが、兄さんの恋人か？）

そんな事を考えてから、その女性の座っている向こうの席に浩一が、更に前後の列に先程まで入れ替わり立ち替わりちよつかいを出してきた面々が、いつの間にかちゃっかりと腰を下ろしているのを認め、聡は確信した。

（今日、どうしてこの人達と遭遇してたのか、漸く分かった。俺達にちよつかいを出す為に現れたのかと思いきや、それは単なるついでで、実際は俺と兄さんが顔を合わせる所を見物に来たんだな！？）

( )( )( ) (こんな面白そうな物、見逃してたまるかよ！)( )( )( )  
聡の視線を受けて一同がにやにやと笑う中、清香は笑顔で聡の方に僅かに体を向けた。

「お兄ちゃん、紹介するわね？　こちらが以前から話していた角谷聡さんで」

「あれ？　実はそれは仕事上の通称で、本名は小笠原って言ってなかったかな？」

聡を紹介しかけた清香だったが、笑顔の清人から突っ込まれ、思わず口ごもった。

「あ、え、えつと……」

(そう言えばお兄ちゃんには謝罪の電話があつたことを伝えた時に、本名が小笠原さんだつて教えてたっけ！　でもそれをすっかり忘れて皆には角谷さんつて紹介しちゃったし、この場をどうすれば……)

(白々しい……。これは絶対、俺が本名を隠して清香さんに近付いた事に対する嫌がらせな……)

狼狽する清香と苛立たしさを押し隠す聡に対し、ここで能天気な声がかけられた。

「あれ？　小笠原つて名前なの？　まあ俺はどっちでも良いけど」

「確か職場が小笠原物産だったか。偶然だね」

「へえ、ラッキーじゃん。小笠原物産の小笠原つて名乗れば、一発で名前を覚えて貰えるよな」

「それなのにわざわざ角谷つて名乗ってるのか？　勿体ないな」

「それは別に本人の自由だろ？　部外者があれこれ言うなよ」

「まあ、とにかく、今はプライベートなんだし、小笠原で統一しても問題ないよね。どう？　聡君」

「……はい、俺は構いませんので」

口々にサラッと何でも無い事のように語り合う面々に、清香は肩すかしをくらった思いだった。

（あ、あれ？ 何か皆、軽くスルーしちゃってるんだけど。やつぱり皆大人だなあ……、些細な事に拘らないで物事を捉えられるんだ。変に気にした私が馬鹿みたい）

（揃いも揃ってこの連中……。絶対わざと嫌味言ってるだろ！……清香さんはそうは思っていないみたいだが）

そんな諸々の思いを綺麗に封じ込め、聡は笑顔で清人に向かって右手を差し出した。

「改めて名乗らせて頂きます。小笠原聡です、初めまして。先日は母の本にサインをして頂き、ありがとうございました。母も大変喜んでおりました、先生には改めてお礼申し上げます」

「佐竹清人です。あんな物で喜んで頂けたかどうかは分かりませんが、お気に召して頂けたら何よりです。それに加え、最近妹が色々お世話になってるようですね。こちらこそ宜しく。それに先生などと呼ばれると仰々しいので、本名の佐竹で構いませんよ？」

差し出された手を清人が握って、ギリギリと力任せに締め上げた。対する聡も負けじと握り返したが、双方顔は爽やかな紳士的笑顔のままである。終いには両者の手首の辺りが微かに震え、こめかみに青筋が浮かび上がっているのが見て取れたが、清香はにこにここと両者の顔の方だけを眺めていた為、そんな不穏な状況を察知できなかった。

聡にとっては不幸な事に、2人の身長差がこの状況に更に影を落とした。

聡が180cm、清人が175cmである関係ではさほど違わないにしろ、どうしても聡の方が若干視線を見下ろす体勢になるため、必然的に清人の不興を買ってしまう結果となったのだ。

（初対面なのにぶてぶてしい面しやがって！ しかも何だ、弟の分

際で兄を見下ろしやがるとは生意気な！！)

(何を考えているか何となく分かりますが……、好きでこの身長になったわけじゃありませんよ！ 不可抗力です！！)

( )( )(普段は滅多に読ませないけど、理性吹っ飛ばしてると考えてる事が丸分かりで、面白いな)、この二人 )( )( )

手を放しても笑顔を保ちつつ視線だけは険しい物を向けてくる清人から、聡はさり気なく視線を外しつつ控え目に清香に尋ねた。

「それで清香さん、そちらの方は……」

清人の向こう側に居る、小さな泣きぼくろが印象的な女性の素性を尋ねると、清香は笑顔のまま紹介してくる。

「川島恭子さんです。お兄ちゃんのアシスタントをしてくれています」  
「川島です。初めまして」

「……いえ、こちらこそ。小笠原です宜しく」

座ったまま軽く会釈して来た相手に、聡が何となく微妙な顔で挨拶を返すと、一見二十代後半に見える恭子は、何を思ったか悪戯っぽく問い返した。

「何だか小笠原さんは、今の説明に納得がいかない様な顔付きをされてますね。私の事、何だと思いいになりましたの？」

「あ、いえ……、一瞬、佐竹さんの恋人なのかと思ひまして」

「……」

聡が思った事を正直に述べると、何故か清人と彼女の向こう側に座っている浩一は無言で眉を寄せ、恭子と清香は互いの顔を見合せてクスクスと笑い始めた。

「恭子さんは違いますよ。私達と一時期、一緒に暮らしてた事もありませんけど」

「良く誤解されるんです。先生にはご迷惑をおかけしてるんですよ」

「そんな事無いわ恭子さん。恭子さん位の美女と噂が立つなら、お

兄ちゃんだつて本望だし」

「あら、ありがとう、清香ちゃん」

それを聞いた聡は、益々混乱した。

（一緒に暮らしてたつて……、それなら尚更恋人の様な気がするんだが。あの派手な真澄さんとは真逆の、お似合いの和風美女だし……）

そんな事を考えながら1人で悶々としていると、清人が声をかけてきた。

「二人とも、ここが空いてるが座らないのか？ そろそろ次のイベントが始まる筈なんだが」

確かに通路側から三つ席が空いており、どうやら浩一と恭子に続く席に清人が座っていたらしいと見当を付けた清香は、素直に頷いた。

「じゃあ座らせて貰うわ。聡さんもここで良いですか？」

「……ああ、勿論構わないよ」

僅かに引き攣った笑顔を見せながら聡は了承し、奥から清人、清香、聡の順に席に着いた。気がつくと一緒について来た修と奈津美は、自分たちの後ろの席にちゃっかりと座っている。

（何かもう……、狼の巣穴に飛び込んだ気分だな）

半ば自棄になりながら聡がステージの方に視線を向けると、司会者らしい学生が出て来て、マイク片手に陽気に宣言した。

「皆様、お待たせしました。それでは当サークル主催、チャリティオークションを開催致します！」

会場から結構な数と音量の拍手が起こる中、周囲でステージ上に運び込まれた品々を見ながら、囁き声での会話が交わされる。

「ふふ、ちよつとドキドキするわね。ねえ修さん、午前中見たあのクリスタルガラスの一輪挿し、落としてみても良い？」

「財務大臣のお前が良いと判断する範囲でな」



「ようし、頑張るわよ！」

やる気満々の奈津美の声に、思わず苦笑しながら背後を振り返る清香。

「奈津美さん、妊婦なんだから、あまり興奮しないでね？」

「ん〜、俺はあのペアウオッチにしようかな？」

独り言のように言った正彦に、キョロキョロと周囲を見渡し不審に思った清香は、前の座席に身を乗り出して正彦に尋ねた。

「正彦さん、彼女さんにあげるんですか？　そう言えばさっきお会いした彼女はどこですか？」

「うん？　取り敢えず別れた。あげるのは次の彼女」

「……いつか女性に刺されますよ？」

清香だけでなく、他の人間からの突き刺さる様な冷たい視線もものともせず、正彦は苦笑いしたのみでステージの方に向き直った。

そんな観客席の細々した事には構わず、ステージ上では滞りなくオークションが進行して行った。

「……それではこちらのティーセットですが、最低落札価格千円から始めたいと思います。ご希望の方は拳手の上金額をどうぞ！」

司会者がそう促した途端、会場のあちこちから楽しげな声が入る。

「千五百」

「千八百」

「二千」

「二千五百」

購入希望者の声を聞き洩らさない様にマイクを持ったスタッフが何人か会場を駆け回り、物によっては結構白熱した競り合いになったりして、出品物が何品か競り落とさせた後には会場に心地よい熱気が溢れて来た。

「けっこう盛り上がってるね」

聡が隣の清香に囁くと、清香も楽しそうに言葉を返す。

「こういうのって、日常生活の中ではありませんからね。皆お祭り騒ぎをしたいんですよ」

「確かに。何だか楽しくなってきたな。次だよな？ 例の花は」

「うう……、こっちは何だか緊張してきました」

「大丈夫だよ、落ち着いて」

徐々に強張った顔になってきた清香を見て、聡は苦笑しつつ宥めてからステージに向き直った。

「さて、それでは次に移ります。こちらのプリザーブドフラワーのアレンジメントです。最低落札価格千円から始めたいと思います。

ご希望の方、拳手をお願いします！」

明るく声を張り上げた司会者の台詞を聞いて、清香が反射的に俯く。

「……やっぱり、百円からにすれば良かった」

「まだ言ってる」

「だって……」

まだグズグズ言っている清香をよそに、会場のおちこちから声が上がった。

「千五百」

「二千」

「二千三百」

「ほら、他にも買ったがつてる人は居るだろう？ 今、俺が競り落としてあげるからね。清香さん、ちょっと待ってて」

そう言っって宥めた聡は、清香の作品を競り落とすべく、正面を向いて片手を上げながら声を発した。

「五千」

「一万！」

「お兄ちゃん!？」

しかしその時、鋭く馳せられた誰かの声で聡の声が遮られた。手

を上げかけた体勢で反射的に声の聞こえた方に顔を向けると、涼しい顔で片手を上げている清人と目が合う。その全く笑っていない目が一瞬緩み、フツとせせら笑われた気配を感じ取った瞬間、聡の闘争心に火が点いた。

清人と同様に視線を険しくした聡が、真つ向から相手を睨みつける。それを見た清香以外の周囲の者達は、試合開始のゴングが鳴り響く幻聴を確かに聞いた。

「おおつと！　ここで一万の声が上がりました。他にご希望の方はございませんか？」

狼狽した清香の声に、嬉しそうな司会者の声が重なり、更にやる気十分の声が会場内に響いた。

「三万！」

「さ、聡さんつ！　ちよつと待つて下さい！」

「五万！」

「お兄ちゃん！　恥ずかしいから止めて！　家族が競り落とすなんておかしいわよ！　サクラみたいじゃない！」

「家族が競り落としては駄目だと言う規則は無いから、別に構わないだろう？」

何とか説得しようとした清香だったが、清人は平然と自分の正当性を主張した。そこに火に油を注ぐ様な発言が重なる。

「八万！」

「聡さん！　あれは材料費を入れてもそんなにしませんから！」

「でもそれだけ払っても良い気がするから。何か無性に気に入ったものでね。あれだったら母も絶対気に入ると思うし」

清香の懇願をあっさり聞き流し、聡ももつともらしい理屈を述べる。

「十二万！……奇遇だね小笠原君。実は俺もあれが結構気に入ってしまつてね」

(このクソガキが！俺に盾突こうなんて百年早いぞ！)

「十七万！……意外ですね佐竹さん。でも俺と好みが一緒だなんて嬉しいですよ」

(この30男が！自分で大人げないとは思わないのか！？)

下手をすればバチバチと火花が散っているのが見える様な緊迫した雰囲気、最初は盛り上がり過ぎていた会場も、いつしか静まり返って胡散臭げにその一角を遠巻きに眺めていた。

(誰でも良いから、この2人を止めてえええっ！！)

清香が本心からの訴えを込めて周囲の者達を見やったが、全員不自然に視線を逸らした。

( )( )( ) 止められないから……、もう気の済むまでやらせとけ( )( )( )

そんな諦めムードが漂う中、事態はどんどんエスカレートしていった。

「お兄ちゃん、聡さん！ そんなに欲しいなら後から同じ物を作るから！ お願いだから今日の所は！」

「二十万！……そうか、それならそつちは川島さんにプレゼントしよう。清香が川島さんの部屋に行った時、殺風景なのが気になったと言っていたし。そうだろう？」

「そ、それは確かにそう言ったけど！」

「先生！ 勝手に人を巻き込まないで下さい！」

「川島さん、落ち着いて」

「二十五万！……それじゃあもう一つは、俺の部屋に飾るから俺の為に作ってくれる？ ああ、いつその事更にもう一つ作って貰って俺の部屋と清香さんの部屋でペアにして飾っても良いよね」

「あ、あのっ！ ペアって何ですか！？」

「二十七万！……ああ、忘れていた。もう一つは奈津美さんの出産祝いとしても贈ろうか？」

「ちょっと！ そんな大金はたいしたもの、怖くて部屋に飾れないわよ！」

「待って！ 奈津美さんにはちゃんと別の物を考えてて！」

「おい、あんまり興奮するな。お腹の子に障るだろうが」

巻き添えを食った形の恭子と奈津美の悲鳴も上がり、浩一と修が宥めに入ったが、当事者2人は気にも留めなかった。

「ああああのっ！ 二人とも、言っておきますけど競り落としたらこの場で現金で引き換えですよ？ カードとか小切手とか使えませんよ！？ 下手したら恥をかいちやうからっ！」

狼狽しながらある事を思い出し念を押した清香だが、男2人は微塵も動揺しなかった。

「三十万！……安心して清香さん。出先で何かあれば一大事だから、普段から大抵は纏まった現金を持ち歩いているものでね」

「三十二万！……やっぱり君とは気が合うな。これ位社会人としては当然の嗜みだからな。そういう訳だから清香は気にするな」

「ききき気にするなって言われてもっ！！」

最早涙目になっている清香を半ば無視し、清人と聡は多少引き攣った笑顔で対峙していた。

(オークションの話聞いて、何か清香さんが気に入った物があれば購入しようと思って現金を多目に用意してきて助かった。しかし流石にそろそろ……)

(この成金の小倅が！ いつもどれ位親の金を持ち歩いてやがるんだ！ やっぱり何もかも気に入らない。一気にケリをつけてやる！)  
( )( )( やっぱりお前達似た者同士の、間違い無く血の繋がった兄弟だよ…… )( )( )( )

周囲の者がうんざりしてそのやり取りを見守る中、ステージ上で青くなっていた司会者が、何とか言葉を絞り出した。

「さ、さあ……、今現在、こちらのプリザーブドフラワーのアレンジメントに三十二万の値がついておりますが……、他にご希望の方はございませんか？」

そこで勢い良く叫んだ声が上がった。

「三十五万！」

「五十万！」

「百万！！」

聡と清人の声に続き、後方から誰かの声が高らかに響いた瞬間、今度こそ講堂内の空気が凍った。

「ひゃ……」

「百万って、おい！」

一瞬遅れてザワザワと空気が揺れる中、先程の女性の声に聞き覚えのあり過ぎる十名程だけは、狼狽しながら後方を振り返った。

「ちよつと待て！」

「今の声って」

「まさか！？」

激しく嫌な予感を覚えた一同の視線の先に、パンツスーツ姿の真澄がゆつくりとステージに向かって通路を歩いて来るのを認め、全員瞬時に固まった。コツコツとヒールの音を僅かに響かせながら近づいて来る間に、清人が小声で浩一に凄む。

「浩一！？」

「いや、俺は何も言って無い！」

顔を蒼白にして首を振る浩一に、清人は舌打ちしたい様な顔を向けたが、そうこうしているうちに真澄が通路に面した聡の座っている場所までやって来て、ピタリと立ち止った。そしてゆつくりと四方を見渡しながら、良く通る声で会場中に厳かに宣言する。

「私はそのアレンジメントに百万出します。ですが皆さんの中でそ

れ以上出せる方は、どうぞご遠慮なく申し出て下さい」

にっこりと慈愛に満ちた微笑みを見せながら不特定多数の者に促すが、勿論そんな事を申し出る者は皆無である。

「真澄さん……」

突然過ぎる闖入者の出現に、清香はただ呆然とするのみだった。

## 第17話 そして最強な彼女

清香の呟きを受けた真澄は聡と清人の方に体を屈め、その周囲だけに聞こえる程度の小声で毒吐いた。

「全く……、大の男が二人、揃いも揃って判断力ぶつ飛ばして。場を盛り上げるどころかドン引きさせるとは何事よ！ あんた達が関係者だと分かったら、清香ちゃんの立場が無くなるでしょうが！」  
そう言われて、漸く清人と聡が我に返った。

「う……、悪い、清香。大人気なかった」

「すみません清香さん。ついムキになって……」

「ううん、それは良いんだけど……」

言うだけ言って通り過ぎた真澄は躊躇う事無く設置してある階段を登り、ステージに立った。一時のざわめきが消えて会場が不気味に静まり返る中、司会者にまっすぐ歩み寄って声をかける。

「すみません、少しだけマイクを貸して頂ける？お騒がせしたのは本意では無かったので、会場の皆さんに一言お詫びしたくて。駄目かしら？」

殊勝げな物言いをしながら小さく首を傾げて見せた真澄に、相手は大人しく従った。

「どうぞ、お使い下さい」

「ありがとうございます」

そうして真澄はステージの中央で、マイク片手に微塵も臆する事無く語り始めた。

「会場の皆様、この場をお借りしてご挨拶とお詫びをさせて頂きます。私は柏木産業創業家の柏木真澄と申します」

そこで軽く頭を下げた真澄を見て、再び講堂内にざわめきが広がる。



「柏木？」

「あの老舗企業の？」

「一体何だ？」

するとそれを見計らった様に、真澄はゆっくりと会場中を見渡しつつ再度口を開いた。

「我が家では、前々から福祉事業に並々ならぬ力を入れて、定期的に複数の福祉財団に寄付しております。こちらには知人が在籍している関係で、今日立ち寄ってから某団体の事務所にすぐ出向くつもりが、なかなか興味深い活動報告を目に致しました」

そこで真澄はにこやかな笑顔を見せた。

「院内学級など普通ならあまり日の目を見ない箇所では活動するとは、流石にその辺の学生ボランティアとは目の付け所が違います。それに比較的短期のフォローで終わられる外科患者ならともかく、長期入院を余儀無くされている難病の子供に対しては、それこそケアは千差万別の筈。それを試行錯誤しつつ、手探りで一つ一つの事例に真摯に取り組んでおられる活動の様子に、心から感服致しました」

軽く胸を押さえつつしみじみと語る真澄に、会場がいつしか静まり返る。

「それで是非ともこの活動にご助力したいと思った所、こちらでチャリティーオークションが開催中なのを耳にして急遽足を運んだわけです」

そこで一旦話を区切った真澄は、悪戯っぽい笑顔を見せた。

「実は、先程申し出た百万はこれから出向く団体へ寄付するお金だったのですが、明日にでも改めて届ける事にします。そことは長い付き合いですので、まさか1日遅れただけでいつもの金額に色を付けてくれなどとは言わないでしょう」

そこで真澄が冗談を言ったらしいと分かった者達が会場のあちこちでクスクスと笑い、場の空気が僅かに緩んだ。そこで真澄が再び

真顔になつて話を続ける。

「今回唐突に百万と金額を出して皆様を驚かせてしまいました、  
そういう訳ですので決して金持ちの道楽や気紛れで大金を投げ捨て  
た訳ではありません。このお金はきつと有意義に使つて頂けるもの  
と信じております。ところで……、こちらのサークルの責任者の方  
はどなた？」

真澄が司会者の方を振り向くと同時に、舞台袖のカーテンの向こ  
うから事態の推移を見守つていた男性が、転がり出る様に真澄の元  
にやつてきた。

「わ、私です」

その男に、真澄はハンドバッグの中から封筒を取り出し、更にそ  
れから銀行の帯封の付いた札束を出して優雅な動きで差し出した。

「この度は有意義な発表を見せて頂きました。これからも活動を頑  
張つて下さい。応援しています」

微笑みを浮かべた真澄がそう言つて札束を手渡すと、感極まった  
相手は真澄の手を取り頭を下げた。

「あつ、ありがとうございます！ 多大なご協力感謝します！ 今  
後、より一層実りある活動が続けて行きますので！」

「皆様！ 当サークルの趣旨に賛同して頂き、多大な寄付をして頂  
きました柏木さんに、盛大な拍手をお願い致します！」

司会者役の学生も感動した様に会場に向かつて声を張り上げると、  
会場中から割れんばかりの拍手と感嘆の声が沸き起こった。

「きゃあああ、あのお姉様カッコイイ」

「流石柏木、ただの金持ちじゃねえな」

「凄いな百万単位でポンと寄付かよ」

「脱税やつて溜め込んでる様な奴とは、そもそも格が違うよ……」

「ああいう人が居る家がトップを占めてる会社なら、福利厚生とか  
も良さそうだよね？」

「うん、寄付して社会還元してるなら、社員にだって還元してそうだし」

「来年、柏木産業にエントリーしようかな？」

「元々優良企業なのに、今回のこれで学内で一気に人気上がるな。清香達の周囲からもそんな声が伝わり、ステージ上で手を振りながら愛想笑いを振り撒いている真澄を見た一同は、揃って感心した様に唸った。

「流石真澄さん。会場全体が柏木からの寄付の事に意識が向いて、直前に常識外れの大金で競り合いをしていた馬鹿男2人の事は、すっかり頭の中から消し去られたか」

「おい！」

遠慮なく感想を述べた友之に対し清人が文句を言おうとしたが、次々と他の者が口にする言葉に不満をかき消された。

「ここは国立の東成大には一歩及ばないが、私立の雄だからな。優秀な卒業生を確保するのに社名をアピールする絶好の機会だ」

「真澄姉、《ピンチをチャンスに変える》を地でやってみせたか。やるなあ」

「CM1スポット幾らで考えたら、百万は安いかもな。学生の口コミはバカにできないし」

「学祭だから他の大学の学生や関係者も出入りしてる筈だし、効果絶大か」

「しまった……、これが親父の耳に入ったら、『どうしてお前がやって《倉田》の名前をアピールしなかった!?』ってどやされる……」

「正彦……、それ、間違ってもお前には無理だから」

そう冷静に浩一が突っ込んだところでステージから紙袋を提げた真澄が戻り、無言で促された正彦と友之と明良が奥に一つずつずれて真澄に席を譲った。そこに同然の如く真澄が腰を下ろし、それから滞りなくオークションが進行していった。

そしてオークションが終わり、講堂内の人間がぞろぞろと入れ替わる様に移動し始め、清香達もそれに倣って立ち上がった時、ステージの袖下で何人かと輪を作っていた朋美が手を振りながら声をかけて来た。

「清香、ちよつと来て！」

「あ、うん、今行く！」

それに応じた清香は、聡に向き直って断りを入れた。

「ごめんなさい聡さん、ちよつと朋美の所に行ってきます」

「ああ、講堂を出た所で待っているよ」

「すぐ行きますね」

そうして互いに笑顔で別れた2人を見ながら、周囲の者達も立ち上がり通路に出る。

「じゃあ俺達も出ているか」

「そうだな」

「それならこれを持って貰えるかしら？」

そこで真澄が先程手に入れたアレンジの入った紙袋を、立ち上がった清人に向かって無造作に突き出した為、周囲の者達は恐れ慄いた。

（ちよつ……、真澄姉！）

（どうしてここで、事を荒立てようとするんですか！？）

（今の清人さんを刺激したら、後が怖いですよ！）

（さつさと帰りたいが、無視して帰ったら余計面倒な事になりそうだし……）

案の定、清人は真澄の顔と差し出された物を交互に眺めてから、不機嫌さを隠そうともせず冷え切った口調で尋ねた。

「……どうして俺がそれを持たなければいけないのか、理由を説明して頂けますか？」

(ああ、怒ってる怒ってる……)

(只でさえ邪魔をされて、不機嫌だったのに)

(こうなるのが分かってて兄さんに命令出来るなんて、この女性は勇者だな……)

柏木に連なる男達が戦々恐々とする中、聡だけは予想外の展開に呆然とし、かつ真澄に心の中で賛辞を贈った。そしてどう対応するのかと様子を窺っていると、真澄が一見上品で邪気に無い笑みをその顔に浮かべる。

「深窓育ちなもので、箸とお茶碗より重い物を持った事が無くて指が干切れそうなの。そんなか弱い女性が目の前に居るのに、無視できないいわよね？」

(深窓？ 誰がだ？)

(白々し過ぎる……)

(……姉さん、勘弁してくれ)

周囲が揃ってうんざりする中、清人は嘲笑めいた笑みで応戦した。「それはそれは大変ですね。しかし札束は平気で持ち歩けるみたいですが、そうになると金だけは持ち歩くのに必要なのは手では無く、図太い神経みたいです。それで重さも感じないとは羨ましい。こちらは人並みの神経しか持ち合わせていないもので、一つ勉強になりました」

(うわ)、負けてないよこっちも)

(つつか、この人に真っ向勝負挑めるのは、清人さん位だろ)

(2人とも笑顔が極悪だよな)

揃って周囲が顔を引き攣らせていると、真澄が真顔になって清人を睨みつけた。

「つまらない御託を言ってくれるわね。人を本気で怒らせて、金を払って頭を下げる位で勘弁して貰えると本気で思ってるわけ？」

「……………」

真澄が言っている内容に心当たりのあり過ぎる清人は、反射的に黙り込む。他の者達が（何事？）と不審がる眼差しを向ける中真澄が一步足を踏み出し、清人の耳元で小声で脅迫した。

「この場であんたが仕掛けてるえげつない“あれ”を洗いざらいぶちまけて良いの？」

「真澄さん」

「それが嫌ならさつさと私の言うとおりにする事ね。……さあ、これを持つのか？ 持たないのか？」

聡の前で小笠原に対する小細工を暴露された日には、密かに進めている諸々が無駄になる可能性があり、清人は舌打ちしたいのを何とか堪えて真澄の方に片手を差し出した。

「……お預かりします」

「最初から素直にそう言いなさい」

ふんぞり返って清人に紙袋を渡す真澄を見て、周囲の人間は皆驚愕した。

（え！？ 清人さん、一体どんなネタを握られてるんだ？）

（真澄さん……、楽しそうですね）

（初めて見たな。清人さんのすげえ仏頂面）

（外面が良いのが、この人の特技の一つだったのに）

そんな呆然としている面々を、真澄が容赦なく追い立てる。

「ほら、さつさと出るわよ。あなた達もグズグズしない！ 通路で立ち止まってたら他の人の邪魔でしょう」

それに従い一同はそろそろと何とも言えない表情で外に向かって歩き出したが、中ほどで並んで歩いていた修と奈津美の間で、小声で会話が交わされた。

「……奈津美」

「分かったわよ、もう……」

基本的に男に敵しく女に優しい真澄に対しては、自分よりも妻の

方が口を聞きやすい筈と判断した修が妻に目線で懇願し、奈津美は肩を竦めてから夫を初めとする男達の疑問を解消するべく、前を歩く真澄に声をかけた。

「真澄さん、ご無沙汰しています。今日は偶然お会いできて嬉しいです」

「ええ、奈津美さん、珍しい所で会うわね。また今度お店に伺うわね」

「お待ちしています。それで……、今日はどうしてこちらに？ しかも大金持参で。寄付に行く直前に寄ったなんて、話を作っただけですよね？」

慎重に核心を突いた奈津美に、真澄は笑いを堪える表情になった。「勿論そうよ。大学祭の事は清香ちゃんから聞いていて、もともと顔を出すつもりだったの。ついでに彼女がオークションに出品する事も知っていたし」

「あら、どうしてですか？」

色々お忙しいでしょうにという思いを顔に出しながら不思議そうに奈津美が尋ねると、真澄が機嫌良さそうに奈津美と並んで歩きながら話を続けた。

「先月の初め位に相談を受けたの。『アレンジのデザインをどうしたら良いか迷ってる』って。単なる左右対称とかにしたく無かったみたいね。『真澄さんはセンスが良いから何かアイデアを出して貰えませんか？』なんて言われたら、とても邪険にできないじゃない？」

「あら、凄い殺し文句」

思わずふふつと笑った奈津美に、真澄も目許を和ませる。

「本当よね。それで持っている画集から作品化出来そうなパステル画の幾つかを選んで、こんなのを題材にしてみたらって写メールで送ったの。それを元にあれを作ったみたい」

そう言って一歩後ろを歩いている清人の手元を指差した真澄に、奈津美は感嘆の眼差しを送った。

「確かに一枚の絵みたいなの、素敵な作品ですものね。使えそうな絵を選んだ、真澄さんの眼は確かですね」

「あら、私の選定眼より清香ちゃんのデザイン感覚とアレンジ力の方が凄いと思うけど？」

「清香ちゃんには、後で改めて誉めてあげます」

「そうして頂戴」

そこで女2人で笑い合ってから、奈津美は何を思っただか顔付きを改めて口を開いた。

「でも真澄さん。修さんともさつき少し話していたんですけど……」

「なあに？ 遠慮しないで言ってみて？」

「どうしてあんな大金を持って、こちらに出向いたんですか？」

「単なる女の勘ね。揉め事が起こる様な予感がしたものだから。勿論普段はこんな無造作に持ち歩かないわよ？」

「……」

そこで真澄がチラツと背後を振り返った為、その視線の先の清人と睨み合っただけで顔を逸らした。それを認めてから、奈津美が更に意見らしき物を口にする。

「今回は確かに事態の收拾に役立つたかもしれませんが……。余計なお世話かもしれませんが、私達と真澄さんの経済観念は違っているのかもしれませんが、それに百万も出すのはちょっとどうかと思いで……」

そう言っただけで若干俯いた奈津美だが、それを聞いていた男達は心の中で拍手喝采を送った。

（偉い！ 奈津美さん！）

（もっと言っただけで！）





「誉め言葉として受け取っておくわ」

清人の嫌味も真澄が軽く受け流した所で、出入り口から清香が走り出て来て一同の元にやって来た。

「お待たせしました！ 真澄さん、今日はありがとうございました」  
駆け寄ってくるなり盛大に頭を下げた清香に対し、真澄が裏表無しに顔を綻ばせる。

「どういたしました。こんな素敵な作品になって、私もアドバイスした甲斐があったわ」

「サークルのメンバーからも、改めて私からお礼を言ってくれって言われましたけど……、あんな大金を出して、本当に良かったんですか？」

心配そうに見上げてくる清香に、真澄が悪戯っぽく問いかける。

「清香ちゃん。私がお金と時間を浪費するタイプの人間に見える？」

そう問われた清香は何秒か真剣に真澄の顔を見つめてから、にこりと笑った。

「見えないです。ご協力ありがとうございました」

「うん、素直で宜しい。本当に、性格が捻れ捲った馬鹿どもに、清香ちゃんの爪の垢でも煎じて飲ませたいわね」

「……………」

頗る上機嫌で清香の頭を撫でつつさりげなく視線を投げってくる真澄に、清人に聡はぐうの音も出ない。他の者が密かに面白がったり気の毒に思っていると、更に真澄の仕切り発言が飛び出した。

「さて、それじゃあ私はここで失礼するわね。門の所に車を呼ぶから。清香ちゃん、お兄さんが車が来るまでこれを持って待っていてくれるそうだから、約束とかがあったら悪いけど一緒に行くわね」

「はあ!？」

「いえ、待ち合わせとかの約束はしていなかったですけど……、お

兄ちゃん？」

流石に清香が怪訝な顔を見せ、清人も怒りの形相で真澄に詰め寄り、小声で囁みついた。

「ちよつと待つて下さい、何ですかそれはっ！！」

「何か文句でも？」

「何で俺がそこまで！」

しかし真澄も負けじと、ドスの効いた声で囁く。

「清香ちゃんの前で“あれ”を言っても良いの？ そんな事をしたら弟君に対抗策を取られるだけじゃなく、清香ちゃんに『信じられない、お兄ちゃん最低！』って言われる位で済めば良いけど最悪」

「お付き合います」

「そう、宜しくね」

如何にも悔しげに了承の言葉を口にする清人と、余裕たっぷりで頷いた真澄を見て、聡は不審に思つのを通り越して啞然とした。

（あの人に、一体どんな弱みを握られてるんだ？ 兄さんは）

その内容を知ったらとても心中穏やかではいらなかった聡だが、現時点でそれを知る由も無く、只首を捻るのみだった。そして真澄の指示が更に続く。

「そういう訳だから清香ちゃんの事を宜しくね。でも言うておくけど、夕飯前にきっちり家まで送り届けるのよ？」

「分かりました」

つい先程までとは異なり、幾分きつい視線で念を押してくる真澄に、聡は苦笑いしかできなかった。

（まあ、さすがに全面的に味方をしてくれるわけでは無いが、門前払いよりはマシか）

そんな事を考えていると、清人はジャケットのポケットから手帳を取り出し、そこに挟んであったメモを恭子に向かって差し出しながら声をかけた。

「じゃあ川島さん。このリストで残っている場所の、写真を撮っておいて貰えますか？」

「はい、分かりました」

それまで控え目に皆の後ろに付いて歩いていた恭子が前に出て来て、清人からそれを受け取る。他の皆が（え？　ここに押し掛ける方便じゃなくて、本当に取材してたんだ）などと密かに驚く中、淡々と清人が話を続けた。

「終わったらそのまま帰って貰って構いません。今日は日曜なのに付き合わせて、申し訳ありませんでした」

軽く頭を下げる清人に、恭子は笑いを堪える表情で応じた。

「いえ、とても楽しかったです。先生の普段とは全く違った一面が見られましたし」

そう言つてクスクスと笑い出してしまった恭子に誘発された形で、周囲から「くっ……」とか「ぶふっ……」とかの失笑が漏れる。それを耳にした清人は、疲れた様に溜息を吐いた。

「川島さん……」

「それじゃあ解散。他の皆も寄り道しないで帰りなさいよ？」

追い払う様に片手を振つてから、真澄は清人を従えて正門に向かつて悠然と歩き出した。その背中を見送りながら、男達が顔を見合わせる。

「すっかり悪ガキ扱いだな」

「まあ、あんまり品行方正とは言えないだろう」

「違うない。じゃあさっさと帰るか」

「じゃあ清香ちゃん、またね」

「聡君、ちゃんと清香ちゃんを送り届けるよ？」

「でないと後が怖いからね？」

そうして他の者達が三々五々その場を立ち去っていくのを見送りながら、清香は隣に立つ聡に苦笑しながら声をかけた。

「はあ……、皆が揃って賑やかだったから、急に静かになりましたね」

「確かにね。清香さんはやさしいお兄さんみたいな人達がいて、楽しいし退屈しなさそうだね？」

「はい」

(……ちよつと皮肉が入ってたんだけど、分からなかったか)

即座に迷い無く返答された為、聡は若干溜息を吐きたくなった。それを何とか抑えて意識を切り替える。

「ごめんね、清香さん」

「何ですか？ 聡さん」

突然の謝罪に清香が首を傾げると、聡は言い難そうに言葉を継いだ。

「その、さつきも謝ったけど……、つい先生と張り合って、清香さんを随分ハラハラさせてしまったみたいだし……」

「本当です、もう！ 大の大人が二人揃って、何をやってるんですか！？」

「うん、本当に悪かった」

本気で怒られて益々気まずい思いをした聡だが、次の瞬間清香が小さく笑った。

「もう怒って無いですよ。そんなにしょげないで下さい。私が苛めたみたいじゃないですか。その代わり、もう同じ事はしないで下さいね？」

「分かった。誓うから」

真顔で頷いた聡に、清香は少し意外そうに言い出した。

「それならもう良いです。でも……、正直言って、凄く意外でした。お兄ちゃんも聡さんも、どんな時でも冷静に対応できる人かと思ってたのに」

「それは自分でも意外だったかな？ 俺も自分がこんなに熱くなるタイプだとは思って無かったからね。本当に、楽しい場を台無しにしかけてごめん」

（兄さんに多少煽られたからって……。まだまだ精神修行が足りないって事だな）

そんな事をしみじみ思いながら聡が苦笑すると、清香も多少悪戯っぽく笑って打ち明けた。

「真澄さんが上手く纏めてくれて、良かったですね。だけど……、正直に言つと、私もちよつとだけワクワクしました」

「え？」

「最後の方、どっちが競り落とすんだろって、密かに楽しんでました。あ、でも、本当にほんのちよつとだけですからねっ！ あんな心臓に悪い事は二度と御免です！！」

「肝に銘じておくよ」

勢い込んで訴えてくる清香に、聡は苦笑しながら頷いた。すると清香が口調を変えて聡を見上げてくる。

「でも、真剣な顔でお兄ちゃんと張り合ってた聡さん、とても格好良かったですよ？」

「……え？」

意外な言葉を耳にして聡が固まったが、そんな事は察しないまま清香が無邪気な笑顔で続けた。

「きつとお仕事中はあんな顔をされてるんですよ？ 笑ってる顔も素敵ですけど、ああいう“戦ってる顔”っぱいのも魅力的だな、と思って眺めてました」

「ありがとう……」

（落ち着け、俺！ 彼女に他意は無いから！ 素直に感想を口にしているだけで）

変な動悸を覚えながら何とか動揺を抑えようとした聡だが、つい気になった事を口にしてしまった。

「……先生は」

「え？ お兄ちゃんがどうかしましたか？」

「あ、いや、その……。俺と張り合ってる先生については、どう思ったのかと……」

口ごもりつつ相手の反応を待った聡だが、清香は事も無げに言い切った。

「お兄ちゃんは笑ってても怒ってても大抵の男の人より魅力的なのはもう十分分かりきっているので、一々口に出す事では無いと思って別に言わなかつたんですけど」

「……ああ、そうだよね」

「聞きたいですか？」

「いや、結構。ごめんね？ 変な事を聞いて」

「はあ……」

(変な聡さん。一体何が言いたかったのかしら？)

(やっぱり俺は、その他大勢での一括りなんだな)

微妙に落ち込む聡に、首を捻る清香。しかし清香は悩むのをすぐに止め、次の話題を口にした。

「それで……、聡さん」

「うん？ どうしたの？」

「お母様の退院までに、あのアレンジと同じ物を作ってお渡ししますね？」

そう言われて、聡は少し驚いた表情を見せた。

「え？ 大変じゃないの？ そんな気を遣ってくれなくても大丈夫だよ？」

「でも随分気に入ってくれたみたいで、嬉しかったんです。勿論、ご迷惑なら止めますけど」

心配そうに顔色を窺って来る清香に、聡は心からの笑顔を向けた。

「そんな事はないから。寧ろ嬉しいから、ありがたく頂く事にするよ。母も喜ぶだろうし」

「良かった。じゃあ年末までには渡せる様にしますね」

「色々忙しい時期だし、無理はしないで良いからね」

「はい！」

そう言っただけで輝く様な笑顔で請け負った清香を見下ろして、聡はしみじみと思った。

(ああ、その笑顔って、やっぱり最強かもしれない……)

聡の中で、また何かがゆっくりと動き出した瞬間だった。



## 第18話 計り知れない女性（ひと）

「……とまあ、大学祭はこんな感じで終わったんだけど」

聡が仕事帰りに由紀子の病室に寄り、請われるまま先日の出来事の一部始終を語り終えると、それまで黙って相槌を打ちながら聞いていた由紀子が、我慢できなくなった様に口元を手で押さえてクスクス笑い出した。

「ふふふつ……、清香さんの従兄弟さん達に散々邪魔された挙げ句、彼女の前で頑張って清人と競り合ったのに、残念だったわね？ 聡」  
「仕方ないさ。全く……、兄さんがあんなに大人気ない人だとは思わなかった」

無然とした聡の表情が面白かったのか、由紀子は益々笑みを深くした。

「それにしても……。2人で散々張り合った挙げ句、一番最後においしい所を全部柏木さんに持って行かれるなんて、笑えるわね」

「何故だかは分からないけど、兄さんはあの人には頭が上がらないみたいだから」

溜め息を吐きながら聡がその時の情景を思い返していると、何か思い付いた様に由紀子が真顔で尋ねてきた。

「ねえ、聡」

「何？」

「話を聞いていて思ったんだけど……、ひょっとしてその真澄さんって方、清人の恋人なのかしら？」

「有り得ないから！」

「なあに？ その即答は」

口にした途端即座に力一杯否定され、由紀子は目を丸くした。そして聡は何となく気まずい思いをしながら、微妙に視線をさまよわ

せる。

「あ、いや、何となく。あの女性が兄さんの恋人って、あまり考えたくないと言うか、考えられないと言うか……。でも、本当にそんな空気は皆無だったから。強いて言えば……“天敵”？」

「そうなの？ それなら川島さんって言う方は？」

そう言われて、聡は眉を寄せて黙り込んだ。そして当日の清人の様子を思い返し、慎重に言葉を選ぶ。

「……川島さんは、柏木さんとはまた違った意味で、何となく違う気がする」

「そうなの。でも本当に楽しい顔合わせだったみたいね。見られるものなら、是非この目で直に見たかったわ」

しみじみと、如何にも残念そうに溜め息を吐かれ、聡はげっそりと肩を落とした。

「母さん……、他人事だと思って……」

「だっておかしいんですもの」

そう言っただけで先ほど聞いた話を思い出した様に再び小さく笑い出した由紀子を見て、聡は少々うんざりしながらも自分自身を宥めた。

（まあ、良いか。こんなに楽しそうに笑う母さんを見るのは久しぶりだしな）

そんな事を考えて苦笑いしていると、由紀子が予想外の事を口にした。

「何だか清香さんに会ってみたくなくなってきたわ。私の退院祝いを作ってくれと言うし、一度家に招待できないかしら？」

由紀子に首を傾げて尋ねられた聡は、盛大に顔を引き攣らせた。

「それはさすがに……、兄さんが黙っていないかと」

（一緒に展示を見る約束をしただけであの妨害っぷり。もし家に招待なんかしたら、どんな制裁を企ててくるか……）

考えを巡らせて戦々恐々としている聡の耳に、更に驚愕する内容

が飛び込んできた。

「それはそうよね。清人は勿論だけど、あれだけ派手に殴られた昭さんも清人の事は警戒してるから、清香さんを招待する事には反対するだろうし。その辺りはどうしたものかしら？」

（母さんの中で、彼女を家に招待するのは決定事項なのか！？ いや、それより……）

動揺しながらも、聡は慌てて難しい顔で考え込んでいる由紀子に確認を入れた。

「母さん、父さんが殴られたって何の話？」

「あら、話したでしょう？ 清吾さん達のお通夜に出向いた時の事」不思議そうに問い返した由紀子に、聡は納得しないまま尚も問い掛けた。

「聞いたけど、確か母さんが兄さんに殴られて、二発目は父さんが止めたって話で……」

「ええ、私が平手打ちされて倒れ込んだのを庇った昭さんが、拳で殴り倒されたのよ。昭さんが盛大に地面に転がったものだから、それで清人も少し落ち着いたみたいだったわ」

「母さん！ 俺はまさかそんな事態だったとは思って無かったんだけど！？」

事の次第を知ってさすがに顔色を変えた聡だが、由紀子は平然と話を続けた。

「説明不足だったかしら？ でもそれで少し安心したの」

「その状況で安心して、何に？」

「幾ら憎くても私は平手打ちで済ませてくれた訳でしょう？ あんな状況でも女性には手加減してくれるなんて、なんて優しい子に育ててくれたんだろうと思って、もう清吾さんと香澄さんに会う事が出来なくなつて悲しいのと同時に、2人に感謝する気持ちで胸が一杯になつたわ」

片手で軽く胸を押さえながらしみじみと語った由紀子に、聡は心の中で絶叫した。

（母さん！　そこ、絶対感動する所じゃないから！！　第一、本当に優しいなら、間違っても母親に手を上げたりしないって！！）  
そうして少しの間頂垂れてから、聡は誰に言うともなくボソツと呟いた。

「何か意外だな……」

「え？　何が？」

ゆつくりと顔を上げ、尋ねてきた由紀子の顔を眺めながら、聡は苦笑いした。

「父さんが体を張って母さんを庇うとは思ってなかったから。親戚連中はこぞって、やれ『財産目当てだ』とか『会長の腰巾着が』とか好き放題言ってたし」

「確かに財産目当てで結婚したって所は否定できないけど、ちゃんと私の事は守ってくれる、結構律儀な人なのよ？」

穏やかに言い聞かせてくる由紀子に、聡は一気に脱力した。

「……母さん。爽やかに財産目当てって断言しないでくれるかな」

「でも、実際そう言われたし」

「何て言われたって？」

思わず眉を顰めた聡に、由紀子は苦笑しながら思い返す様に話し始めた。

「あれは……、小笠原の家に戻って二年位過ぎてからね。父が『今度こそは俺が認める男と再婚しろ！』と五月蠅くてね。断るのも面倒臭くなって、もう適当にお見合いしてたのよ」

「適当って……」

相当自棄になっていたであろう当時の母親の心境を想って、思わず聡は溜め息を吐いたが、由紀子は淡々と続けた。

「父は私の結婚と離婚を必死になって隠そうとしてたけど、お見合

いの席で私から暴露してたの。その途端に破談というパターンを繰り返してたわ」

「……じいさん、怒ったよな」

（そうだよな。お嬢様然としても、駆け落ちまがいの事もした人だものな。こうと決めたら引かない所はあるだろうし）

思わず呻いた聡に、由紀子は小さく笑った。

「勿論よ。父が顔を真っ赤にして怒ってたけど構わずそれを続けていたら、噂が広がって次第に縁談が来なくなってるね。相手が父が言うことを聞かせられる、社内の人だけになったの」

「それで父さんが？」

「昭さんに引き合わされたのは、結構な人間に引き合わされてからね」

「それまでどうして断ってたの？」

これまで父親の謹厳実直さと無愛想ぶりと、面白味の無さを散々目の当たりにしてきた聡としては、他にもっとマシな結婚相手が居たのではと思ったのだが、由紀子は小さく肩を竦めてその理由を述べた。

「だって……、父から事前に言い含められたのか、皆揃いも揃って『辛い経験をしましたね』とか『これからは俺が面倒を見ますから安心して下さい』とか『子供だってまたすぐできますよ』とか、分かった様な事を言って愛想笑いをしてくるんだもの。話に付き合う気にもなれないわ。どうせ小笠原の社長の椅子と財産目当てなのに」

「そう言い切ってしまうのも、どうかと思うんだけど……」

（あのじいさんの息のかかった人間なら、間違い無くそうだろうけどな）

一応フォローらしき物をして見たが、聡自身母の意見に賛同した。すると由紀子が真顔で話を続ける。

「それで悉く突っぱねてるうちに昭さんとお見合いする事になって、

その席で開口一番『あなたは自分の資産が今現在どういう状態なのか、きちんと把握しているんですか？』って言われたの

「…………えっと、本当に初対面の場で？」

（それって一般的に見てどうなんだ？）

流石に聡が心の中で突っ込みを入れたが、由紀子は平然と肯定した。

「ええ。それで私、正直に『全て父が管理していますので存じません』と言ったら鼻で笑われて、『無駄に年だけ食ってるんですね。あのごうつくばりの会長が生きている間は大丈夫でしょうが、あれがくたばったら忽ち路頭に迷いますよ。あの会長が一応頭を下げてきたので、俺に管理を一任してくれたら、そんな事態からは回避させてあげます。ゆくゆくは社長にも就任させて貰える事で話はずいてますし』って言われて」

そこまで言って当時の事を思い出したのかクスクス笑い出した由紀子に、聡は半ば悲鳴を上げた。

「母さん、笑い事じゃないだろ！？ 何だよ、その如何にも財産目当ですって感じ丸出しの台詞はっ！！」

「だって、聞いててあんまり清々しくて。思わず『じゃあ私の財産が全て無くなったら、私と離婚する事になるんですね？』って聞いたら『そうなりますね』って真顔で言うし」

（父さん！ 俺はあなたを流石にここまで守銭奴だとは思ってませんでしたよ！）

愕然として心中で父に非難の声を上げた聡に、由紀子は更に予想外の内容を口にした。

「だからね？ お愛想笑いなんかしてくる人より、そんな正直な人の方が良いかなって思っ、いい加減清吾さんの事は諦めて再婚してみる事にしたのよ」

「してみる事にしたって…………」

呆然と呟いた聡に、由紀子が徐に言い出した。

「それで……、結婚して十年近く経った時、昭さんが如何にも申し訳なさそうに私に謝ってきたの」

「何を謝ったわけ？」

「『君の資産が倍になった。半分は聡名義に振り替えたから』って「は？」

意味が分からずとうとう絶句した聡に、由紀子は真顔で解説した。「初めて会った時に私が『資産が無くなったら離婚しますか？』って聞いたから、どうやら昭さんは私が離婚したくて資産を減らす事を期待していると思っていたみたい。だから『増えて困るものでも無いですよ？』って笑ったら、何だか安心してたわ」

（ちよつと待つてくれ。母さんと父さんは普通の夫婦とは違うとは思っていたけど、何だか益々意味が分からなくなってきたんだが……）

思わず椅子から降りて床に蹲りたくなってしまった聡だが、由紀子はすこぶる冷静だった。

「それに、私は最初の結婚と離婚で親戚中から白い眼を向けられてたんだけど、再婚してからは昭さんが『ろくな家の出じゃない』とか『財産目当て』とかって集中砲火を浴びてたわ。父が事ある毎に『社長にしてやった』って恩着せがましく言うてくるのを黙って聞いて、外でのお付き合いでは気難しい顔で周囲を睥睨して、下手な人は寄つて来ない様にしてくれていたし」

そこで聡がどこか疑わしそうに口を挟んだ。

「じゃあ父さんって……、昔から結構矢面に立って、母さんを庇つたりしてた？」

「そんな風には見えなかった？ 私が社長にしてあげた訳じゃ無いのに、本当に律儀な人でしょう？ だから清吾さんみたいに好きと言うのでは無いけれど、昭さんの事も大事に思ってるわよ？」

慎重に尋ねたが由紀子に事も無げに言われてしまい、聡は本気で

頂垂れた。

（見えなかったから、余程夫婦仲が悪いのかと、俺が1人で気を揉んでたんだよ！！）

それから幾つかのやり取りをしてから、聡は由紀子に別れを告げて病室を後にした。

いつもならまつすぐ家に戻る所だが、色々な精神的疲労が重なったせいか足取りが重く、病院出入り口近くの長椅子にドサリと腰を下ろす。そして盛大な溜め息を吐き出した。

（何か疲れたな。これまで色々気を回していたのが、馬鹿みたいに思えてきた……。熱愛夫婦って訳じゃないけど、実はそんなに仲が悪いつてわけじゃ無かったみたいだし）

そこまで考えた聡は頭に手をやって苛立たしげにガシガシと掻いた後、ポケットから携帯を取り出し、迷わずある番号を選択した。そしてすぐ応答があった事に安堵しつつ口を開く。

「もしもし、清香さん？」

『こんばんは、聡さん。どうかしましたか？』

「うん、何か精神的疲労が激しくて、ちょっと癒されたくなくて…」

『はい？』

思わず本音を漏らした聡に、清香が戸惑った声を返してくる。それを聡は軽く誤魔化した。

「いや、こつちの話。それで用件なんだけど、今週の水曜の夜とか空いてるかな？一緒に食事でもどうかと思って」

誘いの言葉を口にした聡だったが、清香は申し訳なさそうに断ってきた。

『ごめんなさい、その日は玲二さんと正彦さんと食事をした後カラオケに行く事になってて……』



「ああ、それじゃあ仕方無いね。えっと……、それなら金曜日の夜とかは？」

手にした手帳に記入されているスケジュール内容を確認しながら更に聡が尋ねたが、清香は再度断りを入れる。

『その日は明良さんと映画を見に行く予定にしまして……』

「はは……、やっぱり清香さんは皆と仲が良いね。因みに土曜日は？」

自分の顔が徐々に引き攣るのを自覚しながら、聡は諦めずに尋ねた。

『土曜日は……、お昼までお兄ちゃんと買い物をして、その後は浩一さんと友之さんが家に来るので、4人で麻雀をする予定です』

「は！？ 麻雀って何それ？」

予想外の単語を耳にして声を裏返ししながら尋ねた聡に、清香は真面目に説明した。

『何か、お兄ちゃんが今度小説の中で登場人物に麻雀をさせたいみたいで、実際にやってみないと臨場感溢れる文章が書けないから実践してみるとかで。面子が足りないから付き合ってくれと頼まれたんです』

「へえ……。先生って、割と凝り性なんだ」

思わず皮肉っぽい声を出したしまった聡に、清香がすこぶる真剣に返してくる。

『そうなんです。それでお兄ちゃんも私もした事がないので、友之さんが教えてくれる事になって。友之さんって「娯楽の類には精通してる」って豪語するだけあって、何でも知ってて凄いんですよ！』

「……そうだね。さすがに俺もまだやった事は無いな」

感心した様に語る清香に辛うじて言葉を返した聡だったが、内心怒り狂っていた。

（これは……、以前にもチラッと思ったけど、俺が清香さんを誘う

暇が出来ない様に、絶対兄さんが仕組んでる。もの凄い悪意を感じるんだが！？」 第一「精通してる」って……、単に遊びまくってるだけだろうがっ！ ふざけるなよっ！？」

「清香さん、じゃあ日曜日は誰かと約束がありますか？」

多少ムキになりつつも、精一杯穏やかな口調を装って尋ねた聡に、清香は何気なく答えた。

『日曜日は特に約束してはいませんが、ちょっと出掛ける事にしています』

「1人で？ 買い物何か？」

『いえ、久し振りに思いきり体を動かしてこようかな〜とか思ってます』

「俺も付き合っから」

『え？』

唐突に言われた言葉に清香が戸惑っていると、聡がその隙を逃さず畳み掛けた。

「俺も、最近体がなまってると思ってた所なんだ。そっいい事なら是非とも付き合わせて貰いたいんだけど」

『いえ、でも……、聡さんに付き合っつて貰うのは無理かも……』

何故か言葉を濁した清香に、聡は半ば自棄になりながら言葉を継いだ。

「これでも運動神経には結構自信があるんだ。テニス？ 水泳？

それともジョギングとか？ 1人で行くならバレーとかバスケットかの団体競技じゃないよね？ あ、それとも現地集合で待ち合わせとかするのかな？」

『いえ、待ち合わせとかはしないで、場所を借りると言うか、手合わせをお願いすると言うか』

「それなら俺も一緒に参加させて欲しいな。どうしても無理かな？」 殆どごり押し状態になっているのも自覚せず聡が訴えると、清香

が微妙に口調を替えてきた。

『それは……、大丈夫かと思えますけど。ちょっと移動に時間がかかりますよ?』

「じゃあ尚更、俺が車を出すよ。その方が移動も楽だよね」

『良いんですか?』

「勿論。ところで何を持って行けば良いかな?」

半ば押し切られた格好で清香が同行に控え目な了解を告げて来ると、聡は機嫌良く詳細について尋ねた。それに清香がまだ幾分躊躇いがちに応じる。

『えっと……、私はいつも向こうで必要な物を貸して貰ってますので、事前に聡さんが一緒に行く事を話しておけば、持ち物はタオル位で良いんですが……』

「じゃあ予め連絡をしておいて貰える?」

『それは構わないんですけど……。聡さんは柔道の経験はありますか?』

「え?」

そこで清香から告げられたあまりにも予想外の台詞に、聡の頭の中は一瞬真っ白になった。

## 第19話 男のプライド

何とか2人で待ち合わせをした日曜日。都心から一時間ほど愛車のBMWを軽快に走らせてきた聡に、助手席の清香が笑顔を向けた。「聡さん、ありがとうございます。もうすぐ着きますけど、道場の近くに駐車場が無いので、駅前の駐車場に入れて少し歩きますね？」

「ああ、構わないよ。もう少し近くなったら誘導してくれるかな」「分かりました」

そこで来る道すがら清香から聞いた話を思い返ししながら、聡が前を見たまましじみと呟いた。

「しかし……、清香さんのご両親が結婚する時は、大変だったんだね」

「ええ、お母さんは私が大きくなってからも、散々文句を言って愚痴を言っつて悪態吐いてましたね。向こうからの連絡も皆無でした」「そうなんだ……」

今まで疑問に思いつながらも、つい詳細を尋ね損ねていた事柄を時間潰しに聞いた聡だったが、尋ねた途端清香が激しい口調で両親の結婚に至るいきさつを語り出し、一気に車内の空気が険しくなった為、尋ねた一分後には激しく後悔していた。

(しかし、従兄弟達はあの通り平気で接触してるんだが?)

清香が一通りの事情を語り尽くした後も、内心の疑問を完全に払拭できてなかった聡は、さり気なく清香に尋ねてみた。

「……因みに、お母さんの旧姓は何て言うの?」

「旧姓、ですか? そう言えば何て言ってたかしら?……でも、未永劫関わり合いなんか有り得ない人達ですから、知らなくても全然支障ありません!」

「は、はは……、それはそうかもね」

聡の問いに清香は一瞬キョトンとしたものの、すぐに苦々しげに吐き捨てた為、聡は僅かに顔を引き攣らせながら同意した。

（やつぱり皆の素性は隠したままなんだ。俺がそれをバラしたら、立場がより一層まズくなる事確定なんだろうな……）

そんな事を再認識して冷や汗を流しつつ、聡は清香の指示で駅前の通りを走り、一本横の細い道に入って首尾良くコインパーキングに車を入れた。

「じゃあ行こうか」

「はい、こつちです」

車を降りた聡が清香の案内で歩き始めると、並んで歩く清香が深呼吸でもするように軽く両手を広げながらしみじみと呟いた。

「うーん、やつぱり落ち着くな」

その自然な笑顔に、聡もこれまで聞いた話を振り返りながら笑顔で尋ねる。

「確かこの辺に、ご両親が亡くなるまで住んでいたんだよね？」

「はい、もう少し歩いて坂を上った所に、住んでいた団地があるんです。あ、あそこの商店街で良く買い物をして」

再び広い道路に出た2人の向かい側に見える、アーケードの入り口を指差しながら清香が説明してきた為、思わず聡はクスクスと笑いながら確認を入れた。

「ああ、いつか聞いた、清香さんがマスクメロンへの愛を熱く叫んだ商店街？」

「さっ、聡さん！笑わなくても良いじゃありませんか!？」

途端に顔を赤くして喰ってかかる清香に、聡はますます笑いを誘われる。

「ごめん、でも見てみたかったな、当時の清香さん。きっと可愛かっただろうし」

「もう！聡さんって結構意地悪です」

パイと顔を背けてしまった清香を聡が何とか宥めつつ歩いていると、ふと清香が思い付いた様に口を開いた。

「あ……、マスクメロンって言えば……、あの後おじさん達と初めて顔を合わせたんだっけ。何となく思い出しちゃった」

「え？ おじさん達って誰の事？」

不思議に思っただけで尋ねると、清香は懐かしそうに思い返ししながら当時の事を語った。

「実は商店街で『マスクメロンが欲しい』ってゴネた直後、お母さんと幼稚園から帰宅したらお客さんが三人います。お母さんが『清香、ご挨拶しなさい。お父さんと昔からの知り合いの』柏木さんと倉田さんと松原さんよ』って教えてくれたんです。そして何故かおじさん達全員、マスクメロンをお土産に持って来てまして」

「……へえ、豪勢だね」

何とも言えない表情で取り敢えず感想を述べた聡に、清香は大きく頷いた。

「そうですね。それに3人ともなんて凄い偶然。それで私、夢にまで出てきたマスクメロンが3個も目の前に有るので、もう嬉しくて嬉しくて！」

「……それはそうだろうね」

「皆』さあ、私の持つてきたメロンも食べなさい』って次々勧めるからウキウキで食べて、食べ過ぎてお腹が痛くなっただっていうオチなんですけど。それ以降“マスクメロンのおじさん”って三人に凄い懐いちゃいました」

喜色満面で当時の事を語る清香から聡は何となく視線を逸らし、遠い目をしてから再度慎重に問い掛けてみた。

「清香さん……、ちょっと聞くけど、柏木さん達が来ている間、お母さんはどんな顔してた？」

「どんな顔って、何ですか？」

「その……、迷惑そうな顔とか、睨んでたとか……」

それを聞いた清香は不思議そうな顔をしながらも、真面目に答えた。

「最初から最後まで、もの凄くにこにこしてましたよ？ 帰ってからも文句とか言いませんでしたし、その後尋ねて来た時もいつも笑顔で対応してましたし」

「そうなんだ……」

（なんとなく分かった……。恐らく柏木サイドが香澄さんと和解したくて周囲を興信所とかで探らせてた時、マスクメロンの話を偶然耳にしたんだろう）

そこまで考えた聡は、かつての地元であるこの周辺の事について、嬉々として話している清香をチラリと横目で見やった。

（それで喜び勇んで押し掛けて清香さんに好印象を持たれるのには成功したものの、恐らく終始怖すぎる笑顔の香澄さんから『余計な事清香に一言でも漏らしたら承知しないわよ！』って無言の圧力を受けて、結局実の伯父だと打ち明けられなかったんだな）

そこで柏木兄妹の心境を思い、思わず小さな溜め息を吐く聡。

（しかしそのまま十数年経過ってどうなんだ？ しかも香澄さんはもう亡くなってるのに。香澄さんの執念深さもそうだが、妹の前にまず子供の懐柔をと、いそいそとマスクメロン抱えてご機嫌取りに出向くのもどうかと……。柏木三兄弟と言えば柏木総一郎氏の長男である雄一郎氏は勿論、婿入りした次男、三男も業界内ではいずれ劣らぬ切れ者揃いと評判なのに、そんなイメージが音を立てて崩れて）

「……さん、聡さん！」

「え？ 何？」

強い口調での呼び掛けに思考を遮られ、慌てて聡が清香に注意を向けると、彼女は幾分心配そうに聡を見上げてきた。

「いえ、話しかけても上の空なので……。ひよつとして運転して疲れましたか？ それともお仕事の疲れが残っているとか……」

その問い掛けに、聡は慌てて首を振った。

「ああ、ごめんね。ちよつと考え事をして。何かな？」

「そろそろ道場が見えてきましたから。あれです」

「あれかい？ へえ……。思っていたよりも本格的だね」

清香が指し示す先には、昔ながらの町並みに突然出現した、かなり幅が取られている門柱の向こうに、広い戸口を開けている白い壁と瓦葺きの道場が見えた。聡を促してその門を通り抜け、開けっ放しの玄関に入り靴を脱いで下足箱に入れると、清香が躊躇う事無く奥の引き戸を開けて元気の良い声を放つ。

「師匠、こんにちは……っ！」

戸を開ける前から勇ましい掛け声や衝撃音が響いていたが、清香がそう叫んだ途端その喧騒がピタリと静まり、畳が広がる向こうの空間からカラカラと笑う声が聞こえてきた。

「おう来たな、嬢。珍しく彼氏連れとは、骨のある男も居たもんだ。ほら、遠慮せんで入れ入れ」

「かつ、彼氏つて！ そんなんじゃ！」

「本日は、お邪魔させて頂きます」

「あのっ！ 聡さん!？」

清香が何と説明すれば良いかと狼狽えている間に、聡は声をかけてきた小柄で白髪だが張りのある肌の老人がこの責任者であろうと見当を付け、スタスタと歩み寄って頭を下げた。

そして男2人で何やら小声で言葉を交わしている間に、柔道着姿の小学生から中学生位までの少年達が、清香の周りにわらわらと走り寄って来る。

「さや姉、久し振り……！」

「あゝ、師匠が言ってた通り男連れ」



「清人さん公認？ んなわけ無いよな」

「ねえ、本当に師匠が言つてた様に彼氏？」

「でも絶対清香さんの方が強いよね？」

「あ、あのねえっ！」

好き勝手に言われてさすがに清香が切れかけた時、何やら話が纏まったらしい聡と清香の柔道の師匠である槇村が、笑顔で声をかけた。

「それじゃあ、嬢！ 儂はこのボンを連れて更衣室に行つとるからな。貸す奴はいつもの所に置いてあるから勝手に使え！」

「あ、は、はい。分かりました」

「牧村さん。そのボンと言つのは……」

控え目に主張してきた聡に、槇村が真面目くさつて言い返す。

「嫌かの？ なら小僧、若造、若いの、ハナタレ」

「もうお好きな様と呼んで下さい」

「うむ、人生諦めが肝心だからのう」

そう言つて「うわははは」と槇村が高笑いしながら聡を引き連れて道場を出て行くのを見送つた清香は、自分も周囲を振り切つて更衣室に飛び込んだ。

「それじゃあこれを使って貰おうかの。使い終わつたらこちらで洗濯するから、そのまま置いて行つて構わん」

「ありがとうございます。お借りします」

更衣室に入つてすぐ準備されていた柔道着を槇村に手渡され、聡は素直に礼を述べた。そして視線で示された棚に脱いだ服を畳んでしまつていく。何故か柔道着を渡した後もその場に居残つていた槇村は、インナー姿になった聡をしげしげと眺めてから、徐に口を開いた。

「……ちよつと尋ねても良いかの？」

「はい、何でしょうか？」

「お前さん、見た目に似合わず結構引き締まつた身体しとるの。」

何か運動はしとったか？」

「中学から大学までテニスを」

淡々と答えながら下履きを穿いていく聡に、槇村は納得した様な口調で続けた。

「ほう、まあそれなりに瞬発力と動体視力はありそうじゃな。ちなみに柔道の経験は？」

「中高一貫の男子校だったので、体育の授業でそれなりに」

何故か苦い物を含む様な言い方に、槇村は面白そうに口許を歪めながら話を続けた。

「なかなか偏った指導をされてそうじゃの。受け身の取り方と寝技からの抜け方は、散々やらされて結構上手くなったじゃろ」

「どうして断定口調なのか、お聞きしても良いですか？」

そこはかとなく嫌な予感を覚えた聡が上衣の袖に腕を通しながら尋ねると、槇村は事も無げに言い切った。

「お前さんみたいに金持ち顔良し頭良しだと、体育会系の嫉妬を一身に受けて、散々しごかれそうじゃからの。違つとるか？」

「……ご想像にお任せします」

思わず顔を引き攣らせながら聡が答えると、相手はわざとらしく目を見開き、感心した様に言つてのけた。

「清人の奴と違って素直じゃの」。 “金持ち顔良し頭良し”の所を否定せんとは」

「……………」

もう何も言う気がしなくなった聡は、黙って白い帯を締めた。

そして2人で連れ立って道場に戻ると、殆ど同時に清香も戻って来たのを見て、槇村が指示を出した。

「じゃあ僕は子供達に稽古をつけてくるから、お前達は体を解しておけ」

「「分かりました」」

頷いて道場の隅の方に移動した2人は、二人一組でストレッチを始めた。

「じゃあ始めましょうか」

「ええ。……清香さん、先生もここに通っていたんですね。どれ位なんですか？」

柔軟体操をしながら聡が尋ねると、清香は体を折り曲げて考え込みながら答えた。

「えっと……、期間の長さなら10歳の頃からですね。強さって事なら二段です」

「黒帯ですか……」

淡々と口にされた言葉に、思わず溜め息を吐きたくなる聡。両手を組んで互いに引っ張り合い、筋を伸ばしながら清香が当然の如く話を続けた。

「最近は何ヶ月かに一度ここに顔を出す位ですけど、学生の頃は週に何回も通ってましたし。講道館にも月に何回か、形の指導を受けに通ってましたね」

「相当強いみたいだね」

聡がそう口にした瞬間、清香は繋いでいた手をパツと解き、満面の笑みで聡に訴えた。

「ええ、もう、とても格好良いんですよ！？ バッタバッタと相手を投げ飛ばしているお兄ちゃんは！ 近所のお姉さんやおばさん達が、私設ファンクラブを作ってた位ですから！」

「そうだろうね……。因みに清香さんは？」

多少やさぐれた心境に陥った聡が話を逸らそうとしたが、更に落ち込む結果となった。

「私、ですか？ 12の時に引っ越して、近くにめぼしい道場も教室も無かったんです。それでも以前は週一でここに通って来てましたが、流石に最近は真面目に通って無いので、二級止まりです」

「……それでも立派だと思っけど」

真顔で告げられた後は少しの間黙々と準備運動をしていたが、一区切り付けて深呼吸した所で、タイミング良く槇村から声がかけられた。

「よし、準備は良いかの？ 嬢、久し振りに小僧達と乱取りせんか？ そつちの男は儂が基本を教えといてやるから」

そう言われた清香はちよつと驚いた様な表情で槇村を見詰め、次いで幾分心配そうに聡を見上げた。

「構いませんか？」

「ああ、俺だと相手にならないと思うからね。遠慮しないで」

「じゃあ行つてきます」

その場に槇村と二人で取り残された聡だが、別に怖気づく事は無く平然と相手を見下ろした。その視線を受けた槇村が、如何にも楽しそうに笑つ。

「なかなか度胸は有るようじゃな」

「先程も言いましたが、投げられるのには慣れていきます。投げられていた頃は、それに感謝する日が来るなんて、予想だにしていませんでしたが」

苦笑いその顔に浮かべた聡を見て、槇村は小さく噴き出した。

「ふっ……、それこそ『人生万事塞翁が馬』と言つやつじゃな。じやあまず組んでみるか」

「お願いします」

そうして頭を下げた聡に手を伸ばし、まずは最初に槇村は基本的な立ち位置の確認や、重心のかけ方などをしてみせたが、一通りやってみて聡が基本はできているのを確認してからは、実戦に沿った動きをしてみせ始めた。

「ほう、ど素人で無くて安堵したわい。それだったら流石に投げ飛ばしたりしたら良心が痛むからの」

「それは良かったです」

そんな会話を交わしていると、少し離れた所から甲高い声が響き渡った。

「さあ、どつからでもかかってきなさいっ！」

「いつくぜー！ ぶん投げてやるからな。後で泣くなよっ！」

「十年早い！」

「ぐわあっ！」

「さや姉！ あんまり暴れてると、そこの彼氏に振られるって！」

「余計なお世話っ！」

「ぐはあっ！」

「次、俺ね。嫁の貰い手が無かったら、俺が貰ってやっ」

「んな事言つてないでしっかり踏み込めーっ！」

「ぐわああっ！！」

年下とはいえ体格的には負けていない少年たちを次々投げ飛ばし、押し倒し、絞めまくっている清香を見て、思わず槇村は動きを止め、カラカラと笑い声を上げた。

「相変わらず元気じゃの〜」

「はあ……、良いと思いますよ？」

それ以上何とも言えずに苦笑いした聡だが、次の瞬間、槇村がその懐に踏み込みながら勢い良くその襟を掴み上げた。

「嬢はな、『お兄ちゃんみたいに強くなりたい』と言って、柔道を始めたんじゃない。ほれ、しっかりかわせ！ 襟を取られるな！」

「すみません」

足払いをかけて来る槇村から動いて距離を保ちつつ、再度聡が注意深く相手の動きを追う。

「それでな？ 清人の奴は『強くないといけないから鍛えてくれ』  
と言つてきおった。ほれ」

「え？ ぐっ……」

何気ない世間話をしながら槇村が聡の一瞬の隙を突いて片手を取

り、予想外の方向に重心を崩されて聡は引き倒され、呆気なく畳の上に転がった。そんな仰向けの聡を見下ろしながら、槇村がしみじみと続ける。

「『強くなりたい』と『強くないといけない』では、響きは似とるが天と地ほどの違いがあるからの。まあ、柔道には身体的鍛錬と精神的修行の両側面があるから、取り敢えず面倒をみてみる事にしたが」

「そうですか」

なんとなく気まずい思いを抱えて立ちあがった聡だったが、先程より動きが鈍った聡の足を蹴り上げる様にして、横方向から投げ飛ばす槇村。

「ほら、甘い！」

「うっ……。本当に容赦ないですねっ！」

「馬鹿にするな。初心者相手に本気でできるか。なら本気でやってみるぞ？」

「うわっ……。ちよっ……。待っ」

起き上がろうとした所をあっさり転がされ、押し掛かられつつ動きを封じられた聡が呻く。

「あいつは確かに腕っぷしは強くなったが、他の所はな。師匠の儂に『気に入らん奴が行くからボロボロにしてやってくれ』と電話してくるなんぞ全くなつとらんし、相変わらず嬢に関しては馬鹿丸出しで困ったもんだ。なあ、そうは思わんか？」

「押さえ込みながら、同意を求めないで下さいっ!!」

何とか腕を抜こうとしながら足を使って体を捻っていた聡が、畳を叩きながら切羽詰まった声で訴えた。それに軽く笑いながら、槇村が手を放して立ち上がる。

「おお、すまんすまん。つい力が入ってな」

飄々と告げた槇村の前で、聡も慥然としながら柔道着の乱れを直

しつつ立ち上がったが、そこで威勢の良い掛け声が道場内に轟いた。

「とおりやああつ！！」

「うっわー、さや姉、容赦なさすぎ！」

周田が悲鳴を上げる中、榎村が見事な一本背負いをかけた清香を見ながらしみじみと言いつ出した。

「……嬢が真つ直ぐに育ったのはなく、あやつが自分の根性がねじ曲がってる事を自覚しとったから、その分気合い入れて守って真つ直ぐ育ててきたせいじゃな。まあ、それが悪いとは言わんが。……ところで、お前さんの名前をまだ聞いとらんかったが、何聡と言っくんじゃ？」

「……小笠原、です」

いきなり名字を問われた聡は、一瞬口ごもったものの観念した様に本名を口にした。すると榎村が微妙に目を光らせ、探る様な視線を向ける。

「ほう？ 何やら以前、聞いた事が有るような無いような名前が出てきたの」

「そうですか？ そんなに珍しい名前でも無いので、何かの折りに耳にされたんでしょうね」

「そうかもしれんな」

その場に白々しい空気が流れる中、聡は確信した。

（この人は……、絶対に兄さんから聞いてるし分かってる。兄さんの性格がねじ曲がってるって言うなら、この人から精神的影響を受けたのも一因なんじゃ）

「それは邪推と言うものだぞ？ 若いの」

「俺は何も言つてませんよ！ 一体何なんですか！？」

突然前振り無く真顔で言い聞かせてきた榎村に、思わず畳にへたり込みそうになった聡だった。

そして小休憩を挟みつつ小一時間程経過した所で、榎村が徐に言い出した。

「嬢。そろそろ小童どもに稽古をつけないといかんから、お前がこれと組んでくれんか？ そんなに筋は悪く無いから、投げの練習相手位にはなるじやろう」

「はあ？」

思わず当惑の声を上げた聡を、榎村はじろりと睨みつけた。

「なんじゃ、不服か？」

「……いえ」

「じゃあ嬢、暫く揉んでやれ」

軽く言われて、流石に清香も不安な表情を見せる。

「はあ……、でも大丈夫ですか？ 聡さん」

「ええ、何とか。無理にお付き合いさせて貰いましたし、練習台位にはなりますよ？」

「そうですか？ それなら宜しくお願いします」

そうして一礼して組み合った2人だが、聡の予想以上に清香の動きが早く、一分持たずに足を払われて畳に転がった。

（早いな……、やっぱり手加減してくれてたつて言うのは本当だったか……）

苦笑いしながら榎村の表情を窺うと、笑いを堪えて自分達の方を見ているのが分かった。それで逆に聡の中で冷静さが戻って来る。

「もう一度お願いします」

「はい」

清香の手足の動きに神経を集中させながら、聡は慎重に攻め方を考えていた。

（とにかくまず動きに慣れる事だな。そして投げ技だと敵う筈がないから、なんとか寝技に持ち込めれば……）

そんな事を考えながらも聡は次々と技を決められてしまい、忽ち五回を数えた。



(冗談じゃない。投げられっぱなしで終わってたまるか！！)  
そんな決意も新たに、片手を付いて立ち上がりながら清香に申し出る。

「すみません、清香さん。もう一回お願いします」

「えっと、あの……、本当に大丈夫ですか？ 聡さんは初心者ですし、そろそろ休憩した方が……」

「何となくコツが掴めて来たので、続けてもう少しやっておきたいんです」

「……分かりました。それではお願いします」

「はい」

瞬時に真剣な顔つきになり構える清香に、聡も再度気を引き締めた。そして時を置かず清香が足を踏み出し、道衣を掴もうと手を伸ばして来る。対する聡も素早く体を捻りつつ手を払いのけ、すかさず逆に清香の懐に踏み込んだ。

(とにかく、より素早く踏み込んで、良い形を取る)

自分に言い聞かせながら両手で柔道着の襟近くを掴んだ瞬間、聡は力一杯清香を手前に引つ張った。それと同時に清香が僅かに体勢を崩した隙を突いて、彼女の足の間に右足を勢い良く踏み込み、その反動をつけて清香の左内腿を自分の右脚で跳ねあげようと試みる。しかし流石に年季の入り方が違う清香は、片足になった状態で踏み止まり、逆に左脚を畳に着けた瞬間、体を捻って再度手を伸ばして来た聡の右足の踵の上方を、勢い良くつま先の方向に払った。

堪え切れず背中から倒れた聡だが何とか受け身は取り、体を捻って逃れようとしたが、清香が素早く覆いかぶさる体勢になる。体重差が有る為此のまま崩れて逃れるかと思いきや、清香は隙の無い動きで聡の右腕を自分の左腕で深く挟みこみ、右腕を聡の首の下から差し込んで首を抱え込みつつ柔道着の前襟を掴んで袈裟固めの体勢に入った。しかし聡も体格差と長い手足を生かして、体を捻って何

とか逃れようと抵抗する。

その一部始終をひやかし気分で見っていたギャラリーは、呆れ半分感嘆半分の呟きを漏らした。

「すっげ〜、あの兄ちゃん」

「さっきまでバツバツ投げられてたつてのに」

「ああ、初心者癖に、何とか形になってんじゃね？」

「さや姉の腕が鈍ってるって事じゃないよね？」

「素人の根性を舐めちゃいけないって事かな」

「だよな〜。惚れた女に投げられっぱなしってのは、プライドスタスタだろうし」

少年達が好き勝手な感想を口に出しているのを耳にしながら、榎村は一人ほくそ笑んでいた。

「ほう？ なかなか頑張るのお、若いの。まあ、あの清人と真つ向から張り合おうとする男なんだから、これ位は当然じゃろうなあ…」

…」

そう言ってから、榎村はチラリと明かり取り用の窓を眺める。

「さて……、それではついでに余計な小ネズミにも、稽古をつけてやるつかの？」

そして畳の上で組み合っている清香と聡に背を向けた榎村は、含み笑いをしながら道場の外へと足を運んだのだった。

その日の夜。清香と夕飯を食べてから自室に引き籠った清人は、早速ある人物に電話を入れたのだが、相手の話を聞き始めてすぐに激しい怒りに駆られた。

『……いや〜、こっそり覗いていたつもりが、爺さんに見つかっていきなり道場の中に引きずり込まれました……』

「……………随分なへマをやらかしましたね。それでもプロですか？」

自分の声が万年雪より冷たいのを自覚しながら、清人は電話の相手に対する憤りを堪え切れなかった。そして清香が帰宅時に何も言っていないかった為、可能性は無いと思いつつも一応気になった事を尋ねてみる。

「それで？ 俺が清香に尾行を付けていたのがバレたんですか？」  
『いえ、それが……。流石に相手の男は勘付いて嫌な顔をしてましたが、爺さんが「この若いのも体験希望だそうだ。今日は多いの、皆で揉んでやれ」と誤魔化してくれまして……。妹さんにバラさせる代わりに、ガキどもに寄ってたかって散々投げ飛ばされました。今回は酷い目に合いましたよ』  
（完璧に面白がってますね？ 師匠……。相変わらずお達者の様で何よりです）

思わず清人は溜息を吐いてしまい、相手は多少情けない声で報告を続けた。

『妹さんが帰ると殆ど同時に開放して貰いまして、あの男がちゃんと寄り道せずにお宅まで妹さんを送り届けるのは確認しましたから、勘弁して下さい』

「分かりました。今後はそんな失態が無い様をお願いします」

『はい、勿論です。ああ、今日の報告分をメールに添付して送信しましたので、確認お願いします。それでは』

そこで忌々しい会話を終わらせた清人は、机に向かってPCのメールボックスを開いてみた。すると新着メールの中に告げられた内容の物を認め、何も考えずにそれを開いてみる。

そこには今日一日の清香の行動内容の報告と、その時々様子を示す写真が添付されていたが、ある所で画面のスクロールが止まり、清人の顔が憤怒の表情に染まった。

「あの野郎……、やはり徹底的に叩きのめしてやる……」

清人にそんな決意を新たにさせたのは、清香と聡が互いに寝技をかけようと、畳の上で絡み合っている何枚かの写真だった。

小笠原物産営業部第一課の不幸過ぎる冬は、もうそこまで来ていた。

## 第20話 吹き荒ぶ寒風

学食で日替わり定食を食べていた朋美は、何を思ったか唐突に箸の動きを止め、テーブルの向かい側に座っている清香に目を向けた。「うふふふふ……」

そのどこと無く薄気味悪い笑いに、ナポリタンを食べていた清香がフォークの動きを止めて怪訝そうに見やる。

「何？ 朋美。気持ち悪い笑い方をして」

「もう12月だなぁって思ったのよ」

「そうね。それが？」

不思議に思いながらコップに手を伸ばし、清香が一口水を飲んだ所で、朋美が幾分強い口調で尋ねてきた。

「寝ぼけてるんじゃないわよ！ 12月と言ったらクリスマスですよ！ どうするのよ？」

「……そうね、そろそろツリーを出さなきゃ」

若干考え込み、真顔で今後の予定を口にした清香に対し、朋美は僅かに苛々した様に箸を皿に乗せて問い掛ける。

「そうじゃなくて！ 今年はイブをどうするのかって聞いているの！」

その問いに、清香は首を傾げた。

「どうするって……、いつも通りお兄ちゃん特製のディナーを食べ……。他には特に何も」

「はあ？ 聡さんはどうするのよ」

「だから、どうするも何も……、聡さんからは何も言われて無いし」  
怪訝な顔した清香に、朋美が呆れた果てたといった表情で問い質した。

「どうして！？ あんた達付き合ってるんじゃないの？ この前あんたの兄貴に対して一歩も引かずに、オークションでガチンコ

勝負してたくせに！」

「あれは、聡さんも『ついムキになって大人気なかった』って後から謝ってたもの。元々競り落とそうとしたのも、私があのアレンジが売れ残ったらどうしようって心配してたから、親切心から気を回してくれただけだしね」

そうして何事も無かった様に食事を再開した清香に対し、朋美は如何にも疑わしげな視線を向けた。

「……その状況で、付き合ってた無いつて？」

「うん、別に聡さんに告白とかされて無いし。それに私、女性としてはよっぽど魅力が無いと思うから、聡さんは他の人達と同様私の事を妹みたいに思って可愛がってくれてるだけよ」

事も無げに言い切った清香に、思わず朋美が憮然として尋ねる。

「なんでそんなに自分に魅力が無いと思うのよ？」

「だって私、これまで告白されても、『やっぱり気が変わった』とかでお断りされたり、『他に好きな人ができた』って謝られたりしてすぐに別れる事になってるし。最短記録は1日だよ？ どう思う？」

「さあ……、どうしてかしらね」

その理由に心当たりが有り過ぎた朋美は、気まずい思いを抱えて清香から視線を逸らした。

（全く……、あのシスコン男にちよつと脅された位で、悉く尻尾巻いて逃げ出すんじゃないわよ！ それを考えるとあの聡さんって、未だに粘ってるみたいだから貴重な存在なのよね……）

そんな事をしみじみ考えていると、清香が再び食事の手を止めて独り言の様に言い出した。

「やっぱり男の人って、朋美みたいに世慣れてる感じの人が好きなのかな？」

「……どうして比較対象が私なのよ」

「だって心変わりした人の九割位の人が『実は朋美さんの方が好きだった』とか『朋美さんを好きになった』とかって言って、別れを切り出してきてるから……」

そう言つて幾分気まずそうに自分を見てくる清香の視線を受け、朋美は心の中で過去に清香をふつた男達に罵声を浴びせた。

(どいつもこいつも腰抜け野郎どもがつ！ 確かに清香の親友の私を好きになつたけど、申し訳無くて近付けないって風にすれば、私と付き合わなくても不自然じゃないけど。勝手に人を別れの理由にするなつ！！ そのせいで私は親友の彼氏を悉く奪つてる、性格悪い女つて陰口叩かれてるんだからね！)

これまでに陰で散々とぼつちりを受けまくりで憤つていた朋美だったが、流石に清香に対しては弁明しておこうと口を開いた。

「え、え〜つと、清香？」

「何？ 朋美。さつきから何か変よ？」

「あの……、清香をふつた馬鹿な連中が何を言ったのかは知らないけど……。それは私は全然預かり知らない事なんだからね！」

その切実な訴えに、清香は何も含む所の無い、晴れやかな笑顔を見せた。

「大丈夫よ朋美。そんな事はとづくに分かつてるし、全然気にしてないわ」

「そ、そう？ ありがとう」

「だってその人達、その後実際に朋美と付き合い合つたりしてないし。いつも私が朋美の側にいるから、きつと声をかけ難いのよ。だから朋美の交際範囲と可能性を狭めているみたいで、却つて悪いな〜と思つてる位だし」

(うつ……、清香の性格が良いから、私達未だに友人付き合いが出来てるのよね……。清香つてそれほど親しく無い人間に対してはそれなりに警戒心を持つてるけど、身近な人間の言う事は素直で疑い

もしないタイプだから、本当に気が咎めるわ……)

淡々と自分の思いを語る清香に、朋美は改めて罪悪感にまみれながら、清香に言い聞かせてみた。

「あのね、清香。少なくともあの小笠原さんだけは、あの馬鹿な連中やお兄さんもどき達とは違うと思うんだけど」

「え？ どこが？ どういう風に？」

本気でそう問い返してきた清香に、朋美はどう言ったものかと少しの間落ち着かなさげに左右に視線を彷徨させたが、結局頂垂れて突き放す様な言葉を返した。

「ごめん……、その所は自分で考えて判断してくれるかな？」

「……うん。分かった」

何となく納得出来なかったものの取り敢えず清香は頷き、それから二人で黙々と食べる事に専念した。そして少ししてから、ふと清香がその手を止める。

(クリスマス、かあ……。今までお兄ちゃんと過ごす事以外に、考えた事無かったなあ……)

しみじみとそんな事を考えながら、清香は何となく窓の外で揺れている木立を眺めていた。

外回りから戻った聡が課長に簡単な報告をしてから机に戻ると、横の机に座っている高橋が自分の仕事に一区切り付けたらしく、軽く伸びをしてから聡の方に椅子を寄せて来た。

「お疲れ。12月に入ると流石に忙しいな。神谷工業の感触はどうだった？」

「まあまあだな。そっちの調子はどうだ？」

「……最悪だ」

自分のPCを起動させながら問いかけた言葉に、高橋が頂垂れつ



つ暗い声で返してきた為、聡は思わず目を見張った。

「どうして。確か菱倉グループのあれ、お前が担当だろう？ 結構良い線まで進んでるって、この前聞いたばかりなんだが？」

「3日前までな。……あれはボツになった」

「はああ！？ ボツって、お前一体何をした？ 本契約寸前で納入計画の作成まで済んでた筈じゃ！」

驚いて思わず声を荒げた聡を、高橋が僅かに腰を浮かせつつ宥める。

「おい、声が大きい！」

「悪い」

流石に周囲の目を集めてしまった事に気が付いた聡が慌てて声を潜めると、高橋は途端に憤懣やるかたない風情で愚痴りだした。

「それに人聞き悪いぞ。俺は何もしていない。急に社内の方針が変わったの一点張りで、協議を打ち切られた」

「何なんだそれは……」

啞然とする聡に、高橋が尚も続ける。

「先方だつてかなり乗り気だったんだぜ？ あの新素材の梱包材の導入には。軽量かつ裂いても屑が出ないのは、引越しゃ梱包作業の現場でメリットが大きいって。しかも従来之物より低コストで製造・納入できるし。あそこは色々な業種の子会社があるから、幅広く導入していきますって話で」

「それでも断られたのか？ 訳が分からないな……」

思わず怪訝な顔で眺めた聡に、高橋は再度声を潜めて続けた。

「実は後日談もあつてな。3日前に断りの電話が入った後、納得できない課長が昨日再考をお願いしに出向いたら、同じ製品が柏木産業の仲介で納入される事に決まってたそうだ」

「おい、ちよつと待て」

流石に高橋の言いたい事が分かった聡が声を荒げかけると、高橋が真顔で同意を求めた。

「なあ、きな臭過ぎると思わないか？」

「……………」

そこで何とも言えずに黙り込む聡。

（まさか……、単なる偶然だよな？　ここで柏木産業の名前が出てきたのは。おそらく菱倉の内部に、柏木の人間と懇意にしてる人間が居たとかで、偶々今回出しぬかれただけで……）

不吉な予感を覚えて冷や汗を流しながら自問自答していた聡に、高橋が更に不安を煽る内容を口にした。

「……………ここだけの話、他にもうちの課が手掛けている話が、立て続けに何件か潰れている様なんだ。先週辺りから課長がピリピリしてるだろ？」

「確かに神経質になっていいるとは思ってたが……、そのせいだったのか……………」

顎で向こうの机を示され、聡が強張った顔のまま反射的に頷く。

「この不況下でも、他課の売上高は何とか昨年実績をギリギリ保つレベルで推移してるからな。うちの課だけ業績ガタ落ちだと、課長の評価にも響く事確実だし」

「どうしてこう年末に重なるかな……………」

気難しげな上司の顔を見ながら思わず溜息を吐いた聡に、高橋は自分の気持ち奮い立たせる様に、深刻そうな表情を一変させて苦笑いしてみせた。

「年末ですつきり厄落として、新年からはガンガン行きたいもんだな」

「同感」

思わず笑いを誘われて聡が頷き、報告書作成の為のページを開いた所で、高橋が口調を変えて尋ねてきた。

「ところで話は変わるが、年越しの前にクリスマスだろ。お前どうするんだ？」

「どうするって?」

「この前話した“さやかちゃん”。誘うんだろ？」

思わず手の動きを止めて高橋を見やった聡に、相手はにやりと笑ってみせた。しかし聡は真顔になって一瞬考えてから、再び画面に向き直って手を動かしながら淡々と告げる。

「それは……、無理かな？ 彼女は多分、クリスマスはお兄さんと過ごすと思うし」

「はあ？ なんだそれ？ 彼氏より兄貴なのか？ しかもお前、誘う前から諦めてどうするよ!」

「そう言われてもな……」

身を乗り出して来た高橋に苦笑しつつ、聡は頭の中で冷静に考えていた。

（誘っても兄さんが許す筈無いし、下手にちょっかい出して怒らせても……）

そんな事を思いながら、同僚を納得させる様に結論付ける。

「前にも言っただけど、彼女は恋人ってわけじゃないし」

「じゃあ全然会って無いのか？」

「時々は会ってるけど。でもここ半月近くは、メールのやり取りと電話だけだな」

「へえ……。まあ、師走だしな。因みにクリスマスは他の女との約束は」

「無い」

即答した聡に、高橋が本気で驚いた目を向ける。

「珍しいな」

「……そんな珍獣でも見る様な目つきは止めてくれ」

思わず溜息を吐いてから仕事を再開した聡だったが、器械的にキ

ーボード上で指を動かしながら、清香の事を考え始めた。

（でも……、駄目もとで話をしてみようか。申し訳無く思っ、他の日を調整してくれるかもしれないし）

そこまで考えて自然に笑みが浮かび、指の動きも止めて自分の考えに浸った。

（母さんも当初の予定の半月遅れで退院が決まったから、来週末にでも招待してみればちょうど良いかな？ 母さんも彼女に何かあげたい物があるとか言ってたし、後は兄さんが横槍を入れて来ない様に、如何にも尤もらしい理由を付けて……）

そんな事を考えていた聡の思考を、どうやら隣から様子を窺っていたらしい高橋の声が遮った。

「……おい、何独りでニヤニヤしてんだよ」

「別に何も？」

反射的に惚けた聡に、高橋が白い目を向ける。

「いーや、絶対そのさやかちゃんの事を考えてた。やーらしいな」

「そんなんじゃないから」

画面から目を離さず淡々と否定した聡に、高橋が苛立たしげに椅子の向きを変えて迫りながら訴えた。

「あーム力つく。仕事もプライベートも順調な奴なんて。お前が今関わってる近海でのレアメタル採掘調査事業は、今のところ必要な機材や物品を調達して運用するって地味な仕事だけど、埋蔵量が確定して採掘量が実際に飛躍的に伸びたら、流通販売もうちで一手に引き受けようっていう、大化けするかもしれないビッグプロジェクトだろ？ よっぼど上に期待されてるんだよお前。どっちもボロボロの俺に少し運をよこせ！」

そこで相手の台詞に疑問を覚えた聡が、手を止めて不思議そうに問いかけた。

「仕事はともかく、プライベートもって。お前彼女は？」

「……先月末に別れた」

「……………今度奢る」

そこで一気に沈鬱な雰囲気醸し出した同僚に、聡が慰めの言葉をかけようとした時、少し離れた所で課長である杉野が驚きの声を上げた。

「……………はあああつ!? 何ですか。そんな馬鹿な話があるわけ……………、何ですって!?!」

「何事だ?」

「さあ……………」

尋常では無い上司の様子に、2人は勿論他の部下達も仕事の手を止めて杉野を凝視する。そんな視線にも気が付かない様子で、杉野は受話機片手に立ちあがったまま、必死の形相で電話の向こうの相手に訴えていた。

「……………いえ、それは……………、そんな!こっちは納得できませんよ!……………ええ?もしもし!?!」

何分かそんな押し問答をしてから杉野は放心した様に耳から受話器を離し、叩き付ける様に元の場所に戻した。そして少しの間机に両肘をつけて頭を抱えていたが、思い出した様に声を張り上げる。

「角谷、ちよつと来い!……………川北もだ」

「はい! じゃあちよつと行って来る」

「ああ」

あまりありがたくなさそうな指名を受けた聡だったが、嫌がる素振りなど微塵も見せずに立ち上がり、高橋に声をかけて歩き出した。その背中を何事かと、心配そうに高橋が見送る。

そして杉野の机の前で、主任である川北と並んで立った聡は、神妙に杉野の言葉を待った。

「課長、どうかしましたか?」

怪訝な顔つきで川北が口火を切ると、杉野はいつもにも増して沈鬱な表情と声音で話し始めた。

「お前達が中心になって進めていた“あれ”なんだが……」

「はい、三宅研究室と高見重設の意見を集約して今後の計画作成は終わりました、後は各種登録手続きをするだけです。角谷、行政手続きの進行状況は？」

如才なく杉野の言わんとする事を察した川北がスラスラと現状報告をし、中心となって動いていた聡に続きを促した。それに小さく頷いて聡が後を引き取る。

「経済産業省、及び国土交通省への折衝と手続き代行は、滞りなく進めています。プロジェクトに参加する各企業に対しての説明も済んでいますので、来週頭には各社に出向いて本契約を」

「駄目になった」

「「は？」」

聡の話の途中でいきなり口を挟んできた杉野にも驚いたが、それ以上に言われた内容が咄嗟に理解できなかった聡と川北が、揃って間抜けな声を上げた。それを聞いて再度杉野が端的に告げる。

「その契約は中止だ。ご苦労だった」

「「え？」」

苦々しげに短く告げた杉野に2人とも呆然となったが、驚きの後すぐに猛烈な怒りが湧き上がってきた。

「どうしてですか、課長！ 納得できません！」

「特に大きな問題もこれまで出ていませんでしたし、どうして今更」

「そんな事俺が知るかっ！！ こっちが聞きたい位だ！！」

机に両手を力一杯叩きつけて絶叫した杉野に、目の前の二人はおろかフロア中の視線が集まる。

「課長……」

その剣幕に思わず黙り込んでしまった二人に、両手を組んだ杉野が押し殺した声で呻いた。

「理由は分からんが、今回のこれを仕組んだ奴は分かってるんだ」  
「誰ですか？」

僅かに怒気を孕んだ声で問いかけた川北に、杉野が薄笑いを浮かべつつ淡々と告げた。

「効いて驚け？ 先方の担当者が漏らした所では、何をどうやったのかは知らんが、柏木産業の企画推進課二課長様が裏で糸を引いていたらしい。今回弾かれたうちの代わりに、柏木産業がほぼ同じ条件で契約してプロジェクトを進めていくそうだし」

「なんですつて？」

「……それは本当ですか？」

川北は怒りで顔を赤くし、聡があまりの事態に顔を青ざめさせると、その前で杉野は発狂したかの様に先程にも勝る怒声を発しながら、手にした書類をビリビリに引き裂いて周囲に盛大に撒き散らした。

「柏木は小笠原と全面戦争でもする気なのか？ 一度ならず二度までも……、ふざけやがって、何様のつもりだ柏木真澄！？ 俺に何か恨みでも有るつてのか！？ あの冷血吸血鬼で嫁き遅れの年増女がああっ！！」

完全に平常心を失った上司を見て、聡と川北は逆に落ち着きを取り戻した。フロア中からの驚きと非難の視線を背後に受けた二人は互いの顔を見合わせてから、二人がかりで杉野を宥めにかかる。

「……課長、気持ちは分かりますが、少し落ち着いて下さい」

「今の発言、社内セクハラ防止規則に抵触するかもしれませんよ？」  
「分かってる……」

そこで何とか落ち着いたかに見えた杉野はフラリと立ち上がり、おぼつかない足取りで廊下へと歩き出した。

「……ちよつと喫煙室に行ってくる。後を頼む」

「分かりました」

すぐ近くの係長に断りを入れた杉野は、呆然とした表情で廊下に消え、一課には重苦しい沈黙が漂った。その中を聡は自分の机に向かって歩き始めたが、突如それを遮る様に杉野の机上の電話が鳴り響く。

一瞬反応が遅れたが、係長の海藤が慌てて受話器を取って対応した。

「お待たせして申し訳ありません。杉野課長は只今席を外しております……、はい？」

話を進めるうちに何故か上擦った声を上げた海藤は、受話器を持ったまま背後を振り返った。そして何となくその方向に目をやっていた聡と、すっかり目が合ってしまう。

「はい、……はい、分かりました。今すぐ向かわせます。……それでは失礼します」

海藤と目が合った瞬間激しく嫌な予感に襲われていた聡だったが、それは受話器を置く音と共に確信に変わった。

「角谷君、悪いが今すぐ湊専務の部屋に出向いてくれ。専務が君をご指名でお呼びだそうだ」

「……はい。今から行つてきます」

「係長、どういった用件で、角谷が呼ばれたんでしょうか？」

色々諦めながら頷いた聡だったが、ここで横から心配そうな顔で川北が口を挟んできた。しかし海藤は小さく首を振っただけで言葉を濁す。

「詳しい内容は説明されなかった。ただ……、湊専務は営業部担当の役員だし……。下手すれば今回の件で叱責される可能性も……」

その場に益々気まずい沈黙が漂ってから、立ち上がったまま考え込んでいる聡に向かって、川北が気遣わしげな声をかけた。

「この件は一応俺も関わっているし、一緒に行くか？」



「いえ、どうして自分が呼ばれたかも分かりませんし、取り敢えず俺だけで行ってみますので」

「そうか……。それもそうだな」

あからさまにホツとした様子で頷いた川北に怒る気にもなれず、聡は海藤に対して軽く頭を下げた。

「宜しく願います。それでは暫く席を外します」

「ああ、課長が戻ったら俺が伝えておくから」

すっかり顔色を変えている一課の人間の気遣わしげな視線と、他の課の人間の好奇心に満ち溢れた視線を一身に浴びているのを感じながら、聡は一步一步床を踏みしめる様にして歩き出した。

自分でも険しい顔をしているのを自覚しながら、ふつつつと湧き上がってくる怒りを何とか押さえ込もうと努力してみる。

（あの切れる柏木さんが、進んでこんな強引な手法を取るとは思えない……。どう考えても、他の人間の意図が関わっている筈……）

一人きりのエレベーターの中で、腕組みした聡は壁にもたれながら考えを巡らせ、小さな声で吐き捨てた。

「……幾ら俺の事が気に入らないからといって、ここまでやりますか？ とことん迷惑な人ですね、兄さん」

そしてエレベーターを降りて廊下を進んだ聡は、目指すドアの前で足を止め、深呼吸してから重厚感溢れるドアに手を伸ばしてノックをしたのだった。

## 第21話 遅れて来た反抗期

「失礼します」

秘書の先導を受けて聡が湊の部屋に入ると、正面の机で仕事をしていたらしい湊が相好を崩して声をかけてきた。

「ああ、すまないな角谷君。仕事中に急に呼びつけたりして」

「いえ、それはお構いな、く……」

如才なく言葉を返そうとした聡だったが、手前の応接セットに腰を下ろしている人物を認めて口ごもる。

「父さ……、社長もいらっしやいましたか……」

「居てはまずいのか？」

「……いえ」

小笠原物産社長であり、自分にとって厳格な父親でもある小笠原昭に面白く無さそうな表情で睨まれて、聡も惘然とした表情で言葉を返した。そんな親子を取り成す様に、昭とは入社以来の友人であり聡とも自宅での面識がある湊が、椅子から立ち上がりながら聡に声をかける。

「まあ、そこに座ってくれ。いきなり社長室に呼び付けたら君の立場が無かるうと、私がこいつをここに呼んだのだな」

「……失礼します」

昭とは微妙に視線を外しつつ、湊に断りを入れて聡は長椅子に腰を下ろした。そして湊がその反対側で昭の隣に腰を落ち着けると、手にしていた書類を聡に向かって差し出す。

「それで君を呼びつけた理由だが……、まずこれを見て貰えるか？」

「はい」

素直に受け取って内容に目を走らせた聡だったが、次第にその顔が強張ってきた。

「これは……」

「まだ社内に公表してはいないが、見ての通り、この一月程の間に営業一課が関わっている業務内容のうち、駄目になった物の一覧だ」  
「……こんなに、ですか」

思わず呆然と呟いた聡に向かって、昭が鋭い視線と口調で追い打ちをかける。

「今日は更に大きな仕事が盗られたようだが？」

「……………っ！」

僅かに顔を紅潮させながら、盛大に喚きたいのを何とか堪えた聡だったが、ここで湊が口を挟んできた。

「ところで角谷君。調べてみたら、これらにはちよつとした共通点が有ってね」

「どんな共通点でしょうか？ 確かに一課が取り扱っているのは資源・エネルギー関係と工業用品関係ですから、取引相手に共通点があるとえば有りますが……」

バサバサと書類を捲りながら、困惑気味に再度目を走らせた聡だったが、湊は手を伸ばしてその端を軽く何度かつつきながら、思わせぶりに話を続けた。

「取引相手の企業、及び横から参入した企業の担当者もしくはその上司に、東成大経済学部卒が名を連ねてる。特に特定の年度の卒業生が多いな。後は……、柏木産業の縁故企業とか、柏木兄弟の姻戚関係に当たる家が創業者の企業とか……」

「まだ私達が何を言いたいのかわかんか？」

父親に冷徹極まりない口調で駄目出しをされ、聡は必死に歯軋りを堪えた。

（やっぱり兄さんの仕業か……。たかが一介のシスコン作家と油断したのが間違いだっつな……）

本人に面と向かって言えば叩きのめされる事間違いないの事を考えた聡は、ここまでバレているなら仕方が無いと、潔く腹を括った。

「分かりました、お話しします。一月半位前から佐竹清香さんとお会いしてます。先月末には佐竹清人本人と顔を合わせました」

「厳しい顔の昭に対し、微塵も臆することなく真っ向から言っただけだ。聡の言葉に、湊が思わずといった感じで片手で顔を覆いつつ呻き声を上げた。」

「やってくれたな、聡君」

「湊さんは彼の事をご存知なんですか？」

「不思議に思った聡が湊に目を向けると、湊は苦笑いを零した。」

「昭とは同期入社以来の腐れ縁だからね。因みに、君は《会長ご乱心仏花事件》を知っているか？」

「……何ですか、その得体の知れない名称は」

「呆れて問い返した聡だったが、今まで耳にしていなかった祖父の清人への働きかけと、清人の実の祖父に対して行った常識外れの所業についての全てを湊から説明され、今度は聡が頭を抱えた。」

「（そんな事が……。いや、確かにあの爺さんは自己中心的かつ虚栄心の高い人でしたが、幾らなんでもそれはないんじゃないですか？

兄さん）

「愕然として呆然自失状態になった聡だったが、そこで冷え切った声が耳に届いた為、瞬時に意識を切り替えて心に防御壁を張り巡らせた。」

「聡……。お前に彼の事を話して聞かせた時、私は『彼に関わるな』と言わなかったか？」

「仰いましたね、確かに。ですから彼では無く彼の妹と会っていただけです。彼とは学園祭で予想外に遭遇しましたので、不可抗力です」

「詭弁だな」

「どうぞでもお取り下さい」

「おいおい、二人とも。人の部屋で親子喧嘩は止めてくれないか？」

正面から睨み合い、バチバチと火花が散りそうな雰囲気醸し出す両者を見て、真つ先に湊が音を上げた。しかしここでノックの音と共に隣室に控えている秘書が顔を出し、新たな来客を告げる。

「失礼します。専務、望月様がいらつしやいました」

「ああ、通してくれ」

「それでは俺は」

「まだ話は終わって無い」

鷹揚に頷いた湊を見て、自分は席を外した方が良いのかと腰を浮かしかけた聡だったが、面白く無さそうな口調で昭に引き留められ、無然とした顔付きになる。それを取り成す様に湊が補足説明をした。「君にも聞いて欲しい内容の話をするから、このまま座っていてくれ」

「はあ……」

何となく釈然としない顔つきながらも聡が再びソファに座ると、三十代前半と見られる男が一人室内に入ってきた。

「失礼します」

「ああ、わざわざ足を運んで貰って悪いね。こちらにかけたまえ」

「はい」

役員室に呼び出されて緊張しているのか強張った顔つきで挨拶した彼だったが、指し示されたソファに自分よりも若い聡が座っているのを見て、何となくほっとした様に僅かに顔を緩めた。勿論そんな心境など手に取る様に分かっている湊が、相手の緊張を解す様に笑顔で話しかける。

「望月君、そう緊張しないで。別に叱責しようとしてこんな所に呼びだしたわけじゃ無いんだ」

「は、はあ……」

「役員に就任した途端、現場の人間と交流が持てなくなつてね。私は時々将来有望な若手を選んで、現状の問題点や将来のビジョンに

ついで忌憚のないやり取りをするのを楽しみにしているんだよ。今日は偶々横に鬱陶しいのが居るが、置物だとも思つて率直な議論が出来たら嬉しいと思つているんだ」

「そうだったんですか？　こちらこそ光栄です！　宜しく願ひします！」

《将来有望》の一言で舞いあがつたらしい望月は、横に無表情で座っている昭の事も忘れた様に喜色満面になつて湊に頭を下げた。

そしてその瞳に思慮深い色を湛えながらの、湊の追究が始まつた。

「それで……、私も経験があるが、営業だと仕事をする上で人脈作りと言つのは重要だろう？」

「はい、全くもつてその通りです！」

「仕事関係でのそれも重要だが、商談での話題の幅を広げる上でも、経営畑だけではなくて異種業種の人間との交流は欠かせないんじゃないかな。ひよんな事からビジネスチャンスに結び付く事もあるし」

「そうですね……。以前囲碁が趣味と聞いていた商談相手と、碁石の材質について話が盛り上がった事があります。大学時代に博識な友人が話していたのを、聞きかじつた程度の知識だったんですが」

「なるほど。……しかし普通だったら自分の知識としてひけらかすものを、望月君は友人の話から仕入れた知識と素直に述べる事ができるとは、率直で好ましいな。営業をする上でも真摯な態度は必須条件だからね」

「あつ、ありがとうございます！」

穏やかに微笑まれつつ高評価を受けたと感じた望月は、顔を紅潮させ涙ぐまんばかりに喜んだが、湊の眼が決して笑つていない事を見て取つた聡は、内心で舌を巻いていた。

（……流石、営業部時代は『鬼の角谷、仏の湊』と、父さんと並び称されただけの事はある。喰えない人だ……）

「ところで……、大学時代の友人と言つと、その博識な友人とやら

も東成大の経済学部出身だね？　今は君と同じ様に営業の第一線で活躍しているのかい？」

（え？　ちよつと待て、それってまさか……）

何かを探る様に湊が言い出した内容に聡が嫌な予感を覚えたが、それは望月によつて最悪の形で肯定された。

「いえ、実は彼は俺と一緒にここに内定を貰ったんですが、作家になるからと断つたんです。ご存知ありませんか？　東野薫の名前で活動しているんですが」

（やつぱり……）

思わず頂垂れてしまった聡には構わず、湊は人の良い笑顔を望月に向けた。

「ああ、覚えているよ。佐竹君、だったかな？　面接には私も同席したしね。なかなか優秀な人材が来てくれると喜んでいたのに、縁が無くて残念だよ」

「本当に、彼位頭が良くて見た目も良くて性格が良い奴なんていませんでした。俺も彼と机を並べる事が出来なくて残念です。この内定を辞退をした後、俺に『自分の我が儘で今後の後輩の就職に差し障っては申し訳ない。勝手な事を言つてすまないが、俺の分まで小笠原で頑張ってくれ』って激励してくれて。あいつこそ本当の、男が惚れる男ですね！」

如何にも残念そうに嘆息して見せた湊に、望月も力強く頷く。しかし語られた内容から、望月以外の三人は望月と清人の関係を正確に把握した。

（（性格が良いなんて、絶対騙されてるな……。こいつ友人とか言っていたが、相手はそう思つて無いに決まつてる））

思わず白けた空気が漂つたのも束の間、望月がふと傍らの聡を振り返り、親しげに語りかけてきた。

「ああ、そう言えば！ 君は一課の角谷君だよな？ こんな所で顔を合わせるなんて奇遇だな。君、今佐竹の妹さんと付き合ってるんだって？」

「え？」

いきなりの予想外の台詞に聡が最大に顔を引き攣らせ、昭と湊が鋭く目を光らせた。そんな事とは露知らず、望月が嬉々として聡に話しかける。

「実は卒業以来没交渉だった佐竹が、どうやってか俺の連絡先を調べて最近電話してきたんだ。世間話の後『実は妹がそちらの営業部の男と付き合ってるみたいで、どうも心配だからどんな人物なのか知ってる事があれば教えてくれないか？』と言われたんだよ」

「あの……、それで……」

ソファアの向かい側から突き刺さる様な視線を浴びた聡は、冷や汗を流しながら一応先を促してみた。

「いや、あいつは学生時代から妹の事になると目の色変えてたから。ミス東成大とのデートを『妹が風邪をひいたから帰って消化に良いものを作らないといけない』ってすっぱかす位で」

「は、はあ……」

当時を思い出したのか笑いを堪えながら望月は語ったが、聡は生きた心地がしないまま軽く頷いた。

「まあ、同じ営業部所属といっても課が違うから、電話があつた時点で君の名前と顔も一致してなかったし。だから保留にしてみました、君の事を調べて教えてやったんだ」

「因みに……、どんな事を……」

恐る恐る尋ねた聡の顔色を見て、何やら誤解したらしい望月は、バシバシと聡の肩を叩きながら気合いを入れる様に明るく言った。

「そんな心配そんな顔をするなよ！ 同じ社員の事を悪し様に言うわけ無いじゃないか。レアメタル採掘調査プロジェクトとか、原油精製プラントでの新素材フィルター導入とか、遠心分離機の新機接



合部品の調達とか、社内でも有望と思われてる事業に関わったり任されたりしてる、若手でもピカイチの実力保持者で将来を嘱望されてるイケメンだって、目一杯ヨイショしてやったからな！！ 安心してくれ！」

「……ありがとうございます」

（（（やっぱりこいつか……）））

墓穴を掘りまくりの望月を哀れに思つて頂垂れた聡に、流石に顔を引き攣らせた湊。しかしそれでも昭は無表情のままを無言を保つた。

「まあ、そんなわけで、妹が関わってくる事だから流石にちよつとは風当たりが厳しいかもしれないが、頑張れ！ 最後まで諦めるなよ？ 角谷君」

「ご声援ありがとうございます」

もうほとんど自棄で聡が礼を述べると、湊が輝くばかりの笑顔で望月に話しかけた。

「なるほど。望月君は友人関係でも幅広い交流がある様だね。感心したよ」

「いえ、それほどでも」

照れている望月を一瞬気の毒そうに見やっつてから、湊は彼に別れの言葉を告げた。

「これからもどんどん見聞を広めて、小笠原の為に頑張ってくれたまえ。今日は時間を割いて貰つて悪かったね。もう戻つて構わないから」

「はい！ それでは失礼致します」

よくよく考えれば殆ど清人に関わる話しかしていないのだが、望月は湊の笑顔と話術によつてその事実を誤魔化され、ほんの少しも疑問に思わずに上機嫌で自分の部署へと戻つていった。

そして彼が去つた後の室内で、情け容赦無い評価が下される。

「全く……。笑顔の裏の裏を読めんとは、大した人物ではないな」  
「仕方あるまい。この場合、相手が悪過ぎる。あの程度の人間を誘導するなど、佐竹君にとっては簡単だろう」

「彼は現在主任だったな。来年度の人事異動考察では係長へ昇格の打診がされていた筈だが、問答無用で却下だ」

「漏らしているつもりも悪気も無かったとはいえ、簡単に外部の業務内容を漏らしたのは問題だからな」

（兄さん……。あなた同級生の出世の機会を潰しましたよ……）

暗澹たる気持ちになっていた聡に、昭が再び向き直って声をかけた。

「今話が出た業務の進行状況はどうなってる」

「レアメタル以外は今の所順調に進行していますが……」

「なるべく早急に対策を取れ。……恐らく手遅れだろうが」

「了解しました」

思わず口ごもった聡に冷たく言い放つ昭。一言も反論できないまま、聡は頷く事しかできなかった。

「それに情報源は彼だけでも無いだろう。東成大出身者を中心に、洗い直す必要があるな」

「しかし恐らく本人は意図的に情報を引き出されたとは思っていないだろうから、厄介だな。女を使って誑し込んだりしたら、誰も彼も調査対象になるぞ？」

今後の対応策として一通り湊と意見を交わした後、昭は腕組みをしながら聡を睨みつけた。

「さて、どう落とし前をつけるつもりだ？ 角谷君。君の自分勝手な行動で、既に小笠原は甚大な被害を被りつつあるのだが？ あまりにも馬鹿馬鹿しくて、理由を公表する気にはなれんがな」

「……………」  
社長の顔で迫った昭に、聡は無意識に唇を噛みしめた。すると昭

が端的に告げる。

「さつさと手を引け」

「仰る意味が分かりません」

即座に言い返した聡に、昭の片眉が上がった。

「今更だが、今後一切佐竹清香嬢と接触する事を禁じる」

「いくら社長でも、プライベートに関して指図されるいわれはありません」

「……それなら、父親として息子に言っている」

「お断りします」

「ほう？」

表情を消しつつ淡々と断りを入れた聡に、昭は一層低い声になって凄んだ。

「叩き出されたいか？」

その脅しに似た台詞を、聡はせせら笑った。

「会社からですか？ 家からですか？ 俺は一向に構いませんが、その場合どちらにしてもあの人の関係が取り沙汰される事になりますね。馬鹿息子の俺の後始末を押し付けられるあなたが気の毒です。先に謝っておきます」

そう言つて軽く頭を下げた聡を見て、昭は舌打ちでもしそうな表情を見せた。

「……口が減らなくなつたな」

「あともう一つ。彼女の都合が良ければ、来週末にでも家に招待しようかと思っています」

「何？」

今度こそ殺気さえ感じる視線を昭が投げかけたが、聡はそれを真正面から平然と受け止めた。

「彼女から母さんの退院祝いを貰いましたね。母さんが凄く喜んで、彼女を招きたがっているんです。……ああ、勿論あなたはその日、家にいらっしやらないでも良いですよ？」

睨み合う事数秒。何故か先に視線を逸らしたのは昭の方だった。

「……勝手にしろ」

ソファーから立ち上がりつつ捨て台詞の様にそう呟くと、昭は湊に軽く会釈だけしてその場から立ち去って行った。そして重圧感から解放された聡が、深い溜息を吐きだす。

（取り敢えず、なし崩し的に家に招待する事への了解は貰えたか？）  
自分の気持ちを奮い立たせる様に、前向きにそんな事を考えていた聡の耳に、湊の笑い声が聞こえてきた。

「……っ！ はっ、はははっ！ 聡君、言うようになったじゃないか！ 良い面構えにもなっていたし、今頃反抗期到来か？ あのひよろひよろして、おどおどしてた子供の印象しか無かったから、すっかり見違えたぞ」

「湊さん……。いつの話ですか」

腹を抱えて笑う湊に、小さい頃から顔見知りだった聡は無然として文句を言った。それに気を悪くする素振りは見せず、ひとしきり笑ってから湊は真顔に戻り、心配そうに尋ねた。

「しかし、由紀子さんが清香さんとやらを招待したがつていると言うのは本当かい？」

「はい。兄の事を考えると、俺は難しいかと思っっているのですが……。父もあの通り嫌がつているみたいですし」

「先方の都合は別として、昭の奴は反対しない筈だぞ？ 由紀子さんが希望しているなら」

「どうしてですか？」

その聡の素朴な問いかけに、湊も平然と答えた。

「どうしてって……、昭は由紀子さんに惚れ込んでるから、頼まれたら嫌とは言えないだろう」

「……………はあああっ!？」

予想外の事を言われて聡は本気で驚いたが、湊も予想外の反応を  
されて戸惑いの色を見せた。

「え？ どうしてそんなに驚くのかな？ 聡君」

「いや、だって湊さん！ 父さんが母さんと結婚したのは、社長の  
椅子と財産が目当てでしょう！？」

必死になつて言い募つた聡に、湊が反射的に眉を顰める。

「……聡君。幾ら何でも息子の君がそれは無いだろう。誰に吹き込  
まれてそんな事を信じてるんだ？」

「母から直に聞いたんですよっ！」

「はあ？ …………… まさかあの馬鹿、誤解を正さないまま未だに  
そのままだつて言うわけじゃあるまいな」

叫ぶ様に訴えられた聡の台詞に、湊は一瞬ポカンとしてから苦々  
しい表情をその顔に浮かべ、ボソボソと呟いた。それに逆に聡が疑  
問を覚える。

「何ですか？ 誤解つて……………」

思わず尋ねた聡を見返し、湊は重い口を開いた。

「実は…………、昭の奴入社何年目かの時に、偶々何かの用で来社した  
高校生の由紀子さんに、一目惚れしてな」

「……………は？」

聡が（今、何か変な事を聞いた）という様な顔で呆けている為、  
湊は溜息を吐いて念を押した。

「言つておくが、冗談とかじゃないぞ？」

「あの、でも、まさかそんな！？ え、ええ！？」

動揺著しい聡が必死になつて次の言葉を選んでみると、それを無  
視して湊が淡々と昔語りを始めた。

「だけどなあ…………、相手は社長が溺愛してる一人娘だし、あいつは  
しがない和菓子屋の倅だから、婿として社長のお眼鏡に適う筈も無  
いって最初から諦めててな」

「はあ……」

「あいつはそれでも他の女なんか見向きもしないで、密かに偶に見かける由紀子さんをずっと想っていたんだが、出会って十年しないうちにどこの馬の骨と駆け落ちしたって風の噂で聞いて、もう荒れる荒れる。『こんな俺でも勇気を出して告白してれば良かった』って。一晩中飲んで暴れたあいつに付き合っただけで色々な後始末をしてやったのは、何を隠そうこの俺だ」

「……その節は、父が大変お世話になりました」

心の底から湊に申し訳ない気持ちになり、座ったまま聡は深々と頭を下げた。それに真面目くさって頷いてから、湊が話を続ける。

「全くだ。……結局、由紀子さんの最初の結婚は上手くいかずに何年かで実家に戻っただろう？ 既に当時会長として実権を奮っていた君の祖父は早速縁談を企てていた様だが、由紀子さんは悉く拒否していたらしいな。まあ、彼女の心境を考えれば無理も無いが」

「そこら辺の事情については、母から聞いています」

「外部との縁談が難しくなると、会長は社内での有望株を漁りにかかってな。しかしやはり家柄とか縁戚とか後見とか、会長が納得する奴らから話を持ち掛けていったから、同期の中ではダントツに優秀でも、あいつの優先順位はかなり低くて最後に近い方だったと聞いている」

「そうでしょうね」

当時の父親の心境を思っただけで、思わず溜息を吐いた聡だったが、そこで何故か湊が苦々しげな顔つきになった。

「それで……、同年代の人間にはその時点で既婚者も多かったし、幸運な事にあいつにお鉢が回って来たんだが、いざ自分に話が舞い込んだ時に怖じ気づきやがって……」

「どうかしたんですか？」

「俺に真剣な顔で『由紀子さんに何て言っただけで結婚を申し込んで良い

か分からないから教えてくれ』と言いやがった」

「……その話、作ってませんか？」

もの凄く疑わしげな視線を向けた聡に、湊がうんざりとした口調で言い聞かせる。

「実話だから。あいつは無愛想だがセールストークだけは抜群なんだ。必要なら笑顔の大盤振る舞いだってする。だが、進んで女を口説く様な真似はした事が無くてな」

「すみません。俺の記憶違いでなければ、母と結婚した時、父は38歳だったような気がするんですが」

「ああ、それで間違いない」

「……………」

最早匙を投げた様な口振りの湊に、聡は当時の父をフォローすべきかどうか真剣に悩んで黙り込んだ。

しかし何故かそこで、湊が居心地悪そうに視線を彷徨わせながら、気まずそうに言い出す。

「その……、だな、聡君」

「はい」

「それで……、どうも、財産目当て云々についての誤解は、多少は俺のせいかもしれない、と思うんだが……………」

「どういう事ですか？」

本気で首を捻った聡に、湊は重苦しい口調で続けた。

「あいつの前に振られたのは、皆あいつより顔が良かったり、口説き文句なんか挨拶代わりに出る連中だな。そいつらと同じ様な事を喋ってもインパクトを与えられないし、感銘も受けないだろうと思っただんだ」

「それで？」

「思わず『どうせ財産狙いだって本人からも周囲からも思われるだろうから、通り一遍に惚れてる云々言うよりも、俺だったらしっかり財産を管理できるとかアピールしたら良いんじゃないか？』って

冗談半分で言ったんだが……。その様子ではそのままストレートに言った挙げ句、結婚してからもそのまま放置した可能性が……」  
言われた内容を頭の中で反芻した聡は、あまりと言えればあまりの内容に一瞬遅れて非難の叫びを上げた。

「湊さん！ 何なんですかそれはっ！」

「いや確かに、無責任な事を言った俺も悪かったかもしれない。だが聡君。両親を見ていれば、そこら辺は自然に分かるものじゃないのか？ 由紀子さんは煙草の煙が嫌いだからあいつは家の中や彼女の前では吸わないし、常に率先して由紀子さんの前でドアの開け閉めはするし、小笠原の財産は全て由紀子さんと君の名義になってる筈だぞ？ 他にも挙げればキリが無いが」

必死に弁解する湊に聡が吠える。

「それはっ！ 父が婿入りした事で、見た目に似合わず母に対してひたすら卑屈になってる結果だと！ 親戚連中もそう言うてましたし！」

「そんなわけあるか。単にあいつが由紀子さんにベタ惚れしてるだけだ。下手すりゃ箸より重い物を持たせるなんて、言語道断だとか思ってるかもしれん」

「……今更勘弁して下さい」

とんでもない驚愕の事実を知らされて、聡は一気に脱力した。

（父さんは母さんに惚れ込んで、母さんもそれなりに父さんの事信頼してるなんて、俺が以前から思ってた関係とは全然違うじゃないか……。真剣に両親の不仲を疑って悩んでた、あの頃の俺の時間を返せ……）

思わず自分の思春期の頃を振り返って物悲しくなった聡だったが、そんな聡の心境を知ってか知らずか湊が朗らかに声をかけた。

「まあ、良い機会じゃないか。この際君が間に立って、その所を2人でじっくりと話し合って貰ってはどうか？ 何と言っても子は



かすがいと言うしな」

「努力してみます。……ところで他にお話は」

「もう無い。角谷君、戻って構わんよ」

途端に重役の顔に戻って指示した湊に、聡も一社員として立ちあがって頭を下げた。

「それでは失礼します」

そうしてドアに向かって歩き出した聡だが、その背中に能天気過ぎる声がかけられた。

「ああ、聡君。清香嬢との事も頑張れよ？」

「……………」

その如何にも楽しんでいるとしか思えない声音に、思わず床に蹲りたくなつた聡だった。

## 第22話 思案の巡らせ方

聡から連絡を貰って自宅を訪問する事を了承していた清香だったが、師走の忙しさに加えてそこはかとなく醸し出している清人の不機嫌さに何となく怖気づき、その事を告げたのは12月もそろそろ下旬に入ろうかという時期の、木曜日の夕食の時間帯だった。

相手の機嫌がそれほど悪くないのを確認した清香が声をかけ、その旨を説明したのだったが、話の途中で清人から鋭い却下の言葉が下される。

「……………そういう訳で、明後日の土曜日の午後、聡さんのお家に招待されて」

「駄目だ」

「どうして？」

頭ごなしに言われて流石に気分を害した清香に、清人が箸を動かしながら淡々と言い聞かせた。

「先方にご迷惑だろうが。特に退院した直後だそうだし」

「そのお母さんが、是非にと言つて下さってるのよ？」

「それは所謂社交辞令という奴だ。本気にする奴があるか」

取りつく島も無い清人の様子に、清香はムラムラと反抗心が湧いて来た。と同時に、黙々と食べている清人の顔を凝視して、少し前から考えていたある推測を口にする。

「……………お兄ちゃん。この前の大学祭の時もチラッと思ったんだけど、ひよっとして聡さんの事があまり好きじゃないの？」

すると清人は清香の顔をチラリと見てから断言した。

「そうだな。はっきり言わせて貰えば嫌いだ」

「どうして!? 聡さんは親切だし優しいし、思いやりのある大人の人だと思うけど？」

「ちよっと外面の良い男に騙されるなんて、清香はまだまだ子供だ

な。だから心配で目が離せないんだ」

流石にそこまで言い切られると思っていなかった清香は本気で驚き、聡を庇う発言をしたが、清人は大人の余裕を醸し出しながら薄く笑った。それに清香が猛然と噛み付く。

「ちよつとお兄ちゃん！ それは幾ら何でも聡さんに対して失礼でしょう！」

「俺は本当の事を言ったまでだ」

「じゃあ聡さんが何をどう騙してると言っの。その根拠があるなら言ってみて！」

「……………」

きつい基調で迫った清香だったが、自分と小笠原の関係をばらしたくない、かつ考えるのも嫌な清人としては、本当の事を口にするのは躊躇われた。

結果無言になった清人を眺めて、清香が箸でご飯を口に運びながら、心底呆れた様にボソボソと呟く。

「そんな、子供じゃないんだから……、オークションで競り合ったのが幾ら気に入らないからって……」

「そんな事じゃない！！」

「お兄ちゃん？ どうしたの」

勢い良く箸をテーブルに叩き付ける様に置いて清人が怒鳴り、清香が驚いた顔を向けたが、すぐにそっぽを向いて吐き捨てる様に呟いた。

「……………何でも無い。もう良い。勝手にどこにでも行ってこい」

「そうさせてもらっわ」

口調は冷たく言ったものの、清香は心配そうな視線を清人に向けた。

（本当に何なんだろう？ 最近のお兄ちゃんって、絶対変よね……………）  
そんな事を考えていると、何やら考え込んでいた清人が声をかけ

てきた。

「清香」

「ん、何？」

口の中の物を飲み込んでから尋ね返すと、清人はいつも通りの顔で言いだした。

「明後日は午後から出かけるとか言ったな？」

「うん、言ったけど。それが？」

「それなら……、ちよつと午前中に行つて来て欲しい所がある」

「どこに？ 場所にもよるけど」

互いに相手の反応を窺いつつのやり取りになる。

（まさか聡さんの家に行かせない為に、仙台とか大阪とかに行つて来てくれとか言わないわよね？）

（本当なら小笠原の家なんかに行かせない為に、北海道とか沖縄とかに行つて来てくれと言いたい所だが仕方が無い……）

兄妹で似た様な事を考えていたが、清人が口にした内容は清香にとっては意外な事だった。

「都内だ。久しぶりに甘い物が食べたくなった。神田に行つて例の奴を買つて来てくれないか？」

そう言われた清香は、すぐに快く了解した。

「ああ、あれね。あそこなら十分時間内に戻つて来れるし、分かった。行つてくるわ」

「頼む」

（そうよね。お兄ちゃんがそんな意地の悪い事考えるわけないものね。変な事考えて悪かったわ。大好きなあれ、多目にゲットして来ようっ！）

（あの男がああの時の事をまだ根に持っているかもしれんし、旨い物は旨いからな。清香には何も言わなくても、ついでに買っていくだ

ろう)

二人の思惑はどうあれ、それからの佐竹家の食卓は平穏なものだった。

そして約束の土曜日。小笠原家の広いリビングでは、由紀子が一人そわそわしていた。

「聡、そろそろ清香さんが来る時間じゃないかしら？」

「落ち着いて、母さん。駅に迎えに行く事を話しておいたから、到着近くになつたらメールか電話がくる筈だよ」

「それじゃあ、お迎えを宜しくね」

「ああ。だからソファアに座ってて」

緊張の為か、先程からうろつろつと室内を歩き回っている母に聡が笑って促してから、真正面の一人がけの椅子に座っている父親に、胡乱気な視線を向けた。

「……ところで、父さんは今日午後から、共和工業と中西産業の社長とゴルフとか言ってますでしたか？」

その問いかけに、読んでいた新聞のページをバサリと捲りながら、昭は面白く無さそうな声で答えた。

「先方の都合で延期になった。俺が家に居ると、何か不都合でもあるのか？」

「いえ、別に何も」

無然として黙り込んだ聡だったが、ここで昭の横の一人掛けのソファアに座った由紀子が、慎重に口を挟んだ。

「あの……、昭さん？ 聡は清香さんには清人と私達の関係は一切話していないの。勿論清人も清香さんには話していないし、その所は……」

「分かっている。余計な口は挟まん」

「……お願いします」

懇願口調にも昭は端的に答えるのみで、由紀子と聡は一抹の不安を覚えて目と目を見交わす。

（こんな調子で大丈夫かしら？ 以前清人に殴られたのを恨んでても、まさか清香さんに手を上げる様な真似はしないと思うけど、嫌味の一つも言いそうで……）

（好き好んで騒ぎは起こさないだろ。……そう言えば、父さんの一目ぼれ云々の話、忙しさにかまけて母さんにするのをすっかり忘れてたな。まあ、そのうち何とかなるかな）

三人が三人とも何やら悶々と考え込んでいると、ドアをノックして家政婦の塚田が顔を出した。

「失礼します」

「あら、塚田さん、どうしたの？」

何気なく由紀子が顔を向けると、塚田は淡々と報告して来た。

「先程門の所に佐竹様と名乗る女性の方が見えられました、奥様からお伺いしていたお名前でしたので、通用口から入って頂きました」  
それを聞いて驚きに目を見張る由紀子と聡。

「はあ？ 門に来てた？」

「駅まで迎えに行くんじゃない？ 無かったの？ 聡」

「いや、そのつもりだったけど。ちょっと出迎えてくる」

そう言うやいなやバタバタとリビングを走り出ていった聡を見て、新聞の裏側で昭が顔を顰めた。

「……騒々しいな」

清香は最寄駅到着が間近になったら迎えに行くので連絡をと聡に言われていたが、冬とは思えない陽気の良さに心がウキウキし、駅から歩いていく事を選択した。予め聞いていた住所を携帯のナビに打ち込んでみたら、意外に分かりやすい経路だった事もそれを後押ししたのだ。

「迎えに来てくれるとは言われたけど、歩いて15分だものね。ちように良い運動だったわ。駅からほぼ一直線で、分かり易かったし」周囲の景色を眺めながらの散策気分、上機嫌のまま歩いていくと、目指す門の前に首尾良く到達する。そしてその門構えに圧倒された。

「えっと……、ここ、よね？ 住所は確かにここだし、小笠原って表示も有るし」

3メートル程の塀で囲まれたそこには、大型トラックでも悠々と通れそうな大きな両開きの門扉が存在しており、中を窺い知る事は出来なかった。そしてその傍らには、楽に二台か三台は車が入りそうなスペースの車庫がシャッターを下ろしていた。

それらをポカンと見上げた清香は、少しして辺りを見回してみる。「社長さんのお宅だけあって、流石に大きいお屋敷よね。……これ、インターフォンだね？」

門柱の横にポツンと設置されていたモニターとボタンを発見した清香は、迷わずそのボタンを押してみた。

すると大して時間もかからず、声が聞こえてくる。

『……はい、どちら様でしょうか？』

それを受けて、清香はモニターに向かって軽く頭を下げつつ、名前を述べた。

「すみません、佐竹と申します。今日こちらをお訪ねする旨を伝えてある者ですが」

『お待ちしております。横の通用口のロックを解除しますので、そちらからお入り下さい』

「ありがとうございます」

礼を述べるとほぼ同時に、門扉の横に設置されていた小さな扉の解錠する音が聞こえ、その戸を潜って清香は邸内へと入った。

「うわ……、広いお庭。手入れも行き届いてるわね」

左右に広がる綺麗に刈り込まれた庭園に清香が感嘆の溜息を漏らしつつ、門から奥にそびえ立つ屋敷の玄関へと繋がる舗装された道をのんびり歩いていくと、勢い良く玄関が開けられ、中から聡が焦った様子で転がり出る様に走り出て来た。

「清香さんっ！」

「あ、聡さん。今日はお招きありがとうございます」

血相を変えて駆け寄った聡に清香はいつものように頭を下げたが、聡はそれで幾らか落ち着いたものの心配そうに問いかける。

「いや、そんな事より、俺の携帯通じなかった？」

「はい？」

「駅に近付いたら連絡をくれと言ってたのに歩いて来てるから、何か行き違いがあったのかと」

そこでやつと聡の懸念に気が付いた清香は、慌てて謝罪した。

「あの、ごめんなさい。お天気も良いし、そんなに距離も無さそうだし、歩いてみても良いかなって思って、つい……。でも、聡さんに電話の一本でも入れるべきでしたね。気を揉ませてしまったみたいで、すみませんでした……」

申し訳無く思っただけで口ごもってしまった清香に、聡はここで漸く笑顔を見せ、並んで家に向かって歩き出した。

「そうなんだ。何事も無かったのなら良いんだよ。でも駅からここまででは、だから続く上り坂だし、きつく無かった？」

「それは全く気になりませんでした」

「清香さんは普通の人とは鍛え方が違うみたいだしね」

「う……、聡さん、嫌味ですか？」

「まさか！ 褒めてるんだよ？ だけど流石に帰りは薄暗くなるし、駅までちゃんと送らせて貰うからね？」

「はい、お願いします」

そんな事を笑顔で語り合ううちに、二人は玄関の前まで辿り着い



た。

「じゃあ、遠慮無く入って」

「はい、お邪魔します」

聡が開けた扉の中に清香が入ると、かなり広い玄関の上がり口に、使用人らしい女性を従えた上品そうな年配の女性が居て、清香に笑顔を見せてきた。

「こんにちは清香さん。聡の母の由紀子です。退院祝いに素敵なアレンジを頂いて嬉しかったわ。今日はゆっくりしていらしてね？」

早速丁寧な挨拶をされて、清香も笑顔で頭を下げる。

「初めまして、佐竹清香です。本日はお招きありがとうございます。あれを喜んで頂けて、私も嬉しいです」

「堅苦しい挨拶はそれくらいで、上がって頂戴？」

「はい、お邪魔します」

そこまでは全て順調に進んだかに見えたが、清香が靴を脱いで揃えられていたスリッパを履いて廊下を歩きだそうとしたところで、何故か彼女の動きが止まった。そうしてしげしげと自分の顔を見つめているのに気付いた由紀子は、不思議そうに清香に声をかける。

「どうかしたの？ 清香さん」

「いえ、あの……。由紀子さんと私は初対面ですよ？」

「ええ、その筈だけど」

「何となく初対面の感じがなくて……。どこかでお会いした事が有るでしょうか？」

「さあ、そんな筈は……」

「無いと思うけど……」

（お通夜の時に一瞬顔を見られたのを、覚えていたのかしら？ でもその事を言ったら、どうしてその場に居たのか聞かれるだろうし……）

（よくよく考えたら兄さんの容姿は母さん似か？ まさかこんな基

本的な所ではれるとは……)

首を捻って考え込んでしまった清香に、適当な切り返しの言葉が咄嗟に浮かばない由紀子と聡が揃って固まった。しかしそこで救いの手が差し伸べられる。

「世の中にはそっくりな顔の人間が三人存在すると言いますから。

どこかで妻と酷似した人間を見た覚えがあつたのかもしれないね」

「あなた！」

「父さん」

そんな言葉と共に廊下の向こうから昭がのっそりと現れた為、由紀子と聡は驚きの声を上げた。そんな2人を昭が軽く睨み付けながら促す。

「客人をいつまで玄関先に立たせているつもりだ？ さつさと中に

案内したらどうだ」

「あ、は、はい。清香さん、こちらへどうぞ」

「ああ、紹介するよ。俺の父で小笠原昭です」

その場を取り繕う様に慌てて聡が父を紹介すると、清香も慌てて挨拶して頭を下げた。

「は、初めまして。佐竹清香です」

「こちらこそ」

清香の挨拶に素っ気なく一言返しただけで、昭はさつさと奥へと戻っていった。それを見て小さく溜息を吐く清香と、内心で怒りを露わにする聡。

(うっ……、何か気難しそうなお父様。社長さんだからこれ位当然かしら?)

(あんの朴念仁！ 誤魔化してくれたのは助かったけど、少しは愛想笑い位しろよっ！)

互いに何とか笑顔を貼り付けながら広い廊下を進み、全員リビングへと移動した。

触り心地と座り心地が抜群の応接セットに、清香が促されるまま腰を下ろし、他の者が空いている席に座って和やかに会話が始める。

「今日はわざわざ足を運んで貰って嬉しいわ」

「いえ、大した事じゃありませんし。それよりお母様……、えっと、由紀子さんとお呼びしても良いですか？」

「ええ、勿論構わないわよ？ 若いお友達ができたみたいで嬉しいから」

「由紀子さんは、その後体調の方は大丈夫ですか？」

清人に『退院直後で相手に迷惑』と口にされた事もあり、自然に気遣う言葉が出たのだが、それを聞いた由紀子は笑顔で経過を述べた。

「一応服薬は続けているし、月一回の定期健診は必要だけど、無理をしなければ大丈夫と言われたし。至って順調なの」

「良かったですね」

心からの安堵の言葉を告げた清香に、聡も真顔で頷く。

「発作を起こして倒れた場所が場所だったからね。すぐ適切な処置をして貰えたし」

「どこで倒れたんですか？」

疑問に思っただけで尋ねた清香に、聡がしみじみとその時の状況を語った。

「難病の子供が集まっている小児病棟での慰問中に倒れてね。そのままその病院に入院したんだよ」

「それは……、本当に不幸中の幸いでしたね」

流石に驚きの表情を見せた清香だったが、納得して一人頷いた。そして思いだした様に持参した白い紙袋を由紀子に向かって差し出す。

「あの、少しだけですけどお土産を持参しましたので、宜しかったら皆さんで召し上がって下さい」

「あら、清香さん、そんな気を遣って頂かなくても良いのに」

「いえ、やはり初めてのお宅に手ぶらでというのは少し気が引けまして。こんなご立派なお宅なのに、ほんの少しで却って申し訳無いのですが……」

「あら、そんな事言わないで。ありがたくいただくわ」

恐縮気味に述べた清香に対し、最初は断りを入れた由紀子もそれ以上固辞する事はできず、笑顔で紙袋を受け取った。すると続けて清香が恐る恐る尋ねてくる。

「それで……、今更なのですが、聡さんに事前に聞いておくのを忘れていました。和菓子の種類が苦手な方はいらっしゃいますか？」

「いいえ？ 皆大好きだから安心して？」

笑顔で請け負った由紀子に、清香は安心した様に満面の笑みを浮かべた。

「良かった！ 中身は《すみのや》って言う神田にあるお店の練りきりと塩饅頭なんです。とっても美味しいんですよ？」

「……え！？」

清香が嬉しそうに述べた瞬間、小笠原家の面々は揃って驚きの声を上げた後、彼女と何のロゴも店名も入っていない白無地の紙袋を交互に見やっけて固まった。

「あ、あの……、どうかされました？」

流石に異常を感じた清香の前で、昭と聡の間でやり取りが交わされる。

「……聡？」

「いや、俺は別に何も！ わざわざ言う事でも無いだろう！？」

「あの、何か、まずかったですでしょうか？」

何かを探る様な目つきを息子に向けた昭に、聡が真顔で首を振る。そんな中口を挟んできた清香に、昭は比較的穏やかな声で問い返した。

「清香さん。一つ尋ねても良いかな？」

「はい、なんででしょうか」

「どうして今日、これを持参したのか聞きたいんだが」

「実は今日の午前中、お兄ちゃんに『すみのやに行つて塩饅頭を買つて来てくれ』と頼まれました」

それを聞いた昭は、身内にだけ分かる位に、僅かに目を細めた。

「ほう？ 以前から鼻屑にしているのかな？」

「はい。お兄ちゃんはお酒も飲みますけど甘い物も結構好きで、家に来る出版社の担当の人が、良く甘い物を差し入れしてくれるんです。それで三年前位にこれを貰ったら『餡が変にベタベタしなくて口の中で溶けて旨い』と気に入りました」

「ほう、そうなのか」

思わず頷いた昭に、清香が笑いながら話を続けた。

「それから知り合いの編集さんに勧めたり、締め切り間近の時期になると食べたがつて、私に買って来てくれと何度も頼まれて場所も覚えてしまつたんです」

「なるほど」

清香の笑顔に釣られたのか、昭も僅かに顔を緩ませて納得した素振りを見せたが、それに安堵しつつも根本的な疑問がまだ解消していない事に気付いた清香は、改めて問いかけた。

「それで今日も午前中に頼まれたので、ついでにこちらのお土産分も買った訳なんですけど……。何か不都合でも……」

恐る恐るそう述べた清香に、由紀子と聡が慌てて取りなそうとする。

「あら、別に不都合なんかじゃ無いのよ？」

「そう、ちよつと凄い偶然で、驚いただけで」

「偶然つて……」

「《すみのや》は私の実家でやっている店でね」

「え？」

そこで唐突に口を挟んできた昭の台詞に、清香の思考が一瞬停止した。

「これを作っているのは、私の兄と甥っ子なんだよ」

「……え、ええっ！　そ、そう言えば、確かに聡さんからお父さんの旧姓が角谷ってお伺いしてましたけど、すみや、で、すみのや……、そ、そんなんですかっ!？」

「うん、そういう事なんだ」

淡々と昭が頷いて見せた途端、清香は顔を真っ赤にして頭を下げた。

「し、失礼しましたっ！　ご実家のお菓子なら食べ慣れてますよね？　すみません、そういう物をお土産に持参するなんてっ!」

（うううっ！　私のバカバカバカっ!　事前に聡さんに和菓子を持参して大丈夫かどうか一言聞いておけば、その話の延長でお父様の実家の話も聞けたかもしれないのに！　こんな事お兄ちゃんに知られたら『だからお前は思慮の足りない子供なんだ』って絶対言われる!）

恥ずかしさで思わず涙が出そうになるのを清香が必死に堪えていると、ここで予想外の声かけられた。

「……そんなに恐縮しないで下さい清香さん。結構な物を頂戴しまして、ありがとうございます」

「え？」

思わず反射的に顔を上げた清香も発言した人物を見て驚いたが、思わず傍観していた由紀子と聡も呆気に取られていた。

（あら、まあ……、珍しい）

（げっ……、あれが父さん!？）

先程までの無愛想ぶりはどこへ行ったのかと思うほど、穏やかで如何にも人好きのする笑顔を浮かべた昭が存在していたのだった。

「確かに実家の物ですから小さな頃からこの味は食べ慣れていますが、この一年程は忙しさにかまけて実家を訪問していませんよ。わざわざ買いに行く様な真似もしませんし、久しぶりにこれを味わう事ができて、私にとっては何よりのお土産です」

「そう言っただけで、私も嬉しいです」

そう言われて本気で胸を撫で下ろした清香に、昭は穏やかな口調で話を続けた。

「それに兄上が殊の外すみのやにご贔屓にして頂いているとの事。聡から伺いましたが、お兄さんはあの作家の東野薫さんですよ？」

「はい」

「そんな有名な方に好んで買って頂いていると知ったら、実家の兄や甥も喜びます。二人に代わってお礼申し上げます」

ここで軽く頭を下げた昭に清香は却って恐縮し、慌てて言葉を継いだ。

「いえ、そんな。だって確かに美味しいですもの！」

「あなたの様な若い方にも好んで頂けるとは嬉しいですね」

そんな調子でにこにこ世間話に突入した2人を見て、由紀子は微笑み、聡は無然とした表情を見せた。

（良かった。流石に清香さんに変な言い掛かりとかは付けないだろうとは思っていたけど、

彼女の事が気に入ってくれたみたい）

（なんなんだ、あの手のひら返した愛想の良さは……。詐欺だっ……）

そんな中、昭が慎重に清香に尋ねる。

「……ところで清香さん。先程お兄さんが締切間近の時期に和菓子を買に行かせられると言う様な事を仰っていたが、そうすると今がその時期なのかな？」

「えつと……、あら？　そう言えば……、予定を書き込んでるホワイトボードには、そんな切羽詰まった予定は書いて無かった気がします」

「そうですか」

首を傾げて考え込んだ清香を見ながら、昭は傍目にはあっさりと会話を終わらせた。しかし聡と同様、その意味する所を慎重に考え  
てみる。

（ふうん？……この娘は間違っても腹芸ができるタイプには見えな  
いが、あの“彼”がそうなる様に仕向けたか？）

（……何となく兄さんの意図を感じる。彼女に対する父さんの心証  
を良くする為、わざわざ午前中に買物を買わせたのか？）  
そして親子揃って、同じ結論に到達した。

（できるなら妹を行かせくは無いが関係をバラしたくは無いいし、  
行かせたら行かせたで粗雑な扱いをさせられるのも嫌だと言う事か）

そんな男達の思惑など関係無く、由紀子は塚田に指示を出しつつ、  
清香に笑顔を向けていた。

「それでは早速これをお茶受けにしましょう。塚田さん、お願いね」  
「畏まりました」

（本当に、屈折しまくった男だな）

（本当に面倒な人ですね、兄さん）

この場に居ない1人の男の事を思って、昭と聡は深い溜息を吐い  
たのだった。



## 第23話 イブの攻防

『清香さん、一昨日は来てくれてありがとう。両親も喜んでたよ』  
「私の方こそ楽しかったです。でも……、由紀子さんからあんな高そうな物を貰ってしまったって、本当に良かったんでしょっか？」

自室で聡からの着信を受けた清香は、型通りの挨拶をしてから聡が出して来た話題に、思わずこの二日考え込んでいた懸念を口にした。しかし聡はそんな清香の懸念を笑って打ち消す。

『気にしないで。確かに母さんにはもう若過ぎるデザインだし、家族や親しい人の中に若い女性が居なかつたから、このまま箆笥で眠らせておくか捨てるかって話になってたんだ。流石にそれは勿体無いだろっ？』

「それは……、やっぱり聡さんが……」

尚もごもごも口の中で何やら言っていて言葉を濁した清香に、聡は電話の向こうから不思議そうな声を伝えて来た。

『え？……ひょっとして清香さんは、俺に女装しろって言うの？』

「そんな事一言も言ってません！」

慌てて清香が否定すると、聡が電話の向こうで我慢できないと言った感じで噴き出す気配を感じた。当然清香はからかわれたと思つて拗ねる。

「聡さん！？ 笑う事はないじゃありませんか！」

『いや、ごめん。でも良かった。本気でそう思われてたら、どうしようかと思つた』

まだ若干笑いを含んだ声で言うてくる聡に、清香が何とか怒りを抑えながら、先程自分が考えた内容を口にした。

「もう！……そうじゃなくてですね、聡さんが結婚したら、その相手が由紀子さんの義理の娘さんになる訳じゃないですか。だから将

来その女性に譲る様に、大事にしまっておいたら良いんじゃないですか？ って言おうとしたのに、聡さんったらすぐふざけるんだもの！」

「……………」  
清香にしてみれば至極真つ当な理屈を述べたつもりだったのだが、何故かここで聡が無反応になって黙り込んだ。

何らかのリアクションが返って来ると思っていた清香は当惑し、いきなり会話が途切れるなんて珍しいと思いつつ、混戦でもしたのかとそのまま十数秒待ってみてから、相手に呼びかけてみる。

「聡さん？ どうかしましたか？」

それで漸く我に返った、という反応を聡が返してきた。

「……………あ、ああ、何でも無いんだ。……………ちよつと昔の事を思い出ただけだから」

清香は（どうして結婚相手云々の未来の話で、昔の事を蒸し返すんだろう）と疑問に思ったが、何となく聡が話題を逸らしたがっている様な気がした清香は、余計な事は口を挟まず話を合わせる事にした。

「昔の事って何ですか？」

「小さい頃、母さんにスカートを穿かせられた事があったんだ」

「はい？」

耳にした内容が咄嗟に理解できなかつた清香が問い返すと、聡がしみじみとした口調で話し出した。

「実は……………、母さんは娘が欲しかったみたいなんだけど、俺を産んだ時に結構身体に負担をかけたらしくて、医者に「今後子供は諦めて下さい」って言われたそうなんだ」

「……………そうだったんですか」

何と言ったら良いのか分からず、取り敢えず当たり障りのない言葉で応じた清香だったが、聡はそれ以上に沈んだ声で続ける。

『それで仕方が無いって産むのは諦めたんだけど、どうしても可愛  
い洋服とかリボンやフリルの類は諦め切れなかったらしくて、物心  
付くか付かないかの頃から幼稚園時代の俺を相手に、時々』

そこで聡が唐突に言葉を途切れさせたが、相手の言わんとする内  
容が嫌でも分かってしまった清香は、慰める様に言葉を継いだ。

「あの、聡さん。もう何も言わなくて良いです。何となく分かりま  
したから」

『だけど酷いと思わないか？ 清香さん！』

「な、何が、ですか？」

急に語気を強めて訴えて来た聡に、思わずびくつとしながら応じ  
た清香だったが、続く話の内容に笑いを堪え切れなかった。

『あれもこれもと散々着せ替えさせられた挙句、最後に「聡は顔  
立ちは良いんだけど、やっぱり凛々しすぎて可愛い物が全然似合わ  
ないわ」って、盛大に溜め息吐かれたんだよ？ 父さんに言い含め  
られて、嫌だけど母さんの為だと思って一生懸命我慢してたのにそ  
の仕打ち！ 子供心にどんなに傷付いたか！』

「……………！……………くっ、……………ふうっ、……………」

『……………清香さん。ひよつとして、笑ってる？』

思わず当時の光景を想像してしまった清香は、携帯を顔から離し  
て口許を抑えて笑いを堪えたのだったが、そんな気配は容易に聡に  
伝わってしまったらしい。携帯から聡が些か鋭い声で問い質す  
声が聞こえた。

「わ、笑ってるなんて滅相も無いっ！何て微笑ましい親子愛だろう  
なって、思っ……………」

弁解しようとして再び噴き出しかけた清香が言葉を詰まらせると、  
電話の向こうから聡が溜息を吐く気配と、苦笑交じりの声が伝わっ  
てきた。

『まあ、いいさ。そんなわけで、ずっと母さんは女の子を着飾らせ

て可愛がりたかつたんだよ。そんな所に清香さんが飛び込んでしまった訳だから、申し訳無いけど少し付き合っただけで？」

「分かりました」

何とか笑いを抑えて頷いた清香に、聡はここで真面目な口調になつて話を続けた。

『それで話は変わるけど、清香さんはクリスマスとかの前後は空いている？』

「いえ……、ちょっと約束で埋まつて。それに毎年イブはお兄ちゃん特製ディナーと一緒に食べる事にしています……」

（こんな事言つと、朋美みたいに呆れられそうだけど……）

そんな事を考えながら正直に予定を告げた清香だったが、聡からは予想に反した言葉が返つて来た。

『それなら家に居るんだよね。丁度良かったよ』

「え！？ 聡さん、どうしてそんな事を言つんですか？」

すっかり驚いてしまった清香が素っ頓狂な叫び声を上げると、聡も本気で驚いた様な戸惑つた声を返す。

『どうしてつて……、何が？』

「だって、自分が言うのも何ですけど、イブの夜に兄妹でディナーつて変に思わないんですか？ 朋美や他の友達全員『お兄さん優先なんておかしい』つて毎年言つてますし」

（自分で言つて、何だか自分自身がもの凄く変に思えてきたわ。そんなにお兄ちゃんと過ごすのが変なのかしら？）

密かにそんな事を考えて落ち込み始めた清香に、聡が事も無げに言い返してきた。

『別に变じゃないだろう？ イブに誰と過ごそうが、それは人それぞれだと思つし。それだけ兄妹仲が良いつて事だから、他人がどう言おうと構わないじゃないか』

不思議そうに告げられた台詞に若干救われた気持ちになりながら、清香は反射的に尋ねた。

「聡さんはそう思うんですか？」

『勿論、そう思うから言ってるんだけど？』

幾分笑いを含んだ声に、清香は心からの礼を述べた。

「そうですか。ありがとうございます」

（ちょっとだけ、聡さんに誘って貰えるかなって思ったけど……。でもそうしたらお兄ちゃんに何て言えば良いか分からないし、これで良いのね）

そんな風に僅かに残念な気持ちを抑えつつ自分自身を納得させた清香に、聡が穏やかに声をかけてきた。

『正直に言えば……。イブは清香さんを誘いたかったんだけどね？』

「え？」

『実は俺、今年は年末までびっしり仕事でスケジュールが埋まってる……。最近立て続けに潰れた仕事の後始末と、新規事業開拓の準備でなくてご舞いなんだ』

密かに動揺したのは一瞬で、清香は如何にもうんざりとした口調で事情を説明する聡に、心の底から同情した。

「年末なのに大変そうですね。体調に気をつけて下さいね？」

『ありがとう。そんな訳でどこにも誘えないんだけど、プレゼント位は届けようかと思って。だから家に居てくれて助かったと思ったんだ』

先程の発言の意味が漸く分かり、清香は慌てて断りを入れた。

「え？ そんな忙しい時期にわざわざ家まで来て貰わなくても良いですよ？ それ以前に、由紀子さんからあれを頂いたばかりですし、聡さんからもプレゼントとか頂けませんから！」

『俺がそうしたいから……。ごめん、実は今、職場の廊下からかけてるんだ。仕事に戻らないといけないから、じゃあまた連絡するね』

？』

「あ、あのちよつと、聡さん!？」

言うだけ言つて切られてしまった携帯を見下ろし、清香は一人途方に暮れた。しかし流石にこのまま掛け直すのは躊躇われる。

「切れちゃつた……。でも忙しそうだから、かけ直しちゃ悪いよね」  
今度時間のある時に、改めて断りを入れようと決めた清香は、諦めて携帯を自分の机の充電器に刺し込んだ。そしてそれを見下ろしながら、しみじみと呟く。

「でも聡さんつて優しいなあ、あんな事を話しても全然馬鹿にされなかつたし。それにスカートつて……」

そしてぷふつと笑いを漏らしてから、晴れ晴れとした笑顔で頷いた。

「うん、聡さんつてお母さん思いで、誰にでも優しい人だよね」

そんな調子で、清香の中で聡の株がこれまで以上に上昇していた頃、清人はリビングで厄介な相手からの電話を受けていた。

『……清人君。君に限つてと思つていたが、私達の期待を随分裏切つてくれたね?』

開口一番喧嘩腰の雄一郎の台詞に、清人は丁寧な口調は崩さないまま眉を寄せた。

「何の事を仰つておられるのか、全く分かりませんが?」

『君が今更小笠原に拘るなんておかしいと思つて調べさせた。更に今、浩一を締め上げて洗いざらい吐かせた所だ』

「それはそれは」

(災難だつたな、浩一……)

文字通り実の父親に締め上げられたに違いない友人を、清人は密かに不憫に思つた。しかしすぐに目の前の現実に意識を振り向ける。

『一体何を考えているんだ? 向こうの家に清香ちゃんを出向かせ

るなんて!?!」

段々伯父バカっぷりを醸し出して来た口調に、清人が溜息混じりに言い返す。

「……頭ごなしに駄目だと言ったら、益々ムキになって行きますよ。帰ってから粗方の話を聞きましたが、どうやら終始茶飲み話をしてきただけですから、特に問題は無いでしょう」

「そんな悠長な事を! 万が一小笠原なんぞに清香ちゃんをかつ攫われたらどうする気だ!」

「……させませんよ」  
「ほう?」

不愉快な仮定話をされた途端、清人の声のトーンが一気に低下した。流石にそれを感じた相手も、興味深そうに一言漏らしたただけで清人の反応を窺う様に黙りこむ。

そして短い沈黙の後、清人が徐に言い出した。

「柏木さん……。そこで一つご相談なんです」

「何かな?」

「代わりにあいつにあてがうのを調達して貰えませんか?」

「は?」

流石に戸惑った声を上げた雄一郎に、清人は補足説明をした。

「柏木も小笠原も、表立って揉めたくは無いです。要は“自然な形”で向こうから手を引かせれば良いわけです」

告げられた内容を頭の中で吟味した雄一郎は、ひとしきり忍び笑いを漏らしてから清人に声をかけた。

「……なるほど、良く分かった。今回、君と私達の利害が完全に一致したわけだな」

そう同意を求められ、清人が苦々しく呟く。

「初めてですし、これきりにしたいですね」

その本心からであろう台詞と口調に、雄一郎は豪快に笑った。

『そう嫌そうに言うな。分かった。和威と義則にも内容を伝えて、万事抜かりなく話を進めるよう準備しておく。女房達にも骨を折って貰う事にしよう。それでは清人君、くれぐれも』

「目は離しませんよ。それでは」

『ああ、失礼する』

最後は円満に会話を終わらせた清人は、口許を緩めながら受話器を戻した。

「さて、どう話を持って行こうかと思っていたが、向こうから突っ込んで来て貰えるとは助かった」

そして見るともなしに壁にかけられたカレンダーに目をやり、独りごちる。

「これでまた一つ片が付いたし、今年は最後にケチのつきっぱなしだったから、年末は静かに過ごして気分良く新年を迎えたいな」

……しかし清人と他の面々にとっての厄年は、まだ十日近く残っていた。

「清香、今年の料理はどうだ？」

「うん、舞茸のコンソメスープも美味しいし、鱸と鯛のパイ包み焼きも絶妙な味付けと焼き上がりで嬉しい。パンだって自家製だよね」

「ああ、暫くバタバタして手の込んだ料理を作って無かったから、今回はちよつと頑張ってみたんだ」

「それにしても雲丹と海老のジュレなんて、普通家で作らないよ？和牛サーロインのグリルとこのグレービーソースが最高っ!!！」

自分の料理に舌鼓を打ち、一口ごとに称賛を惜しまない清香の笑顔で、清人の機嫌はその日最高潮だった。

もともとは料理人であった父親に、父子家庭ゆえ必要に迫られて叩き込まれた料理の腕前ではあったが、小さかった清香の「おにい



ちゃんのおりより、おいしーね？」という笑顔付きの贅辞にころっと参ってしまった清人は、その後独学で研鑽を積んだ結果、玄人裸足の腕前になってしまったのだ。しかしその腕前を披露するのは専ら清香に限定されている為、余程親しい人間でしか知りえない清人の特技の一つだった。

それを満面の笑みで褒められて悪い気などする筈が無く、清人は笑顔で更なるメニューの内容を告げる。

「最後のデザートはクレープシュゼットにするから。それから別にチヨコケーキもあるぞ？」

「酷い、お兄ちゃん！どこまで私を太らせるつもり！？」

「はは……、清香なら丸くなっても可愛いぞ？」

「もう、お兄ちゃんったら！」

そんな他愛も無いやり取りをしながら楽しく食事を続けていると、突然壁のモニターから呼び出しのメロディー音が聞こえてきた。

「え？」

「あ、聡さんだわ！」

「……何？」

こんな時間に誰かと清人の戸惑った声に、嬉しそうな清香の声が重なる。それを耳にして忽ち清人の機嫌が急降下した。

「今日は仕事が忙しくて誘えないけど、プレゼントだけ渡しにくるって言ってたの。玄関先で失礼するって言うから、ちょっとだけ開けるわね？ お兄ちゃんは食べてて」

「……………」

清人の微妙な変化には気が付かないまま清香は席を立ち、スマートフォンを受話器を取った。そして短く何かを話してからボタンを操作してエントランスの自動ドアを開け、そのまま玄関へと向かう。その間清人は無言で清香の背中を見詰め、その姿が見えなくなっただけから忌々しそうに舌打ちをした。

一方の清香は玄関で待機し、チャイムが鳴るのと同時に外を確認して扉を開けた。

「今晩は、清香さん」

「聡さん、お疲れ様です。今から帰るんですか？」

ビジネスバッグを手に提げた姿に清香は気遣わしげな視線を向けたが、カシミヤの温かそうなコートを纏った聡は、何でも無い様に笑って頷いた。

「うん、でも思ったより早く終わって助かったよ。清香さんが寝てしまう様な時間だったら、流石に悪くてインターフォンで呼び出せないしね」

そう言ってからバッグを開け、中からギリギリ掌に乗る位のサイズの箱を取り出した聡は、清香に向かってそれを笑顔で差し出した。

「はい、メリークリスマス。これまで俺に色々付き合ってくれたお礼も兼ねてるから受け取って？」

反射的に受け取ってしまったものの、包装紙とリボンで綺麗に包まれた長方形の箱に目を落としてから、清香は申し訳無さそうに聡の顔色を窺う。

「本当に良いんですか？」

「勿論。それから先生の分もあるから、後から渡してくれるかな？」  
続けてもう一つ、先程の物より幾分小ぶりの箱まで渡されて、今度こそ清香は狼狽した。

「え？ お兄ちゃんの分まで用意してくれましたか？」

「ああ、サインを頂いたり、学祭の時には親しく言葉をかけて貰ったしね。ほんの気持ちだから、受け取ってくれると嬉しいな」

にこやかにそう告げられ、清香は漸く笑顔になって頭を下げた。

「ありがとうございます。……実は、私も聡さんに用意してた物があつて」

「本当に？」

そこで清香は予め用意しておいた紙包みを、玄関から奥に続く通路に設置してある棚から取り出し、聡に向かって差し出した。

「あまり高くないんですけど、マフラーなんです。シルクだから肌触りは良いかと」

それを聞いた聡は、益々嬉しそうな顔を見せる。

「嬉しいな。ここで開けてみても良い？」

「はい、どうぞ！」

そこで早速中身を取り出して確認した聡は、表面に手を滑らせながら満足そうに目許を緩めた。

「うん、良い色合いだね。柔らかいし気に入ったよ、ありがとう」

「どういたしまして。聡さん、上がってお茶でも飲んでいきませんか？」

「……いや、お邪魔をするのは悪いし、今夜はここで失礼するよ。

おやすみ」

「おやすみなさい」

清香の誘いを丁寧に辞退して、聡はそのままあっさり引き揚げた。それを忙しくて疲れて居るんだろうと好意的に解釈した清香は、素直に二つの箱を手にして大人しく奥へと戻って行った。

そして一人で戻って来た清香を見て、てっきり聡が押しかけて顔を見せるかと思っていた清人は肩すかしをくらった。

「……帰ったのか？」

「うん、お茶の一杯でも思ったんだけど、今まで仕事で早く帰ってたかっただけだったから、無理に引き止めなかったわ」

「そうだな」

清香の言葉に（さっさと厄介払いができて良かった）とほっとしていたが、ここで意外な言葉を耳にした。

「それでね？ 私の物と一緒にお兄ちゃんにもプレゼントを預かったの！」

「俺に？」

「うん！ 『サインを頂いたし、学祭の時には親しく声をかけて貰ったし』って聡さんって本当に義理堅い人だよな？」

「……それはそうだな」

（嫌味か？ 生意気な……）

聡の意図が今一つ掴めず眉を顰めた清人の前で、清香は食事そっちのけで自分用のプレゼントを解き始めた。

「早速開けてみようっと！」

そしてさほど時間がかからず、清香の目の前に細長い円筒形の物が現れた。

「うわ、可愛いアトマイザー！ ボトルの周りが銀の透かし彫りだよ？ 凄いつ！」

瞳を輝かせて見せてきた清香に、清人は無難な感想を述べた。

「へえ……、なかなか良い趣味をしてるな」

「あ、カードが入ってる。えっと……《好みが分からなかったので中身は今度贈ります》だって。流石社会人の人だと色々心遣いが凄いいよね？」

（今度って何だ、今度ってのは！？）

内心ムカついた清人だったが、表情はまだいつもの顔を保っていた。その為、清香が更に清人の機嫌を悪化させる事を言い出す。

「ねえ、お兄ちゃんのは？ 開けてみて？」

「ああ、後からでも」

「今見たいの！」

「……分かった」

キラキラした瞳の妹に半ば脅され、清人はしぶしぶ渡された箱を開けた。しかしその中を見て目が点になる。

「は？」

「え？ そんな筈は……」

箱の中にはカードの一枚すら無い空箱状態で、流石に清香も呆然となった。そして清人は懸命に齒軋りを堪える。

（随分ふざけた事をやってくれるじゃないか。意趣返しのもりか？）

その瞳に危険な物が浮かんで来た時、清香が突然バタバタと自室に駆け込んだと思っただら携帯片手に戻り、電話をかけた。

「これは何かの間違いよ。ちょっと聡さんに聞いてみるから！」

「止める清香。プレゼントの中身についてどうこう言うなんて、相手に失礼だろう？」

「だって聡さんがわざと空箱なんて寄越す筈が無いもの！ 後で気が付いて慌てるかもしれないわ。……あの聡さん？ 清香ですけど……。ええ、実はプレゼントの件で……」

一応清香を窘めたものの、聡がどう弁明するのかを少し意地悪く眺めていた清人だったが、あまり清人の思った方向に話は進まなかった。

「……あ、そうだったんですか？ びっくりしちゃいました。……」

……じゃあ、私はもう休みに入りましたし、来週にでも聡さんの会社の近くまで行きますね？」

「おい、清香！？」

予想外の台詞を清香が発した為、慌てて清人が口を挟もうとしたが、話し中だった清香はそれを半ば無視した。

「……いえ、構いませんよ？ 今日わざわざ家にまで来て貰いましたし。……ええ、それじゃあまた」

そして通話を終わらせた清香は、笑いを堪える表情で清人に向き直った。

「聞いてお兄ちゃん、笑っちゃったわ」

「何だったんだ？ 一体」

「聡さんったらお兄ちゃんにはカフスボタンを用意してたんだけど、間違つて来週の忘年会でやる予定の、ビンゴゲーム用のサプライズ景品として準備した箱を渡しちゃったんですって」

そう言つてクスクス笑っている清香に、清人が面白く無さそうに呟いた。

「……随分うっかり者なんだな」

「本当、時々聡さんって可愛いよね」

「可愛い？」

清香のその台詞にピクリと反応した清人だったが、当の本人は笑いを堪えるのに精一杯だった。

「空箱でしたつて言つた途端、凄い狼狽してたのが電話越しにも分かつたわ。『先生に失礼な事をした』つて。きつと顔色は真っ青だったわよ？」

「まあ、当然かもしれんな」

「『一度家に戻つて本来の物を届けるから』つて言つてくれたけど、只でさえお仕事で疲れてるのに流石に悪いじゃない。だから来週聡さんの会社の近くに、聡さんの休憩時間に合わせて出掛けて、プレゼントを受け取る事にしたわ。『近くにランチの美味しい店があるから案内するよ』つて言われたし」

「俺は宅配とかでも一向に構わんが？」

殆ど呻くように清人が意見を述べたが、清香は腕組みをして頷きつつ真面目くさつて答えた。

「私もそう思つただけど、聡さんが『失礼をした上にこれ以上不義理な事は出来ないから、是非とも手渡ししたい』つて。本当に真面目な人だね、聡さんって」

（やっぱりわざと空箱を仕込みやがったな、あの野郎……。小芝居までして上手く清香を丸め込みやがって、そんなに力尽くで排除されたいのか!?!）

そうして「仕事納め前だとここら辺かな」と上機嫌でカレンダーを眺めている清香は、未だ清人の怒りの大きさと深さに気が付かないまま、新年を迎える事になったのだった。

## 第24話 秘められた誓い

新年に入って最初の土曜日。都内有名ホテルの大宴会場で、経済団体主催の新年会が華々しく開催されていた。

一流どころの企業の経営者、創業者一族の錚々たる顔ぶれが、あちこちで輪を作りながら親しげに語り合い、もしくは牽制し合う中、柏木雄一郎は時期を見計らい、目指す相手に向かって悠々と近付いて行つた。

「やあ、小笠原さん、こちらにいらつしやつたんですか。新年明けましておめでとうございます」

にこやかに声をかけられて、昭と彼を囲んで話をしていた何人かは、意表を突かれて黙り込んだ。しかしそれも一瞬で、すぐに昭が何事も無かつたかの様に笑顔で挨拶を返す。

「……これは柏木さん、おめでとうございます」

「昨年はお互い色々と気忙かつたと思いますが、今年は心穏やかに過ごしたいものですな」

「全く同感ですね」

如何にもわざとらしく「ははは……」と笑い合っていると、側で二人の様子を窺っていた総白髪の老人が、興味深そうに口を挟んできた。

「ほう……、柏木さんは小笠原さんと懇意でいらしたんですかな？何やら最近仕事を取ったの取られたのと、穏やかで無い話がチラホラ漏れ聞こえておりましたが」

「それは……」

「滅相ありません、永島会長。ああ、勿論同業者の関係ではあるので、互いに競い合うのは当然ですが、仕事を離れた上では親しく交歓したいと思っております」



昭の台詞を遮り笑顔で雄一郎が断言すると、永島は満足そうに頷いた。

「なるほど……。それでは巷で囁かれている様に、柏木と小笠原で全面戦争が勃発直前などと言う事態は、単なる懸念と言う訳ですか？」

「勿論ですとも。小笠原さんもそれには同意してくれるだろう？」  
あくまでもにこやかに促してくる雄一郎に、昭は舌打ちを堪えながら笑顔で話を合わせる。

「そうですね。どこその馬鹿な人間が、勝手な憶測を流しているだけでしょう。今年も宜しく願います、柏木さん」

「こちらこそ。……それで早速ですが、小笠原さんにお渡ししたい物が有りましてな」

「おや、何でしょうか？」

昭が怪訝な顔をする、雄一郎は壁際に視線を向けて軽く手招きした。すると万事心得ている彼の秘書が歩み寄り、無言で手に提げていた紙袋を恭しく雄一郎に手渡す。

そして更に雄一郎は、昭に向かってそれを差し出した。

「どうぞお持ち下さい。ご子息の見合い写真です」

「はあ？」

周囲の者達と同様、思わず昭も間抜けな声を上げてしまったが、それに一向に構う事無く雄一郎は笑顔で続けた。

「実は私とごく親しくしているある人物が、お宅のご子息を大層気に入ってしまったみたいでして。『是正彼に良縁を世話して欲しい』と頼まれたんですよ」

「ほう……、親しい人物、ですか。その方とはどういったご関係ですか？」

相手の言わんとする事が分かり過ぎる程分かってしまった昭は皮肉っぽく顔を歪めたが、雄一郎は平然としらを切った。

「まあ、そんな事は置いておいて。弟達や妻の実家にも声をかけて、腕によりをかけて素晴らしいお嬢さんばかりを厳選してみましたよ？ 来生精巧社長のお嬢さん、畠山経団連会長の姪ごさん、信楽銀行頭取のお孫さん、白鳥大臣のお嬢さん、その他選り取り見取りです」

その顔ぶれを聞いた周囲の面々は、驚きと羨望が入り混じった眼差しで、紙袋の中の風呂敷包みを凝視した。

「流石柏木さん。豪華絢爛な顔ぶれですな」

「人脈の広さが並みじゃ無い」

「いやいや、巷で噂されている事など、この一事で十分否定できますよ」

「本当に。これだけ骨を折る間柄だとは思いませんでしたよ、小笠原さん」

「はあ……」

昭は何とか顔をひくつかせない様懸命に堪えたが、この場で最年長でもある永島が、心底嬉しそうな笑顔で彼にとどめを刺した。

「これは春から縁起が良いな。希に見る良縁ばかりじゃないか。小笠原君、ありがたく柏木君の好意を受け取りたまえ」

「はい……。息子にまでお心遣いを頂き恐縮です、柏木さん」

「いやこれ位、大した事ではありませんよ」

雄一郎の純粹な好意からきている行為と信じて疑わない永島に、昭は反論を封じられた。由紀子と結婚して社長職を譲られて以来、こういう社交場で全く後見の無い昭を何くれとなく気にかけてくれ、庇ってくれた恩人の目の前で、変に事を荒立てたくは無かったのだ。

「そう言えば君の息子には暫く会っていないな。聡君、だったか？」  
昭に対するその問いかけを、横から雄一郎が奪う形で答える。

「そうです、永島会長。今年25歳の東成大経済学部出身の秀才で、

体格も立派で容姿もなかなかの好青年です」

「おや、柏木君は彼の人となりを知っているのか？」

「そうでなければ縁談など持ち込みませんよ」

「それもそうだな」

そこで一同が揃って楽しげに笑い合つ中、半ば強引に紙袋を押し付けられた格好になつた昭だけは、必死に怒りを押し隠していた。

その日、夕方になつて帰宅した昭は、運転手から手渡された紙袋を手に提げながら、仏頂面でリビングに入った。

「……………戻つたぞ」

「お帰りなさい」

笑顔で声をかけた由紀子だったが、昭は表情を変えないままぶつきらぼうに言い放つた。

「今すぐ聡を呼べ」

「……………分かりました」

常になら「聡を呼んでくれ」という筈の夫が命令口調で言ってきた為、由紀子は少し驚きながらも聡を呼びにリビングを出て行った。そしてほどなくして、聡が由紀子と共にリビングに姿を現す。

「お疲れ様です、父さん。新年会で何かあつたんですか？」

ここに来るまでに、由紀子から何やら父親が不機嫌らしいと耳打ちされた聡は、昭の顔色を窺いながら慎重に問いかけたが、既にネクタイを緩めながら惘然としてソファアに座っていた昭は、自分とは向かい側の席を指し示した。

「まずそこに座れ。話はそれからだ」

「……………はい」

取り敢えず聡が大人しくソファアに収まり、由紀子も昭の隣に腰を下ろすと、昭は持参した紙袋から風呂敷包みを取り出し、それを目の前のテーブルに置いた。

「お前への縁談だ。柏木が見合い写真と釣書を、大量に俺に押し付けてきた」

「は？」

前振り無しの話の内容に聡はただ呆気に取られたが、流石に由紀子は顔色を変えた。

「あなた！ 断れ無かつたんですか？ そんな突然に」

「興和製紙会長の前で親しく声をかけられてな。まさか事を荒立てたり、周りの連中に変に不仲の所を見せる訳にもいかんし。……完全に向こうにしてやられた」

「そう……、永島さんには、変にご心配をかける訳にはいかないわね……」

忌々しく舌打ちする昭の説明を聞いて、由紀子は仕方無さそうに頷いた。そして固まっている聡の代わりに風呂敷包みを解き、内容を確認し始める。

そして幾らもしないうちに顔色を曇らせた。

「あなた……。この顔ぶれの方達とのお話を、無碍に断る様な真似は」

「流石にできんな。車の中で中身を確認してきたが、うちのメインバンクの頭取令嬢や、許認可官庁の幹部の娘も含まれているとあつては。全く柏木の奴……」

そこで昭は由紀子との話に一区切り付け、黙って二人のやり取りを見守っていた聡に声をかけた。

「さて、どうする？ 聡。大人しくこの中の誰かを見合いをするか？ 柏木のお膳立てはなかなかの物だ。小笠原にとって有益な縁談ばかりだからな」

半分以上皮肉を込めた父親の口調に、聡は冷え切った声で尋ねた。

「これはあれですか。大人しくこの縁談を受けて、清香さんの周りからさっさと失せると言う、柏木側からの遠回しの脅しですか？」

「解釈はどうとでもできるが、ここで一番重要なのは、父親の再婚に関して柏木家に対して大いに含む所のある筈の“彼”と、あの損得勘定に聡い“柏木”が全面的に手を結んだと言う事実だ。相当嫌われたな、聡」

深刻な話の筈が、昭はその顔に苦笑いを浮かべ、釣られて聡も顔を緩めた。

「そこまで嫌われればいつそ本望ですよ。相手が無視できなくなっている証拠ですからね。申し訳ありませんが、その話は全部断つて下さい」

息子のあまりにもあつさりした言い方に、僅かに渋面を見せる昭。「簡単に言ってくれるな」

「やってやれない事は無いでしょう。父さんなら」  
悪戯っぽく笑いながら言つてのけた聡に、昭は今度は笑いを堪える表情になった。

「はっ……、いつの間にか世辞も上手くなったな。分かった。何とかしておこう」

「すみません」

面倒をかける事になった父に向かって殊勝に頭を下げた聡だったが、ここで昭は真顔になって口を開いた。

「それはともかくとして……。どのみちいつまでも現実から目を逸らしている訳にはいかないだろう。そのうち清人君と腹を割って話をしなければいけないと思うから、そのつもりでな」

「……分かりました」

思わず強張った顔で頷いた聡から、昭は由紀子に視線を向けた。

「由紀子。お前も心構えだけはしておくんだな」

「はい……」

同じ様に緊張した顔つきながらも小さく答えた由紀子を、昭は何とも言えない表情で少しの間見詰めていた。

新年早々、小笠原家でそんな不穏な会話が交わされた翌日。三が日を過ぎたものの一月に入って最初の日曜日とあって、神田明神にはそれなりに参拝客が訪れていた。

社務所の窓口では様々な祈祷の受付、お守りや絵馬などの販売で人が並んでいたが、その傍らの大木の下で、先程引き当てたばかりのおみくじを手に、清香が堪え切れない笑いを漏らす。

「うふふつ、今年はやつとお兄ちゃんに勝った！」

その喜びぶりに、清人が呆れた様に小さく肩を竦めた。

「おみくじに勝ち負けがあるわけ無いだろう？」

「だって……、これまで毎年、お兄ちゃんは大吉ばかりで私は吉や小吉とかで悔しかったのに、今年は私が大吉で、お兄ちゃんが凶だなんて凄く嬉しいんだもん！」

ウキウキと上から垂れている枝におみくじを結び付けている清香の頭を、清人が苦笑しながら軽く叩いた。

「こら、俺が不幸になっても良いってのか？」

「そんな事は言って無いってば！ それに大吉の私が側に居れば、そんなに不幸にもならないでしょう？」

「それもそうだな」

緩みまくった顔のまま清人が清香と共におみくじを結び付けていると、何故か背後から奇妙な声が聞こえてきた。

「…………げっ！！」

「え？」

「は？」

呻きとも叫びとも取れるその声を不思議に思った2人が反射的に振り向くと、何メートルか後方に口許を手で覆った聡の姿を発見した清香は忽ち笑顔になり、清人は威嚇するかのようにスッと目を細めた。

「聡さん、どうしてここに？ 三が日は過ぎましたけど初詣ですか？」  
走り寄って来た清香にこやかに話しかけられた聡は、視線を忙しく行き来させてから、若干引き攣り気味の顔で答えた。

「あ、ああ。三が日のうちは色々忙しくてね。父の実家がこの近くだし、落ち着いた頃そこに顔を出すついでにここに来てるんだ。清香さん達は？ ここは住んでいる所からは随分遠いけど……」

「私達も混雑している時にわざわざ来たくなくて、毎年ずらして参拝してるんです。実はこの例大祭を見物に来て、お父さんとお母さんが出会ったんですよ。それで縁起が良いからって、両親が生きてた頃から毎年ここに来てるんです」

「そ、そうなんだ」

（まずい……、幾ら心構えをしておけと言ったって、こんな所でいきなり兄さんと母さんを会わせるわけには）

内心で激しく動揺している聡とは対照的に、清香がのんびりと尋ねる。

「ところで、聡さんお一人ですか？ 由紀子さんとおじさまは一緒に居ないんですか？」

そう清香が口にした途端、その背後で清人がその眼に殺気をちらつかせ始めた為、聡は本気で狼狽した。

「あ、ああ……、母が去年入院したから皆で病氣平癒の祈祷をして貰ったんだけど、2人は先に駐車場に行って貰って、俺だけこっちにお守りを買いに来たから」

「そうなんですか。側にいらっしやるなら一言ご挨拶しようかと思っただんですけど、それならまた改めて」

「うん、そうしてくれるかな。わざわざ車まで来て貰うのも悪いしね」

そうして聡がほっと一息吐いた瞬間、背後から今現在尤も聞きた

くない声が響いて来た。

「聡？ もう買い終わったのか？ 由紀子が言い忘れたらしくて、受験生の子供が居る知り合いに渡すから、商売繁昌御神札の他に勝守も……」

「ごめんなさい、聡。二度手間になってしまったら……」

「……………」

社務所の建物の陰から角を曲がって出て来た夫婦は、後ろ姿の息子に向かって声をかけたが、更にその向こう側に居た人物を認めて口を閉ざした。

清人と聡も咄嗟に対応ができずに無表情になって固まる中、一人清香だけが笑顔で昭と由紀子に頭を下げる。

「おじさま、由紀子さん、新年明けましておめでとございます。今年も宜しく願います」

それを受けて、2人は何とか笑みを浮かべつつぎこちない挨拶を返した。

「ああ……、こちらこそ宜しく」

「新年早々会えて嬉しいわ」

そこで何を思ったか、清人が無表情のまま夫婦に向かってゆっくり歩み寄った。その何を考えているか分からない様子に、由紀子は怖気づいた様に一歩後ずさりして昭の背後に半身を隠す様にし、危険な物を察知した聡も一歩足を踏み出す。

しかし昭は息子を視線だけで制し、清人と正面から対峙した。

「初めまして、清香の兄の佐竹清人です。先日は妹がお宅にお邪魔させて頂いたそうで、加えて聡君から結構な品物を頂きまして、ありがとうございます」

軽く頭を下げながらの清人の話の内容や口調は、いたって紳士的かつ礼義に適った物であったが、事情を知る者にとっては辛辣すぎ



る一言だった。

(なるほど……、初めて顔を合わせた時は、自己紹介する間も無く殴り倒されたからな。確かにある意味、初対面には違いない)

つつい笑い出しそうになるのを堪えながら、年長者の余裕で昭は言葉を返した。

「ご丁寧にありがとうございます。聡や清香さんからお話を聞いたりして、あなたとは既に随分前からの知己の様な気がしていましたね。今回が初顔合わせだなんて、信じられない位ですよ」

そう言っつて穏やかに笑った昭を見て、清人は益々腹立たしさを覚えた。

(嫌味か、この狸親父……。あの時もつとボコボコにしておくべきだったな)

「そう言えば……、佐竹さんは柏木社長とも昵懇だとか。柏木社長に働きかけて色々ご配慮頂いた様でございます」

「さて、何の事やら。確かに柏木さんの所とは家族ぐるみでお付き合いをしています。一介の作家如きが大企業の社長職を務めていらっしゃるお宅に、どんな配慮をすると?」

「家庭の中の事まで考えて頂けるとは、恐縮ですな。しかしご心配頂く様な事はありませんので、今後はお気遣いなく」

「小笠原さんは、どうやら何かお考え違いをいらっしやる様ですが?」

「そうでしたか?」

「そつだと思えますが?」

傍目には笑顔のやり取りだったが、話の内容が今一つ掴めない清香は後ろで首を捻り、聡はこの腹の探り合いの会話に胃痛を覚えた。

(二人とも、もういい加減勘弁してくれ、胃がっ……。そつだ、母さん!?)

慌てて由紀子の方に目をやると、真つ青な顔で片手で軽く昭の口トの袖を掴んでいるのが目に入った。しかし清人が更に足を踏み出して彼女に近寄ったのを見て、聡は顔色を変える。

緊迫した空気を醸し出す中、清人は昭の斜め後ろに佇む由紀子を面白く無さそうに見下ろしてから、笑顔らしき物をその顔に浮かべた。

「聡君のお母様の小笠原由紀子さんですね？ 初めまして、清香の兄の佐竹清人です。あなたの事は清香から話を聞いていました」

「……………は、はじめ、まして」

目が全く笑っていない笑顔で無言の圧力を受け、初対面では無いとも言い切れずに、由紀子がか細い声で挨拶を返した。すると由紀子と昭だけに聞こえる程度の小声で、清人が冷たく吐き捨てる。

「……………どの面下げて清香を家に引つ張り込んだ。この偽善者が」

「……………っ」

「由紀子！」

真つ青な顔の由紀子が小さく息を飲んで胸元を押さえ、そんな彼女の顔を覗き込んだ昭が、僅かに顔色を変えて小声で呼びかける。対する清人はそんな2人に全く興味が無さそうに一瞥しただけで、踵を返して歩き始めながら清香に声をかけた。

「それでは失礼します。この後片付けなければいけない仕事もありますので。ほら、清香、行くぞ」

「う、うん。じゃあ聡さん、おじさま、由紀子さん、失礼します」

慌てて清香は頭を下げ別れの言葉を述べ、昭達も何とか笑顔を浮かべつつ言葉を返した。

「ああ、さようなら」

「じゃあ清香さん、また電話するから」

「はいー」

そうしてその場に立ったまま、二人を見送っていた三人だったが、その姿が人混みに紛れて見えなくなった瞬間、緊張の糸が切れた様に由紀子が玉砂利の上に崩れ落ちて膝をついた。

「由紀子、大丈夫か!?」

「母さん!!」

流石に顔色を変えた男二人に、由紀子が胸を押さえながら弱々しく呟く。

「大丈夫よ、ちょっと苦しいだけだから、お薬で何とかなるから……」

そう弁解した由紀子を、昭が叱りつけながらバッグの中のピルケースを探す。

「早く舌下錠を使え! それから念の為此のまま病院へ行くぞ。聡、かかりつけの病院に休日対応して貰えるかどうか確認してくれ!」

「分かった!」

由紀子の傍らで慌ただしく対応している二人に、周囲の視線が集まり始めている頃、清人と清香は境内を抜けて最寄駅への道を歩いていた。

「今年は色々良い事がありそうだね、お兄ちゃん!」

「お兄ちゃんってば! 聞いている?」

「……あ、ああ、すまん。何か言ってたのか?」

掴んだ腕を揺さぶって漸く反応を返された清香は、少し前から話しかけても上の空状態の清人に、怪訝な視線を向けた。

「どうかしたの? さつきから何だか変よ?」

それに対し、清人は僅かに視線を逸らしながら弁解する。

「いや、何でも無い。ちょっと仕事で疲れてるかな? 新年早々一本新しいのを抱え込んだし!」

それを聞いた清香は、何となく腑に落ちない様な顔付きをしたものの、深くは追及せずに話を終わらせた

「……そうなの？　じゃあ今日は帰ったらゆっくり休んでね？　晩

ご飯は私が準備するから」

「すまないな、清香」

それから何となく互いに無言で家路を辿っていたが、清人は心の中で義母である香澄に向かって謝罪の言葉を述べていた。

（すみません、香澄さん。あれから二十年以上経っても、まだ俺には約束を果たすのは無理みたいです……）

勿論そんな清人の呟きを、耳にする者など皆無だった。

## 第25話 罪作りな天使

「聡さん、これがこの前の成人式の時の写真なの。由紀子さんに見て貰って下さいね?」

一月も半ばの週末、喫茶店で清香と待ち合わせた聡は、挨拶もそこそこに差し出された封筒を受け取り、その中から何枚かの写真を取り出して顔を緩めた。

「ああ、早速母があげた簪や帯留めを使ってくれたんだね? ありがとう、これを見たら母も喜ぶよ」

振袖姿の清香の全身を写した物や上半身のアップの物など何枚かの写真の中に、清人とのツーショットを認めた聡は一瞬手の動きを止めたが、清香は特に不審に思わず笑顔で話を続けた。

「当日着付けと髪セットをしてくれた玲二さんも感心しました。『流石に大企業の奥様だと、普段使いの物も本物だね』って。一応お店で貸して貰える飾りを家まで持ってきてくれたんですけど、無駄になって謝っちゃいました」

それを聞いた聡は思わず写真から顔をあげ、感心したように清香に向かって呟く。

「へえ……、玲二さんは当日の朝に、わざわざ清香さんの自宅まで出張してくれたんだ。優しいんだね」

「はい。それに『清香ちゃんの振袖姿を見逃してたまるか!』とかで、結局他の皆も成人式の会場に勢揃いしてしまって、そこで撮ったのが一番下のそれなんです」

「……そうなんだ」

清香に指し示され、端だけが見えていた一番下の写真を引き抜いて見ると、確かに振袖姿の清香を囲んで彼女の兄と従兄達が笑顔で全員集合しており、聡は軽い頭痛を覚えると同時に納得した。

(清香さんの成人式に顔を出そうかとも思ったが、大学祭の二の舞になりそうな予感がしたんだよね……。しかもこの日に皆予定を合わせたから、今日は誰もちよっかいを出しに来れ無かったとみた。つくづく正解だったな……)

そんな考えを頭の中で巡らせていると、無言になっていた聡を不審に思った清香が声をかけてきた。

「聡さん、何となく元気が無い様な気がしますけど、どうかしましたか？」

その問いに対し、聡はついこの間の懸念について口を滑らせる。

「……ちよつと、ね。実は今、母さんが少し体調を崩してて」

その言葉に、清香は忽ち心配そうな表情を浮かべた。

「大丈夫なんですか？ そう言えばこの前神田明神でお会いした時、何となく顔色が優れない様な感じはしましたけど」

「確かに、久し振りに人混みの中に出て、ちよつと疲れたのかもしれないね」

「そうですね……。退院されたばかりですし、あまり無理なさらない様に伝えて下さいね？」

「心配してくれてありがとう。母に伝えておくよ」

体調を崩した原因が清香自身の兄の一言だとは言えず、聡は静かに微笑んで誤魔化した。そして話題を変えようと、ここに来た時に感じた事を口にしてみる。

「だけど清香さんも、何となく元気が無い感じがするんだけど」

「私ですか？ 私は別に具合は悪く無いですよ？」

キョトンとして言い返した清香に、聡が真顔で続ける。

「でも俺がここに来た時に、何か難しい顔をして考え込んでなかった？ 何か心配事でもあるなら相談に乗るよ？」

そう言われて合点がいった顔付きをした清香は、次に戸惑う様な表情を見せた。

「心配事ですか？ まあ、確かに有ると言えば有るんですが……」  
「何？ 遠慮せずに言ってみて？」

「こんな事言われても聡さんが困るかと思うんですが……、最近お兄ちゃんの様子が変なんです」

そう言われた瞬間、聡は別に困るでもなく、寧ろ平然とその言葉を受け止めた。

（兄さんは清香さんに関わる事限定で、相当変だし色々常軌を逸しているのはこれまでで十分分かってるからな……）

冷静にそんな事を考えた聡だったが、清香に対しては心配そうな顔を装いつつ問い返してみた。

「先生の様子が変わって、いつからどんな風に？ 原因が何かは分かっているのかな？」

それに対し、清香は割と冷静に答えた。

「思い返してみると、初詣から帰ってからの様な気がするんです。

突然どこか上の空になったり、気が付くと飾ってある家族写真を無言で凝視してたりとか」

「へえ……、その日に何かよほど気に入らない事や、ショックな事でもあったのかな？」

原因がすっかり把握できているにも関わらず聡は惚けたが、続く清香の物凄いの外れな台詞を聞いて、激しく脱力した。

「ええ、お兄ちゃんったら、その日おみくじで初めて凶を引いたんです」

「……え？」

「お兄ちゃんはこれまで毎年、不思議な位大吉ばかり引いてたんですよ」

「……なかなか強運な人なんだね」

辛うじてコメントを口にした聡に、清香が更に追い討ちをかける。

「そうなんです！ それなのに今年偶々凶を引いて、密かに動揺して落ち込んでみたいで。それで巷で有名なラッキーアイテムを色々集めて、お兄ちゃんにプレゼントしてみたんですけど、なかなか気に入った物が無いらしくて。あれから調子が戻らないままなんです」

ポニーテールを微かに揺らしながらテーブルに身を乗り出し、真顔で訴えてくる清香に、聡は思わず遠い目をしてしまった

（そりゃあ……、おみくじの結果が悪くて、気分を悪くしている訳では無いだろうからな……）

「聡さん、見ただけでお兄ちゃんの心をグツと鷲掴みしそうな、そんなラッキーアイテムに心当たりありませんか？」

あくまでも真剣に尋ねてくる清香を冷たく突き放す事はできず、聡は神妙に答えた。

「ごめん、その手の類にはあまり詳しく無くて……。今度耳よりな情報が入ったら、清香さんに教えるね？」

「お願いします」

（全く……、母さんの体調崩しただけでは飽き足らず、清香さん今まで何変な心配かけてんだ。あの馬鹿兄貴！）

聡は心の中で清人に罵声を浴びせてから、写真を元の様に封筒に入れてコートの内ポケットにしまい込み、カップに残っていた珈琲を飲み干した。

「じゃあそろそろ出ようか。スケートに行く前に、寄りたい所があるんだろう？」

「はい、そんなに時間はかかりませんから。この近くで開催されている、明良さんの個展に顔を出したいんです」

「明良さん？ 倉田さん、だよ。確かフリーのカメラマンだったっけ」



「はい、結構活躍してるんですよ？ 実はさつき渡した写真も、明良さんに撮影して貰ったんです」

「そうなんだ」

そうして支払いを済ませた二人は、清香の先導で他愛の無い話をしながら表通りを五分程歩き、繁華街のビルの一階に入っている貸しギャラリーの前で足を止めた。

ガラス張りのそのギャラリーの入口横には《倉田明良個展会場》の表示が掲げられており、二人は躊躇する事無く中へと足を踏み入れる。すぐ側の受付で担当の女性に軽く会釈しつつ記帳を済ませると、少し離れた所で年配の男性と立ち話をしていたスーツ姿の明良が清香達に気が付いて話を終わらせた。

「……そんな所ですね。それではごゆっくりご覧下さい。……」

やあ、良く来てくれたね、清香ちゃん。小笠原君もようこそ」

笑顔で歩み寄って来た明良に清香は悪戯っぽく笑い、聡は社交辞令的な笑みを返した。

「うふふ、明良さんに言われた様に、サクラの頭数を増やしに来たわ」

「それはありがたいな。清香ちゃん一人でも、十分華やぐからね」

「お邪魔します」

「やあ、付き合わせて悪いね。大した物は無いけど、一通り見て行つて」

明らかに謙遜と分かるそんな会話を交わしてから、三人はそれなりに人が入っているであろう会場内をゆっくり移動し始め、偶々手が空いていたのか、それともスポンサーであっても中年男の相手よりは清香にへばり付いていた方が楽しいのか、明良は清香に寄り添って展示されている作品の解説を始めた。

今回の個展の被写体は主として自然の風景らしく、断崖絶壁から

鳥が飛翔する瞬間を狙った物や、洞窟内の神秘的な光景を撮った物など、思わず聡も見入ってしまう秀逸な題材と絶妙なアングルの作品が多かった。それで思わず素直な感想を口に出す。

「……なかなか素敵なお作品が多いですね」

清香と話し込んでいた明良がそれを耳にして、益々嬉しそうな顔になりながら清香と聡を奥まった場所へと誘導した。

「ありがとう。実は最近の一番の傑作はこっちでね。是非ともその感想も聞かせて欲しいな」

「そうですね。拝見します」

それに素直に従って付いて行った聡は、目の前に現れた三枚のパネルを目にした途端、絶句して固まった。

「ああ、これだよ」

「これ……、………っ!？」

「きゃああっ！ 思ったより素敵に出来てる！」

明良が自慢げに披露し、清香が歓声を上げたそれらは、《羽化》と題名が付けられた連作だった。それを見た聡がどうして固まったのかと言えば、それが清香の全裸を撮影した物だったからである。

勿論きわどいショットなどでは無く、向こう側を向いて膝立ち状態の背中に、翼をイメージした様に薄く透けて見えるシフォンの細長い布を交差させて体に軽く巻き付け、その両端を両手で掴んで幅広く広げた物、横向で膝を抱えてその上に乗せた顔をカメラの方に向けながら、下部はやはり薄布に埋もれている様に写っている物、更にうつ伏せになった状態で両肘を付き、組んだ手の上に顔を乗せて真っすぐ見詰めている物の三枚だった。

これだけでも聡は心臓が止まる位驚き、次いで猛烈な怒りに駆られたが、傍らの脳天気な二人の会話がそれに拍車をかけた。

「良いだろう？ 出来上がりを見て、是非とも今回のラインナップに加えたくなってるね。これまで見た人の反応も、結構良いんだよ」

「うわゝ、凄く嬉しい！ 撮影前にエステで全身を、お姉様達に散々いじられた甲斐があつたな〜」

「はは。俺は後から文句言われたけどね。『あんな何もしくなくてもピチピチの若い子連れてきて、私達にどうしろって言うのよ。嫌味？』って」

「あはは、そんな事があつたんだ〜」

そんな会話を耳にしているうちに、聡の中で何かが盛大に音を立てて切れた。

と同時に聡の顔から徐々に表情が消え去っていき、ここで漸く清香と明良が静か過ぎる聡に気が付く。

「小笠原君？ さつきから黙ってるけど、どうしたの？ 俺の傑作に度肝抜かれたとか？」

「聡さん、これ、どうですか？」

「……どうして“これ”を撮ったんですか？」

二人の問いかけに聡は質問で返したが、その声音は地を這う様な代物だった。それに当然気付きながら明良は平然と言い返し、清香は何も考えないまま素直に答える。

「どうしてって、清香ちゃんの成人の記念に。綺麗な今の清香ちゃんを残しておこうと思ったから」

「裸なんて、明良さんじゃなかったら恥ずかしくて撮って貰え無かつたし。でも明良さん、流石プロだね？ 撮る時結構厳しかったし」

「そりゃあ、良い物を撮る為に命かけてるからね。それ以前に清香ちゃんを撮るんだから、下手な物は撮れないさ」

「でも本当に良い記念になったわ。ありがとう明良さん」

「どういたしまして。あとから別なパネルを家に送るからね」

如何にも楽しげに会話している清香と明良を凝視したまま黙って

いたが、ここでいきなり聡は右手で清香の手首を鷲掴みし、明良に軽く頭を下げただけで足早にその場を後にした。

「失礼します。行くよ」

「……え？ あの、聡さん！？ ちょっと待って！」

当惑しながら聡に半ば引きずられて行く清香を見送った、この事態を引き起こした張本人である明良は、一人取り残されたギャラリ―でクスクスと笑いながらひとりごちた。

「ああ……、ちょっとばかり刺激が強過ぎたかな？ 頑張つてね？  
清香ちゃん」

そうして何事も無かったかのように、新たな来客に向かって愛想を振り撒いていたのだった。

そして今現在自分が置かれている状況に全く気が付いていない清香は、一歩先を早足で進む聡に困惑しながら声をかけた。

「あ、あのっ！ 聡さん？ いきなりどうしたんですか！？」

そんな問い掛けを何回か無視しながら聡は建物を出て通りを進み、少し歩いたと思ったらいきなり細い路地に清香を引っ張り込んだ。更に通りに陰になって見えない場所を選んで、建物の壁に清香の背中を押し付け、その両脇に自分の両手を付いて半ば彼女を閉じ込める体勢になる。

事ここに至っても、自分に何が起きているのか今一つ分かっていない様に、不思議そうに見上げてくる清香に向かって、聡は無表情のまま漸く口を開いた。

「……無防備にも程がある。多少腕には自信があるのかもしれないが、それで油断していると火傷だけじゃ済まないって分かって無いな」  
「は？」

いきなりの断定口調に清香が戸惑った声を上げたが、続けて言われた言葉にカチンときた。

「加えて無頓着で無神経過ぎるし」

「……聡さん、怒りますよ？」

「怒ってるのはこっちだ！」

「きゃあっ！」

軽く文句を言っただけなのにいきなり怒りの表情で顔の横の壁を拳で叩かれ、清香は相手が相当怒っているのを漸く理解した。

「一体何がどうなると、ヌード写真なんか撮られる羽目になるんだ？」

「だから……、それは明良さんが、二十歳になった記念に、綺麗な私を撮ってくれるって……」

しどろもどろになりながら弁解を始めた清香だったが、聡は容赦しなかった。

「そんな口車に乗った挙げ句、撮影中散々男達に裸を舐めまわす様に見られてヘラヘラ笑ってたんだ？」

「それは……、裸と言われてもきわどい写真なんか撮られてませんし、明良さんは気心が知れてる相手だし、芸術作品を撮りたいってそれに舐めまわす様になんて誤解で、明良さん以外は全員女性スタッフで終始和気あいあいと……、きゃあっ！」

「ふざけるな！」

今度は強く両肩を掴まれて一瞬揺さぶられた為、流石に清香も固まって顔を引き攣らせた。そこで漸く聡も自分が清香を怯えさせているのを自覚し、肩を掴む手の力を緩めて黙って自分の足元を見詰める。

そして自分の感情を落ち着かせる様に、軽く何回か呼吸をしてから、再びゆっくりと顔を上げて清香の顔に視線を合わせた。

「……あ、あの、聡、さん？」

「俺としては……、はつきり口にしてなくても、もう家にも呼んで両親にも会って貰ってるからそのつもりだったんだけどね。迂闊だったな……」

「な、何が、でしょう?」

心底疲れた様な溜め息を吐かれ、幾らか怖じ気づきながらも清香が尋ねると、聡は一気にサラツと言つてのけた。

「清香さんと付き合つてる氣になつてたつて事。残念ながら君の方はそうじゃなかつたみたいだね。まあこの際、済んでしまった事は仕方がない。この際はつきり言わせて貰う。俺と付き合つて」  
真正面からそんな言葉を投げ掛けられた清香は、思わず逃げ場を探してしまつた。

「え、えつと……、それは所謂どこかに行くと言つ事では……」

「できれば、俺をこれ以上怒らせないで欲しいな?」

ここで唐突に聡の顔が、先程までの怒りの表情から不気味な位の極上の笑顔に切り替わつた為、清香は心の底から戦慄した。

(や、やだつ! 何かこの笑顔怖いつ! 絶対聡さん怒りまくつてる!!!)

見せ掛けに騙されず聡の心情を正確に理解できた清香は、未だ両肩を掴まれた不自由な体勢のまま、軽く頭を下げて謝罪した。

「……すみません。所謂男女交際についてのお話だつて事は、十分理解してます」

「それは良かった。一々説明する手間が省けて安心したよ。じゃあ話は戻るけど、俺の恋人になつて?」

台詞の内容は依頼する形なのに、何故か拒否する事を許さない空気を醸し出している笑顔の聡に、清香はおずおずと口を開いた。

「……あの、聡さん」

「何? 俺が恋人じゃ不満?」

「いえ、そんな事じゃなくてですね。私、これまであまり男の人に好かれた事が無いんですけど……」

ボソボソと自分の経験値の低さを語り、遠回しにどうしてそんな

自分と付き合おうとするのかと問い掛けてみた清香だったが、聡はその発言を切って捨てた。

「単に、世の中の男達の見る目が無さ過ぎると、根性が無さ過ぎただけだから。俺から見たら清香さんは、十分魅力的な女性だよ？」

他に質問は？」

「他に、と言われても……」

完全に進退窮まった格好の清香に、聡は自分のペースのまま話を続けた。

「じゃあ問題無いよね。じゃあこれから俺達は恋人同士と言う事で」

「はあ……」

「それで、早速恋人の俺から君に、幾つか注意事項があるから良く聞いて」

「はっ、はい。何でしょうか？」

急に再び険しい表情になった聡に、清香がビシッと全身を緊張させるると、聡は大真面目に言い聞かせてきた。

「他の男の前で裸になるのは禁止、って言うかそんなのは問題外だから。今回だけは特別多目に見てあげるけど、もし万が一同じ様な事があつたら……、お仕置きだけじゃ済まないよ？」

「……っ!？」

最後に呟く様に語られた台詞の時、聡の瞳の中に得体の知れない危険な物を感じ取った清香は、目を見開いて固まった。

(ちよ、ちよっと待って！ 聡さんが何か変っ!?)

本気で狼狽する清香の前で、聡が自嘲めいた小さな笑いと呟きを漏らす。

「自分でも驚く位、俺って独占欲が強いタイプだったみたいだな。でもこれまでこんな事は無かったし、本気の相手限定か……。これじゃあとても“あの人”を笑えない」

「え、えつと……、それはどつという意味」

「だから水着もビキニは禁止」

「は、はあぁ？」

話の流れに全く付いていけない清香を半ば無視し、聡が淡々と自分の要求を繰り返す。

「ただし、俺がプールを貸切にする時だけは構わないから」

「あの……」

（独占欲が強いとか、ビキニは禁止とか、だけどプール貸切の時はOKとか……、何か突っ込み所が満載なんだけど……。つていうか！いつもの穏やかで冷静な聡さんはどこに行っちゃったのよっ！？）

聡の理性と冷静な判断力を崩壊させた張本人である清香が悶々と考え込んでいると、聡が顔を近付けて覗き込んできた。

「ねえ、俺の話、ちゃんと聞いているのかな？」

「は、はいっ！聞いてますっ！」

（ち、近いですから顔がっ！！）

自分達の体勢と距離を再認識して、自分の顔が赤くなるのを自覚した清香だったが、聡は傍目には変わらないままだった。

「そう。流石に温泉とかで、女湯に入る時まで水着を着るとは言わないから安心して？」

（安心して……、それは当然だと思っただけど……）

心の中で突っ込みを入れた清香だったが、取り敢えず別の内容を口にしてみた。

「あの……、因みに、温泉テーマパークとか、クアハウスの類に行く場合は……」

それに対する聡の答えは、実にきっぱりとした物だった。

「他の男に見られるだろ？ 当然ワンピースタイプ。スカートの付



いたAラインタイプの物や、パレオ付きなら尚良いね」

「……………」

最早何も言えず黙り込んだ清香に、聡が笑顔で促してくる。

「返事は？」

「はいっ！」

「うん、良い子だ……………」

反射的に了承の返事をする、聡は満足そうな笑顔になってその顔を近付けてきた。

「あ、あのっ！ 聡さんっ！？」

思わず両手で聡の身体を押しやる様にしながら、これから起きる事態を想像して軽くパニックを起こしながら清香は両目を閉じた。しかし自分の額に何か柔らかい物がほんの少しの間触れた感触がしただけで、何も変わった事は起きず、少ししてから恐る恐る目を開いて聡を見上げてみる。

するとそこにはいつも通りの穏やかな笑顔をたたえた聡が立っており、何か面白そうに清香を見下ろしていた。

「うん？ 何？ 清香さん」

「……………いえ、何でも無いです」

ついさっきまでの一連のあれは幻だったのかと思う位の清々しい笑顔に、清香は呆然となりながら聡の問い掛けに答えた。すると聡が清香の手を取って、元の広い通りに向かって歩き出す。

「さあ、じゃあ話がついたところで、予定通りスケートに行こうか」

「あ、は、はい……………」

（えっと……………と、取り敢えず、私、聡さんとお付き合いする事になったんだよね？）

そんな些か頼りない認識をしながら、清香は聡と共に目的地に向かって歩き出したのだった。

後日、明良から『めでたく清香ちゃんと交際開始にこぎつけた様だから、祝い代わりに贈ってやる。だがくれぐれも変な用途に使うなよ?』とのメッセージ付きで例のパネルをポスターに仕立てた物を送りつけられた聡は、「変な用途って何だ! しかもこれを一体どこに飾れと?」と本気で頭を抱えた。

その一方で清香からどんな記念写真を撮影したのかを詳しく聞いていなかった清人は、自宅に届いたパネルを見せられた途端、「明良! お前俺に殺されたいのか!？」と盛大に電話口で吠える事になったのだった。

## 第26話 女達の策動

昼食もそろそろ食べ終わろうかという頃、学食で隣の席に座っていた清香から「朋美、ちよっと聞いて欲しいんだけど」と話しかけられた内容を、朋美は最初聞き流していた。しかしすぐにスプーンの動きを止めて真顔で清香を見返し、一通り話が終わったのとは同時に、持っていたスプーンをカシャンとドライカレーの皿に取り落としつつ、小さく呻く。

「……………それで、付き合う事になった？」

「うん、なんだかそんな事に……………」

いつの間にか箸をトレイに置き、もじもじと居心地悪そうにしている清香を眺めた朋美は、頭痛と眩暈を覚えた。

（これまでのやり取りで、付き合ってるっていう認識が無かったのも凄いけど、半ば脅迫しながら崩し的に告白ってどうなのよ？）  
朋美は気を落ち着かせようとコップを取り上げ、その中に半分ほど残っていた水を勢い良く飲み干してから再び横に向き直り、慎重に清香に問いかけた。

「因みに今の話、清人さんには」

「してるわけじゃないでしょ！ 恥ずかしいじゃない！ というか、今までも告白された時、一々報告なんてしてないから！？」

「……………だよねえ」

（全く、厄介事を増やしてくれて……………）

途端に顔を赤くして訴えてくる清香に、朋美は思わず深い溜息を吐いた。そしてこの場合、やはり自分が詳細を清人に通報するべきなのか、しかし告げた時の彼の怒り具合を考えると、あまり連絡はしたくないなと眉間に皺を寄せて考え込んでいると、清香が真剣な顔で問いかけてくる。

「それでね？ どうしたら良いかなって」

「どうしたらって、何を？」

全く文脈と発言の意図が分からなかった朋美が問い返すと、清香は微妙に朋美から視線を外しながら、恥ずかしそうに小声で呟いた。  
「えっと……、だから、聡さんと付き合っつて、どうすれば良いのかなって……」

「……………は？」

（そこから？ そりゃあ確かにあのシスコン兄貴と私のせいですぐに別れてるから、清香の恋愛経験値は限りなく0に近いけど！？）  
あまりと言えばあまりの事態に朋美は絶句したが、自分の立場では間違つても恋愛指南などできる筈も無いと分かりきっている朋美は、わざと冷たく突き放してみた。

「……………好きなら暫くくつついてるし、嫌いなら別れば良いだけの話よ。何？ もう愛想尽かしたの？」

「朋美、違うから！ そんな愛想を尽かすなんて！」

「じゃあ本当のところ、清香は聡さんの事をどう思ってるのよ」  
盛大に反論してきた清香に冷静に突っ込んでみた朋美だったが、そこで清香はボソボソと、しかし顔をうつすらとピンク色に染めながら延々と聡についての見解を話し始めた。

「そつ、それは……、時々何を考えてるか分からない事があるけど、心配りのできる優しい人だと思っつわよ？ 笑った顔も素敵だけど、真剣な顔も格好良いし。それで……」

そこで、本人は意識していないものの立派な惚気話を延々と聞かされる羽目になった朋美は、益々精神的疲労感が増大した。

（本人は絶句自覚してない筈だけど、清香からこんな惚気話もどきを聞く日がくるなんて、何か感慨深い……。だけど迂闊な事は言えないし。かといってあの清人さんと真つ向勝負できる聡さんは貴重

な人材で、この先清香の前に同レベルの男がまた現れる保証はないし。うう、どうしよう……）」  
ひとしきりそんな事を悶々と悩んでから、朋美は顔付きを改めて清香の話を止めさせた。

「……清香、分かった。もう良いわ」

「そう?」

「それでね、清香」

「何?」

きょとんと問い返した清香の肩を、そこでいきなり朋美が両手でガシツと掴み、真剣な顔で一言口にした。

「……ごめん」

「え? 何が?」

今度は清香が話の流れが全く分からず問い返したが、朋美は語気強く言い切った。

「理由は卒業するまで言えないけど、取り敢えず先に謝らせておいて!」

その勢いに押され、何がなんだか分からないままとにかく清香が頷く。

「……う、うん。何だか良く分からないけど……、取り敢えず分かったから落ち着こうね」

「卒業したら何でも相談に乗るから! 遠慮なんかしなくて良いからね! お金に関わる事以外だったら何でも頼って!?」

「……その時はお願いします」

気迫に満ちたその訴えに、何事かという様な周囲からの視線を意識しつつ、清香が殊勝に答えた。それに安堵した様に、朋美が顔を綻ばせる。

「任せて! あ、じゃあ私、次は向こうの特別棟の教室だから、先

に行くね！」

「うん、じゃあまた後でね」

そうして慌ただしく立ち上がり、トレイを抱えて食器の返却場所まで走り、そのまま手を振って学食を出て行った朋美を呆然と見送った清香は、食べかけだった親子丼の残りに再び箸を伸ばしながら首を捻った。

「何だか朋美まで変だな。今年は変な星回りなのかな？ お兄ちゃんも聡さんも揃って変だし」

そして清香の目につかない場所まで行ってから、朋美は何かを堪える様な表情で携帯を取り出し、幾分躊躇しながらも目的の番号を選択して電話をかけ始めた。

（ごめんね清香！ 親友の情報を切り売りする私を許して！）

「もしもし、緒方ですけど……」

「はい、佐竹ですが」

『今晚は。小笠原ですが清香さんは』

夜の八時を回った時間帯、自宅の電話を本を読んでいたリビングで受けた清人は、相手が誰だか分かった瞬間、無言で受話器を戻した。しかし即座に再び着信音が鳴り響く。

『もしもし。聡ですが』

途端にガシャツと音を立てて戻される受話機。しかし相手もなかなか引き下がらなかった。

『いい加減にして下さい！ 大人気ないとは思』

三度目は会話の途中で清人がぶち切る。そんな取っては切り、取っては切りの攻防を十回程度繰り返し、とうとう向こうが諦めたらしく切つてから一分経過しても再度呼び出し音が鳴らなくなった時点で、漸く清人は小さく溜息を吐いてから忌々しく呟いた。

「目障りな小バエ野郎が……」  
小さく吐き捨てるのとほぼ同時に、自室でレポートを書いていた清香がリビングのドアを開けてひょっこりと顔を出した。

「お茶を飲もうかと思ったんだけど、お兄ちゃんも飲む？」

「ああ、頼む。煎れてくれ」

「分かった。ねえ、さっき電話が何回か鳴って無かった？」

不思議そうに尋ねてきた清香に、清人が何でも無い顔で答える。

「何だかしつこい間違い電話が立て続けにな」

「そうなんだ」

小さく肩を竦めた清人に、清香は頷いてからキッチンへと向かった。そして自分が口にした電話、の言葉で、つい聡の事を思い浮かべる。

(ここ何日か聡さんから電話もメールも来ないんだよね。忙しいのかな？ こっちから連絡してみようかな？ でもわざわざ忙しい時に悪いかもしれないし、どうしよう……)

そんな風に清香が人知れず悩んでいる頃、残業の合間に会社の廊下から電話をかけていた聡は、携帯を握り締めながら清人に対する悪態を吐いていた。

「あのシスコン野郎！！ どこまで邪魔すれば気が済むんだ！」

思わず叫んでから慌てて周囲に人影が無いかを探り、取り敢えず無人らしいのが分かってから、何とか気持ちを落ち着かせつつブツブツと文句を呟く。

「清香さんに連絡が付かないのは、兄さんが彼女の携帯に、本人が気付かないうちに何か小細工したに決まっている。本人はそんな事をされてるなんて、夢にも思っただろうし……」

そこで盛大に舌打ちをしてから、聡は冷静に対応策を考え始めた。

「固定電話の取次は不可能。家に直接尋ねても門前払い。昼間に学校に訪ねて行ける程、そんなに時間に余裕は無い。となると……」  
暫く真剣な顔で考え込んでから、聡は一度携帯をポケットに戻し、如何にも嫌そうに背広の内ポケットから名刺入れを取り出した。そしてその中から、以前貰っていた一枚の名刺を探し当てて引っぱり出す。

「……毒を食らわば皿までって言うしな。色々な意味で後が怖いが」  
そう呟いて重い溜息を吐いた聡の手には、以前試写会会場で遭遇した時に真澄から貰った名刺が存在していた。サラリーマンの悲しい習性で、つい持ち歩いてきた名刺を会話の合間に柏木姉弟と交換していたのだった。

そしてそれを裏返し、そこに書き込まれていた番号を確認し、再び取り出した携帯でその携帯番号に電話をかけ始める。  
待つ事しばし。しかし予想通りの応答の声が返ってきた。

『……はい、柏木ですが』

「夜分すみません。小笠原です」

『あら！ 随分珍しい人から電話がかかってくる事』  
しおらしく挨拶をすると、最初の仕事モードの様なやや警戒気味の口調から一転し、笑いを堪える様な声が返ってきた為、聡は些か無然として言い返した。

「……ある程度予測されていたのでは？ 頂いた名刺の裏に、こちらの携帯番号を手書きしておくなんて」

『まさか本当にかけてくるなんてね。“彼”の妨害になりふり構ってられないって事？』

「仰る通りです」



ひたすら下手にでた聡だったが、真澄は素つ気なく言い放った。  
『だけど流石に私でも、あまり“彼”を本気で怒らせる様な事はし  
たく無いんだけど。それに別にあなたに借りとかも無いし』

「やって貰いますよ。迷惑料の代わりにね。小笠原の損害と俺の精  
神的苦痛に比べたら、実にささやかな物でしょう？」

『仕事の事を言っているなら関係無いわね。ビジネスの世界は弱肉  
強食。むぎむぎ盗られるそちらの力量の無さが災いしただけよ。責  
任転嫁は止めなさい』

「……………」

流石にムツとした聡はこの前からのあれこれを当て擦ってみたが、  
逆にキツパリと言いつつ切られて黙り込んだ。しかし十数秒沈黙が続い  
てから、電話の向こうの真澄が軽く溜息を吐いた気配と共に、予想  
外の台詞を伝えてくる。

『ただし、この場合ハンデが有りすぎるわね。フェアにするのは到  
底無理だけど、状況を幾らか有利にする位の話なら聞いてあげるわ。  
何をすれば良いの？』

「は？」

いきなりの上、あまりにも想定外の台詞を耳にして聡が思わず固  
まると、真澄は苛々した様に催促してきた。

『さっさと主旨を纏めて三分以内に言いなさい。こっちは残業中な  
のよ』

「失礼しました。それでは、お願いしたい内容ですが……………」

急いで気を取り直した聡が依頼内容を説明するまで三分も必要と  
はせず、二人の会話はすぐに終了となった。

「もしもし、佐竹ですが……………。どうかしましたか？ 清香に用なら  
まだ帰っていませんが」

そろそろ夕方になるつかと言う時間帯に、自宅にかかってきた電

話に対応した清人は、その相手と伝えてきた内容に戸惑いの表情を見せた。

「は？」

思わず疑問の声を上げたものの繰り返し要求され、大人しく指示に従うべく電話を保留にして仕事部屋へと向かう。そしてドアを開けて中で資料整理をしていた恭子に声をかけた。

「川島さん。真澄さんから電話で、君に代わって欲しいと言われたんですが……」

「あら、珍しいですね。こちらにかけてくるなんて」

まだ戸惑いながら伝えた清人に、恭子は椅子から立ち上がりながらあっさりと返した。それに逆に驚きの表情を見せる清人。

「個人的に会ってるんですか？」

「ここで引き合わせてくれたご本人が、今更何を言ってるんですか。ごく偶にですけど、一緒に食事したり買い物に行ったりしてますよ？」

「……知らなかったな」

「お話ししていませんでしたか？ あ、それより電話！」

クスクス笑いながら指摘した恭子だったが、清人には予想外の取り合わせだったのか、些か呆然とその話を聞いていた。そして真澄を電話口で待たせている事に気付いた恭子が、慌ててその室内にある電話の子機を取り上げて会話を始めた。

「もしもし、真澄さんですか？……はい、恭子です。お待たせしました。今日はどうしてこちらに電話を？」

何となくその場に立ったまま清人がその様子を窺っていたが、話している間に恭子が当惑した声を出す。

「すみません、そう言えば携帯の電源を落としてました。…………え？」

その声を発したと同時に何故か恭子は背後を振り返り、一瞬清人

とまともにも目が合った。しかしすぐに視線を逸らして真澄の話に耳を傾ける。

「はい……………、……………はい、分かりました。ええ……………、それならちょうど良かったです。確認して今夜か明日にでもお返事します」

最後は何故か笑いを堪える表情になった恭子は、終始友好的に話を終わらせた。

「……………ええ、それじゃあまた」

そして子機を元の位置に戻すと同時に、清人が怪訝そうに尋ねてくる。

「彼女、何の用だったんですか？」

それに対し、恭子は清人の方に向き直りながら楽しげに答えた。

「美味しいお店を見つけたそうで、そのお誘いです。一人客は目立つから嫌とかで、時々お付き合いしてるんですよ」

「嫌なら無理に付き合わなくても良いんですよ？」

真澄に無理やり連れ回されているのではと、幾分心配になった清人は探りを入れてみたが、恭子はその懸念を一蹴した。

「あら、私真澄さんと一緒にお食事するのを、毎回楽しみにしてますよ？ 自分とは違うタイプの方ですから、思いがけない考え方がか聞けて、楽しいですから」

「そうですね。それなら良いんですが……………」

まだ今一つ納得できない様な表情で清人はリビングに戻って行き、その姿が完全に見えなくなってから恭子はしみじみと考えた。

（先生の下で働く様になつてから、口からでまかせが上手くなつたわね……………。喜ぶべきか悲しむべきか微妙だわ。さて……………、そんな事より、頼まれた内容を確実にできる様に段取りを考えておかないと……………）

そんな風に清人の知らない所で、女達の共同戦線が構築されつつあった。

それから一時間ほどして、清香が元気に帰宅した。

「ただいま！」

「お帰り。ちょうど良かった。そろそろ出掛ける所だったから」

「うん、行ってらっしゃい。気をつけてね」

まさに玄関で鉢合わせ状態の清香に、清人は愛想良く笑いかけてから背後の恭子を振り返って軽く頭を下げる。

「清香も戸締まりはしっかりと。川島さん、10時までには戻るのでお願いします」

「了解しました」

すっかり心得ている恭子の頷きに、清香が一人むくれる。

「お兄ちゃんったら！ もう子供じゃ無いんだから、川島さんに一緒に留守番をお願いしなくても」

「駄目だ」

清香に一言だけ言い聞かせ、清人は恭子の方に再び向き直り、小声で念を押した。

「……それでは川島さん。不審人物の排除は宜しく」

「どなたの事でしょう？」

「名前を口にしなければ分かりませんか？」

笑いを含んだその問いかけに、清人も同じ表情で返して来た為、恭子はそれ以上口を挟まず笑顔で頭を下げる。

「いえ、それでは行ってらっしゃいませ」

そうしてドアの向こうに清人が出て行くと、清香が憤慨してから恭子に向かって申し訳なさそうに言い出した。

「もう、お兄ちゃんったら！ ごめんなさい恭子さん、遅くまで付

き合わせて」

それに事も無げに答える恭子。

「料亭で出版社の接待だから、無碍に断れ無かったみたいね。清香ちゃんが心配で中座して相手方の心証を悪くするより、私が留守番する事で先生がきちんとお愛想笑いしてくれるなら、その方が私も気が楽なもの」

「それもそうね」

そこで女二人で顔を見合わせ、ひとしきり笑い合ってから玄関から奥へと移動した。

「さて、食材は十分有るから何を作ろうかしら。清香ちゃん、何か食べたい物はある？」

「あ、私が料理するから恭子さんは待つて？ 久々に恭子さんに料理の腕前を披露したいから」

いつも泊まる時の様に夕食の支度をしようと台所に入りかけた恭子だったが、ここで清香が自分が引き受けると言い出した為、少し驚いた顔をした。

「あら、良いの？」

「勿論」

「それじゃあお言葉に甘えて、先生のお部屋から本でも借りて読ませて貰ってるわ」

「じゃあついでにこのバッグを部屋に置いて貰えますか？ 料理ができれば呼びますね」

恭子は清香からバッグを受け取り、台所に入った清香に背を向けて彼女の部屋へと向かった。そして邪魔される事無く室内に入り込む。

(さて、ここまでは予想外に上手くいったけど、どうかしらね……) 考え込みながらベッドの上にバッグを置き、中から清香の携帯を取り出した。そしてベッドに座りながらその設定を確認しようとする。

ると、案の定暗証番号の入力画面が出てくる。

「えっと……、流石にロックがかかっているわね」

そう呟いてから恭子は取り敢えず試しに四桁の数字を入力したがエラーになり、次いで少し考えてから駄目でもととの気分です更に四桁を入力してみた。しかし予想に反してあっさりロックが外れてしまった為、思わず片手を額にやって深々と溜息を吐きだす。

「清香ちゃん……、自分の誕生日じゃ無いのは誉めてあげるけど、先生の誕生日だなんて先生を喜ばせるだけだから」

そして何とか気を取り直してから、恭子は聡からの通話やメールの着信拒否設定を次々と首尾良く解除し、携帯をバッグの中へと戻した。

「……これで、修正完了つと。まだもう一仕事、残ってるけど。先生に意趣返しする為に、先生にも清香ちゃんにも気取られ無い様に誘導するなんて、厄介よねえ」

そんな事を幾らか疲れた様に呟きながら、恭子は清香の部屋を後にしたのだった。

そして清香が夕食を作り終わり、二人で向かい合って食べ始めたから暫くした頃、如何にも四方山話のついでという感じを装いながら、恭子が慎重に言い出した。

「……そう言えば清香ちゃん。留守番もそうだけど、携帯の設定とか大丈夫？」

「え？ 何がですか？」

急な話題の転換に清香が怪訝な顔をすると、恭子は用意しておいた台詞をスラスラと述べた。

「先生が清香ちゃんを一人にさせるのを嫌がるなんて、何か変な事でもあったのかと思って心配になったの。以前から泊まりがけの取材旅行の時、ここに泊まる様に頼まれているけど、夕方から数時間

家を空ける位で留守番を頼まれるなんて初めてだったし」

それを聞いた清香は、溜息を一つ吐いてから申し訳なさそうに答えた。

「うう……、ごめんなさい恭子さん。何か年明けからお兄ちゃんがちょっと変で。情緒不安定って言うか、妙に心配性って言うか」

「そうなの？ それなら別に良いの。ストーカーの気配とか、無言電話や悪戯メールとかあったのかと思っただわ」

「勿論、そんな事無いですよ」

慌てて否定した清香に対し、恭子は神妙な顔つきで話を続ける。

「それでさっきの話に戻るけど、携帯なんて個人情報のかたまりだから、きちんと管理しないと危ないと思ってね。ちゃんとセキュリティロックをかけてる？」

「大丈夫ですよ。恭子さんも心配性ですよな？」

そこは余裕の笑みで返した清香だったが、恭子は先程勝手に清香の携帯設定を確認した事など微塵も感じさせずに、笑顔で念を押し出した。

「それなら勿論、ロックナンバーは自分や家族の誕生日とは違う番号に設定してるのよね？」

「……え？」

途端に笑顔のまま固まる清香に、恭子が疑う様な視線を向ける。

「え？ って、清香ちゃん？ まさか、ひよっとして……」

「いえ、あの、でもっ！ お兄ちゃんの誕生日だし！」

必死になって弁解する清香に、恭子はわざとらしく溜息を吐いてみせた。

「……清香ちゃん。それ位ある程度付き合いのある人は知ってるし、先生はプロフィールで誕生日は公表してるのよ？ そんなに親しく無い人でも、清香ちゃんと先生の間を知っている人なら、容易に

推察できそうじゃない」

「駄目？」

恐る恐るお伺いを立ててきた清香に、恭子は語気強く言い切った。

「携帯が未来永劫悪意を持った人間に渡る可能性が皆無では無いし、私としてはこの際は非変更を勧めたいわ」

「うーん、それならどんな番号にしようかな」

最早食事そっちのけで悩み始めてしまった清香に、とんとん拍子に事が進んで嬉しい為緩みそうになる顔を何とか引き締めながら、恭子は冷静に問いかけてみた。

「誕生日以外で、そうそう忘れない日付とか、番号とかは無い？」

「えっと……。あ、そうだ！ 0612にしよう！」

そう宣言してから再び箸を動かして料理を口に運んだ清香を、恭子は微笑ましく思いながら、自身も箸を動かしつつ小さな疑問を口にした。

「確かに二人の誕生日じゃ無いけど、何か忘れられない意味がある数字なの？」

「あれ？ 覚えてない？ 6月12日は恭子さんが初めて家に来た

日だよ？」

「え？」

何気なく言われた言葉に恭子は目を見開いて手の動きを止め、清香は清香でしみじみと語り出した。

「もう、あの時は本当にびっくりしたんだから。夕方帰ったら家に知らない女の人が居て、お兄ちゃんに『暫くこの人と一緒に暮らすから』って言われた時には」

「……ごめんなさいね。相当驚かせた自覚はあるわ」

うんうんと頷きながら話をする清香に、恭子は如何にも申し訳なさそうな顔になる。



「おまけにその頃、まだ客用布団を揃えて無かったから、『明日布団を買うから、一晚一緒に寝てくれ』って言われて」

「私は床やソファでも良かったんだけど、先生が『ちゃんとしたベッドで寝なきゃ駄目だから、床やソファを使うなら俺がそこで寝るから俺のベッドを使って下さい』って強固に主張されて、あの時は本当にどうしようかと思ったもの」

そこで女二人は顔を見合わせ、申し合わせた様に同時に溜息を吐いた。

「本当に訳が分からない主張だったな。私、義理のお姉さんになるかもしれない人を、ベッドから蹴り落としちゃったらどうしようって、凄く緊張したんだから！でも後でよくよく考えたら、恋人だったら一緒に寝るだろうし。その時、誰かと一緒に布団で寝るなんて凄く久し振りで、ホカホカしてすぐ寝ちゃった様な気がする」

当時を思い出しつつそう述べた清香に、恭子は思わず苦笑してしまった。

「ええ、緊張してた割には布団に入って五分で熟睡してたから、凄く羨ましかったわ」

「だって両親が死んでからはいつもお兄ちゃんと二人きりで、泊まりに来る人とかも皆無だったから、なんだか家族が増えたみたいで嬉しかったんだもの。そうか、お兄ちゃんが結婚したらお姉さんができるんだ。この人だったら仲良くできそうだなって。だから忘れられない一日なの」

にこにこ説明された内容に、最近では殆ど忘れかけていた当日の事を思い出した恭子は、その顔に心からの笑みを浮かべた。

「……私だってそうよ。ありがとう、清香ちゃん」

「どういたしまして。……ところで恭子さん、本当にお兄ちゃんと結婚しないの？」

どこかからかう様な口調で尋ねてきた清香に、恭子も余裕で笑っ

て答える。

「だからその話は今更よ。あれから五年以上経ってるのよ？ もし  
そうならとつくに清香ちゃんのお義理のお姉さんになってるわ。先生  
とはあくまで雇い主と雇用者の関係よ」

「そうなのよね。残念だな」

本心から言ってくれていると分かる言葉を恭子は嬉しく思い、半  
分照れ隠しに箸を動かしながらつい余計な事を口走った。

「それに、先生には先生のお考えがあるみたいだし」

「なあに？ それ」

清香に問われて自分が口を滑らせた事に気が付いた恭子は、にっ  
こりと笑って誤魔化する。

「秘密。私が勝手に推察しているに過ぎないし」

「ええ？ ずるい！」

盛大に抗議してきた清香だったが、ここで恭子が話を逸らしにか  
かった。

「それに、先生の結婚云々の話以前に、偶には清香ちゃんの恋バナ  
とか聞きたいな、とか思っているんだけど？」

「うえ？ 恋バナって」

途端に動揺した声を上げる清香に、恭子はテーブルに肘を付きつ  
つにっこりと微笑してみせる。

「この前大学祭で顔を合わせた小笠原さん。この際、その後どうな  
ってるのか、是非聞きたいわ」

「ど、どうなってるのかって……」

「うふふ、清香ちゃんとこんな話ができる様になるなんて、本当に  
感慨深いわね。ほら、お姉さんに何でも話してみなさい」

「うう……、恭子さんの意地悪！」

小さく手招きする仕草を見せた恭子に、清香が顔を真っ赤にしな  
がら拗ねる。それを見ながら恭子は何とか嘖き出しそうになるのを

堪えた。

（ありがとう、清香ちゃん。今夜はぐっすり寝られそうだな……）  
清香との会話で思いがけずこの家を初めて訪れた時の事を思い出  
し、恭子の胸の内はその時の様に温かくなっていた。

## 第27話 アップダウン・バレンタイン

二月に入って寒さも一段と厳しくなってきた頃、一限目の講義が終了して次の教室へと向かいながら、朋美は並んで歩く清香にさり気なく話しかけた。

「ねえ、清香。今年のバレンタインはどうするの？ 勿論聡さんにあげるんだよね、手作りチョコ」

「いつも通りお兄ちゃんには作るけど……、聡さんには渡そうか渡さないか迷ってるの」

本気で悩んでいるらしい口振りに、朋美は驚いて足を止めた。

「はあ！？ ちょっと待って！ 付き合い出して初めてのバレンタインでしょ？ ここは気合いを入れて、手作りチョコを渡すところじゃないの!？」

「だって……、私、相当料理の腕前が無いと思われる顔みたいで……ごめん、私にも分かる様に話してくれる？」

がつくりとうなだれながら言われた台詞の意味が分からず、朋美は清香に説明を求めた。すると顔をあげた清香が、真顔で事情を語り始める。

「だって、今まで五人に手作りチョコを渡した事があるんだけど、そのうち二人に受け取り拒否されたの」

「何それ」

詳細を聞かなくてもそこはかとなくその理由が察せられ、その時の清香の心境を思っ、朋美は僅かに顔を引き攣らせた。そしてそのまま清香の説明が続く。

「そして他の三人は貰ってくれたけど、当日中に一人、翌日二人に『やっぱり貰えない』って真つ青な顔で返されて。開封もしないそのままって、私の作った物を食べる気にならないって事だよね……」

言うだけ言って更に落ち込んだ様子を見せる清香に、朋美は流石に清人に対する怒りが湧き上がった。

（清人さんっ！ あんた何て事してくれましたか！？ しっかり清香のトラウマになっちゃってるじゃないですか！！）

恐らく過去に手段を選ばず、相手にチヨコを突き返させたであろう清人を、胸中でひとしきり罵ってから朋美はある決意をして口を開いた。

「……清香、今年はやっぱり作るべきよ」

「そうかな？ お兄ちゃん是我的の作った物は何でも喜んでくれるけど、聡さんは迷惑に思わないかな？」

自信なげに問い掛けてくる清香に、朋美は溜め息を吐きそうになるのを堪えながら言い聞かせ始めた。

「あのね、私が今までそんな話を聞いた事が無かったって事は、小中時代の話でしょ？」

「うん、まあ……、そうだけど」

素直に頷いた清香に、朋美はそのまま畳み掛ける。

「そんなお子様時代の、所謂ガキの言動に未だに引きずられてどうするの。料理が下手そんな外見云々の問題じゃ無くて、大方周りの連中にチヨコを貰った事を冷やかされて、恥ずかしくなって発作的に返したとかそんなところよ」

「そうなのかな？」

まだ疑わしい顔をしている清香に、朋美は大きく頷いてみせた。

「実際清香の料理を食べて腕前を知ってる私が保証するから、何も心配要らないわ。聡さん絶対喜ぶから、自信持って作ってあげなさいって！」

「そうかな……、朋美がそう言うなら、今年は二人分作ろうかな？」

「悪いこと言わないからそうしなさい」

「うん、ありがとう朋美」

そこで漸く明るいつも通りの笑顔に戻った清香と共に、朋美は次の教室に向かって再び歩き始めた。

そして次の休憩時間、清香に適当な理由を述べて彼女から離れた朋美は、携帯である人物に連絡を取った。

「……もしもし、真澄さんですか？ 朋美です。今大丈夫ですか？」

『ええ、大丈夫よ。頼んだ件、どうなったかしら？』

以前から清香の周りの人間関係についての情報源が絶対にいる筈と確信していた真澄は、清香から朋美の存在を聞き出した段階で彼女がそれだと目星を付けていた。しかし大人しく清人の指示に従っているからには、彼女なりの事情があると察してこれまで静観していたのだが、今回は敢えて清香を介さずに連絡を取ってみて、動揺する彼女に事情を話しささやかな協力を要請してみたのだった。すると案の定、朋美は憤慨しきった声を返してきた。

「チョコを作って渡す様に誘導しました。今回だけは全面的に真澄さんの意見に賛成です。以前から誰にもチョコを渡さないのは、清人さん以外に興味がある人が居ないからだと思ってましたが、まさか自分が料理下手顔かもと思いきい悩んでると思ってもませんでしたよ。何妹のトラウマになる様な事をしくさってるんですか、あの人はっ！？」

現状としては清香に近づく男を排除する役目を担わされている朋美だが、基本的に親友思いの彼女が清人に向かって直接言えない分怒りまくって訴えてくる内容を、真澄は黙って聞いてから疲れた様に溜め息を吐いた。

『……本当に、普段冷静な人間が見境無くなると手に負えないっていう実例ね。協力ありがとう、朋美さん』

「どういたしまして。今回のこれは清香にバラした訳では無いし、清人さんの契約の範囲外の事ですから」

きっぱり言い切った朋美に、真澄はつい小さな笑いを漏らす。

『今回はお互いの意見が一致して助かったわ。ついでにアフターケアもお願いできる？』

「勿論、この件に関してだけは最後まで面倒見ます。安心して下さい」

清香への罪滅ぼしの意味でも、朋美の意思は固かったのだった。

そしてバレンティンを控えた日曜日。朝食を食べながら清人は清香に確認を入れた。

「清香、今日は正彦君と出掛ける予定だったか？」

「ううん、悪いけど正彦さんには昨日急遽断りを入れたの。どうしても今日じゃ無いと空かないって言われたから、そっちを優先しようと思って」

あっさりと言われた内容に清人の箸の動きが止まり、若干声のトーンが低くなる。

「……じゃあ誰と出掛けるんだ？ 小笠原君か？」

何とか顔を普通の状態に保ちながら、（清香に無理を言って予定を入れさせたのか？）と密かに憤っていると、そこで清香が思いもかけない事を言い出した。

「出掛けないし、午後から来るのは真澄さんよ。昨日言ってなかったかな？」

「は？ いや、聞いていないが……、彼女が何をしにここに来るんだ？」

全く理由が思い当たらなかった清人は当惑して尋ねたが、清香の答えを聞いて更に驚愕の声を上げた。

「バレンタインのチョコを作りによ」

「はああ!？」

驚きの声を出しただけでは足りず、無意識のうちに箸を取り落としてしまった清人に、清香は非難がましい視線を浴びせた。

「何？ 別にそんなに驚く事は無いでしょう？」

「……彼女、食べられる物を作れるのか？」

思わず漏らした内容に、流石に清香が怒りの声を上げた。

「もう！ お兄ちゃんまで聡さんと同じ事言わないでよ。幾ら何でも真澄さんに失礼じゃない！」

「彼が何だつて？」

「明日出掛けないかと言われて、真澄さんと一緒にチョコを作る約束をしたからと断ったら、少し黙った後『食べられるの？ それ』って言ったの。当然叱りつけたわよ、全くもう！ キャリアウーマンだからって料理ができないなんて思い込みは、失礼極まりないわ！」

その時のやり取りと思い出したらしく、怒りを増幅させた清香を眺め、清人は不覚にも心の中で聡の意見に同意してしまった。

(……初めてあいつに親近感らしき物を感じたな)

そんな風に呆然としていると、清香はまだ怒ったまま清人に宣言した。

「そういう訳だから、お昼過ぎからキッチンを使うからね！」

「ああ、分かったから……」

そして清人は何となく落ち着かない気分のまま午前中を過ごし、軽く昼食を取って後片付けが済んだ所で、エントランスからの呼び出し音が鳴り響いた。それは予想に違わず真澄からの連絡で、清香がモニター越しにやり取りしてから出迎える為に玄関へと向かう。

そしてさほど時間がかからずに、大きめの紙袋を抱え、片手にはバッグを提げた真澄が清香と話しながらリビングに現れた。



「本当に、今日は無理に押し掛けちゃってごめんなさいね。お邪魔します、清人君」

「こんにちは」

ソファーに座って新聞を読んでいた清人に、真澄が愛想良く声をかけたが、清人は辛うじて非礼にならない程度に挨拶を返したただけだった。しかしそんな態度を気にもせず、ダイニングテーブルの上に真澄が持参したチヨコの材料らしき物を、女二人は袋から次々取り出しながら話を続ける。

「うちは一向に構いませんから良いですよ、真澄さん。でも話を聞いた事無かつたんですけど、毎年チヨコを作ってたんですか？」  
「今年は偶々ね。ちよつとあげたくなつた人が居たから、作ってみるのも良いかなって」

その真澄の言葉に清人は新聞を捲る手の動きを止め、清香は期待に目を輝かせた。

「へえ？　どんな人ですか？　職場の人とか？」

「あら、それなら手作りなんかしないわよ。既製品を買っわ。あ、でもよくよく考えてみれば、私義理チヨコの類も渡した事無かつたわね。買いに行く時間とお金の無駄だと思つてたし」

小さく笑いを零しながら真澄が答えると、清香が尚も答えをねだつた。

「ええ？　それなら益々どんな人が気になるな」

「それは内緒。けどいざ作ろうとしたら、家のシエフが『厨房を破壊しないで下さい！』って断固として使用拒否するんだもの。ふざけてるわよね」

手の動きを止めないまま憤慨してみせる真澄に、清香は僅かに顔を強張らせて慎重に尋ねてみた。

「あの……、真澄さん。どうしてその方は真澄さんが厨房に入るのをそんなに嫌がるんですか？」

「真顔で『危険過ぎる』って言うのよね」

「まあ、確かに危険と言えば危険かもしれませんが……。真澄さん、以前火傷でもした事あるんですか？」

「いいえ、全然。ちよっと手を切った事がある位よ。それに以前家族に問題視されたのは、ちよっと炎が燃え上がって火事になりかけて、何かの弾みでオーブンが爆発して、ちよっと手が滑って包丁が飛んだ時偶々シェフが水を飲みに来て、鼻先にそれが刺さった事位だし。年を取って心配性になったみたい」

真顔で淡々とそう述べた真澄に、清香と清人は無言になり、心の中で突っ込みを入れた。

(それじゃあ問題視されなかつた事とかも、色々あつたのかしら？)  
(それなら以前のあの特製ジュースとやらのレシピは、どうやって考えたんだ？)

そんな動揺している兄妹の心境など推し量る筈も無く、真澄は明るく清香に向かって声をかけた。

「さあ、清香ちゃんの指示通り材料は揃えて来たわよ。指導宜しく、清香ちゃん」

「う、うん。任せて」

一応笑顔を浮かべていた清香だったが、心なしかその顔が微妙に強張っているのを見て取った清人が、ソファから立ち上がりつつ恐る恐る口を挟んだ。

「……清香？ 一応俺も見ているか？」

しかしここで顔付きを険しくした清香が振り返り、清人にきつく言い聞かせる。

「一緒にお兄ちゃんにあげるチョコも作るんだから、見ていたら駄

目でしよう!? 毎年貰った時のお楽しみにしてるんだから」

「いや、しかし」

「締切が近いから、今日は頑張るって言ってたじゃない。ほら仕事仕事!」

尚も言いかけた清人に清香は走り寄り、両手で仕事部屋の方へと押しやった。それで清人は説得を諦め、大人しくリビングを出て行きながら一言付け加える。

「それじゃあ、気をつけて」

「分かってるわ」

力強く頷いた清香に一抹の不安を覚えながらも清人は大人しく出て行き、自身の仕事部屋へと入った。そして真つすぐ机に向かつてやりかけの原稿に再び手を付け始めたのだが、十分も経たないうちに両手で頭を抱えて音を上げる。

「……勘弁してくれ。気になって仕事になるわけないだろうが」

しかしそんな愚痴を零しても締め切りが待つてくれる筈も無く、五時近くになってから清人は漸く何とか仕事に一区切りつけ、立ちあがって重い溜息と共に仕事部屋から出て行った。

そしてキッチンに入ると、カウンターの向こうのダイニングテーブルで、真澄と清香が何やら動かしている手元を見ながら、語り合っているのが見える。

「……それで、ここにこれを通して、捻って? そのままこっちの方向に引っ張って纏めるの」

「こう、かな? ……うん、上手くできた!」

「綺麗にできたわね。早速使えるわよ?」

「ありがとう真澄さん。……あれ? お兄ちゃん。休憩?」

人の気配を感じたらしい清香が振り向いて声をかけてきた為、清人は曖昧な頷きを返した。

「ああ、何か飲もうかと思って……」

そうして清人が黙ったまま清香が手にしている物に目をやると、それを察した清香が嬉しそうにそれを差し出してみせる。

「チョコを冷蔵庫に入れてからお茶にして、その後真澄さんにリボンフラワーの作り方を教えて貰ったの。可愛いのができたでしょ？」

「ああ、そうだな……」

サテンのリボンとビーズを束ねて作ったらしい、小さなコサージュの様に見えるそれを、思わず清人は凝視した。

「わざわざ持つて来て頂いたんですか？ すみませんでした、真澄さん」

「余り物をついでに持つて来ただけだから、気にしないで」

そう言いながら、真澄は既にラッピングされている手のひらに乗るサイズの、しかし結構深さのある二つの箱に手早くリボンをかけ、更に結び目の所に先ほど清香と作っていた物を飾りつける。

「さてと、これで完成」

「うわゝ、素敵。売り物みたい、真澄さん」

その出来映えに思わず誉め言葉を口にした清香に、真澄もにっこり笑ってから持参した袋をごそごと漁った。そして目的の物を引っ張り出す。

「ありがとうございます。じゃあ最後の仕上げに、清香ちゃんにこれをあげるわ」

「何ですか？ これ」

一見何の変哲もない保冷バッグの様な、銀色で僅かにモコモコしている袋状のそれを、清香は不思議そうに見つめた。すると真澄は仕上げたばかりの箱を、その袋の中に入れながら説明を始める。

「持ち歩く間にせつかくのデコレーションが崩れたりしたら勿体無

いでしょう？　これは今度うちで取り扱う新製品なの。ここの横のラインを見ていて？」

「ここですか？」

箱を入れて直立している袋の縁から縁へ横に延びている線を清香が見やると、真澄は左手で袋の左縁を押さえ、右手で右端に付いていた何かのラベルを勢い良く引つ張ると、それは繊維状のものを引き出しながら外れた。そして十秒程してから清香に促す。

「ほら、どうなったのか分かる？」

「え？　あ、凄い！　何もしてないのに線の所で密着してる！　不思議」

「凄いでしょ。専用の圧着機とか熱で溶着させないで、出先で手軽に密閉できるの。清香ちゃんを驚かせたくて持ってきちゃった。チヨコを入れて保管運搬するのに使ってみて」

「うわ、面白そう！　早速使ってみます」

ウキウキと清香がそれを受け取ると、真澄が手早く荷物を纏めた。「長々とお邪魔しちゃ悪いし、そろそろ失礼するわね。迎えが来る頃だし」

そこで唐突に携帯の着信音が鳴り響き、真澄が自分の物をバッグから引つ張り出して時間を確認しつつ、苦笑いで応答した。

「…五時ジャスト、さすがね。今降りるわ」

そして再び携帯をしまい込んでから、清香とキッチンでお茶を煎れ始めた清人に向かって声をかけた。

「下に車が来てるから失礼するわ。お邪魔しました」

そして下まで送ると言った清香を、真澄は玄関での見送りで押し止めて去って行き、清香はすぐにリビングに戻って来た。

「もう少ししたら、夕飯を作り始めるから待っててね」

「それは構わないが……、流しも綺麗に片付いているし、終わった

のか？」

「うん」

「そうか」

そこで何やら言いたげな清人の気配を察したのか、清香がボソツと言いだした。

「……ねえ、お兄ちゃん、柏木のおじさんのお家ってお金持ちなんだよね？ 専属の料理人だっているみたいだし」

「そうだな。それが？」

「真澄さんが厨房に立ち入り禁止の理由……、何となく分かった気がする」

視線を逸らしながら言いにくそうに述べた清香から、清人はキッチン全体に視線を移して眺めやった。そして平然と言ひ聞かせる。

「まだマシな方だと思うぞ？ 短時間で綺麗に片付く程度なんだから」

「え？」

当惑した清香に、清人は淡々とある事実を告げた。

「香澄さんも深窓育ちだったから、結婚当初家事は壊滅的だったからな。父さんは仕事で忙しかったし、必要に迫られて俺が一通り教えたんだけ……俺はあれで“忍耐”という言葉の、本当の意味を知った」

「……………」

清人が真顔でそう告げると、キッチンに不気味な沈黙が漂った。

清香としては（確かにあまり手際良く無かったけど、あれでもマシになった方なんだ）という驚愕や、（十歳の義理の息子に家事を指導される継母ってどうなの？）という疑問などが頭の中で渦巻いていたが、母と真澄の名誉の為にも取り敢えずこの話題はここで終わりにしようと気持ちを切り替える。

「えっと……、それじゃあ、夕飯の支度の前に、チョコの仕上げだけやってしまおうかな」

そんな事をわざとらしく口にしながら、清香は冷蔵庫に向かった。清人もそれ以上話を蒸し返す事はせず、無言のまま茶を淹れてソファへと向かう。

そして清香が冷蔵庫から取り出したトリュフチョコを、ダイニングテーブルで一粒ずつ丁寧に箱詰めし、慎重に包装紙で包みリボンと先ほどのリボンフラワーを付けるのをお茶を飲みながら何気なく眺めていた清人は、清香が真澄から貰った銀色の袋にその箱を入れた所で、漸く真澄の今回の訪問の意図を悟った。

（しまった……。あんな特殊な物で密封されたら、小細工なんかできなないじゃないか！）

真澄が清香にも正確な目的を悟らせず、聡へのチョコへの手出しを完璧に封じてみせた事に気付いて、清人は小さく齒軋りした。

（あいつの肩を持つ気ですか……。それ以前に、それだけの為にわざわざチョコを作る話を出したんですか……）

清人が、真澄に対する怒りに駆られているなど夢にも思わない清香は、楽しそうに清人を振り返った。

「見てお兄ちゃん！ 本当に一瞬でくつついたみたい。面白〜い！」  
「……そうだな。良い物を貰ったな」

「うん！ これって緩衝材にもなってるし。せっかく作ったりボンフラワーを崩さないで見て貰えるわね」

そんな風にな機嫌で語る清香を、清人は苦々しい思いで見詰めていた。

そして迎えた二月十四日。予め電話とメールのやり取りで聡が抜

け出しやすい時間帯を確認した清香は、夕刻に小笠原物産本社ビルの前に朋美と共にやって来た。

「……ねえ、朋美。わざわざ会社まで押し掛ける必要ってあるの？ 何だかストーカーっぽくない？」

「現に付き合ってるんだから、ストーカーなんかじゃないでしょ。今更何言ってるのよ！」

「だって……」

そんな押し問答をしていると、社屋から「清香さん！」と声をかけながら、聡が小走りにやって来た。そして清香の所に来た聡は、横の朋美の姿を認めて僅かに顔を引き攣らせるが、いたって普通の口調で挨拶する。

「清香さんお待ちませ。やあ、緒方さんも久し振りだね」

「はい、大学祭以来ですね。……ほら、清香。グズグズしない！ 相手は仕事なんだから」

「う、うん」

ドンツと背中を押されて聡の方に一歩足を踏み出した清香は、幾分心配な顔で持っていた小さめの紙袋を彼に向かって差し出した。

「あの、聡さん。電話でお話した様にお仕事中に呼び出して申し訳無かったんですが、チョコを持って来たので良かったら貰って頂けませんか？」

それに聡は僅かに怪訝な顔をして見せた。

「えっと……、本当にくれるの？ 先生に何か言われなかった？」

「何かって……、何をですか？」

益々清香が不安そうな顔になってきたのに気付いた為、聡は慌てて笑顔で手を伸ばし、その紙袋を受け取った。

「いや、何でもないんだ。ありがとう頂くよ。それにわざわざ会社まで来て貰って悪かったね。今度埋め合わせするからね？」



上機嫌で聡が受け取ってくれた為、清香も安堵して漸く表情を緩めた。

「そんな事気にしないで下さい。聡さんから誘われても色々あって断ってる事が多いし……、今度はなるべく聡さんの方の都合に合わせてますね？」

「そう言っただけで嬉しいな。それじゃあ今度の週末にでも」満面の笑顔で早速清香に誘いの言葉をかけようとした聡だったが、ここで静観していた朋美が容赦なく割り込んだ。

「じゃあそういう事ですので、お邪魔様でした！ 失礼します！ほら、帰るわよ、清香」

むんと清香の腕を掴み、最寄駅に向かって歩き出した朋美に、清香は慌てて聡に別れの言葉を告げる。

「え？ あ、そ、それじゃあ、聡さん、失礼します」

「ああ、また連絡するから」  
半ば強引に朋美に引き摺られて帰って行った清香を呆然と見送ってから、聡は苦笑いして社屋ビル内へと戻った。そしてエレベーターに乗り込んで、一人きりの空間で手提げ袋を覗き込みながら嬉しそうに独り言を漏らす。

「うん、元気が出てきたな。……しかし、この保冷バッグの様な物はなんだ？ 職場に持って来るから中身が見えない様に、気を遣ってくれたのかな？」

そんな事を呟きながら、聡は顔を引き締めつつ部屋へと戻ったが、何故か戻った途端部屋中の人間の物言いたげな視線を浴びて僅かに怯んだ。更に自分の机の所に、同じ課の主だった面々が集まっているのを見て困惑する。

「あの、どうかしたんですか？ 皆集まって」

不思議に思いながらも声をかけたが、上司達は揃って黙り込んで

おり、恐る恐る隣の席から高橋が説明してきた。

「角谷、ついさつき、お前宛てに社に届いた宅配便を、総務の子が届けに来たんだが……」

「荷物？ 最近会社宛てで何か頼んだ記憶は無いんだが」

怪訝に思いながら人垣を掻き分けて机を見ると、確かに小さいダンボール箱が乗せられているのが目に入った。しかし心当たりの無かった聡は首を傾げる。

そこで高橋がもの凄く言い難そうに、聡に注意を促した。

「その伝票の……、送り主欄の名前、見てみる」

「名前……、つて！ はあ!？」

そこに真澄の名前と柏木産業本社ビル所在地の住所がしっかりと記されていた為、聡が驚きの声を上げた。そして呆然とする間もなく、背後からおどろおどろしい声が響く。

「角谷……、どうしてここに“あの”柏木真澄の名前が書かれているのか、その理由を教えて貰えないか？」

その声が課長の杉野の声以外ではありえない為、聡は蒼白になりつつ慌てて振り返った。

「いえっ、課長！ 俺にも何が何だかさっぱり」

「しかも品名が“チョコ”だと？ ふざけるなよ角谷っ！ まさか一連のあれも、お前が全て漏らしたんじゃないやあるまいな!？」

聡に掴みかかりながら絶叫した杉野に、聡は必死になって弁解し、周囲の者が慌てて引き剥がしにかかる。

「課長！ それは誤解です！ これは何かの間違いか嫌がらせです！」

「ちよつと落ち着いて下さい、課長!」

「冷静に話し合いましょう!」

「角谷！ 一体どういう事なんだ、これはっ!」

その日から聡は暫くの間、職場で冷たい視線に晒される羽目に陥ったのだった。

「……はい、柏木」

『何て事をするんですか！ あなたって人はっ！！』

出先から帰社したのとほぼ同時に鳴り響いた携帯に応答した真澄は、いきなり耳元で叫ばれた為反射的に携帯を離しながら顔を顰め、次いで怒りの声を上げた相手が分かって嬉しそうに顔を緩めた。

「ああ、ちゃんと届いたのね」

『届いたのね、じゃありません！ 運悪く偶々席を外した時に机に持って来られて、上司や同僚に見咎められて、えらい目に合わされましたよ！ あなたは俺に何か恨みでもあるんですかっ！？』

憤慨しきった訴えに微塵も恐縮する事無く、飄々と答える真澄。

「特に恨みは無いけど……、今回清香ちゃんのチヨコに何も仕込まれたりせず、安心して食べられるのは私のおかげなのよ？ 感謝される事はあれ、文句を言われる筋合いは無いわね。それ位の嫌がらせ、甘んじて受けなさい」

『どうしてですか！』

「それが私の筋の通り方だからよ。言ったでしょ？ 例の件を引き受ける時に、あなたに借りは無いしどちらかに一方的に肩入れはしないって」

そんな主張を繰り返した真澄に、聡は一瞬黙りこんでから慎重に問いかけた。

『……ちよつと待って下さい。つまり、兄さんからの嫌がらせを受けない代わりに、あなたからのそれを受けると？』

「当たり前じゃない」

『どうしてそうなるんですか！？ 全然意味が分かりません！』

「分からなくて良いわよ。それじゃあね」

電話の向こうでまだ何やら喚きかけた様だったが、真澄はそれを無視して通話を終わらせた。そして苦笑しながら携帯をしまおうとする。

「よっぽど職場で絞られたらしいわね。まあ、若い頃の苦勞は買ってもしるって言うし、お姉様からの愛の鞭だとも思って」

そこで再び携帯が鳴り出し、真澄が（まだ文句を言い足りないわけ？）と思いながらディスプレイを確認すると、別な人物からの着信だった。それを認めて思わず小さな笑みを零す。

「あら、重なるわね」

そしてすぐに応答ボタンを押した。

「もしもし？」

『佐竹ですが……、今大丈夫ですか？真澄さん』

「ええ、平気よ。出先から戻って部屋に移動中なの」

そう言いながら真澄は廊下を歩き、付き当たりの窓の所にまでやってきた。すると清人が電話越しに、困惑した声を伝えてくる。

『さつき自宅に届いた物があるんですが……、何ですか？これは』

「あら、まだ開けてないの？」

『開封して、包装も解いたから電話したんです』

「それならご覧の通り、ブラウニーだけど。それが何か？」

淡々と告げる真澄に、清人がどこか疲れた様な声を出した。

『……すみません、俺はこれを送りつけた意図を知りたいんですが』  
「だって清香ちゃんがトリュフを作るって言うから、違うチョコ菓  
子の方が良いかと」

笑いを堪えながら伝えた真澄に、清人が恨みがましく言うてくる。

『真澄さん、何かの嫌がらせですか？』

「嫌ね、邪推しないでくれる？ 最近随分疲れてそうだから、甘い

物でも取った方が良いんじゃないかと思っただけよ。念の為清香ちゃんにも味見して貰ったし、心配いらないわ」

『それはどうも、ありがとうございます』

とうとう我慢できず小さく笑いながら断言した真澄に、清人も苦笑いの風情で答えた。ここで真澄が爆弾発言をする。

「それで、もう一つは聡君にあげたから」

『……は？ あいつに、ですか？ どうしてそんな事を』

途端に困惑と怒りが入り混じった声を出した清人に、真澄は飄々と云ってのけた。

「職場にね。送り主欄は私の名前で、品名はチョコと記入して今日送りつけたの。ついさっき熱烈な“お礼”の電話を貰ったわ」

真澄のその台詞の意味を少しの間黙って吟味した清人は、小さく笑ってから呆れた様な声を出した。

『……随分、意地の悪い事をしますね』

それを聞いて、再び楽しそうに言い出す真澄。

「若い子にはあまり嫌われたく無いけど、この場合仕方が無いわ。

そういう訳で、彼は結構周りから絞られたみたいだから、清香ちゃんもチョコを渡して拗ねてるのは分かるけど、機嫌を直して大人しくそれと清香ちゃんのチョコを食べてなさい」

『どこまで命令する気ですか』

「せっかく清香ちゃんがあなたに作ったのに、『あいつと同じ物なんて』って苛つかないで、美味しく味わって食べて欲しいからよ。分かった？」

押しつけがましく言った台詞にも清人は気を悪くする風も無く、大人しく了承の言葉を返した。

『分かりました』

「それなら良いわ。それじゃ失礼するわね」

そこで真澄は会話を終わらせ、耳から携帯を離してそのディスプレイを見下ろした。

「全く、世話が焼ける事……」

呆れた様に溜息を吐いてから真澄は携帯をしまい込み、自分のオフィスへと戻って行った。

そして清人は清人で携帯を耳から離し、目の前のテーブルに置かれた小さな箱の中身を見詰める。

「なるほど。これがあの人流の筋の通し方、と言っわけか……」

セロファン紙に一つずつ包まれたブラウニーを、清人が真顔で一つ摘み上げ、次の瞬間苦笑いの表情になった。

「全く……、完全に裏をかかれたな。まあ、偶にはこんなのも良いか」

そんな事を呟きながら何となくそれを掌で転がしていると、清香が帰宅してリビングに姿を現した。

「ただいま。あれ？ それって真澄さんが作ったやつだよな？」

「ああ、最近疲れ気味みたいだからこれを食べて英気を養え、だそうだ」

不思議そうに問われて、清人は小さく肩を竦めながら答える。それを聞いた清香は怪訝な顔をした。

「なんだ、それなら宅配便なんかで送らないで、作った時にそう言つて渡せば良いのに、真澄さんつたらどうしてそんな事するのかな？」

「あの人にはあの人の考えがあるんだろう」

「まあ、そうだけだね。……でもそうになると、もう一つは誰にあげたんだろう。気になるな」

空中に視線を彷徨わせながらそんな事を呟く清香に、清人は失笑しかけながらも何とか笑いを堪えた。

「さあ、誰だろうな。清香、悪いが珈琲を淹れてくれるか？」

「うん、ちょっと待ってて。私のチョコも今渡すね」

「ああ、嬉しいな」

荷物を置き、笑顔でキッチンに向かった清香の背から視線を手中に戻した清人は、満足そうにブラウニーを包むセロファン紙を剥がし始めた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9168w/>

---

心の隙間の埋め方

2011年11月21日20時09分発行